フロイド精神分析学全集

快不快原則を超えて

何故の戦争か？

T·I·P·A·

精神分析学研究所

フロイド精神分析學全集

快不快原則を超えて
何故の戰爭か？

大槻憲二譯
伊東豊夫譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神
分析學全集

快不快原則を超えて

何故の戰爭か?

大槻憲二譯
伊東豐夫譯

精神分析
學研究所

春陽堂版

フロイド像

序文

本書は『フロイド精神分析學全集』第四卷に當り、第一版は對馬完治氏によつて邦譯せられたものであつた。同氏は英譯に依つてなされた前版に對して今日不滿を覺えてゐられたが、近來多忙のために自ら改訂に當る餘暇なきため、私にその改訂方を高囑せられた。依つて私はフロイド原書全集第六卷所載のものに就いて全篇改譯を企て、相當入念に邦譯を試みておいたつもりである。その間、ハバック(C. J. M. Hubback)氏の英譯をも參照した。この英譯はなかなかよく譯してあると思はれたが、所々不滿な個所もないではなかつた。

『快不快原則を超えて』はフロイドの理論的著作中でも特に重要な位置を占むべき書であつて、その重要なる理由は、精神分析本能觀發展史上に於ける重大な分岐點をなしたものであるからである。本文中にもところどころ論述してある(拙著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』の卷頭にこの發達史を詳論しておいた)やうに、精神分析本能觀は從來大體三段の變化を閲したのであつた。第一段は自我本能と對象本能との區別であり、第二段はナルチスムスと云ふ見方の導入(自我本能のリビドー性の承認)であり、第三段が生死兩本能の對立相關の發見である。從前主として無意識本能は快不快原

則に支配せられてゐるものと考へられてゐたに對して、今や無意識本能生活（エス）は「快不快原則を超えて」ゐるもの、即ち死の本能と云ふそれよりもなほ以前の本能によつて更に一層力強く支配せられてゐると云ふことが假定せられるに至つた。この考へは併しながら、フロイドに於いては當時なほ未だ文字通り假定に止まつてゐて、彼自身の告白してゐる通り、「好意ある」第三者的の承認が與へられてゐたに過ぎないのであつて、その躊躇的な態度は、彼がこの論文の續編とも云ふべき『自我とエス』（一九二三年）を著すに至つた時（即ち三年後）までも及んでゐるのである。

精神分析學の父祖の説と云へ、流石にこの大膽なる假定は斯學界の人々を全部的に直ちに納得せしめるには足りなかつたと見えて、英國のアーネスト・ジョーンズを始め、その他の人々がこれに反對の態度を示したが、今日では既に斯學界の人々は固より、其の他の方面の人々も廣くこれを承認せんとする傾向を判然と示してゐる。佛敎の涅槃思想によつて久しく敎育せられて來た我々東洋人にとつては、併しながら、このやうな本能觀はあまりにも當然であつて、寧ろこれに抵抗を感じた西洋學界人の心持が理解しにくいくらゐであるやうに思はれるのは、單に私の一家見であらうか。とにかく、私にはこの書ほどフロイドの頭腦の明敏を痛感せしめた書はなかつたと云ふことだけは敢へて斷言し得るのである。各章の見出しは原書にはないのであるが、理解に便ならしめるために、譯者これを補

入した。

伊東豐夫君の譯せられた『何故の戰爭か?』は御覽の通り、物理學の世界的巨人アインシタインと心理學の人類的至寶フロイドとの間に交された戰爭に關する意見の交換書であつて、その內容は勿論その成立の契機が既に我等に深甚の感興を覺えしむる。この論文にも死の本能への言及があるので、特に『快不快原則を超えて』と同卷に收載することにしたのである。伊東君は單行本として公にせられた書に就いて譯されたのであるが、私が多少加筆の蛇足を試みた。その後、原書全集第十二卷に收載せられてある筈である。

卷末の『精神分析學の興味』はずつと古く一九一三年の著作であつて『快不快原則を超えて』と內容上の聯絡はなく、寧ろ『總論』の中に入るべき性質のものであるが、餘白あるまゝこれを添附することにした。たゞこゝには第一部「心理學的興味」のみを載せて、第二部「非心理學的科學に對する興味」を割愛したことは甚だ遺憾であるが、餘白の關係上已むを得なかつたことを諒承せられたい。何れ第三版に於いては、更に一層內容を整理するであらうことをこゝにお約束して、この遺憾へのお詫びとしておく。

こゝに口繪として掲げたフロイド寫眞は、彼の肖像として殆ど代表的なものゝ如き觀を呈してゐる一般的なものであるが、その撮影は一九二二年ハムブルグに於いてであつて、彼が『快不快原則を超えて』を著した以後二年目の像であるから、當時の風貌を察するに足ると云ふ點に於いて、その意味があると思つてこゝに掲げておいたのである。（昭和十二年四月）

大槻憲二識

『快不快原則を超えて』目次

口繪（フロイド肖像、一九二二年 Halberstadt, Hamburg）

快不快原則を超えて

始めて一九二〇年、國際精神分析學會出版部より出版せられ、翌年再版を出し、一九二四年には第九版を出し、後原書全集第六卷に收載。原名

„Jenseits des Lustprinzips."

第一章

快不快原則の意義及び限界

精神分析學の理論に於いて我々は心理過程の動きが所謂快不快原則によつて自動的に統轄せられてゐるものだと云ふ事を、當然として想定する。卽ち、心理の動きは常に不快なる緊張によつて亢奮せしめられ、さうしてその窮極の結果がこの緊張を低下せしめること（卽ち不快を逃避し快樂を追及すること）と一致する如き方向へと向つて行くと云ふことを、我々は信ずるのである。我々がこれまで研究して來た精神過程に右の働きを參照して考究する時は、我々は自分等の仕事の內に經濟的見地を取入れることになるのである。我々の考へるところでは、精神現象を、局所的及び動的の見地からのみならず經濟的見地からも考慮する場合は、それは現在考へられるものゝ中で最も完全な精神現象の研究の仕方である。で、この方法は超心理學的（メタプシコロギシュ）方法として特別に稱呼するに慣する。

快不快原則を樹てるに當り、それが歷史的に確立せられたる一定の哲學に如何なる程度まで接近してゐるか、或はそれと一致してゐるかを論ずるのは、我々の興味のないところだ。かゝる思辨的想定に到達するに至つたのは、我々が日常觀察してゐる範圍內に起る事實を記述し、これに說明をつけよ

うとする努力からであつて、この主張の優先權乃至獨創權と云ふやうなことは、精神分析そのものゝ關するところではない。この原則を主張せざるを得ざらしめるに至つた基礎は甚だ明白であつて、これを無視することは出來ないのである。併しながら、從來この力強き影響を與ふる快感及び苦感の意義について、その何たるかを語り得る哲學或は心理學があるならば、我々はこれを大いに歡迎せざるを得ないのであるが、遺憾ながらこれと云ふ思はしい學理は未だ提供せられてはゐない。これは、精神生活の中で最も茫漠たる、且つ最も近接し難い領域である。ところで我々は、これを回避することが出來ない以上、これを說明するには最も都合のよい伸縮自在なる假定に據ることが最良の方法であると思ふ。で、まづ我々は、快感及び不快感は精神生活中に存在する、增減自在な、亢奮の量に關係してゐるものであると云ふことに定めたのである。卽ち、不快感はこの量の增加に基き、快感はこの量の減退に基づくと云ふ風にである。このやうな考へ方に於いて、我々は決して感覺の强さと種々な變化（感覺の强さが歸せられるところの變化）との間の單純な關係の如きを考へてゐるのではないのだ。況んや、心理物理學上のあらゆる實驗で云ふところの、直接的割合と云ふやうなことを考へてゐるのでは猶更ないのだ。どうやら時によつて增減する度合ひが感覺にとつて決定的な契機であるやうだ。恐らくこの點に就いては、なほ實驗的に證明すべき餘地は存してゐるであらうが、我々分析者と

しては、全然確實なる觀察に依つて導かれない以上は、更にこの問題に深入りしても始まらないと思ふのである。

併しながら、フェヒネル（G. Th. Fechner）のやうな洞察力のある研究家が快不快の考へ方を採つてゐるとすると、我々はこれを無視しておくわけには行かない。彼の考へ方は、その本質に於いて、我々が精神分析的研究の結果、到達したところと一致してゐるのだ。彼はこの思想を『有機體の發生史及び發達史に就いての二三の見解』（„Einige Ideen zur Schöpfungs- und Entwicklungsgeschichte der Organismen," 1873, Abschnitt XI, Zusatz, p. 94）と題する小著の中で述べてゐる。曰く「意識的衝動が常に快感及び不快感と關係してゐる限りは、快感及び不快感は精神物理的關係の安定及び不安定の狀態に關係してゐると看做される。自分が他所で樹てた假定は、この考へを基礎としたものであつた。卽ち、意識の域を超えて現はれる總ての精神物理的運動は、或る程度を超えて完全なる安定を保たむとしてそれに近寄らうとする、その割合に應じて快感に伴はれ、又或る限度を超えてそれから隔たれば隔たるほど不快感に伴はれるのである。而してこの快不快の兩者の中間に、質的限閾と看做される限界に、無感覺的の、無關係の帶域が存するのである。」と。

精神生活の中にあつて快不快原則が主權を占めてゐると云ふことを我々に信ぜしめるに至つた事實

は、次の假定の中にも表はれてゐる。卽ち、精神的裝置は亢奮の量を出來るだけ低く、或は少くとも不斷に一樣に保たうと努める傾向があると云ふ事である。これは同じことを別の形式で述べたに過ぎない。何故ならば、もし精神裝置が亢奮の量を低く持續せむとするものならば、この量を增加させる傾向ある總てのものは、精神機能に背馳したもの、卽ち苦痛として、認められねばならないからである。快不快原則は不斷持續原則（Konstanzprinzip）から推論されるのである。實際に於いて、不斷持續原則は我々に快不快原則の假定を餘儀なくせしめた事實から結論されたのである。更に精しく論究して行くならば、我々によつて想定された精神裝置のこの傾向は、フェヒネルの所謂安定への傾向（さうして彼はこの傾向は快不快感と關係ありとした）の原則の特殊の場合であることを、發見するであらう。

併しながら我々はこゝで、云つておかなければならない、精神過程の動きに快不快原則の支配を論ずるのは、本來正しくないと云ふことを……。もし果して快不快原則が完全に支配してゐるならば、我々の心理過程の大部分は快感に伴はれてゐるか、或は快感の方へと導かれてゐるであらう。然るに、一般の人々の經驗はかゝる結論に斷然撞着してゐる。そこで、心理の中には快感追及の強い傾向が存してはゐるが、併しそれが他の何等かの力、又は事情に依つて反對をせられ、かくて結局のところ、

快感傾向が實現せられてゐないのだと、云ふことにならざるを得ない。それに似たやうなことをフェヒネルが云つてゐる個所を比較して御覽なさい。「目的への傾向はこの目的を果すことだとは定まつてはゐない。この目的一般はたゞ近似的にのみ果たされ得るのだ」と。それで今、この快不快原則を遂行するに當つてその實施を無效にして了ふのは如何なる事情であるかと自問して見るならば、即ち我我は再び確實な、先刻案內の土地を步み、精神分析的體驗からして豐富な答辯をそれに對して與へることが出來る。

快不快原則がそのやうに禁制される第一の場合は、合法的なものとして既に我々のよく知るところである。即ち、我々にも判つてゐる通り、快不快原則は心理裝置の原始的な働き工合に合致したものので、外界の困難の中にあつて有機體が自己保存をなすには始めから誠に無益な、實に高度に危險なものである。自我の自己保存本能の影響に依つて、快不快原則は現實原則に依つて置換へられる。この原則は窮極の快樂獲得を放棄するのではないが、滿足を一時延ばしておくのである。そのやうな滿足の種々な可能性を斷念し、不快を一時的に忍び、長き迂路を經て快樂を獲得するのである。快不快原則は併し長い間、容易に制御し難き性本能の働き工合の中に殘つてゐる。さうして性本能の中から出るにもせよ、自我の中にあるにもせよ、現實原則は有機體全體の弊害にまであまりにも有力になり過

ぎるのである。

併しながら、快不快原則に置換へるに現實原則を以てすることは、たゞ不快體驗の（最も激しい部分に對してゞなく）極小部分に對してのみ、何とか出來るやうになるに過ぎないことは、疑ふまでもない。苦感發生の今一つの、これまた同樣に合法的な根原は、精神裝置に於ける葛藤又は分裂から生ずる。尤も、自我は他方に於いて、より高き統一ある組織へと發展してはゐるのだが……。精神裝置に充滿してゐる殆ど總てのエネルギーは始めから在る本能亢奮から生じてゐるのであるが、併しこれ等のエネルギーは總て同じやうな發展段階には達しないのである。その途中で又しても起ることは、個々の本能又は本能的な部分がその目的又は要求に於いて爾餘の本能又は本能的な部分（それ等は自我の中に包含合致せられるが）と調和しなくなるのである。そこで、その調和せざる本能は抑壓と云ふ過程に依つてその統一から逸脫し、精神的發展のより低き段階に保留せられ、かくて何らかの滿足を得べき可能性から切離されることになる。ところがやがて、それ等の本能が（これは抑壓せられてゐる本能の場合に容易に起り勝ちなことであるが）一つの直接的な或は代償的の滿足へと突進して行くことに成功するならば、この成功は（本來ならばそれは一つの快感であり得る筈なのだが）自我に依つて不快として感ぜられる。抑壓せられることに依つて一時解消してゐる古き葛藤のために、快樂

原則はまた新たに爆發して來たわけである。それは正に或る本能が他方にこの原則に從つて新たな快樂を求めて働いてゐた爲めでもある。これ等諸々の過程に依つて抑壓は快樂の可能性を不快の根源に變じるのであるが、それ等諸過程の個々に就いてはなほよく分つてはゐないし、或は明白に云ひ表はすことは出來ない。併しそのやうな性質のあらゆる神經症的不快は快樂として感受され得ざる快感に外ならないのである。

こゝに擧げた不快の二種の根源だけでは、我々の經驗する不快の大部分を盡してはゐないが、併し爾餘のものに就いては我々はかう主張して大過ないであらうと思ふ。卽ち、爾餘の不快の存在は必ずしも快不快原則の支配に矛盾するものではないと。我々の感ずる大部分の不快は實は知識の不快である。滿足されざる本能の壓迫の知覺か、或は外的知覺か何れかである。その外的知覺とは、それ自身が不快であることもあるし、或は精神裝置の中に不快な期待を惹起さしめる（精神裝置に「危險」と認識せられる）ものであることもあるが、何れにもせよ……。かくの如き本能の要求や危險の脅威などへの反動（かゝる反動として精神裝置の本來の活動は顯現するのだが）は、やがて快不快原則又は快不快原則を改變しつゝある現實原則に依つて正しく導かれることになるのである。そこで、快不快原則のこれ以上の制限を承認することは、不必要に思はれる。とは云へ、外的危險に對する心理的反

應を研究することはこゝに取扱はれてゐる問題に對して新たな材料と新たな問題とを提供することには、確に、なるであらう。

第二章

不快の再現と快不快原則

激烈なる器械的衝擊、例へば汽車の衝突、或は生死の問題に關するやうな事故に遭遇した人には、或る狀態が惹起せられる。この狀態は外傷性神經症（Traumatische Neurose）と稱せられて、久しい以前から認められてゐた。今回の戰慄すべき大戰爭は今や終つたが、この大戰では斯樣な疾病の例が無數に出た。さうして少くとも研究の結果、器械力の影響によつて神經組織に肉體的傷害を及ぼしたゝめであると看做された。*

【註】 * フェレンチ、アブラハム、ジムメル、アーネスト・ジョーンズ等に依つて報告せられたる『戰爭神經症の精神分析』を參照。一九一九年發行、『國際精神分析學叢書』第一册。

外傷性神經症の臨床的症狀は、ヒステリーのに類似した運動神經症狀に滿ちてゐる。それ故にヒステリーに甚だよく似てゐるが、主觀的苦痛感の甚だ强烈なところは、寧ろヒポコンドリーか、或はメランコリーに酷似してゐる。殊に心理的行動が遙か全般的に衰弱してをり、且つ障害されてゐる點は、最もよく似てゐる。戰爭神經症や平時の外傷性神經症等は、これまでなほ未だ十分な研究が試みられ

てゐない。併し單なる器械力に俟たなくとも、同樣な症狀が時々起きると云ふことは、戰爭神經症の場合には、一方に於いてこれを明瞭ならしめるのであるが、更にまた複雜な問題が起きて來た。と云ふのは、一般に外傷性神經症に就いて我々の考慮を更に深く進ませる必要のある著しい特徴が二つある。その第一は、その主なる起源が突發的の瞬間にあると云ふこと、即ち恐怖にあるらしいこと。第二は、精神的外傷と同時に肉體の危害又は負傷を受けた場合には神經症を發するには至らぬと云ふことである。從來は驚駭（Schreck）と恐怖（Furcht）と不安（Angst）とが同じやうな意味で取扱はれてゐたのは正しくない。危險に對する關係に於いてこれ等三つは明かに區別せられねばならない。不安とは危險を期待すること、及びそれに對して準備してゐる狀態を云ひ、その危險の何たるかは必ずしも分つてゐなくともよいのである。恐怖とは恐るべきもの丶確實に存在してゐることを意味し、驚駭とは全然準備せざる時に危險に遭遇した狀態を云ひ、突發と云ふことに重きをおく。私の信ずるところでは、不安のために外傷性神經症が起きると云ふことはない。何故ならば、不安には恐怖に對して防禦する或るもの、即ち恐怖神經症に對して防禦する或るものが存するからである。この點に關してはまた後に述べるであらう。

夢の研究は、深い底部にある心理作用を研究するに當つて最も信賴し得る途であると、我々は考へ

るのである。ところで、外傷性神經症患者の夢を研究して見ると、彼等患者は常に夢の中で又してもその災難の立場を繰返し、新たな驚駭を以てその夢から目を醒ますのがその特徴となつてゐるのである。これに就いては、人々はあまり不思議と思はなかつたのである。そのやうにして患者が睡眠中にも繰返し脅かされてゐるのは正にその外傷的經驗に依つて與へられた印象が如何に强かつたかを證明するものであると云ふ風に人々は考へてゐる。患者はその外傷に對して、云はゞ心理的に定着してゐるのだと考へた。病氣を惹起した經驗へのそのやうな定着に就いては、我々にはずつと以前からヒステリーの場合によつて分つてゐた。ブロイヤーとフロイドとは、一八九三年に、ヒステリー患者は大部分追憶に惱むものだと發表しておいた。また戰爭神經症の場合には、フェレンチやジムメルのやうな觀察者たちは、多くの言語動作上の症狀が外傷の瞬間への定着によつて說明され得るとしてゐる。

併したゞ、外傷性神經症に惱んでゐるものが覺醒時に彼等の災難を想起してクヨクヨすると云ふことは、私にも分つてゐない。多分彼等は寧ろ、その災難に就いて考へないやうに努めてゐるのであらうと思ふ。夜の夢のために彼等が再び發病的立場に追ひ遣られると云ふのがもし自明のことだと考へられてゐるならば、卽ち人々はその夢の性質を誤認してゐるのである。夢の性質としては、彼の健全なりし時代を、又は彼が願望してゐる恢復後に於ける心の有樣を、睡眠中に示すものであれば、寧ろ

ふさはしいのである。災害に依る神經症者の夢に依つても夢の願望充足的傾向が否定されないとしても、少くともこの狀態に於いては（他の多くの場合に於けると同樣）やはり夢の機能が搔き亂されて、その意圖から逸脱してゐると云ふことだけは、我々に分るのである。或は、自我に謎の如きマゾヒスティックな傾向があると云ふことを、我々は考へざるを得ないのである。

私は今や外傷性神經症と云ふ漠然たる厄介千萬な主題を捨てゝ、精神裝置がその最早期に於ける正常なる活動に於いて如何なる働き方をなすかを研究して見ようと思ふ。私の云ふのは子供の遊びの事である。

子供の遊びに就いての諸說に關してはプファイファー（S. Pfeifer）が最近『イマゴー』誌第五卷第四號に於いて詳論し、且つこれを分析學的に批評してゐる。私はこゝでこの論文に準據することが出來る。それ等の諸說は兒童の遊戲の動機を闡明しようと努めてゐるのだが、そのくせその遊戲を經濟的見地から考へることを、そこに快感獲得の目的あることを、一向に顧慮してゐない。私はこれ等遊戲と云ふ現象の全體を把握しようとは思はないが、私に與へられた一つの機會を利用して、一歲半になる一幼兒が始めて自分で發明した遊戲を說明して見ようとするのである。それは私の單なる行きずりの觀察ではなかつたのだ。何となれば、私はその子供及びその子供の兩親らと共に數週間を同じ屋

根の下に暮したのだからである。で、私がその謎のやうな、而も相當に永い間繰返された行爲の意味を覯破するまでにはやゝ永く掛つたのであつた。

その子供は智慧の發達があまり早い方ではなく、生後一ケ年半になつても極めて僅かの片言しか話し得ず、それ等の言葉以外には或る意味を有つた發音をしたが、それは身邊の者らにだけしか分らなかつた。併しその子は兩親及び只一人の女中によく馴付いてをり、また行儀がよいと云ふので褒められてゐた。彼は夜中に兩親を騷がせるやうなこともなく、何かをいぢつてはいけないとか、この部屋に這入つてはならぬとか云ふ命令には良心的に服從した。就中感心な事には、彼が母親に愛着してゐるに拘らず數時間も母親が彼をおいてきぼりにしても決して泣くやうなことはなかつた。母親はこの子を自分の乳で育てたばかりでなく、その世話をするに一切他人の手を借りたりそれに任せたりはしなかつたのだ。この善良な子供が時々厄介な習慣を示すやうになつた。彼自身が大切に思つてゐる總ての小さな品物を部屋の隅や寢臺の下に投げ遣るのであつた。そのためにその玩具を再び捜し出すのは屢々容易の仕事ではなかつた。玩具が出て來ると、子供は如何にも感興のありさうな、滿足げな表情で、オーオーオーオーと聲高に、長く引張つて叫ぶのであつた。その叫び聲は、母親及び觀察者の合致した見解に依ると、單なる感投詞でなくて、「出て行け（フォルト）」と云ふ意味であつた。遂に私は、それが

一つの遊戯であり、さうして總ての子供はその玩具で「居ない居ない（フォルトザイン）」を演ずるためにこれを利用するのだと云ふことを氣付いた。やがて或る日、私は或る觀察に依つて自分の考への正しいことを確め得た。子供は絲の卷きつけてある木製の絲卷を持つてゐた。その絲卷を床に轉がせてそれを背後に車のやうに曳張つて遊ぶと云ふやうなことは、彼には考へつかなかつた。彼は絲のついたその絲卷を非常に巧みに被ひのかけてある寢臺の緣の上に轉がせ、かくてそれが見えなくなると、例の意味深長なオーオーオーオーを發した。やがてまたその絲卷を絲で寢臺から曳張り出し、その出現に對して今度は嬉しさうに「居た」と云つた。これはこのやうに「居ない居ないバア」や「隱れんぼう」の完全な遊戯であつた。これに就いては人々は多く最初の居なくなる方の行動ばかりを見るやうであり、さうしてその方もそれ自身のために飽かず遊戯として繰返されるであらうが、併しそのより大なる快樂は第二の行動（再會）の方にあることは疑ふまでもない＊。

【註】＊この解釋はその後の觀察に依つて愈々確證された。或る日、母親が幾時間も不在にしてゐたが、歸宅した時、子供は「坊や、オーオーオーオー！」と云つて迎へた。その意味が始めには分らなかつた。併しやがてかう云ふ事が明かになつた。その子供は長い間一人ぼつちでゐた間に自分を見えなくする方法を發見したのであつた。子供は殆ど床にまで達するほどの姿見鏡の中に於ける自分の姿を見出し、やがて下に蹲むと自分の姿が「居ない居ない」になつてしまふことを知つたのであつた。

その遊戯の解釋は、それから容易になつた。それは子供の偉大な文化的な行爲に關係があつたのだ。それは、彼が實施した本能放棄（本能滿足の放棄）、母の外出を苦惱なく許すことゝ、關係があつたのだ。子供は同じ消失と再現とを自分で處理出來るもので演じて見ることにより、云はゞ自分をそれに對して防備したのである。この遊戯の本能感情上の意義に對しては、それを子供が自分で發明したか或は何かの暗示でやるやうになつたかは、どちらでもよいことである。我々の興味は別の一つの點に掛つてゐるのである。母親の出掛けて行くことは、子供にとつては愉快であり得る筈はない。或はただ無關心になり得るのみである。このやうに子供が彼自身にとつて不快なこの體驗を遊戯として反復するのは、如何にして快不快原則に合致するのであらうか？　これに對して人々は恐らくかく答へるであらう、出掛けて行くことが喜ばしき再出現の豫備條件として演ぜられ、その再出現の方にこの演劇の本來の意圖があつたに相違ないと。併し、第一幕の、出掛けて行くことだけがそれ自身として芝居に仕組まれ、而も芽出たし芽出たしに終るまでの全體が仕組まれるよりも遙かに屢々であるので、その事が、右の見解には撞着するわけである。

右のやうな一つの場合を分析して見ても着實な結論に達することは出來ないが、併し囚はれざる考察を施して見ると、我々には子供がその體驗を別の動機から演劇に仕組んでゐるのだと云ふ感じがす

るのである。子供はこの場合受動的であつたのだ。さうして體驗に驅り立てられて、それが不快であるに拘らず、その體驗を遊戲として反復することに依つて能動的な役割に這入り込んで行つたのだ。このやうな努力は一つの統御本能の現れであると見ることも出來よう。その記憶それ自身は愉快であらうとなからうと――。併し人々はまた別の解釋を下すことも出來よう。物を投出すと云ふことは、即ちそれが居ない居ないになると云ふことは、生活に於いて抑壓せられてゐる（母への）復讐慾の滿足であるかも知れない。母は彼を見捨てゝ出掛けてゐるのだから。果してさうだとすれば、よし、お出掛けなさいとも、僕は母ちやんなど要らない、僕の方から追出してやると云ふ、剛情な意味があるかも知れない。一歲半の時にその最初の遊戲を私が觀察したその子供は、その後一年經つた時に、玩具に就いて何か氣に入らぬことがあるとそれを床の上に叩きつけつゝ、「いくちやに行け！」（Geh in K(r)ieg!）と云ふのが常であつた。その當時不在であつた彼の父親は戰爭に行つてゐたのだと、人々は彼に語つて聞かせてゐたが、彼は少しも父親を慕ふことはなく、寧ろ現在の如き母の獨占を何人にも亂されたくないと云ふ樣子を露骨に示すのであつた。*

【註】＊この子供が五歲と九ヶ月になつた時に、母親は死んだ。今や母は本當に「居ない居ない(オーオーオーオー)」になつたのであるが、この男兒は亡母のために何らの悲しみを示しもしなかつた。何れにもせよ、その間に二番目の

子供が出來て、それに對して彼は非常に激しい嫉妬を感じてゐた。

我々はまた、同樣な敵意的亢奮を表現するに人間の代りに品物を放り出すことの出來た他の子供達を知つてゐる。* そこで人々はかう云ふ疑念を持つ、何か非常に印象の深いことを心理的に工作しようとの欲求、完全にそれを統御しようとの欲求は、快不快原則には關係なく、第一次的に、表現せられ得るのではなからうかと。こゝに論究してゐる子供の場合に於いては、彼が一つの不快な印象を遊戲に於いて反復し得るのは、別種の、併し直接的な快感がそれによつて獲得されるからである。

註 *『ゲーテの「詩と眞實」の中の一つの幼兒期記憶』（本譯文全集第六卷『分析藝術論』の內）參照。

子供の遊戲を更に立入つて追及して見てもやはり、これ等二つの考へ方の間に我々が動搖することを如何ともすることが出來ない。總ての子供は生活に於いて彼等に大きな印象を與へたことを遊戲に於いて反復し、かくてその印象の强さを解消し、さうして自分を云はゞその立場の支配者たらしめようとするのだと云ふことを、人々は認めるのである。併しながら他方に於いて、總て彼等の遊戲はその當時の彼を支配してゐる願望——自分も大きくなつて大人たちのするやうな事を行りたいとの願望——の影響の下になされると云ふことは、十分に明白である。また人々の觀察するところに依ると、經驗の性格が不快であるからとて、それでその經驗が遊戲とならないとは限らないのである。醫師が

子供の咽喉を診たり、彼に小手術を行つたりすると、その恐るべき經驗はきまつてその子の次の遊びの內容となる。併しその際、他の源泉から快感の獲得せられることは看過出來ない。子供は受動の經驗を能動の遊戲に轉換することにより、自分自身に加へられた不快事を遊び仲間に加へ、かくて代理人の身に就いて復讐するのである。

かくの如く論じて來ると、遊戲の動機として特殊の摸倣衝動を假定するのは如何はしいと云ふことが明かになる。なほこゝで警告しておかねばならないことは、成人の藝術的遊戲及び摸倣が、子供の態度と違つて見物人の身になることを目指し、見物人に苦痛な印象（例へば悲劇に於ける如き）を與へることを辭せず、而も見物人等はそれに依つて高度の享樂を得てゐると云ふことである。それ故に我々は確信する、それ自身に於いて不快なるものを記憶や精神的加工の對象となすには、快不快原則の支配下に於いてもなほ十分に手段や方途の存すると云ふことを。このやうに窮極的に快感獲得に結果してゐる場合や立場を、經濟的に（快不快原則的に）確立してゐる美學に關係させることは出來ようが、併し我々の意圖のためにはさう云ふ場合や立場は役に立たない。何となれば、そこには快不快原則の存在と支配とが豫想せられてゐて、快不快原則を超えた傾向（則ち快不快原則よりも本來的であり、而もそれとは獨立してゐるところの傾向）の效力に對しては、何の證明にもならないからである。

第三章　轉嫁及び運命に於ける反復强迫

二十有五年間の激烈な努力の結果、精神分析的技法の第一の目的は今日では頭初に於けると全く異なるものとなつて來た。始めには分析醫は患者に於いて匿されてゐる無意識を洞察し、取纏め、潮時を見てこれを告げ知らせると云ふこと以外には、何事をもなし得なかつた。精神分析學は何よりもまづ解釋術であつた。治療上の課題はそれに依つて解決せられなかつたので、直ちにその次の意圖が擡頭した。卽ち患者をして彼自身の記憶を回想せしめそれに依つて心理内に構成せられてゐるものを確認せしめるやうに强ふることであつた。この努力に際して、主要點は患者の抵抗に置かれた。そこで技術は今や、この抵抗を出來るだけ早く暴露し、それを患者に示し、人間的感化（このやうな場合には暗示が轉嫁として働く）に依つて抵抗を放棄せしめるやうに動かして行くことゝなつた。

併しながらやがて愈々明かになつて來たのは、無意識を意識化すると云ふ一定の目的がこの方途でも完全には到達出來ないと云ふことであつた。患者は自分の内に抑壓せられてゐるものゝ總てを、少くともその主要部分を、回想することが出來ない。それ故に、これが君の心理内の構成だと云つて聞

かせてもそれを成程と肯つてはくれない。患者は寧ろ、彼自身の心内に抑壓せられてゐるものを現在の體驗として反復せんとし、それを過去の一部分として回想しようとは（その方が醫者としては望ましいことなのだが）せぬのである。*

【註】* 本全集第八卷『分析療法論』中の「想起、反覆、竝びに徹底操作」を參照。

好ましからざる誠實さを以て擡頭し來るこの回想は常にその內に幼兒性感的な部分を、卽ちエディポス・コムプレクス的な及びそれの派生的な部分を、內容に包含してをり、從つていつもきまつて轉嫁の領域に於いて、卽ち醫者への關係に於いて演ぜられるのである。分析處置中にかう云ふ過程が現はれると、卽ち人々は昔の神經症が今や新たな轉嫁神經症となつて現れたと云ふことが出來る。醫者はこの轉嫁の領域を出來るだけ局限し、出來るだけ多くを回想の領域の中へ追込み、反復の中に浚出て來る部分を出來るだけ少くしようと骨折つたのである。回想と再生（反復）との間に生ずる關係は、あらゆる場合に於いて違つてゐる。概して云へば、醫者は被分析者に對して治療上のかゝる段階を經させずにおくことは出來ない。醫者は患者をしてその忘れられたる生活の或る部分を反復させねばならず、さうしてそこに或る程度の勢力が保存せられてゐることに對して注意してゐなければならない。その勢力あるがために、現實らしく見えて實は現實ならぬものが忘れられたる過去の反映としていつ

も再認識せられるのである。右に述べた二つのこと——過去の生活の或る部分を反復させること〻、保存せられてゐる勢力に注意すること〻——が首尾よくなし遂げられるならば、患者は自分の無意識に隱されてゐたものを成程と思つて承認し、その承認に基いて治療上の成果が收められるのである。

精神分析處置の間に現れるこの「反復强迫」(Wiederholungszwang)を一層判然と把握するためには、分析者は患者の反抗に直面した時にそれが無意識の抵抗であると思ひ込む誤りを犯してはならない。無意識的なもの、卽ち抑壓せられたものは、治療一般の努力に對しては何らの抵抗を試みないのである。それどころか、無意識なものは已に課せられた重壓を現實的行爲に依つて意識の方へ、發散の方へと、驅り立てること以外には何もしないのである。治療に於ける抵抗は、始めに抑壓と云ふことをなしたのと同じ高級心理層竝びに心理組織から發してゐるのである。併しながら抵抗の動機も(動機のみならずこの抵抗それ自身も)、治療中に實驗したところに依ると、始めには無意識であるのだから、我々の表現の仕方を改善するやうに注意しなければならない。もし我々が意識と無意識とを對立せしめないで、聯絡ある自我と抑壓せられたものとを對立せしめたならば、我々の表現の仕方は曖昧ではなくなる。自我に屬してゐる多くのものは確にそれ自身に於いて無意識であり、殊に自我の中核と人々の呼び得るやうなものは無意識である。たゞ自我の一小部分を我々は前意識(das Vorbewusste)

と云ふ名で呼ぶことが出來る。これは單なる記述的表現法に代ふるに組織的な、又は動的な表現法を以てしたことであるが、この置換へに從へば、被分析者の抵抗は彼の自我から發すると云ふことが出來る。そこで我々は直ちにかく考へるのである。反復强迫は無意識的抑壓のなすところであると。抑壓が治療操作に會つて弛むまでは、反復强迫は現れないものであるらしい。*

【註】＊私は他のところで明かに區別しておいたが、この場合に反復强迫を助成するものは治療の暗示的效果である。卽ち、無意識的なエディポス・コムプレクスの中に深く潛んでゐるところの、醫者への從順さである。

意識的自我及び無意識自我の抵抗が快不快原則のために役立つものであることは、疑ふまでもない。實際、抵抗さへしてをれば、抑壓せられてあるものが解放せられた時に惹起される不快を味はなくても濟むと云ふものだ。で、我々としては現實原則に愬えることによつてそのやうな不快を這入り込ませようと骨折るのである。ところで抑壓せられたものゝ力の表現たる反復强迫は、快不快原則に對して如何なる關係に立つてゐるか。反復强迫が再生せしめる大部分のものは自我に對して不快を齎すと云ふことは明かである。何となれば、反復强迫は實際、抑壓せられてゐる本能的亢奮の活動を明るみへ押出すものだからである。併しそれは吾人が旣に說明したところのものであつて、快不快原則に牴

觸しないものである。一つの系統に對しては不快を與へるものであるが、別の系統に對しては滿足を與へるものである。併しながら今や我々が記述せねばならない、注意すべき新事實は、反復强迫がやはり過去の體驗（その中には何等快感の可能性の含まれてゐないやうな、そのやうな體驗）を反復すると云ふことである。その過去の體驗にはまた、その時以後抑壓せられてゐる本能亢奮の滿足でさへもなかつた如き、さう云ふ體驗が反復せられるのである。

幼兒的性生活の早期開花は、彼等の願望が現實と調和せざるため、また幼兒的發達段階が不完全なるため、やがて凋落すべき定めにある。この早期開花は最も痛ましい事情の下に、深刻な苦感の間に衰頽する。人から愛されなくなることや種々な失敗は、自己感情に對して持續的な傷痕を自己愛上(ナルチスティツシユ)の傷痕として殘す。自己愛上の傷痕と私は云ふのだが、マルチノウスキー*はこれを「劣等感」（Minderwertigkeitsgefühl）と名付け、とにかく神經症患者の劣等感に對しては最も力强い契機となつてゐる。

【註】＊『劣等感の色情的根源』（Marcinowski, Die erotischen Quellen der Minderwertigkeitsgefühle, Zeitschrift für Sexualwissenschaft, IV. 1918）參照。

子供は性に關していろいろ穿鑿して見るが、子供等の身體が發達して行くのでその穿鑿も沙汰やみ

となり、何ら滿足の行く結論は齎されない。そこで後年になつて、「僕は何も仕上げることが出來ない、何も考へが纒まらない」と云ふやうな嘆きとなる。多くの場合、異性親への感傷愛的執着は失望に終り、滿足の期待が外れ、新たに赤ん坊が生れて來た時に嫉妬を感じ、自分の愛してゐる親に眞心がないと云ふことが明白になる。また自分でもこの樣な子供を造らうとの悲劇的に大眞面目な彼等自身の試みは屈辱的な失敗に終る。これまで子供等に頒ち與へられてゐた感傷愛は漸次に撤回せられることになるし、教育は愈々重苦しくなつて來るし、小言は益々嚴しくなつて來るし、時々には懲罰も加へられ、かくて彼はあらゆる範圍の輕蔑を身に受けることになる。この幼兒期の典型的愛情が如何にして終りを告げたかをいつもきまつて反復してゐる二三の珍しい場合が存してゐるのである。

總てこれ等の望ましからぬ事情や苦痛な本能感情狀態は、今や神經症患者に依りて轉嫁として反復せられ、非常な巧妙さを以て再體驗せられる。彼等は未完了の治療を中絕せんとし、輕蔑されたと云ふ感じを作り出すことを心得て居て、醫者に向つて亂暴な言葉を用ゐ、自分等への醫者の態度を冷淡ならしめるやうに仕向け、嫉妬を起すべき適當な相手を發見し、また幼時に熱心に與へたがつた子供の代償として大きな贈物を與へようと約束をするが、それ等の贈物も大抵は、以前の子供が空想であつたやうに今度の贈物も現實の事ではないのだ。總てこれ等はその當時には何ら快感を齎すものでは

なかつたのだ。今日ではそれ等が回想や夢となつて顯現した時には、新たな體驗として形作られる時よりは、その不快は少いには相違ないのだ。勿論、滿足を與へるのは本能の行動が眼目ではあるが、併し本能はその時でもやはり快樂でなく不快を齎したと云ふ經驗があつても、その經驗は何にもならない。その行動は依然反復せられる。强迫的にさう云ふ風になるのである。

精神分析が神經症患者の轉嫁現象に就いて指適したところと同じものはまた、神經症者にあらざる人人の生活に於いても見出すことが出來る。それ等のものは彼等の生活に於いて付き纒はれてゐる宿命であり、彼等の經驗中の惡魔的な特徴であるかの如き觀を呈してゐる。然るに精神分析は始めから、そのやうな運命が大部分は本人の意圖するところであり、且つ早期幼兒時代の影響に依つて決定せられてゐるのだと、考へてゐるのである。その間に現れる强迫は、神經症患者の反復强迫と違つてはゐない。たゞそれ等の人物に於いては、症候構成として現れる神經症的葛藤が見られないだけのことである。で、諸氏は、その對人關係がみな同樣な結末に至るが如き人物を知つてゐられるであらう。例へば人に恩を施すことの好きな慈善家でいつも飼犬に手をかまれてゐる人々がある。彼等は他の點では違つてゐるにしても、忘恩の苦杯を滿喫する點では一致してゐるやうである。また如何なる友とつき合つても遂にはその友に裏切られるやうになる如き人々がある。その他、或る人を大なる權威とし

て自分でも認め、世間にも認めさせておきながら、暫くするとその權威をとり上げてこれを他の者の上におくと云ふやうなことを反復してゐる人々もある。また婦人に對する戀愛態度が同じ樣相を示し同じ結末に終る如き人々がある。等々……。我々はこのやうに「同じことが永久に反復せられる」ことをあまり不思議とは思はないのである。もし、そこに本人の能動的態度が見られるならば……。ましたもそのやうに同じ經驗となつて反復せられねばならない特徴が、本人の性格中に發見せられるならば……。併し我々も驚かざるを得ないのは、本人が受動的に經驗するやうに見えてゐながら、そこには何の外的影響もなく、而も常に同じ運命がそこに反復せられてある如き場合である。例へば、前後三人の男と結婚し、その何れの夫も結婚後間もなく病氣に罹り、且つ死ぬまで看護しなければならなかつた一婦人の場合を想起する。* かやうな運命的特徴に就いての極めて感動的な文藝作品は、タッソーのロマンティックな史詩『聖都解放』（Tasso: Gerusalemme liberata）である。勇士タンクレッド（Tankred）は、敵騎士の具足をつけて戰を挑んで來た自分の愛人クロリンダ（Clorinda）を、それと知らずに殺した。彼女の葬式の濟んだ後で、彼は十字軍の恐れる無氣味な魔の森に這入つて行つた。そこで彼は劍を以て一本の丈高い樹を伐倒したが、その樹の傷口からは血が流れると共にクロリンダの聲がした。クロリンダの靈がこの樹に宿つてゐて、タンクレッドが再びクロリンダを害したことを

難じた。

【註】＊ユングの論文『各人の運命に對する父の意義』（C. G. Jung: Die Bedeutung des Vaters für das Schicksal des Einzelnen. Jahrbuch für Psychoanalyse, I, 1909）に適切な言及があるから參照せられたし。

人々の轉嫁過程に於ける態度や彼等の運命を以上のやうに觀察して見て、我々は次のやうな假定を下す勇氣が生じて來る。卽ち、人間の心理の中には快不快原則を超えて働くところの反復强迫的傾向が實際に存在してゐると。我々は今や又、災害性神經症患者の夢や幼兒の遊戲衝動をもこの强迫的傾向と關係あるものと認めんとするに傾くであらう。勿論、他の動機の參與なくしてこの純粹に反復强迫だけが作用することは極めて稀だと云ふことは、斷つておかなければならない。子供の遊戲の場合には、その起源に就いて他の如何なる解釋が容認せられ得るかを、我々は旣に指摘しておいた。反復强迫と直接的な本能滿足の快樂とが、子供の遊戲に於いて、密接に融合せられてゐるやうに思はれる。轉嫁現象は、抑壓を固執する自我の側の抵抗を助成するものであることは明かである。治療は反復强迫を利用するものであつて、快不快原則に固執せんとする自我は反復强迫を、云はゞ、自分の側へ引寄せるのである。運命强迫（Schicksalszwang）と名付け得べきものに就いても、その多くは合理的說

明に依つて理解することが出來るやうになり、殊更に神祕的な動機をそこに豫想する必要はないのである。最も疑ひの餘地なきは、恐らく災害の夢であるが、併しなほ仔細に考究して見ると、我々は、他の實例に於いてはやり、我々にその動機の分つてゐる行動としてだけでは說明しきれないと云ふことを告白しなければならない。そこで、反復强迫を假定することの是認理由が十分に存するわけである。さうして反復强迫は、そのために側に押遣られてゐる快不快原則よりはもつと自發的、もつと本源的、もつと本能的なものであるやうに、我々には思はれる。併しながら、そのやうな反復强迫が心理生活中に存在してゐるものとすれば、それは如何なる機能をなし、如何なる條件の下に擡頭し來り、また我々がこれまで心理生活に於ける亢奮過程の上に支配力を振つてゐると信じてゐた快不快原則に對して如何なる關係を持つてゐるかを、我々は何とか知りたいものと思ふのである。

第四章

外傷性神經症に於ける反復强迫

次に述べる事は單なる思辨(スペクラチオン)である。屢々あまりに奔放なる思辨である。各人は、各々所有する特殊の心持ちによつてこれを承認したり、又は無視したりしよう。或はまた我々は、一つの思想から如何なる思想が發展し來るかを、好奇的に調べて見ようとするのだとも云へる。

我々は無意識的心理過程を調べて見て、意識は心理過程の全部を占めてゐるわけではなく、それのほんの特殊の一機能に過ぎないと云ふことを感知してゐるので、精神分析の思辨は實にこの感知に基いてゐるのである。超心理學的(metapsychologisch)な表現法で云へば、意識(Bewusstsein)とは一つの特殊な系統(區劃)の所業であると云ふことになる。この系統は本質的には外界より來る刺戟を知覺し、また內界の精神機能によつて生ずる快苦を知覺するものであるが故に、この意識系統を空間的位置あるものとして考へることが出來る。この區劃は內界と外界との境にあつて、外界に面してをり、その內側には別の精神系統を包藏してゐるものと想定せざるを得ない。

とは云へ、我々はこの假定に依つて別に新しいことを云つたのではないのだ。腦髓解剖學に於ける

局所的な考へ方と同じことを云つたに過ぎないのである。腦髓解剖學に於いても、腦皮質中に意識の「座」の存在を認めてをり、皮質は腦中樞を包んで腦の最外表部を形成してゐると云ふ。腦髓解剖學では、何故に——解剖學的に云つて——意識が頭腦の深部若しくは底部に安全に置かれずして、却つて外表部に置かれてあるかに就いては、別に考へて見るには及ばないことである。吾人の知覺的意識系統がそのやうな位置を與へられてゐると云ふことの中に、恐らく前記の解剖學的事實が猶深く究められるであらう。

この系統に於ける心理過程としては、意識がその唯一の特性であるとは、我々は考へない。と云ふ我々の根據は、我々が分析經驗中の印象にあるのである。卽ち、他の系統に於けるあらゆる亢奮過程は記憶の根柢としての持續的痕跡を（つまり意識化せられることゝは何の關係もない記憶の殘物を）意識系統に殘すのである。その記憶の殘物は、それ等を遺留する過程が決して意識化せられない時には、屢々最も力強く、最も固執的なものである。我々は併しながら、そのやうな亢奮の持續的痕跡が知覺的意識系統の中にもやはり構成せられるとは信じ難いのである。もしその痕跡が常に意識化せられてあるならば、新たに入り來る亢奮に對するこの系統が受容的適合態度が直ちに制限せられるであらう。* もしさうでなく、無意識的であるならば、一つの系統の機能が大抵は意識的であるのに、何故

に無意識的過程がそこに存在し得るかと云ふことを、我々は說明しなければならないことになる。意識化と云ふことは或る特殊の系統に於いてのみ見られることだと云つたとしても、それに依つて我等には何の變化も、何の利益もない。よしんばこれが何ら絕對的に拘束的な考察でないとしても、とにかく、意識化することゝ記憶痕跡があとに殘ることゝは同一系統中では相互に矛盾すると云ふことは想定せねばならない。そこで我々はかく云ふことが出來る。意識系統に於いては亢奮過程は意識化せられるが、併し何らの持續的痕跡を殘さない。また亢奮過程の一切の痕跡（記憶はそれ等の痕跡に基いてゐるのだが）は次の內部系統に於ける亢奮がこの系統に波及した時に生ずるのであらうと。私が一九〇〇年に公刊した拙著『夢の解釋』の思辨的な章の中に挿入した圖式は如上の意味に於いてなされたものである。吾人は意識の起源に就いて他の方面からは殆ど知るところなきを思へば、意識は記憶痕跡のところに生ずとの命題は、少くとも何らかの決定的な主張をなすだけの意味が許されねばならないであらう。

【註】 ＊ このところは『ヒステリー研究』(Studien über Hysterie, 1895) 理論篇中ヨハン・ブロイエルの說のまゝに述べてある。

意識系統にはこのやうに特異な點があると思はれるのである。卽ち、この系統に於いては、他の系

統に於けるとは違つて、そこでの亢奮過程はその要素(エレメント)に持續的な變化を遺すことなく、意識化の現象の中に云はゞ發散せられるのである。このやうに一般的規則から離反してゐることを說明しなければならない契機は、專らこの一系統に就いてのみ問題になるので、他の諸系統に缺如してゐるこの契機は、意識的系統の露出的地位を占め、その系統の外界への直接的突出と容易になり得るのである。

刺戟を感受し得る不分化の小胞の如き、これより以上單純なものはないと云ふが如き、さう云ふ生活體を想像して御覽なさい。卽ち、そのやうな生活體の外界に向つてゐる表皮はその位置それ自身に依つて自ら變化し、刺戟享受の器官として役立つのである。種族發達史の反復としての胎生學はやはりまた、中樞神經組織が外胚葉から生じてゐること、腦の灰白質は原始的表面層の派生物であること、それの本質的特性は遺傳に依つて傳はり得ること、などを示してゐる。そこで容易に考へられ得ることは、小胞の表面が不斷に外界からの刺戟を受けることに依り、その物質が一定の深度まで持續的の變化を被り、かくてそこの亢奮過程がより深き層に於けるとは違つた進みをとると云ふことである。かやうにして一つの皮質が構成せられるが、その皮質は刺戟の效果に依つて完全に燃え固まり刺戟の受容に對しては最も好都合な關係が齎され、それ以上の變化は生じないやうになる。この考へ方を意識系統に適用して見ると、それは刺戟の通過に際しこの系統(システム)の要素が何らの持續的變化を被らないや

うになると云ふことである。何故ならば、それらの要素はこの效果の意味に於いて旣に極度に變化せしめられてゐるからである。併しながら、その時、それらの要素は意識を生ぜしめることが出來るのである。物質(ズブスタンツ)のかゝる變化及び物質に於ける亢奮過程の變化が何に存してゐるかと云ふことに就いては、種々に考へて見ることも出來るであらうが、今日のところではまだ何とも證明がつかない。そこで我々は次のやうに假定することが出來る。卽ち、亢奮が一つの要素から他の要素に進んで行く時に一つの抵抗を克服しなければならないこと。このやうに抵抗が減少するために亢奮の持續的痕跡(通路)が生ずること。かくて意識系統に於いては一つの要素から他の要素に移行する際の抵抗が旣に存在してゐないこと。以上の如き考へ方は、ブロイヤーが心理的系統の諸要素に於いて自由に流動してゐる纒綿(備供)エネルギーと靜止してゐる(拘束せられてゐる)纒綿エネルギーを區別したことゝ關係させて見ることが出來よう。* 意識系統の諸要素は、そこで、拘束せられてゐない、自由に發動することの出來るエネルギーのみを導くことになる。併し私の考へに依ると、これ等の諸關係に就いては出來るだけ確定的な云ひ方をしない方が今のところ却つてよいやうである。兎に角、我々はこれ等の思辨に依つて意識の起源を、意識系統の位置竝びにその系統に歸せられる亢奮過程の特殊性と多少の關係ありと認めんとするのである。

【註】＊ブロイエル・フロイド共著『ヒステリー研究』參照。

刺戟受容の皮質層を有してゐる、生ける小胞のことを、更に別樣に論じなければならない。この生ける物質の小片は最も强力なエネルギーを包有する外界の中に浮動し、もしそれが刺戟に對する防備(Reizschutz)を有してゐないならば、外界の刺戟作用に依つて破壞せられるであらう。それが如何にしてこの防備を持つやうになるかと云ふに、それは彼の最外部表皮が生體的な構造を廢棄して多少とも無機的となり、かくて今やこの特殊な包皮又は膜として刺戟拒否的な働きをするやうになるからである。つまり、外界のエネルギーはその激しさのたゞ一部分だけを、その次に生きて存續してゐる層に及ぼすことが出來るやうにするからである。かくてこれ等の層は保護を被りながら、入り來る多くの刺戟の受容に自ら當ることが出來る。併しながら外面層は自分自身の死によつて、凡てのより深き内面層が同樣な運命に會ふことを防いだのである。少くとも刺戟に對する防備を突破するやうな强さの刺戟が這入つて來ないやうに防いだのである。生きてゐる有機體にとつては刺戟への防備は刺戟の受容よりはもつと重大な位な役目である。有機體はそれ自身のエネルギーを貯藏してゐて、殊にそれ自身の内に行はれる特殊のエネルギーの變革の特殊の形態を、あまりに强大な外界の（一切平等化的な、從つて破壞的な）エネルギーの影響力に對して保護すべく努力しなければならぬ。刺戟の受容は

就中、外界刺戟の方向や種類を知ることの意圖に役立つ。だから、外界の少しの證據をとるだけで、少量で外界を味ふことで滿足しなければならない。高度に發達した有機體に於いては、嘗ての日の小胞の刺戟受容的皮質は旣に夙く肉體內の深部に這入込んでゐるが、併しそれの一部分は一般の對刺戟防備の直下の表皮に置去りにされてゐる。その一部分と云ふのが感覺器官であつて、これ等は特殊の刺戟作用の受容に對する裝置がその本質であるが、併しそれ以外に、そこには過大な刺戟や不適當な種類の刺戟に對する防備の裝置もなされてゐる。で、外界刺戟の極少量のみを受容し、それの見本を取つて見るのがその部分の特質であるから、吾人はそれを以て、かの外界に觸れ而も常にそこから引込んでゐる觸角に比較することが出來よう。

私はこゝで最も根本的な處置に役立つ一つの主題に就いて、ざつと觸れて置かうと思ふ。時間と空間とは我等の思考の必然的形式であるとのカントの命題は、今日精神分析學によつて得られた若干の認識に從つて論議することが出來る。吾人は、無意識心理過程がそれ自身に於いて「沒時間的(ツァイトロス)」であることを知つてゐる。と云ふのはつまり、無意識心理過程が時間的に秩序立てられてゐないと云ふことであり、時間はそこに何らの變化を及ぼし得ないと云ふことであり、我々は時間の觀念を無意識に照して持つことが出來ないと云ふことである。これ等は消極的特質であるが、たゞこれ等を意識的心

理過程と比較することに依つて判然と知ることが出來るやうになる。時間に就いての吾人の抽象觀念は寧ろ知覺意識系統の働き方から導き出されたもので、働き方それ自身の知覺に相應するやうに思はれる。この系統がこのやうな働き方をするに際しては、對刺戟防備の今一つの方途が辿られるやうである。これ等の主張は甚だ曖昧に響くことを私は知つてはゐるが、併しそのやうな暗示に留めておかなければならないのである。

生きてゐる小胞は外界の刺戟への對刺戟防備を以て自分を保護してゐることは、これまで詳論して來た。それ以前に、吾人はその次にある皮質層が外界刺戟の受容器官として分化せられてゐるに相違ないと云ふことを斷言しておいた。併しこれ等の敏感な皮質層（後の意識系統）は、內部からの刺戟をも同樣に受容するので、內外の丁度中間にこの系統が位置してゐること、及び一方からの作用と他方からの作用とに對する條件が違つてゐることゝは、この系統竝びに全心理裝置の活動に對して決定的なものとなるのである。外界に對しては對刺戟防備があるために、これに向つて來る大量の亢奮もたゞ微弱になつた程度に於いて作用するに過ぎないが、內部に對しては對刺戟防備は不可能であつて、深層からの亢奮は直接的に且つ微弱にならない程度に於いてこの系統へと迫まつて來る。かくてそれ等の進みの一定の特性として快不快感の系列が生ずる。何れにもせよ內部から來る亢奮はその强度に

より又その質的特性により(確か、その振幅により)、外界から流れ入る刺戟よりも、遙にその系統の作業樣式に適合するものである。併しこれ等の狀態によつて決定せられてゐる二つのことがある。第一は、快不快感が裝置內部に於ける過程の指標であるが故に、あらゆる外部的刺戟よりも優勢なること。第二は、過大量の不快感を生ずるそのやうな內部亢奮に對する態度の一つの方針である。この場合には、その亢奮が內部からでなく外部から作用し來るかの如くに取扱ふ傾向がある。かくして外部的刺戟への防備手段を內的刺戟への防備に流用するのである。これが病理的過程の原因としてあのやうに大きな役割を演じてゐるところの、かの投出(Projektion)の起源である。

右の最後の考察に依つて吾人は快不快原則の理解に一層近付いたやうに、私には思はれる。併し快不快原則に反對する如き種々な場合の說明はまだやつてはゐないのである。それ故に、更に一步を進めよう。外的刺戟にして對刺戟防備を突破する程に强力なるものを外傷的(traumatisch)と吾人は呼ぶのである。外傷なる槪念は、刺戟がこれほど强力でさへなければ防備し得られたと云ふ意味を含んでゐると私は信ずる。外的傷害の如き出來事は、確に一つの大袈裟な障害を有機體のエネルギー作用に惹起し、あらゆる防備手段を動員せしめるものである。併しながらその際、まづ快不快原則は駄目になるのである。心理裝置はこのやうな多量の刺戟の洪水に對しては最早防ぐことが出來ず、寧ろ別の

課題が現れて來る。即ち、刺戟の量を統御し、拘束し、かくて相當の排出から解放しようとするやうになる、

身體的苦痛に伴ふ特殊の不快は恐らく、限られた範圍に於ける對刺戟防備が突破せられた結果であるらしい。そこで末梢的なこの點から心理の中樞裝置の方へ、不斷の亢奮が流入して行く。亢奮は、防備突破のない場合には、只裝置の內部からのみ流れ來るを常とするのであるが……。＊ところで、かかる突入に對して心理裝置は如何なる反應を示すであらうか。それは、その破壞せられた部分の周圍に、この亢奮に相當するだけのエネルギー纏綿（備給）を造らんために、あらゆる方面からエネルギーを搔集めて來ることになる。そこで大袈裟な逆纏綿（Gegenbesetzung）が生ずることゝなり、それを助長するために凡ての他の心的系統は貧困となり、かくて他の心理活動は廣汎に亙つて減退し低下することになる。右の如き例證からして、我々の超心理學的推定をそのやうな原型の上に據らせることを、我々は學ばうとするのである。かくて我々は次のやうに結論を下す。――それ自身高度に纏綿せられてゐる系統は新たに流入し來るエネルギーを採上げてそれを靜止的な纏綿に變化させ、かくてそれを心理的に「拘束」（binden）することが出來る、と。それ自身の靜止的纏綿が愈々高ければ高いほど、その拘束力も愈々大きくなる。その反對に、それの纏綿が低ければ低いほど、その系統は流入

し來るエネルギーへの受容力が減少し、かくて對刺戟防備のそのやうな突破は愈々力強くならざるを得ない。流入の個所の周圍に纏綿が高まることは單に侵入する亢奮量の直接的作用として說明する方が遙に簡單だと云つて抗議する人があるかも知れないが、それは正しくない。もし抗議者の說の如くであるならば、心的裝置は單にエネルギー纏綿の增加をのみ經驗し、苦痛の痲痺的特質や凡ての他の系統の貧困は說明がつかなくなる。また苦痛に依つて激甚な發散的效果の擧がることも、我々の說明の妨げとはならない。何となれば、かゝる發散的效果は反射的に生ずるからで、つまり、心的裝置の干涉なしに生ずるからである。我々の論議は確定的ではない（さうして我々はそれを超心理學的（メタプシコロギシュ）と云つてゐる）が、何故にかく確定的なことを云はないかと云ふに、それは勿論、心理系統の要素に於ける亢奮過程の本性に關しては何事も我々に分つてゐないし、從つて我々はそれに就いて當然何の假定を下すことも出來ないと云ふ感じがすると云ふところに、その所以がある。このやうに我々は常に大きなXを取扱ひ、そのXを我々は何れの新しい假定にも適用してゐる。この過程がエネルギーの量的相違に依つて行はれることは容易に承認せられる要請（フォルデルング）であり、またそれの質も（例へば、振幅の種類に於いて）一つ以上であることは我々には本當らしく思はれる。我々がこゝに新たに考察したことはブロイヤーが主張に基いたもので、氏によるとエネルギー充足には二つの形式があり、一つは自由

に流れて發散の方へと向ふものであり、他は心理的系統（又はその要素）の靜止的纏綿である。心理裝置中に流入するエネルギーを拘束するのは自由に流れてゐる狀態から靜止的狀態に移すことである、との想定を下す餘地がありさうである。

【註】＊フロイドの論文『本能及び本能の成行』（原書全集第五卷）を參照。

一般の外傷性神經症は對刺戟防備があまりに廣汎に破壞せられた結果だと考へることも、滿更許されないことではなからうと私は信ずる。さうすると衝擊（Schock）に就いての古い、素朴的な說が却つて正しいことになり、近世の、心理學的根據に立つらしい說と對立するやうな形になる。後者の方では、病源は機制的（メカニッシュ）な暴力作用にあるとせられず、驚駭や生命脅威にあるとせられてゐる。併しながらこれ等の相反對立は調和し難いものではない。さうして精神分析學からの外傷性神經症觀は衝擊說のやうな最も粗笨な說と同一ではない。衝擊說では衝擊の本質を神經要素の分子的構造、或はそれの組織學的構造の直接傷害に求めるならば、我々の方ではかゝる作用が、心理器官への對刺戟防備の突破から、またかゝる突破のために生じた心理機關の任務から、理解せんとするのである。驚駭の意義は我々も輕視するものではない。それの成立條件は不安と云ふ狀態で用意してゐなかつたと云ふことである。その用意してゐることの中には、最初に刺戟を受ける系統に超過纏綿がなされてゐると云ふこ

とも含まれてゐる。このやうに纒綿度が低いために、系統はその時、迫まり來る亢奮の大量を拘束することが出來ない。かくて對刺戟防備突破の結果は愈々容易になるやうに思はれる。かくて我々は、不安的用意狀態と刺戟受容系統の超過纒綿とが對刺戟防備陣の最後備線であることを知るのである。大多數の外傷に於いては、準備のない系統と超過纒綿に依つて準備されてゐる系統との區別が、結果を決定する契機であるかも知れない。尤も、一定の度を超えた烈しさの外傷に就いては、かゝる區別も問題にならない。災害神經症患者の夢に於いてその災害の場面が又しても現れるとするならば、それは成程、願望充足にはなつてゐない。願望充足は快不快原則に基く夢の機能であるには相違ないのだが——。併し彼等患者の夢は場面反復に依つて（快不快原則がその支配力を振ひ始める前に）別の目的を果さなければならないのだと、我々は考へることが出來る。これ等の夢は不安を生ぜしめて災害的刺戟を統御しようとしてゐるのだ。抑々その不安の準備が出來てゐなかつたと云ふことが外傷性神經症の原因であるのだから——。故にこれ等の夢は心理裝置の一機能に就いての管見を我等に許すのである。その一機能とは、快不快原則に悖ることなく而もそれから獨立してをり、さうして快樂追及並びに不快逃避の意圖よりはもつと起源の早いものであるやうに思はれるのである。

こゝらで一つ告白しておくべきであらうが、夢は願望充足なりてふ命題にはこのやうに一つの例外

がある。併し不安の夢がそのやうな例外でないことは、私が繰返し詳說した通りである。「懲罰の夢」(Strafträume)もやはり例外ではない。何となれば、この種の夢は禁ぜられた願望の實現の代りに單にそれに相當する罰が表れてゐるのであつて、從つてそれは輕蔑すべき衝動に對して反應として生じた罪惡意識の願望を實現してゐるに外ならないからである。併し上述の外傷性神經症者の夢は願望充足として見ることは出來ず、また精神分析の際に患者が幼兒期の心的外傷を夢により想起する、さう云ふ夢も同樣に願望充足ではない。それ等の夢は寧ろ反復强迫に從ふもので、その反復强迫は分析に於いては「暗示」で押出された願望(忘れられてゐるもの、抑壓せられてゐるものを想起しようとの願望)に依つて支持せられてゐるのである。かう云ふ次第であるから、亢奮的な願望充足に依りて睡眠の中絕せられる動機を除かうとする夢の機能もやはり本源的でない。心的生活全部が快不快原則の支配を承認した後に始めて、夢は願望充足の機能を完全に果すことが出來る。もしそこに「快不快原則を超えて」ゐるものがあるとすれば、夢の願望充足的傾向にもそれ以前の時代のあつたことを承認せざるを得ないわけになつて來る。それを承認することは、夢のその後の機能と矛盾はしない。たゞこの傾向が一度破られると、その次の問題が生じて來る。――外傷的印象を心理的に拘束することを目的として反復强迫に從ふ如き夢は、分析中以外にも起り得るのではなからうか? この問に對しては、

全然肯定の答へをなすことが出來る。

「戰爭神經症」は、その病氣が表れる戰爭に於いてとは別の場合にでも、なほ重大な意義を有するもので、これに就いては私は別の個所で述べておいたが、この疾患は自我葛藤（Ichkonflikt）に依つて容易に起る外傷性神經症であるらしいのだ。* 第十二頁に擧げておいた事實——心的外傷を受けると同時に身體的に重傷を被る時には神經症を生ずる機會が少くなると云ふ事實——は、精神分析的研究に依つて强調せられてゐる二つの事情を考へると、これを理解するに既に困難ではない。第一は、機械的衝擊が性的亢奮の源泉の一つとして認められなければならないこと（一九二〇年、拙著『性說に關する三論文』中「動搖と汽車旅行の效果」の條參照）、第二に、痛みと熱とを發する病氣が、それ等の持續する間、リビドー分配に有力なる影響を及ぼすこと。かように、外傷の機械的力は性的亢奮量を解放するが、その亢奮量は不安的準備が缺けてゐるために外傷として作用する。併し同時に身體的傷害があると、被害個所にナルチスティッシュ（自己愛的）な超過纏綿が生じ、過剩の亢奮は拘束せられるやうになる。（『ナルチスムス序說』參照。） 鬱憂症に於けるリビドー配分の如きその配分の重き障害も途中に起きる肉體的病氣のために一時的によくなることがある。また十分に膏肓に入つた早發性痴呆症でも同樣な肉體的病氣のために一時は好調を見せることもある。これ等はよく知られてゐる

事實ではあるが、リビドー説に於いてこの考へを十分に吟味して來てはゐないのである。

【註】＊一九二一年發行、國際精神分析學文庫第一篇『戰爭神經症の精神分析』參照。

第五章

早期狀態再現傾向と死の本能

刺戟を受容する皮質は、内界より生ずる刺戟に對して防備を持つてゐない。そのために、その刺戟の傳達は經濟的意義を增し、外傷性神經症にも比すべき大きな經濟的障害を惹起すことがある。そのやうな内的亢奮の最も廣汎な源泉となつてゐるのは所謂有機體の本能である。この本能は身體内部から發して精神裝置の上に交付せられる力の作用であつて、心理學的研究の最も重要な、而も最も明瞭ならざる要素である。

本能より生ずる亢奮は、拘束された種類の神經過程ではなく、寧ろ解放を求めてゐる種類の神經過程に一致するものだ、と假定しても甚だしい過言ではあるまい。この神經過程について最も信賴すべき知識は、夢の仕事の研究に依つて得られたものである。無意識系統に於ける過程と、前意識系統に於ける過程とは根本的に違つてゐることは、夢の研究に依つて發見せられた。無意識に於いては纏綿は容易に全的に轉嫁（交付）せられ、轉位せられ、また凝縮せられる。もしそれが前意識に起つたならば、これほど完全に轉嫁、轉位、凝縮などは起らない。かゝる理由に依つて顯在的な夢のよく知ら

れた特異點は生ずるのである。顯在的な夢は前白の經驗の前意識に殘留してゐるものが無意識の法則に從つて變化を被つて生ずるのである。私は無意識に於けるこの種の過程を心理の「第一次過程」(PrimärVorgang)と名付け、これを我々の常態的覺醒生活に妥當する「第二次過程」(SekundärVorgang)と區別したのである。本能亢奮は總て無意識系統に影響するから、本能亢奮が第一次過程に從ふことは今更申すまでもない。他方にまた、心理の第一次過程を(ブロイヤーの所謂)自由流動纒綿と同一視し、第二次過程を拘束せられたる、又は强壯なる纒綿と同一視することも亦、敢へて新しいことではない。*

【註】＊拙著『夢の解釋』中、第七章「夢の過程の心理」の條參照。

そこで精神的裝置の上層の任務は、第一次過程に到達する本能亢奮を拘束することであらう。この拘束をやり損ふと、外傷性神經症に似た一つの障害を惹起すであらう。この拘束が首尾よくなし遂げられた後に到つて始めて、快不快原則(並びにこの原則の變化としての現實原則)の完全な支配が確立するのである。それまでは併し、心理裝置の他の任務(亢奮を統御し拘束せんとの任務)が現れるのであらう。よしんばそれは快不快原則に撞着はしないまでも、而もそれとは獨立し、且つ或る部分までそれを顧慮することなしに行はれるにしても……。

反復强迫は幼兒的精神生活の早期の活動に顯現する如く、分析治療時の經驗に於いても顯現するものであることは既に述べておいたが、この顯現は實に高度に本能的な、(且つそれが快不快原則に反對して起る場合には)惡魔的な性格を示すものである。子供の遊戯を觀てゐると、彼等は單なる受働的經驗に於けるよりも自己の能動によつて、强い印象を更に根本的に支配し得んために、不快なる經驗をすら反復するのだと認めるべきを私は信ずる。新たに反復する度にこの目指す支配をより完全にし、愉快な經驗の場合でもこれを無暗に反復するとは限らず、何度やつても印象は同じだと頑固に主張してゐる。併し愉快なる經驗は反復に依つて後には消失すると云ふのがその特徴である。機智(洒落)は繰返されては興味索然たるものだし、芝居も二度見ては初めての時ほどの印象は受取れない。實際、非常に興味を以て讀んだからとて、も一度讀み返せと云つても、成人はなかなか承知しないであらう。新奇であると云ふことが常に享受(鑑賞)の條件である。併し子供は以前に彼に敎へたことのある、或は一緖に遊んでやつたことのある遊戯を反復することを成人に要求されても、飽きない。遂には成人の方で參つて了つてもうやめにしようと云ひ出す。同樣に、子供に向つて面白い話をして聞かせると、又してもその同じ話を聽きたがり、新奇な話は聽かうとはせぬ。而も嚴密に同じ話であることを要求し、談話者が間違つて口を滑らしたり、又は新味を加へるために違つたことを挿入すると、その

違つてゐる點を訂正する。併しこの事は快不快原則に牴觸はしないのである。反復、即ち同一性の再發見は明かに一の快樂の源泉である。これに反し、被分析者がその幼兒期の生活挿話を轉嫁の中に反復しようとの强迫は、あらゆる點に於いて快不快原則を超えてゐることは明かであらう。患者は受分析に際しては幼兒的になるものである。さうして彼の極早期の經驗の抑壓せられたる記憶痕跡は拘束せられたる狀態に於いて彼の內に存在するのではなく、實際、多少とも第二次過程たり得ない狀態にあるのである。この拘束されてゐないことのために、記憶痕跡は、晝間の殘物に固執することに依つて、夢の中に現れる願望空想を構成することが出來る。同じ反復强迫はまた分析治療の終りに於いて、分析醫から完全に離れようと思ふ時に、治療への妨害として現れる。それは患者が分析に馴染んでゐないために一種の不安を感じ、寧ろ眠らせておく方がよいと思ふものを眼覺めさせはしないかと心配するからである。そしてその不安は、根本に於いては、この惡魔的反復の擡頭を恐れるのだと考へることが出來る。

ところで、本能的なものが反復强迫と關係があると云ふのは、如何にしてゞあるか？　今や我々は、一般的にあまり明瞭に認識せられてはをらず、或は少くとも明かに强調せられてゐない所の本能の特質、或は恐らく有機體一般の特質を嗅ぎ出すところへ辿り着いたと云ふ感じがしてならない。で、本

能とは有機體内部に宿つてそれをして早期狀態を反復せしめるやうに驅逐するところの力（Drang）であらう。この早期狀態をこの生物は外界の障害力の影響に依つて放棄しなければならなかつたのだ。換言すれば、本能とは有機體の一種の彈力性、或はまた有機生活に於ける惰性の發現であると云つてもよいであらう。*

【註】 *「本能」の本性に就いて同様な想定が既に繰返し表現せられてゐることを私は疑はない。

このやうな本能觀は奇異に聞こえる。何となれば、我々は本能とは變化と發展の方へ押遣る力であると云ふ風に考へ慣はしてゐるのに、今はその正反對を、生物の保守的性質の表現されたものと見ようとしてゐるからである。他方に於いて、動物生活を見ると、本能が歷史的に條件づけられたことを確めるやうな例が發見せられる。或る魚は產卵期になると平常の居住地から遙か離れた一定の水澤に卵を產むために骨の折れる遍歷を企てるが、多數の生物學者の說明によると、それは彼等の種のずつと以前の居住場所（さうして時の移るにつれてそこから他の場所へ移るやうになつた）を求めてゐるのだと云ふことである。同じことは、渡り鳥の移住に就いても云へる。併し吾人が遺傳の現象や胎生の事實の中に有機體の反復强迫の證據を有することを思へば、なほこれ以上にいろいろの證據を大袈裟にあさるのも餘計なことになる。生きてゐる動物の生殖細胞はその發達の確定的の形態に最短距離

を通つて急ぐことなく、今日まで發達して來た凡ての形式の構造を――よしんば簡單に、ざつとではあるにもせよ――反復すべく餘儀なくされてゐることを、我々は知つてゐる。さうしてこれに對しては一小部分は機制的な說明もつくであらうが、やはり歷史的說明を無視することは出來ない。同樣に、動物界の可成り廣汎に亙つて再現能力が見られる。或る器官が失はれるとそれと全く似た器官が、その再現能力に依つて新たに構成せられる。

反復を强迫する保守的本能はあらうが、それ以外に、新形態と進步とに促す他の本能も存するとの反對が起るであらう。これは成程無視しておくことは出來ないが、これに就いては後に言及する機會がある。併し、凡ての本能は早期狀態を再現せんと欲するものだとの假定を窮極まで追及する誘惑を我我は感ずる。ところで、我々の語るところがあまりに難解に思へるとか神祕的に聞こえるとか云ふ向きもあるかも知れないが、さう云ふ批難は當らないと思ふ。我々はさう云ふことのないやうに十分に努めておいた心算である。我々の硏究は冷靜な、正氣なものであり、我々の願ふところはたゞ我等の硏究に確實性のあらむことに外ならないのである。

凡ての有機的本能は保存的であり、歷史的に獲得せられたものであり、早期狀態を反復する退行的傾向をとるものであるならば、我々は有機的發達の結果を外界の、障害的、轉向誘導的影響力に歸さ

なければならない。もし周圍の事情が常に同一狀態に停まつて反復せられてゐたならば、本原的な生物體はその發生の始めから變化することを欲しなかつたであらう。併しながら有機體の發達にその刻印を遺したものは、窮極の根據に於いて地球の發達及びそれの太陽に對する關係であつたに相違ない。保守的の有機的本能はその生活の進みに於いて押付けられたこれ等の變化を受容れ、反復するために蓄積したのであつた。さうして本能は古く且つ新しい方途に依つて古い目標に達せんと實際は努めてゐるに拘らず、宛も變化と進歩のために努める力であるかの眩惑的な外觀を呈するに至つたに相違ない。またあらゆる有機體の努力の窮極の目的はまたかく述べることが出來よう。もし生命の目的がこれまで未だ曾て到達せられたことのない狀態であるならば、本能の保存的性質はこの窮極の目的に矛盾する。それは寧ろ、古き出發點の狀態でなければならない。その狀態を生物は嘗て後に置き去つて來たのであつた。さうしてそこへと生物は、あらゆる發達の迂路をたどつて歸らんとしつゝあるのだ。あらゆる生物は內的の根源からして死し、無機物に還元すると云ふことが、例外なき經驗として假定することが出來るならば、我々はたゞかく云ふことが出來る。——一切生命の目標は死であると、またその逆命題として、無生物は生物よりも存在が早かつたと。

何時の頃にか知らないが、我等の全く推測し難い力の作用に依つて生物の特性が無生物質の中に生

起した。恐らくその過程は、後になつて生物の一定の層の中に意識が生起したのと類似の過程であつたに相違ない。それまで無生物であつたもの丶中にその時生じた緊張は、それから後に弛緩を得んと努めた。かくてそこに最初の本能――無生物に還元復歸せんとの本能――が生じた。その當時の生きてゐた物質にとつては死はもつと容易であつたらう。それ等の生物は恐らくたゞ短き生命の道を辿つたゞけであつた。その道の方向は若き生命の化學的構造に依つて決定せられてあつたやうである。かやうにして生命ある物質は長い間不斷に新造せられ、且つ容易に死滅して行き、遂に外部の非常な影響のために生活物質は最初の生命の道から離れた道を辿るやうに强ひられ、且つ死の目標に達するには益々複雜な迂廻をせねばならぬやうになつた。死へのこの迂路は保守的本能によつて忠實に保持せられてゐるもので、今日我々の知る生命現象の姿に外ならない。もし本能の本性をこのやうに專ら保守的なものと確信するならば、生命の起源並びに目標に就いて、これ以外の想定を下すことは出來なくなる。

もしこれ等の現象が我々の耳に異樣に響くとすれば、有機體の生命現象の背後に横はると我々の認める本能の大集團に就いて下す結論も、同じく異樣に響くことであらう。あらゆる生物は自己保存の本能を有すとの要請は、本能生活全般が死を齎すためのものであるとの假定と著しく對立する。後の

考へ方に照して見ると、自己保存本能、權力本能、自己主張本能などの理論的意義がなくなつて來る。それ等諸本能は有機體に固有なる死への道を確保するための、さうして無機物への還元の內在的可能性以外の可能性を回避せしめるところの、部分本能である。併し何事に抗しても自己を保持しようとの有機體の謎の如き努力、他のものとは關係させて考へられない努力、と云ふ如きものはなくなるわけである。そこで、有機體はたゞ自分流に死んで行きたいと欲するのみだと云ふ事を附言しておく。で、これら生命の番人（自己保存本能）は本來は死の執行者であつたのだ。然るにそこに一つの逆說（パラドクス）が起きる。と云ふのは、生命ある有機體はそれの生存の目標に到達することを捷徑に依つて助けようとする影響力（危險）に對して全力を擧げて抗爭することである。併しかゝる態度は知的努力とは反對に、純粹に本能的な努力の特質を示すものである。*

【註】 * こゝでは自己保存本能に就いて極端な考へ方をしてゐるが、後に是正してあるところを參照ありたし。

併しこの逆說は必ずしも逆說でないことを考へなければならない。神經學說では性本能のために特殊の位置を要求してゐるが、この性本能から見ると一つの全く別の見地が開けて來る。あらゆる有機體が、いや進み行く發展へと驅り立てる外的强迫に順應するものではなく、現に多くの有機體は今日に至るまでその低き段階に停滯することに成功してゐる。高等の動物や高等の植物が嘗て通つて來た

過去段階に類似してゐるに相違ない段階にある生物が（總てとは云はないが）甚だ多い。また同樣に、高等生物の複雜な身體を構成してゐる（總てのとは云はぬが）要素的有機體（エレメンタール・オルガニスメン）はその發展の全道程を相共にする。それ等要素的有機體の或るもの（生殖細胞）は、生活物質の本源的構造を保有してゐるらしく、若干時間の經過後に全的有機體から（併し本能的性向は遺傳せられたものも新たに獲得せられたものも併せ保有しつゝ）離脱する。恐らくこれ等二種の本能的性向あるが故に、生殖細胞の獨立的存在は可能となるのである。やがて生殖細胞は好都合の條件を得て發達を開始する。換言すれば、あの演戲（それのお蔭で抑々彼れ生殖細胞は生じたのだが）を反復する。さうしてこの物質の一部分は再び最後まで伴ふて行かれるが、他の一部分は新たな生殖的殘核として新たに發達の始源に遡つて行く。このやうに生殖細胞は生物の死に反對して働き、そのために生物は不死ならんとする力があるやうに見えるのである。ところがそれはたゞ死の道を長引かせることを意味するに過ぎないのではあるが……。我々にとつて最高度に重要なことは、生殖細胞が以上の事をなすために、已れと類似してはゐるが異つてゐる他のものと混合することに依つて力強くなり、或は一般に有能となると云ふことである。

個體よりも長生きするこの要素的有機體の成行（運命）を注意し、それが外界の刺戟に對して無防

備である間はそれを安全に保育してやらうと配慮し、他の生殖細胞との結合に導かうとする一群の本能がある。それが性本能である。性本能は他本能が保守的であると同意味に於いて保守的であつて、生活物質の早期狀態を再現せんとするものであるが、併し性本能の保守性は一層强烈であつて、外界の作用力に對して特別な抵抗力を示してゐる。生命そのものをもつと長く保持してゐるから、右以上の意味に於いて保守的である*。性本能が本來の生本能であるのだ。その機能に依つて死に導く他の諸本能の意圖に反對して性の本能が働くと云ふ事實に依つて、性本能と他本能との間の對立が明かに分る。この對立を神經病學では以前には重大視してゐたのである。その對立は有機體の生命の中に於いて振動する律動の如きものである。一群の本能は生命の窮極目的に出來るだけ早く到達せんとして前方に突進し、他群の本能はその途中の或る個所から尙一度同じ進路を辿るために後戻りをし、かくて道の進みを長びかせるのである。併し、性慾及び性別は生命の始めに於いては存在してゐなかつたにもせよ、後に性的なものと認められるに至つた本能が最初から存在してをり、「自我本能」の働きに反對する作用が後代になつて始めて生じたのでないことは、やはり可能として認められる。

【註】 * これこそ我々が「進步」及び高級發達として認め得る唯一のものである。

これ等思辨の總てに根據が缺けてゐるか否かを、今こそ一度吟味して見よう。性本能は別として、

早期狀感を再現せんと欲するもの以外の本能は何もないが。未だ曾て到達したことのないものへと努力するまた別の本能はないか。我々が右に擧げた特質に矛盾する確實な實例を、私は有機界に於いては一つも知らない。植物界や動物界に於いて高等發達への一般的本能は確實には認められない。そのやうな發達の一つの方向は確に辿られずに殘つてはゐるが……。併しながら一方に於いて、我々が一つの發達段階を他の段階よりも高等であると云ふのは、單に我々が種々な形での評價の問題に過ぎず、また他方に於いて、一つの點に於いての高級發達は他の點に於ける退化に依つて贖はれ或は差引せられてゐると云ふことは、生物學の教ふる如くである。またその幼少時の狀態に依つて見てその發達が寧ろ退行的特質を示してゐる形態の動物も相當に存在してゐるのである。高等の發達と退化とは順應へと促す外界力の二つの結果であると認められる。さうして本能の役割はこれ等二つの場合に於いて、强要せられたる變化を内的快感の源泉として確保することに限られてゐるやうである。*

【註】　＊　フェレンチは他の方面からこれと同じ考へ方の可能なることを示してゐる。(『國際精神分析學雜誌』第一卷所載「現實感の發達段階」)「このやうな思考の道筋を學的に辿つて見ると、持續又は退行の傾向が生物界を支配してゐることを考へざるを得ない。進步發達の傾向、順應などは外部の刺戟に對してのみ活潑になつて來る。」――(**以下譯者附記**)この論文の邦譯は『精神分析』第五卷第四號に揭げてある。

本能が精神的行動や倫理的昇華の現在の高さにまで達した以上、人間には完全への本能が內在し、その本能に依つて超人への發達が保證せられるとの信念を棄てることは、多くの人々にとつては困難である。併し私はそのやうな內的衝動力の存在を信じないし、且つこのやうな好都合な幻覺を保存すべき途を知らない。現在までの人間の發達は動物の發達と違つた說明を必要とするとは思はれない。さうして少數の人間が尙完全なものゝ方へ絕えず努力してゐるやうに觀察せられるのは、本能抑壓(人間文化に最も價値あるものは本能抑壓の上に樹てられてゐるのだ)の結果として無理なく理解することが出來る。抑壓せられたる本能は完全なる滿足を得んとの努力をやめず、その完全なる滿足とは第一次的の滿足體驗の反復に外ならない。代償滿足、反動構成、昇華の如きは總て、その不斷の緊張を弛めるには足りない。與へられたる滿足快感と要求せられたる滿足快感との間の差違からして推進的動力が生じ、その動力は如何なる立場が供せられようともそれには滿足することなく、詩人の言葉にもあるやうに「屈することなく永久に前方へ」(ゲーテ『ファウスト』第一部、書齋の場に於けるメフィーストの言)と追及するものである。完全な滿足の得られる退行の途は、大抵は、抑壓を支持する抵抗によつて妨げられるが故に、他方の妨害のない進步發達の道へ進んで行くより他に途はないのだ。併し何れにもせよ、結論や目標に達する見込みはまづない。神經症的恐怖とは實は本能滿足からの逃

避の試みに外ならないが、この恐怖症の構成せられる過程は、この「完全化への衝動」と見えるものの生じた原型を我々に示すものである。併しそのやうな衝動が萬人に存在してゐるとは私には信ぜられない。そのやうな衝動への動的(力學的)條件は一般的に存在してゐるであらうが、併し經濟的關係がかゝる現象を幇助成立せしめることは稀であるやうに思はれる。

有機體を愈々大なる統一に結合せんとするエロスの努力が、この承認すべからざる「完全化への衝動」の代償としての役割を果すことがあると云ふことだけは斷つておかねばならない。抑壓作用とこのエロスの努力とを合せて考へると、「完全化への衝動」に歸せられた現象の説明がつくであらう。

第六章

生物學及び精神分析學より見たる死の意義

我々のこれまでの研究の結果では、自我本能と性本能とを截然區別し、前者は生物を死に向つて驅逐し、後者は生物を生命保存に向はしめるとしておいたが、この考へ方は多くの點に於いて未だ確に我々自身を滿足させない。さう考へるならば、我々は前者に於いてのみ保守的又は(更に適切に云ふならば)退行的性質を、即ち反復强迫性の一つに相當するものを、認めることになる。何故ならば、我々の假定によれば、自我本能は無生物を生かす(生物化する)事によつて生じたもので、その目的としては無生の狀態を再現するにあるのである。然るに性本能にあつては、生物の原始的狀態を再生するのは疑ひないが、異つた方面に分化された二種の細胞を、あらゆる手段によつて結合させようと努力してゐるのである。もしこの結合が起らなかつた時には、生殖細胞は他の複細胞生物の細胞と同樣に死滅すべきものであるからである。たゞこの條件を充すことに依つてのみ性的機能は生命を延長して、生命をして不死なる如き觀を呈せしめるのである。ところで、生物體の發達の過程中に於いて生殖的結合作用又はその前驅たる二個の別々の原型體の結合如何によつて、如何なる重要事が反復せ

られるのであらうか。この問題については、明答し難い。それがために我々の思想の全體が誤謬なることの證明が下さるゝ時があるならば、我々は寧ろ氣が樂になるであらう。もしこの思想が破るゝ時は自我（死）本能と性（生）本能との對峙が消滅するであらう。從つて反復强迫は我々の附與した意義を失ふに至るであらう。

で、我々が挿入した假定に再び戻るとしよう。それによつて我々はこの疑點を否定し得るかも知れない。我々は、右の假定に基いて更に進んで、總ての生物は內側の原因によつて死滅すべきものなりといふ假定から、旣に結論を得た。が、この假定は假定らしくないので、餘り骨折らずにこれを立てた。併し、かやうな觀察を支持する如き敎示は、多數の詩人が與へてゐる。我々も亦この假定を立てることに決心したのは、このやうな信念から一つの慰藉を受けるからである。もし我々の最愛の人が死んだ後に自分も亦死なねばならぬとするならば、何か偶然の事で死ぬよりも、むしろ冷酷無情なる自然律則、崇高なる宿命のために死ぬる方が、大きに氣安めになるであらう。偶然の出來事などは避け得らるゝ手段がある。この生物の內界の律則の結果死なねばならぬといふやうな信念は、恐らく我我がそれによつて生存の重荷に堪へることが出來るやうに、自分のために作つた錯覺の一つと看做されるであらう。かゝる信念は確に自生的ではない。何故ならば、「自然死」と云ふ觀念は原始人は持つ

てゐなかつたもので、彼等自身の間に起る死と云ふものは、すべて敵のためか或は惡魔の力であると考へられてゐた。それ故に我々はこの信念を檢覈するために、生物學的研究を怠らないものである。

我々が生物學的の考慮をして見るならば、自然死といふ問題に就いては、生物學者の中でも異論のあることを知る。死といふ概念は、生物學者と雖も明瞭に説明し難いものである。少くとも高等動物間では、或る平均壽命は內界の原因から生ずる死に關聯してゐると云ふ論がある。併し或る巨大な動物や若しくは大木の如きものは非常に永く壽命を保つてゐる。この事實は今茲に考慮の中に入れねばならぬ。これによれば、一定の壽命などと云ふ考へは取去られてしまふ。フリース(W. Fliess)氏の雄大なる思想に依ると、總ての生の現象——死の現象とても亦——は時間の經過といふ事に關聯してをり、その內に於ける男性と女性との二つの生物體の相互依屬は、太陽年で表れて來るといふ事である。併しながら、外界の力の影響は、殊に植物界に於いて、如何に容易に如何に廣汎に、生の現象を改變し、その季節的擡頭を改更し、或は早め、或は遲らせ得るかと云ふ事實を知るならば、これはフリースの主張を打破つて、氏の證明したと稱する原則の普遍性を疑はしめる。

ヴィスマン(A. Weissmann)の著書にある生物間に於ける死と壽命の問題*は、我々に大なる興味を與へる。生物體を死すべき部分と不死なる部分とに別つてゐる。死すべき部分は狹義に於いてゾマ

(Soma) である。これは自然死に遭遇すべきものである。これに反して生殖細胞は本質的に不死である。** 即ち、これは好機に乘じて新しき個體へ發達する性能を有するもので、換言すれば、彼等自身を新しきゾマをもつて圍む力を有してゐる。

【註】 *『生命の持續に就いて』一八八二年。『死と壽命に就いて』第二版一八九二年。『生殖細胞』一八九二年、等參照。

** 『生と死とに就いて』第二版二〇頁。『生命の持續に就いて』三八頁參照。

此處で誰しも氣附くことは、非常に相違した方面からの考へ方が、測らずも他方面からの考へ方と一致してゐることである。生物を形態學的見地から研究したヴィスマンは、死の捕虜となるべき一つの要素、即ちゾマを認めてゐる。これはつまり、性的要素及び遺傳的要素とは全然別個の肉體である。氏は同時に不死の部分、即ち生殖細胞(Keimplasma)をも認めてゐる。これは種族の保存、即ち繁殖の目的に役立つのである。これに反して我々は、氏の如く生物質に注意を向けないで、寧ろ生物質の内部に活動してゐる力に注意を向けてゐた。而して本能の中に二種あることを認めるに至つたのである。即ち、一つは生を死に導かむとする死の本能、今一つは生の再生のために間斷なく努力してその再生を齎す性の本能である。それはヴィスマンの形態學說を動的に推論したものゝ如く思はれる。

このやうに重要なる一致點があるやうに思はれるが、我々がヴイスマンの死の問題に關する叙述を檢討するや否や、忽ちその一致點らしいものも怪しくなつて來るのである。何故ならば、ヴイスマンは死すべきゾマと不死なる生殖細胞との差異を複細胞生物にのみ認めてゐるが、單細胞生物にあつては個體と生殖細胞とは同一であるからだ。氏はその單細胞生物を本質的には不死の力を有するものだとし、死はたゞ複細胞生物にのみ起るものだと說いてゐる。そして、高級動物がこのやうに死すると云ふことは、何れにもせよ、自然的であり、且つ內部の原因から生ずるものであるが、生物體の根元的性質から出てゐるのではない。死は生命の本質に基く絕對的必然と認めることは出來ない。死は寧ろ或る目的に役立つものとして創造せられたものである。これは生命を外的條件に順應させる現象に外ならない。何故ならば、肉體の細胞がゾマと生殖細胞とに分化せられた後は、個體の無限の壽命といふことは、全く不必要な贅物となるからである。故に、複細胞生物內にかゝる分化が現はれると共に死が起こり、且つこれが必要となつた原因である。かくて高等動物のゾマは、或る期間後に於いて內側の原因から死するのである。併し原型生物は不死である。然るに他方、繁殖といふことは死が始まると同時に起つたのではなかつた。繁殖は生長と同樣に、生物體の根源的性質である。生長によつて繁殖は發生したのだ。かくて生命は地球上に現はれた後、間斷なく持續せられて來たのである、と。

高等動物に自然死を容認する以上の論に依つては、我々の論議は何らの力をも與へられない。死が後期の生物に至つて生じたものとするならば、この地球上に於ける生命の始めからそこに死の本能があつたと考へることは最早出來なくなる。複細胞生物は、分化の缺乏、又は新陳代謝の不完全などの如き、內側の原因で間斷なく死んでゐるだらう。が、この事は我々が玆に研究せむとすることには何等の興味がない。死に對するこのやうな考へ方及びこれより生じた考慮は、「死の本能」と云ふ奇異な假定よりは普通の人間の見地に近い。

ヴィスマンの主張に基いて數々の主張は生じたが、自分の見るところによれば、何れの方面に於いても確定的な歸結が生じなかつたやうだ。* 多くの學者は却つてゲッテー(Götte)の見地（一八八三年）に逆轉して了つた。彼は、死が繁殖の直接の結果だと認めてゐる。ハルトマン（Hartmann）は、死の本質が「屍骸」を遺すことにあるとは認めない。卽ち、嘗ては生物質の一部であつた「屍骸」を遺すことだと考へない。寧ろ彼は、死を個體發展の終局と見做してゐる。この意味に於いては原型生物も亦、死すべきものである。原型生物に於いては、死は常に繁殖と同時に起るのである。併し彼等の死は繁殖と云ふことの中に或る程度まで覆ひ隱されてゐるのである。何故ならば、母體の實質の全部は新しい子供の個體の中に直接攝取されるからである。

【註】＊ マクス・ハルトマン著『死と繁殖』一九〇六年。アレキサンダ・リプシュッ著『何故に我等は死するか』コスモス叢書の内、一九一四年。フランツ・ドフライン著『動植物に於ける死及び不死の問題』（一九〇九年）などを參照。

やがて研究者の興味は、生體の所謂不死なることを單細胞生物に就いて實驗的に試す事に向けられて行つた。米人ウッドラフ（Woodruff）は纖毛インフゾリア（Infusorium）、即ち上靴微生物（Pantoffeltierchen）の人工培養を試みた。この生物は分裂して二個體に繁殖するのである。氏は、この二個體に分裂した時にその一匹を新しい水に移しながらこれを三千二十九代まで繁殖させて實驗した。この最後代の子孫は、祖先の生物の如く活潑な活動力を有して、何ら老朽の兆を示さなかつたのである。もしこの累代の個體をもつて何らかの證明が得られるとするならば、この原型動物の死と云ふことは、實驗によつて證明せられたと云ふことが出來る。

併しながら他の研究者はこれと違つた結果を齎した。マウパス、カルキンズ（Maupas, Calkins）兩氏はウッドラフ氏と反對の證明を得たのである。即ち、これらのインフゾリアは或る代を經た後に衰弱してその大きさを減じ、その組織の一部を失ひ、もし或る新手の力の補ひを受けねば死滅するに至る。この實驗に從へば、原型動物は恰も高等動物の如く老朽期に達して死ぬのである。これはヴイス

マンの主張とは矛盾するものである。ヴイスマンは、生物が死の運命を受けるやうになつたのは、可なり進步した後に至つてゞあると云つたが……。

これ等の研究の結果から、その正味をとつて我等は二つの事實に氣付き、それに依つて確信を與へられるやうに思ふ。第一に、もし微生物がその老朽に先立つて他の微生物と混合（結合）する機會を持つことが出來るならば、さうして更に結合後分離せしめられるならば、微生物は老朽を免れて「若返る」。この結合は疑ひもなく、高等動物の性的繁殖の原型をなすものである。微生物の結合は繁殖とは何の關係もなく、唯二つの個體が混合するだけに止まる。（ヴイスマンの結合 Amphimixis）結合の新手補給的影響は一定の刺戟手段を以て置換へることが出來る。例へば、培養液の或る成分の變更、溫度の上昇、振盪などを以て置換へることが出來る。それには有名なロエブ（J. Loeb）の實驗を人々は想起するが、彼は雲丹の卵子に或る化學的刺戟を與へることに依つて分裂させることが出來た。分裂は普通には受胎後に起るときまつたものであるのに……。

第二に、インフゾリアは自身の生活過程に依つて自然死に遭遇するやうになると云ふ事は恐らく事實であらう。何故ならば、ウッドラフの發見と氏以外の人々の發見との相違は、氏が新たに生れたインフゾリアを何れも新しき培養液に入れたことで、こゝに相違がある。氏は新たに生れたものを新培

養液中に移さなかつた時は、矢張り老朽狀態に陷ることを發見してをり、他の研究者もこれと同樣な報告をしてゐる。これに依つて見れば、この微生物は自身が周圍の培養液中に排出した新陳代謝の産物によつて障害せられるのである。なほ氏は、新に生れたものゝ死を齎すものは、それ自身の新陳代謝の産物であることを、確實に證明し得た。それは、遠縁の種族の新陳代謝物で飽和せられた溶液中にては、その微生物は非常によく繁殖し、自己の培養液中にては、久しく放置せられると必ず死ぬからである。かくの如く、インフゾリアは同じ液體中に放置せられる時は、自己の新陳代謝物を處理し兼ねるために自然死に至るのである。恐らく、總ての高等動物と雖も、これと同樣に同じ狀態で死するのであらう。

この點に就いて一つの疑問が起る。卽ち、原生物の研究に於いて自然死に關する問題を決定しようとすることは、果して何らかの役に立つことであらうか。これ等原生物の組織中にはやはり重要な傾向があつて、それが我々には見えないのかも知れない。これらの傾向はたゞ高等動物に於いてだけ形態的表現を得てゐるので直ぐに分るのであるが原生物では分りにくいのかも知れない。併しもし我々が形態的見地を放棄して動的見地を取るならば、原生物の自然死と云ふものが證據立てられるや否やと云ふことは、全然必要のないことである。原生物に於いてはその後に至つて不死と認められる物質

が死すべき運命を有する部分から未だ分離せられてゐない。生を死に導く本能力は、原生物に於いてもその發端から働いてゐたであらうが、その力は生保存の力のために覆ひ隱されて居たのであらう。それがためにかゝる本能が存在すると云ふ直接の證據を立てることは困難となつてゐる。生物學者の研究の結果は、我々の聞くところによれば、原生物間にも斯かる死を來たすべき内側の作用を假定し得るとしてゐる。併しながら、ヴイスマンの說に從つて、原生物は不死なりと云ふ證據があるとも、氏の云ふ「死は其の後に至つて生物の運命となつたのだ」といふ事は、死の外觀的表現に限つて當て嵌まるのであつて、決して死へ驅逐する力の存在を否定するものとはならない。そして生物學は死の本能の認容を全然否定するだらうと云ふ期待はこゝで充たされないのである。死の本能の存在を追及するに當つて旣述以外の理由がありとするならば、それを追及する途は我々に開かれてゐるのである。ヴイスマンのゾマと生殖細胞との區別と、我々の死の本能と生の本能との差との間に顯著なる類似點を認めたが、その類似點は毫も破られずにその價値を保留してゐるのである。

このやうに本能生活を微妙に二元的に考へる見方に就いて、なほ暫く考慮を加へて見たい。ヘリング（E. Hering）の『生物の作用に關する學說』に依れば、總ての生物の作用中には二種の相反せる働きが間斷なく營まれて居り、一は建設的（同化作用的）、二は破壞的（解體作用）であると云ふ。我

我はこの二つの生活過程中に、我々の二つの本能的傾向、卽ち生本能と死本能との活動を敢へて認めるべきものであらうか。そこに何かあるものを我々は自らに匿すことが出來ない。卽ち、我々は知らず識らずにショーペンハウエル（Schopenhauer）の哲學の港に乘入れたのである。彼は「死は生の本來の結果なり」と云ひ、「それ故に生の目的は死である。同時に、性本能は生きんとする意志の體現である」と云つた。

こゝで我々は百尺竿頭更に一步を進めようと思ふ。一般的見地によれば、無數の細胞が一個の生活體として結合するやうになつたこと、卽ち複細胞生物組織は、生物の壽命を延長せんがための手段となつたのである。一細胞は他細胞の生の保存を助け、細胞の集團は一細胞だけならば死なゝければならない場合と雖も、壽命を續けることが出來るのである。我々はまた、結合（Kopulation）卽ち二個の單細胞が時々混合することは、兩者に對して保存と若返りの效果があることを旣に知つてゐる。そこで、精神分析に於いて樹てられてゐるリビドー說を各細胞間の關係に當嵌めるやうに試み、各細胞が他の細胞を性的對象として採るのは、生本能或は性本能の役目なりと假定することも出來よう。さう考へると、この細胞の死の本能（卽ち對象をとることに依つて誘發せられた過程）も或る部分打消され、かくてその細胞は生命を保存し、他の細胞はこの保存を助け、更に又他の細胞はこのリビドー

的機能を營む爲めに自ら犧牲になる。即ち、生殖細胞は絶對に「ナルチスティッシュ」な態度をとること、恰も個人がそのリビドーを自我に集中して對象纏綿のためにリビドーを他に與へない時に神經症學に於いてナルチスティッシュと呼び慣はしてゐると同じやうである。何故ならば、生殖細胞はその生活本能（レーベンストリーベ）の活動のために、將來の非常に雄大な建設作用に備へんが爲めにそのリビドーを獨占してゐるのである。かの生物を傷くる惡性の腫物の細胞も、これと同じ意味に於いてナルチスティッシュだと說明することは恐らく許されるであらう。病理學では腫物の眞因を根元に於いて先天的で胚芽的性質であると見傚してゐる。かくて我々の云ふ性本能のリビドーは詩人や哲學者の云ふ愛——總ての生物を結合せしめるエロス（Eros）——に相當するであらう。

こゝに於いて、我々のリビドー說の漸次發達した過程を復習すべき場合となつたのである。轉嫁神經症の分析によつて我々はまづ、對象に向けられる性本能（Sexualtrieben）と、未だ不完全にしか分つてゐないが假りに自我本能（Ichtriebe）と云はれるものとの間に、對立を認めなければならなくなつた。それ等の中で個體の自己保存への役割を果すものがまづ認容せられねばならなかつた。これ以外にそこに如何なる差別を附すべきであつたかは、人々には分らなかつた。正しい心理學を確立せむがためには、種々の本能の共通性及び各本能の特殊性を或る程度まで理解するくらゐ大切なことはな

い。而も、心理學の中に於いて本能の問題ほど闇中模索的なものはなかつた。各人は勝手に自分の欲するまゝに、本能或は「根本的本能」(Grundtriebe) の數を羅列して使用してゐる。恰も古代ギリシアの自然哲學が四元、卽ち土、風、火、水を勝手にきめた如くである。精神分析は本能に關する何らかの假定を全然放棄することが出來なかつたゝめに、先づ通俗的に認められてゐる區別に據ることにした。それは「食慾と愛慾」(Hunger und Liebe) と云ふ言葉に依つて表はされてゐるものである。これは少くとも勝手に創つた新奇なものではなかつた。この區別に依つて我々は精神神經症の分析には十分なのである。併し性感といふ概念(並びに性本能の概念)は、確にその意義を擴げ、多くのものを、單に繁殖機能に關係のないものをまでも、包含しなければならなかつた。それがために、峻嚴なる、且つお上品なる、或は恐らくは單に僞善的なる世人たちから、反對の聲を喚起するに至つたのである。

精神分析が心理學的研究の結果認めた自我に一步踏込むことが出來た時に、次の進步が齎らされるに至つた。この自我は先づ、抑壓し檢閲し、防禦作用及び反動構成を齎し得るものとして分析學に認められた。リビドーの概念を狹義に解釋して、對象に向けられたる性本能の力であると見做した點は、久しい間、批判的な、廣汎な見地をとる人々から反對を受けた。併しながら、それ等の批判者たちは、

彼等のよりよき說明が何處から得られたかに就いては何も云はない。そして精神分析に對して何等かの役立つものを自說から引出すことも出來ないでゐる。なほ用心深く精神分析的觀察を進めて行くに從つて、如何に正規的に（いつもきまつて）リビドーが對象から撤回せられて自我に向けられる（內向（イントロフェルジョン）する）かを認め得た。併し早期に於ける子供のリビドー發達を研究することによつて、自我はリビドーの固有の、自然發生的の源泉であつて、この源泉からして對象に向けて擴げられたのであることが明らかになつた。自我はまづ諸々の性的對象の一つとして登場し、さうして直ちに諸々の對象中の最も好きものとして認められたのである。斯樣にして、リビドーが自我の周りに低徊してゐる場合をナルチスムス的と呼ぶのである。* このナルチスムス的リビドーは勿論、分析的意味に於いてはやはり、性本能の力の表現であつた。そして人々はこれを、始めから認めてゐた「自己保存本能」（Selbsterhaltungstriebe）と同じものと認められたのである。それがために自我本能と性本能との間の區別が不完全になつた。自我本能の一部分はリビドー的性質のものと認められた。自我の裡に於いては、性本能が——恐らくは他の本能もそこに働いてはゐるが——働いてゐるのである。而もなほ我々は、精神神經症が自我本能と性本能との間の葛藤から生ずるとする古い原則には何らの動搖を感じないであらう。たゞこの二種の本能の差を本源的な何らかの質的な差と考へてゐたが、今はそれを質の差では

なくて、寧ろ局所的な差として認めることになつた。特に精神分析の本來の研究對象である轉嫁神經症は、やはり、自我と對象に對するリビドー纒綿との間の葛藤の結果と見做されてゐることに變りはない。

【註】 *『ナルチスムス序說』(本譯文全集第九卷『分析戀愛論』の内) 參照。

我々は性本能を、總てを保存するエロスとして認め、自我のナルチスムス的リビドーをリビドー配分から說明しようとする以上、愈々益々今や我々は自己保存本能のリビドー的性格を强調せざるを得なくなる。その配分せられたるリビドーに依つて肉體細胞の各々は互に結び合つてゐるのである。併しながら、こゝで突然次の問題に直面する。その問題とは、もしも自己保存本能がリビドー性を帶びたものとすれば、我々はリビドー的ならざる他の如何なる本能をも持たないであらうと云ふことである。少くともリビドー的ならざる本能は見られないことになる。さうなれば最初から精神分析は總てを性的に說明するものではあるまいかと始めから察してゐた批評家や、或はユング(C. J. Jung)の如くリビドーなる語は本能力一般であるとした新人たちを是認することになる。さうではなからうか。

以上のやうな結論は、我々の全然意圖するところではない。我々はこれと反對に、我々の出發點として、自我本能(死の本能)と性本能(生の本能)との間に明白なる區別を立てた。しかのみならず、

我々は自我の自己保存本能をも、死の本能の中に加へんとしたのである。尤も、この論點は、その後我々は修正し、撤回した。我々の見地は最初から二元的であつて、今日に至つて益々その二元性を明瞭にしてゐる。何故ならば、我々は最早二つの反對傾向を、自我本能或は性本能と呼ばずに、生の本能と死の本能と呼んでゐるからである。これに反して、ユングのリビドー說は一元論で、彼は唯一の本能力にリビドーなる語を用ゐてゐる。が、これは混雜を來した故に我々は避けねばならない。我々は自我の內にリビドー的な自己保存本能以外の本能の活動してゐることを想像してゐるが、これを證明すべき處には到らなかつた。自我の分析は不幸にも未だ十分な進步を見ないので、この證明は甚だ困難である。自我の內に存するリビドー的な本能は、我々がまだ知り得ない他の本能と或る特殊な方法で混合してゐるのかも知れない。我々が明かにナルチスムスを認めたなほ以前に、精神分析では旣に、自我本能がそれ自身の中にリビドー的成分を收めてゐると云ふ想像を持つてゐた。併しこれは頗る漠然たる可能性である爲めに、我々の反對論者は承認しないであらうが、今日までの分析の結果では、實驗的にリビドー本能の存在を證據立てられて來たのである。その他の本能が存在せぬと云ふ結論は、それ故に、我々はまだ下したくないのである。

現在のところ、本能說はまだ闇中模索的なので、それに幾分でも光明を與へるやうな何らかの思ひ

付きは無暗に排斥したくない。我々は、生本能と死本能と云ふ大きな對照から出發した。對象に對する愛そのものは、そのやうな兩極性として第二の兩極性であることが分つた。卽ち、對象愛は愛の極(感傷愛（ツエルトリヒカイト）)と憎みの極(攻撃慾（アグレシヨン）)とに分れてゐるのである。もしこれ等兩端の相互關係を求め、一方を他方に結びつけることが出來たならば如何であらうか? 我々は隨分前から、性本能の中に加虐性的成分*(sadistische Komponente)を認めて來た。我々の知る通り、加虐性的成分は性本能から獨立し、變態として當人の性的傾向の全體を支配することがある。そして私の所謂「性器前期的組織」(prägenitale Organisationen)に於いて、主要な部分本能の一つとして出て來る。ところで、對象を害するのを目的とする加虐的衝動が、生命を支持してゐる愛（エロス）から如何にして發するのであらうか。この加虐性なるものは、本來、ナルチスス型リビドー(自己保存慾)の影響に依つて自我から分離した死の本能だとは考へられないだらうか。死の本能にして自我から分離したものだから、たゞ對象に對してのみその働きを示のだとは考へられないだらうか。對象に對して働きを示す場合には死の本能は性的機能に奉仕するものである。リビドー發達の口唇時代に於いては、愛の克服慾は對象を亡きものにすることとなほ同一事であつた。その後に至つて加虐性的本能は獨立し、遂に性器統裁期(思春期)に至つては、性行爲を行ふに必要な限りに於いて性的對象を支配する機能を司り、かくて生殖の目的を果すの

であるさうだ、自我から追放せられた虐待性は性本能のリビドー性要素に進むべき道を示したのだと云ひ得るであらう。後になつてリビドー的要素は對象を追及する。もし自發的の加虐性が緩和せられず、又は他のものと混合せざる時には、戀愛生活に於いて誰しも知つてゐる愛憎のアムビヴレンツ（相反竝存）が示されて來る。

【註】＊『性説に關する三論文』（本譯文全集第五卷）參照。

もし右の假定が許されるならば、我々は死の本能――轉位せられてゐるものではあるが――の一例を擧げよとの要求に應じることが出來よう。併しながら、かう云ふ考へ方は一切の觀照性からは離れたもので正に神祕的な印象を與へる。それに依つて我々は一つの大きな難關から何とかして脫出しようと踠いてゐるのだと云ふ疑念を受ける。だが、この假定は決して新規なものではなく、この難關脫出の疑惑を受けなかつた以前から既に假定してゐたものであつたと云つて答辯しておかう。臨床的觀察に依つて我々は以前に、虐待性の補足としての被虐待性（Masochismus）の部分本能は、要するに、虐待性が自我それ自身の上に逆戻りして來たものとして解釋せられねばならなかつたのである＊。

【註】＊『性説に關する三論文』第四版及び『本能及び本能の成行き』參照。

併しながら本能が對象から自我に逆戻りすることは、自我から對象に向ふことゝ本質に於いて同じ

である。それがこゝでは新しいものとして問題になつてゐるのである。斯くして被虐待性即ち本能が自己に逆戻りすることは、實際に於いて早期の狀態に逆戻りすること、即ち退行現象なのである。被虐待性に關して嘗て私が與へた定義は、一面に於いて餘りにはつきりし過ぎてゐたから、修正を要する。即ち、自分は當時、被虐待性が第一次的のものであることを否定しようと思つたのだが、やはり第一次的のものでもあり得ると思はれるのである*。

【註】 * このやうな思辨の大部分はスピールラインの『生長の原因としての破壞』(Savina Spielrein: Die Destruktion als Ursache des Werdens. Jahrbuch der Psychoanalyse, IV, 1912)にて既に發表せられてゐる。この論は非常に內容と思想とに富んだものであるが、自分には遺憾ながら全部的には呑込めなかつた。この著者は虐待性的要素を破壞的なものと見做してゐるのである。なほ、ステルケ(Indeiding by de vertaling von S. Freud, De sexuele beschavingsmoral etc., 1914)も他の方面からリビドーの概念そのものを死に驅逐する衝動の生物學的概念と一致させようと試みた。尤も、これは單に理論に基いた假定に過ぎなかつた。(ランク『藝術家論』Rank: Der Künstler と比較せよ。)これ等總ての企圖は本書の企圖と同じく、我々が未だ達し得てゐない本能說の說明をなすべき必要を示してゐる。

併しながら我々は再び生命支持の性本能の事に戻つて論じて見たい。我々は既に原生物の研究より

して、二つの個體が混合してその後分離しない場合でも、性交してその後直ぐに別れる場合でも、それに依つて雙方が强固になり、且つ若返りすることを知つたのである。（前掲、リップシュッツの條參照。）これがためにその生物の後裔は頽廢することがない。而も、この後裔は彼等自身の新陳代謝から生ずる有害なる産出物に對して更に久しく抵抗する性能を持つてゐるやうである。自分はこの一つの觀察を性行爲の效果の原型として採用出來ると信ずる。併しながらたゞ僅かばかり相違したる細胞が混合すると云ふだけのことで、何故にかゝる生の更新を齎し得るのであらうか。これには原生物を結合させる代りに、化學的又は機械的刺戟を與へて行つた實驗によつてこの解答は與へられる。（前註書參照。）これは、新しい刺戟量を導入することに依つてさうなるのである。そしてこれは、個體の生命過程は內側の原因によつて化學的緊張を緩和させると云ふ假定と、卽ち死に導くと云ふことゝ、極めてよく一致してゐる。然るに、異つた個性を有する生物體の結合の場合には、この緊張が增加する。換言すれば、更に新しい生命力の分化を導入することになる。この分化は、やがて生命によつて消盡されることになる。この分化のためには、一つ又は二三の最上法がある。我々が精神生活（又は、恐らく神經生活一般）の主要傾向として、引下しの努力、永久持續の努力、內的亢奮緊張の揚棄（バーバラ・ローの所謂涅槃原則（ニルバーナプリンチープ））を認めたこと（さうしてそれは快不則原則に於いてよく表現せられてゐるが）

は、實は我々が死の本能の存在を信ずるに至つた最も强き動機の一つである。

併しながら、我々の思想過程にとつて常に痛いところは、この性本能に對しては我々に初めて死の本能の存在を認めさせてくれた反復强迫の性質の存在を明かにすることが出來ないことである。尤も、胎芽の發達過程にはかゝる反復現象の無數の實例が見られ、卽ち性的繁殖を目的とする二個の生殖細胞及びこの細胞の發達史は、それ自身が有機體の初まりの繰返しであるが、併しながら性本能によつて意圖せられてゐる過程の本質は、二つの細胞の混合である。この手段によつてのみ高級生物の生命實質(レーベンデズブスタンツ)の不死が保證せられるのである。

これを換言すれば、我々は性的繁殖の起源及び性本能一般の由來を究めねばならない。これは一般に人々の躊躇する難問題であり、且つ專門硏究家と雖もこれまで解決し得なかつたことである。これ故に此處に相互に撞着する諸說の中から我々に何かの足しになるやうな說だけを取上げて要領よく論を進めたいと思ふ。

こゝに、繁殖の問題に對して不思議な刺戟を供する一つの考へ方がある。それによると、繁殖は生長の一つの部分的現象(分裂、發芽による增殖)だと云ふのである。性的に分化せられたる生殖細胞によつて繁殖作用の起つたと云ふことは、眞劍なダーヰン風の考へ方に從つて我々は二つの原生物の

偶然なる結合によつて初めて他種混合から齎らされる利益が分り、その後の發展に於てその利益が支持せられ利用せられるやうになつたのだと考へることが出來るのである。*「性」(Geschlecht)はそれ故に、非常に古い時代の發生ではないであらう。そして性的結合を目的とせる異常に激しい本能は嘗て偶然に起り、それが生物に有益であつたゝめに、そのまゝ存續するに至つた或るものを受け繼ぎ反復することになつたのである。

【註】＊ 尤も、ヷイスマンは『生殖細胞論』(Das Keimplasma, 1892)の中で、このやうな利益を否定して次の如く云つてはゐる。「受胎は決して生命の若返り又は更新を意味しない。受胎は生命持續のためのものではないやうである。これは二つの相異る遺傳傾向を可能ならしめるための工作に外ならない。」と。そのやうな混合の效果として、ヷイスマンは併し、やはり生物の變化能力の増進と云ふことを考へてはゐる。

この場合にもやはり、死に關しての場合と同じやうなことが問題となる。卽ち、原生物は、現に示してゐるもの以外に何らかの質を保持してゐないものだらうか。或は高等動物となるに至つて見えて來てゐる力及び作用が、原始動物の中にも始めから現れてゐるものだらうかと。我々の目的のためには、上述の性慾觀はあまり役に立たない。さう云ふ性慾觀に對しては、人々はかう云つて反對する必

要がある。即ちさう云ふ考へ方は極めて單純なる生物の中にも既に働いてゐる生本能の存在を假定してゐるのだと。だからと云つて、この假定を放棄するとせば、生の絶滅を防ぎ且つ死を困難ならしめる結合作用の如きは、保留せられざるのみならず、完成もされず、寧ろ回避せられてしまふであらうから。斯様なわけで、我々がこゝに支持してゐる死の本能の存在の假定を放棄しないとすれば、この死の本能は始めから生の本能と結び付いたものとせねばならないことになる。さうすると、こゝで我我は未知數を有する方程式を觧かうとするやうなことになる。性感の起源に就いて科學は殆ど説明してゐないために、この問題は甚だ茫漠としたもので、假説の光の一線すらこゝに達することが出來ないほどである。全く別の個所に於いて我々は一つの假説らしいものに逢着するが、それは極めて荒唐無稽なもので、科學的説明と云はむよりも寧ろ神話に屬すべきものである。で、それをこゝに持出す氣にはならないのだが、その中に我々が滿たさうと努めてゐる或る一つの條件を滿たしてゐるものがあるので持出すのである。その一條件とは、早期の狀態を再現せんとする必要から一つの本能が生じたと云ふことである。

私は假説らしいものに逢着すると云つたが、それは勿論プラトーン(Plato)が『對話篇』の中でアリストファネースをして云はしめてゐる説である。その説は性本能の由來に關してのみならず、對象

に關しての最も重要な變型にまでも言及してゐる。曰く「人間の肉體は嘗ては現在のものとは大部違つてゐた。初めには三つの性があつた。現在の如き男女の他に、第三の性があつた。この第三性は兩性の結合物で、男女性（das Mannweibliche）とも云はるべきものであつた。」ところがこの人間には總てのものが重複してゐた。例へば四手四足を有し、二つの顏面、二つの性器を有してゐた。ツォイス神はこの人間を「梨を二つに割るやうに兩斷すべきことを他の者から勸められた。總てのものが兩斷せられた結果、各人は各半身を戀慕するやうになつた。この二個の半身は抱擁し、彼等の身體を密着させて再び同一體にならうと欲したのである。」*

【註】* 私はヸインのゴムペルツ教授（Prof. Heinrich Gomperz）からこのプラトーンの神話に就いて次の話を聽いた。この話を私は氏の云はれた通りの言葉で抄錄しよう。「余はプラトーンの對話篇中のものと本質に於いて同じやうな話を、ウパニシャド（Upanishads）の中に發見したことに注意を牽きたい。現にBrihad-Aranyaka-Upanishad, I, 4, 3,（Deussen, 60 Upanishads des Veda, S. 393）の中には、世界がアトマン（自己又は自我）から生じたことが述べてあつて、「そこに次のやうに書いてある。「併しアトマン（自我）はまた何らの快樂をも持たなかつた。それ故に如何なるアトマンでも一人である時は快樂を持つことが出來なかつた。それで彼は相手を求めてゐた。彼が相手と抱擁した時、男女合せただけの大きさになつた。そこで彼は自身を二つに割つて、そして夫婦を造つたのである。斯樣にして

出來た身體は Yajnavalkya の説明によれば、自己の半分であつた。そのために、この不足部分は婦人で充たされたのである。」

Die Brihad-Aranyaka-Upanishad は總てのウパニシャドの中、最古のもので、凡そ有爲な研究家ならばみなこれをキリスト紀元前八百年後のものとは云つてゐない。プラトーンが彼の對話篇を作るに當つて、これらの印度思想によしんば間接にもせよ據つたと云ふことに就いては、私は現代の定説とは反對に、これを確然と否定したくない。何故ならば、さう云ふ可能性は再生説に對しても一概に否むわけに行かないからである。プラトーンがこれに據つたと云ふことは、最初ピタゴラスの云ひ出したことであつた。この考慮が偶然にも一致したといふ意義は別にそれによつて打消されはしない。何故ならば、プラトーンは何らかの手段によつて東洋の傳説から斯かる物語を採つたといふことは疑はしいが、併しこの言葉が重要な意味を持つてゐるといふことから考へれば、彼が斯樣な明かな例を示せる事實を知らなかつたとは云はれないのである。

チーグラー『人間及び世界の生長』(K. Ziegler: Menschen- und Weltenwerden, Neue Jahrbücher für das Klassische Altertum, Bd. 31, S. 529 ff., 1913) の中で、プラトーン以前のかゝる思想を組織的に研究してゐるが、これによるとかゝる思想はバビロン人から由來してゐることが分る。

我々はこの詩人的哲學者の示唆に追隨して、生物體が生を受けた當時に小部分に切斷され、その後斷えず性本能によつてその再結合を求めてゐるのだと云ふ假定を敢えて下すべきであらうか。また、

性本能の中には無生物質の化學的親和力の猶未だ繼續せるものがあり、この本能は原生物界より漸次あらゆる障碍物を乘超え、生を脅す刺戟に充滿した環境中を奮闘して來り、そして保護層を構成すべく餘儀なくされたと假定すべきであらうか。そして斯く分散せる生物體の斷片が複細胞組織を作り、遂に極めて强められた形に於いて再結合を欲する本能を生殖細胞に交付するに至つたと假定すべきであらうか。自分はこの邊に於いて打切るべきだと信ずる。

併し私は前記の思辨に對して、こゝに少しく批判的考慮を述べずして打切るべきではないと思ふ。前述の如き見地を、自分は果して信ずや否や、もし信ずとすれば如何なる點までゞあるかと、人々は問ふことであらう。これに對する私の解答は、私自身ではこれを信ずるのではない、他人にも亦これを信ぜしめんとするものでもない、もつと正確に云へば、自分でも如何なる點まで信じて居るかは分らないと云ふにある。信念の本能感情的要素はこゝでは考慮せられる必要はないやうに思はれる。それでも我々は一つの思考過程に身を任せて、それが導くまゝに辿り行くことが出來る。併しそれはただ科學的好意心に從つて、或は「惡魔の代言人」として（併しそれ故に惡魔それ自身にさへ身賣りすることなしに）思索するものであるのだ。私は私の步み來つた本能說に於けるこの第三步が前に步み來つた二道程の如き――卽ち性感概念の擴張やナルチスムス想定の如き――確實性を持つてゐないこ

とを認めるに吝なるものではない。この新說は、觀察を理論に直譯したものであつたが、この程のものに免れ難い錯誤はそれほどにしてはゐない。本能に退行的性質があるとのこの主張は、やはり實際に觀察した材料を基礎としてゐる。卽ち、反復强迫の事實を基礎としてゐるのである。併し或は私もこの事實をあまり大袈裟に考へ過ぎてゐるかも知れないが、かゝる觀念(理論)を造るには、觀察した事實を順次に繰返し、純なる考察と結合せしめる以外に方法はないのである。それ故、理論はどうせ觀察から遠ざかつて行くものである。それ故に理論を打樹てるに際し、觀察から離れることの度が重なれば重なるほど、その結果は益々信頼すべからざるものとなるのは分りきつたことである。併し、その不確實さの程度は何とも云へない。それは美事なる發見に到達することもあらうし、或は莫迦莫迦しい迷路に踏入ることもあらう。斯樣な企圖に於いて、自分は所謂直觀(Intuition)なるものにはあまり賴らない。思ふに、直觀なるものは知力の或る不偏不黨性の結果である。たゞ遺憾ながら、人々は科學や人生の重大なる問題に就いては、あまり不偏不黨にはなり得ないものである。自分の信ずるところでは、何人でも心の深部にて、或る偏見の支持を受け、思辨の場合に知らず識らずこれに陷るのである。信ずべき根據の乏しい場合には、自分自身の考究の結果に對してもたゞ冷靜なる好意以外の何ものもが殘らない。たゞこゝに云ひ添へておきたいことは、そのやうな自己批判があるからとて、

それと違つた種々の說をやたらに默過させねばならならないわけのものではないと云ふことである。觀察の分析の初步に於いてそこに矛盾を見るが如き理論に對しては、我々は躊躇なくそれを排斥し得るのである。さうして同樣に、その人の主張せる說は、單に暫定的價値の存するものであることを知り得るのである。假に生の本能と死の本能に關する我々の思索を評量する時に、種々雜多なる、全く豫想外の、或は全く豫想し難き事實がそこに見られることがあらうとも、我々はあまりまごつかないであらう。例へば、一つの本能が他の本能に驅逐せられ、又は自我に關した本能が對象に向けられる如き事が起るとも、我々は別に理論の動搖を感じないであらう。このまごつきは、科學的用語を以つて、卽ち心理學（正しくは深部心理學）に特有なる比喩的言語を用ゐて考究せねばならないためである。さう云ふ比喩的言語を用ゐざれば、我々は無意識過程を記述することが出來ず、抑々それ等を知覺することが出來ないであらう。もし我々が心理學的用語に代ふるに生理學的又は化學的用語を以てすることが出來るならば、恐らく敍述の缺點は除き得るであらう。勿論、生理學又は化學の用語と雖も比喩語には相違ないが、我々はこれに久しい間馴れて居り、且つ比較的單純な語だからである。

それどころか、我々の思辨は、生物學の材料を借用して來なければならない必要のために、その不確實さが益々增大するに至ると云ふことを明白にしたい。生物學は實に無限の可能性を含んでゐる。

我々はそこから極めて豫想外の啓蒙を期待しなければならないのである。そして我々が斯學に提出した疑問に對して、數十年後に至つて答辯が與へられるかどうかは全く豫想出來ない。恐らくこれらの答辯に依つて、我々の假定の人爲的構造の全部は覆へされるであらう。果してさうだとすれば、本節に於いて解決を企てた如き努力は何のためになされたのであるか、そして又何故にそのやうな努力の結果をこゝに報告したのであるかと、人々は尋ねることであらう。併し私の考へでは、本節に於いて辿つて來た類推、關係及び連鎖の或るものは、考慮の價値を有するものと思へると云ふことを、私は否定し得ないのである。*

【註】＊我々の用ゐて來た用語を明瞭にするために、こゝに二三言を費しておかうと思ふ。これ等の用語はこの論議中に多少の展開を示したのであつた。「性本能」の何たるかといふことは、男女兩性に對するその關係から、及び繁殖機能への關係から知つたのであるが、精神分析の研究結果により、性本能の繁殖に對する關係はそれほど緊密でないことを知つたが、その時もなほこの語を用ゐることにしておいた。ナルチスス型リビドーと云ふ考へ方をとり、且つリビドー概念を擴大してそれを各細胞間にも働いてゐるものとして考へると共に、性本能と云ふものは我々の爲めに生物の各分離された部分を相互に吸引して結合させる愛(エロス)と云ふものに外ならないと云ふことになつたのである。そして一般に云ふ性本能とはこのエロスの對象にさし向けられた部分であると云ふ風に考へられるやうになつた。このエロスが生

命の發端から働いてゐて、それが「死の本能」に對する「生の本能」として有機體に於いて現れたのであるといふことを我々は思辨的に考へ、即ちかくて發端から對峙してゐたこの二つの本能の存在を假說することにより、生の謎を解かうと我々はしたのである。そこで「自我本能」の概念に變化が生ずると云ふことは、恐らく看過出來ないところであらう。自我本能と云ふ用語の本源的の意味は、外界の對象にさし向けられてゐる性本能と區別せられるところの、我々にまだ判然と分つてゐないところの一切の本能的傾向のことであつたのである。(性本能の表現は即ちリビドーに外ならぬのである。)其の後に至つて我々は自我分析を試み、所謂自我本能なるものゝ一部も、それ自身をリビドーの對象物として取上げるといふ點に於いて、亦リビドー性を有するものだと云ふことを認めたのである。それ故に、このナルチスムス的な自己保存本能は、今やリビドー的性本能に屬するものと見做されるに至つた。かくして自我本能と性本能との對照は、今は自我本能と對象本能との對照となつた。この兩本能は、その質に於いてはリビドー的である。併しながら、その後に至り、これに代つて新しい對照が出來た。それはリビドー的(即ち自我及び對象)本能としその存在が自我に依つて認められ、且つ恐らく破壞本能として認められるところの別の本能との對照である。我々は思辨に依つて、この對照を、生の本能(エロス)と死の本能との對照に代へたのである。

第七章

結語

早期狀態を再現せむとするこの傾向が、このやうに實際に本能の一般的傾向であるとするならば、精神生活に於ける大多數の作用は快不快原則に獨立して存するものと認められても、決して怪しむに足りないであらう。この一般的傾向が總ての部分的本能に傳はり、それが爲めに總ての生物は發達の過程の或る點を再現せんとするであらう。併しながら快不快原則は未だかゝる傾向の總ての上に支配力を及ぼしてゐるわけではないから、さう云ふ傾向が必ずしも快不快原則に對立してゐるものだと云ふわけではない。我々は猶、本能的な反復過程が快不快原則の支配に對して如何なる關係を持つてゐるかを決定すべき問題を、未だ解決してはゐないのである。

精神裝置の最初にして最重要な機能の一つは、襲ひ來る本能の亢奮を「拘束」(binden)*して、そこに支配してゐる第一次的過程を第二次的過程に置換へ、そこに自由に流動してゐる纏綿（備供）エネルギーを、主として靜止してゐる（强直してゐる）纏綿に置換へることであつた。この轉換中には苦痛が生ずるが、それは別に顧慮することはないのである。たゞ、これに依つて快不快原則は破られる

ことはない。この轉換は寧ろ、快不快原則に役立たんがために起るのである。「拘束」と云ふことは快不快原則に導き、それを確立するための準備行爲である。

【註】＊ 本書三五頁及び四〇頁參照。（譯者）

我々は從來、明瞭な區別をつけなかつた機能と傾向とに就いて、從前よりももつと明瞭な區別をつけようと思ふ。卽ち、快不快原則とは或る機能に役立つための傾向である。さうしてその機能とは、精神裝置をして亢奮なくあらしめておくこと、或は亢奮の備供（纏綿）量を不變に、且つ能ふだけ低く保たしめておくことである。我々は未だこれ等の考へ方を確實なものと決めることは出來ないが、斯く定義せられた機能は總ての生物の最も普遍的な傾向、卽ち無機狀態に落着かうとする傾向に關係があると我々は考へるのである。我々の得られる限りの最高快感たる性行爲の快感が、最高潮の瞬間的解消と結びついてゐることを我々の總ては知つてゐる。併しながら、本能の亢奮が拘束されることは準備的機能に過ぎないであらう。その機能の目的とするところは、亢奮をその窮極的解消のために解放の快感にまで差向けて行くことである。

これに就いては快感及び不快感は、拘束されてゐる亢奮過程からと同樣に、拘束されてゐない亢奮過程からも發するや否やと云ふ問題が生ずる。拘束されてゐない、卽ち第一次型過程は、拘束されて

ゐる亢奮、卽ち第二次型亢奮過程に比して、快不快の兩方面に、より强い感覺を與ふることは疑ひのないところである。時間的に云つても、第一次型過程はやはり早期に屬してゐる。卽ち、精神生活の發端にあつては、まだ他方の過程は起つてゐなかつたのである。この時代に於いて旣に快不快原則が働いてゐなかつたとするならば、その後の過程に至つて抑々快不快原則が生ずるには至らなかつたらうと云ふ結論は下し得るのだ。そこで我々は根柢に於いて單純ならぬ歸結に達するのである。卽ち、精神生活の發端には快樂の追及は、後の時代に於けるよりも遙に强烈であつたが、併しそれほど無制限ではなかつた。そこには屢々勃發があつたに違ひない。更に成熟の時代に達して、甫めて快不快原則の支配が確立せられて來たのである。併しこの原則と雖も他の本能一般が受けるやうな制限を免れることは出來ない。兎に角、亢奮過程に於けると同樣に、第二次型過程に於いても、存在してゐるに違ひないのである。

今や我々は更に硏究を進ませる必要を感ずる。我々の意識は內側からの快感及び不快感を我々に傳達するのみならず、或る特殊な緊張の感覺をも與へる。この感覺は、それ自身やはり一つの快感、又は不快感でもあり得るのである。さて我々がこの感覺に依つて識別すべきことは、拘束されてゐるエネルギー過程であるか拘束されてゐないエネルギー過程であるか。或は、緊張感は或る絕對量に達し

た時に起ると見るべきか、それともリビドー纒綿（備給）が或る水準に達した時に起ると見るべきか。（但し、快不快の代謝はリビドー備給（纒綿）量に變化のあつた或る瞬間に於いて起ることは明かなのだが……。また、我々の氣付かずに居られないことは、生の本能が我々の內的知覺と大きな關係を持つてゐると云ふことである。何となれば、生の本能は寧ろ我々の落着きを擾亂するものとして擡頭し來り、不斷の緊張をそこに伴ひ、その緊張の弛緩は快感として感ぜられるからである。然るに死の本能の方はその働きを暗々裡になしつゝあるのである。快感原則は正に死の本能に奉仕せんとするものゝ如くに思はれる。快感原則はやはり外部からの刺戟に依つて活動するのである。（この外部からの刺戟は生死二種の本能からは危險視せられてゐる）が、併し內部からの刺戟の强くなつて來ることに依つて特に目醒ましく活動するのである。この內部からの刺戟の强まりと云ふことは生活の問題を困難ならしめるのを目的としてゐるのである。この點に於いて無數の問題がからんでゐるが、それ等諸問題への解答は只今では不可能である。人々は忍耐强くなければならない。さうして他方面の方法や契機を待つて研究を續けなければならない。また人々はよしんば暫くの間辿つて來た道とは云へ、よきものに導きさうにもないと思はれるものならば、これを再び放棄するに吝であつてはならない。從來の信仰問答書を放棄して科學にその代償を求める如き信者のみが、舊信仰の繼續又は改作をなさんとす

る科學者に向つて批難を浴せることであらう。その他の人々にあつては、詩人リュッケルト(Rückert: Makamen des Hariri)の言葉の如く、我々の科學的認識の遲々たる歩みを慰撫するであらう。

「一足跳びに跳んで行けないところへは、
びつこ引き引きでも歩いて行かねばならない。
聖書の中にも、びつこを引くことが
罪になるとは書いてはない。」

――完――

『快不快原則を超えて』の約說

この『快不快原則を超えて』はフロイドの著書の中で極めて難解だと稱されてゐる。それ故さういふ部分は、誤解の生じないやうにと思ひ直譯的にした爲め、或は意味の解し難いところがあるかもしれないが、一般には出來るだけ了解されるやうにと思ひ、平易に書いたつもりである。

その難解なものを、成るべく了解して讀んで貰ひ度い爲めに、譯者の老婆心から、各章の要領と筋道とを約說して置きたいと思ふ。

第一章は、精神作用は總て快不快原則に基いてゐるといふ事と、及びその原則だけでは說明し難い精神作用があるといふ事とを主として論じたものである。卽ち快感及び不快感は、精神生活中に發生する興奮の量の多寡に關係してゐると說明して、フェヒネルの『安定に向ふ傾向』に苦樂感を結合した特殊のものだと稱してゐる。然しこの快不快原則が精神生活の主權を占めてゐるものとすれば、我我の精神作用の大多數は、必然的に快感に伴はれねばならない筈だが、さういふ塩梅にはなつてゐない。そこで一時現實原則に代つて貰はなければならない破目に陷る。卽ち最後に快感を得むが爲めに一時だけ苦痛を忍ぶといふ事になる。こんなわけで、何處までも快不快原則が精神作用を支配すると

いふ事が出來ない場合が認められるといふ事を論じてゐる。

第二章に於ては、この快不快原則の支配を受けない明瞭な事柄を提出してゐる。それは戰爭神經症の症狀である。恐らくフロイドは戰爭神經症の多數の例を扱ひ、それによつて快不快原則を超えた原則が存在してゐることに確信をもつたことゝ思へる。本書はこの點が實際的の主論であるらしい。戰爭神經症は過般の歐洲大戰の際に多數發生したもので、それは註に出てゐる著述を參照すると明瞭に了解できる事だが、戰爭の現場にあつて生命の危險を强度に經驗した將卒が、一種の恐怖性を帶びた神經症に罹つて戰地から歸還させられる。それが兵卒よりも將校の方が多く、殊に常に先頭に立つて敵前に進んで行かねばならぬ尉官に非常に多く生じた。それらの患者の枕頭を每夜襲ふものは惡夢であつて、その恐怖の爲めに目を醒まされるのである。遂には自殺を遂げるに至るものがあつた。當時、戰爭神經症患者が獨澳軍では治癒されて再び戰線に現はれる事を英軍では非常に不思議に感じて居た。その治療が精神分析によつて遂げられたことを知り、此處に初めて英國の學者が精神分析學を習得して、自國に採用するに至つたといふのである。これは餘事であるが、この戰爭神經症患者の夜每の惡夢は、快不快原則では容易に說明され難いものであつた。患者は每夜夢で恐るべき戰地に連れ戻されるのであるが、戰地の場面は決して患者の願望してゐる箇處ではないので、寧ろ忌避されてゐる

る箇處である。これではフロイドの主張した『夢は願望滿足』といふわけに行かなくなる。その以前から普通の恐怖の夢、うなされる夢の說明は困難であつたが、戰爭神經症患者の每晚つゞく惡夢には、その願望滿足說を絕對なものとして考へることが出來なくなつたのである。同時に快不快原則にも基いてゐるものとは考へられなくなつたのである。それ故、こゝに於て本論で述べてある通り反復する强迫衝動の制し切れぬ威力を認めるに至つたのである。この反復强迫行爲の理由を說明するに當つて、子供の遊びを觀察して、受動的の不快なる經驗を、アプレアギーレン(再現)して能動的にすることだと云つてゐる。そして、自身に受けたその不快なる場面を、今度は自身の力で自由に操縱しようとすることだといつてゐる。操縱できれば今度は自身がその場面を支配することが出來、周圍の適當の人に對してそれを向けて、所謂復讐することが出來るのだと說明してゐる。

第三章になると、他の方面からも快不快原則を超えたものを提出して來てゐる。それは神經症患者が分析治療中に常に示す一つの現象たる轉嫁神經症である。この轉嫁神經症とは、分析が或程度迄進行すると惹起される症狀であつて、主として忘却されてゐた嬰兒時代の性的生活(卽ちエヂポス結コンプレクス情などが含まれてゐるもの)を再現させて來る。卽ち、此れを現在のものとして經驗するものである。この忘却された過去を再現するといふ事は、抑壓されたものゝ力を表現する事であるから、自我

に對しては悉く不快なものばかりである。それ故又々快不快原則に基いてゐるとは云へないことになるのである。それから反復强迫症そのものは、何等快感の要素を含んでゐない過去の經驗の復活であると云へることになる。その理由の說明として、嬰兒時代に抱いた性的願望が悲慘なる最後を遂げ、それが劣等感の要素ともなつた事を論じて、如何に懊惱苦痛であつたかを說明し、この苦痛感が分析中に轉嫁神經症狀として潑剌として再現されるからであると云つてゐる。そしてこの嬰兒時代の懊惱苦痛を新らしき經驗として再現させるといふ事は、分析治療には何うしても避けられない技巧に屬してゐて、省略するわけには行かないといつてゐる。かういふ現象は、神經症患者のみならず常人の生活中にも猶少からず認められるものだといつて、例を擧げて說明してゐる。そしてこの反復强迫症を假定するに就ては、快不快原則よりも更に原始的な元素的なものがあつて、それは快不快原則の土臺の如きものになつてゐると論じてゐる。

第四章では、反復强迫症である處の外傷性神經症の發生に關する機構を論じてゐる。戰爭神經症も外傷神經症に屬してゐるもので、それらの症狀が反復强迫症狀となつてくる機構を、生物學の根原にまで遡上つて說明してゐるのである。そして外傷神經症患者の夢の說明にまで及ほし、それも同じく快不快原則とは別箇の目的をもつたものであると結んでゐるのである。

それに就ては、原生物が漸次あらゆる障碍物を乘超え、生を脅かすが如き外界の刺戟を突破して來て、そしてその外皮に保護層を構成するに至つたといふ假定を下し、その構成された保護層が、外界の刺戟によつて破壞された場合に、外傷性神經症が惹起されるのだといつてゐる。保護層が破壞されたる場合には、力の拘束と解放とが現はれると解いた。卽ち外界より一つの刺戟が來つた場合に、精神區劃に於ては、外皮の保護層によつて無害なものとなすことが出來る。處が外界の刺戟が、ある程度を超えて强大なものであつた場合には、その保護層が破壞されるといふ事は必然である。この場合に起る現象としては、第一に各所からこの破壞された部分に對して、受けた刺戟に相當するだけの力が該刺戟に對する防衛の爲め集る。卽ちその周圍に力の充塡が起る。さうすると他の精神區劃ではそれが爲めに力の減退又は消失が起り、從つて精神活動の痲痺や減退が廣汎に亙つて起つてくる。この場合に多量に力の充塡を受けた區域でさへも、更に流れくる新しい力を受けて、これによつてその充塡を不動性のものとなして精神的に拘束するといふことになるのである。卽ち保護層が破壞されると力の充塡によつて刺戟を制禦し、拘束せむとする企てが生ずるのである。これが所謂反復强迫症となるのである。そして刺戟に對して豫感を起して相當なる準備行動が出來てゐた場合、卽ち豫感によつて力の過剩充塡があつた場合には、外傷の程度も低くて濟むが、豫感が缺けてゐたか或は無かつた爲

めに、過剰充塡が低いか或は無かつた時には、外傷の程度が强度となる。然し乍ら或程度を超えた强き刺戟の場合、例へば戰爭の外傷(勿論精神的の)の場合には、この準備行爲は役に立たなくなる。だから戰爭神經症患者が夢で每晩恐怖を感ずる理由は、夢によつて豫感を喚起して、刺戟に對する操縱力を復活させようとする企てであると見做してゐるのである。豫感が脫漏した爲めに外傷神經症が起されるのである。斯く論じ來つて、かゝる精神作用は快不快原則には違背することなしに、矢張り反復作用の傾向に基いてなされてゐるのであると論じてゐる。

第五章は、第四章に於て外界より來る刺戟に對して、反復强迫症狀の發現することを論じたるに對し、一步を進めて內界より來る刺戟に對する論議をなしてゐる。內界より來る刺戟の源泉となつてゐるものは、有機物の本能であると云つて、この本能は體軀から發生して精神機能に傳達される力の總ての代表であると論じてゐる。これを硏究するに當つて、資料となつたものは夢の現象だつた。夢によつて無意識に於ける作用と前意識に於ける作用とが全然異つてゐることを發見し、夢の仕事として施される轉嫁、轉位、壓縮等の現象を精神的一次型作用と呼ばれ、前意識で施される現象を精神的二次型作用と呼ばれるに則り、本能から來る刺戟も亦同じくこの一次型作用法則に從つて示されるものであると論じてゐる。それ故この一次型作用に達する本能の刺戟を、拘束すべき特務を持つた高層の精

神作用が、一朝その拘束に失敗する時は、外傷性神經症に類似した症狀を發するに至ると見做してゐる。即ち反復强迫症が起ると稱してゐる。

この反復强迫症の現象は、極めて高度の本能性から發してゐるもので、それを快不快原則に對立させてみると、運命的性質を示してゐる

そこでこの本能性なるものが、反復强迫症に連絡してゐる理由を明かにする爲めに、本能の定義を決定して來た。それは今迄論じて來た事を根據として定めたものである。即ち本能は總ての有機體に宿つてゐる傾向であつて、有機體をして、その早い時代の狀態を再現させるやうに努力させてゐるものであると論じてゐる。さうしてその例を遺傳の現象や胎生學から引いて反復再現する强い力を有してゐることを說いた。そして總ての生物が辿りゆく道筋は、生物が旣に捨て去つた最も古代の出發點にゆくべき道であると云つて、生物の以前の狀態卽ち無生物に還元しようとする事が、本能の目的となつてゐると云つた。そして無生物より生物が發生したる狀態、更にそれより本能の發生する過程、その過程が現にその發生の當初より無生物に還元せむとする傾向より生じたものであると說き、最後に本能が無生物に還元せむとする傾向は、換言すれば死に到着せむとするに外ならぬと見做したのである。それ故當初の生物は生を得るや間もなく死滅してゐたものであつたが、外界の影響が變化して

來た爲めに、死滅の道程が延長され迂回されるやうになつて來た。それゆゑ直ちに死滅せんとしても得ざるに至り、死せむが爲めには迂回したる復雜したる道程を辿らねばならなくなつたのである。この迂回路は忠實に保守されて居つて、これが現在吾々の生命の現象となつたものであるとしてゐる。それ故吾々は過去に於て辿り來つた道筋をのみ辿らむと欲して、この道以外の道筋を經て無生物に還元せむとする內外の影響を悉く拒絕反抗するのである。かく內外の影響を拒絕して、過去の道筋を安全に辿らしめ、死の到着點に進ましむべき擁護者は所謂自己保存本能である。この本能の爲めに旣定の道筋以外を辿ること、卽ち病死自殺によつて直接に死の到着點に達せむことには甚しき反抗を蒙るのである。故に自己保存本能は『死の本能』でなければならぬ。

更に一方に於ては、この死の道程を辿つてゐないものが發見された。それは生殖細胞である。生殖細胞は生物の本原的性質を保留して一定期間の後に分裂する。その分裂に際して、遺傳的の傾向と新らしく得たる本能的傾向とを持つて獨立する。この分裂が卽ち生物の發達であつて、この發達は過去を周期的に繰返す。卽ち分裂を常に繰返すのである。この繰返しといふことが生殖細胞の本原的性質であつて、これが爲めには、この細胞と他の生殖細胞と結合（卽ち精虫と卵の結合）によつて不死性を獲得するのであると論じ、この本能を性本能と見做してゐる。性本能はこの事實に明かなるごとく

生命の本能で、『生の本能』と認められる。

こゝに於てフロイドは、生物の本能を二大別して、自己保存本能である處の『死の本能』と、及び性の本能である處の『生の本能』とを説いたのである。この二種の本能が吾々の內界の衝動となつて絶えず刺戟を起すのである。然し乍らこれらの本能は、決して抑壓されることなしには滿足なる姿をもつて現はれることは出來ない。抑壓を受けた本能は、それが滿足を得むとして間斷なく奮鬪努力を傾倒してゐる。この奮鬪努力が現在人類の發達を齎し又文化を齎す所以となるものであつて、人類がそれ自身の中に、完全なるものにならむとするが如き衝動を有してゐると思ふのは慰藉的の錯覺である。それゆゑ下等動物の發達と何等異つてゐる處はないのだと論じた。これは人類が益進歩發達して遂には超人になるだらうと信じてゐるナルチス的傾向の强い人に對して、辛辣なる皮肉を投げたのである。斯うしてフロイドは精神分析學によつて人間の自惚的錯覺を各方面から悉く折破してゐるのである。

この章で面白く感ぜられるのは、死の本能を唱道した事である。これによつて『總ての生の到着點は死である』といつたのは、佛教で『生死一なり』と云つてゐるのに合致してゐる。

第六章に於ては、前章に於て論じた生本能と死本能とを、更に生物の形態學研究と比較して精細に

論じてゐる。

それにはヴィスマンの著書『壽命に就いて』、『生と死とに就いて』、『胚芽細胞』等を對象として論じ、氏が生物を形態學的見地より論じて『死すべきゾマ』と『不死の性殖細胞』とを認めたるに對し著者は動的(ディナミッシ)の見地から『死本能なる自我本能』と『生本能なる性本能』とを認め、この兩者の概念が異つた道から出發し乍ら、測らずもその歸着點に於て一致を見たといつて微笑を洩らしてゐるのである。處がこの一致せる如く見えた兩者の概念が、ヴィスマンの叙述を檢査するときは必ずしも一致してゐないことを指摘した。それは前述の『死すべきゾマ』と『不死なる生殖細胞』とはこれを複細胞生物にのみ認めて、單細胞生物には認めないといつた事である。この事に對して、著者は痛切なる反對を縷々として費し、『生物は內側の原因によつて死滅すべきものなり』『單細胞動物も亦死すべきものなり』として各種の實驗を參照し、それによつて次の二つの結論を得てゐる。第一、老衰せる原生物が他の原生物と結合し、更に分裂する時は若返る。第二、原生物は自己の新陳代謝產物によつて死す。然し乍ら新しき培養液中に入れる時は死せずと。これにより生物が死を招く內側の原因を假定してゐるのである。猶ヘーリングの所謂アナボリック(建設)及びカタボリック(破壞)の兩說に對しても、同じく著者の生本能と死本能とが一致せるものと認め、遂にショーペンハウエル

の『死は生の結果なり』『生の目的は死なり』にまで比較させて來た。以上によつて著者は生本能と死本能との二大本能の說明を完結させたのである。

精神分析學が生物學及び哲學の領域にまでもディナミッシの見地から進入して行き、然かも堂々と彼等以上の明快なる說明を揭げて進んでゆきつゝあるは實に興味の盡きざる處である。

更に本章では『複細胞組織を形成する所以は、單細胞の壽命を延長せしむる手段である』と云ひ、それは二個の單細胞の一時的混合が『保存』『若返り』であるからだといつてゐる。これを更に有名なるリビドー說に當て嵌めて、各細胞が他の細胞を性的對象物として取扱つてゐること、及び斯く取扱ふのは性本能の役目であると假定したのである。それ故にリビドーは、各細胞間を結合せしめる所謂エロス(愛)に相當するものだと說明した。それよりリビドーと本能との關係を說明して、リビドーとは對象物に向けられたる性本能の力であると明快なる聯絡をつけたのである。

このリビドーの說明を更に進めむが爲めに、自我の問題に踏込んで行つた。自我は、轉嫁神經症の分析の際に、第一に對象物に向けられた性本能と、第二にそれに反抗してゐる或物、それは不明なものだが假に自我本能と呼ぶべきものを認めた。又精神分析によつて、リビドーが對象物より撤回されて自我に向けられた事を經驗し、又子供のリビドー發達の研究によつて、リビドーの發生地が自我で

あることを明かにした。リビドーがこの自我を對象物として、纒綿した狀態を『ナルチス型』と呼び、これが性本能の表現となつたのである。そしてこの本能が將來自己保存本能として認められるやうになつたのである。こゝに於て自我本能と性本能との區別が不明瞭になつて來た。何故なれば自我本能の一部はリビドー性を有するものと認められたからである。そして自我の裡にも性本能が働いてゐるといふことになるからである。これは自我本能と性本能との差を質の差であると考へたからであつて、實際は質の差ではなく、精神區劃的に考へた差でなければならぬのであつた。即ち轉嫁神經症の場合で考へれば、一方は自我であり、一方は對象物に向けられたリビドーの充塡であるとした。

斯くて著者は前述の如く區別的に困難を感じた本能を明瞭にせむが爲めに、性本能、自我本能と呼ぶよりも、生の本能、死の本能と呼ぶべきであると主張した。そしてユングのリビドー說は一元論であつて、それは解釋に當つて非常に混雜を來すものだと云つた。そして自我の中に存するリビドー性本能は、我々が未だ知り得ざる他の本能と一緒になつて、或方法で混入してゐるものだらうと云つた。故に著者は、自我の中に撤回されて來たリビドー即ちナルチス型だけは認めてゐて、それ以上のものは不明であると見做してゐるのである。

その生本能としての對象物に對する愛は、それ自身に兩極性を有してゐて、一は愛の極、一は憎惡

の極となるのである。その兩極を一方から他方に辿つてゆく關係よりして、性本能の加虐性要素及び被虐性要素が認められると云はれた。これには先づ生を支持するエロスから、何故に對象物を害さむとする加虐的衝動が發したかといふ疑問が生ずる。その說明として、對象物を虐待する傾向は、リビドーの發達を檢査する時には、口唇時代に於ては對象物を口內に食盡すことが性的占有であり、其後に至つては生殖作用と共に性的要求を追求せむが爲めに、性的對象物を征服せむとする作用となつてゐるのを見る。それらは悉く加虐的傾向と見做すことが出來るといつた。次いで更に、愛の一極としての性本能の被虐性的要素を認めるに至つたのは、その說明として、臨床的觀察により加虐性が對象物を離れて自我に逆戻りしたもの、自我を虐待することであると見做した。これによつて自我が虐待されるのである。この逆戻りは退行現象（卽ち發達の早期の狀態に戻ること）であると說明した。この退行によつて、被虐性要素を死の本能の一例だとして擧げ得ると稱してゐる。

以上によつて生本能とリビドーとの關係が明かになつたのであるが、更に問題を反復强迫症に戻して論じてゐる。卽ち二個の生殖細胞と其の發達とは最初の狀態を繰返すこと卽ち死の本能であつて、それは反復作用の性質と稱することが出來るが、その二種の生殖細胞の結合そのものを主要點と認めてゐる生本能の性質は何であるか。この結合は元來如何なる源泉より出發してゐるのであるか。

著者が生の本能とされてゐる二種の生殖細胞の結合について、その元來の性質を何故に玆に於て提言したかといふことは興味の多い問題である。これは換言すれば性的繁殖の根原及び性本能の源泉を究めることで、何故に性感を有するかといふ問題に到達するものである。これは又著者の反復作用に結び付くべき一條件を具備したものが存在してゐる爲に、提出したものであることは明かである。

この解說には今日迄專門家すら躊躇してゐる處だと前提して、まづダーウィンの說を擧げた。ダーウィンは二種の細胞の結合は偶然の機會によつて結合したもので、その偶然の結合が有益であつたが爲めに繰返すに至つたのだと解いてゐる。この論は唯紹介にしたに過ぎないもので、著者の云はむとする處は、次のプラトーンの對話篇であつたのだ。その對話篇には、著者の考へてゐる條件を具備したものがあつて、一概に神話的の談叢として輕視すべきものではなからうといつてゐる。その條件とは『本能は早期の狀態を再現する必要があつて生じたものである』といふことである。これが著者の反復作用に結び付くべき强大なる條件である。その條件を充してゐる神話的の談叢中には、人間には三種の性があつたこと、卽ち男女兩性の外に第三の性があつて、その第三性は總てのものが重復して居り、卽ち二つの顏面、四つの手、四つの足、二つの性器があつた。この人間をツォイスの大神が兩斷した爲めに、各半身は互ひに戀慕するやうになつたと記されてある。卽ち最初の狀態を再現したい

が爲めに、相互に結合せむことを望んでゐるのであるといふのである。
以上を總括して著者は次の如く提言してゐる。『我々は、詩人的哲學者の考慮した如くに、生物はその生を享けた當初に於て二部分に切斷されたもので、其後絕えず性本能の手段によつて再結合を求めつゝあるといふ假定を爲してよいだらうか。性本能の中には無生物質の化學吸引力が未だ猶存續して居り、この本能が原生物界から漸次あらゆる障碍物を乘超え、生を脅かす刺戟に充滿せる環境中を奮鬪し來り、遂に保護層を構成すべく餘儀なくされたと假定してよいだらうか。そして斯く散在せる生物體の斷片が複細胞組織を作り、遂に極めて强められたる形に於て再結合を欲する本能を生殖細胞に轉位するに至つたと假定してよいだらうか。』この著者の言葉は、本書の結論であつて、廣く世に問うたものであるが、その一面には決定的のものでないとはいへ、確固たる道程を經て來て提出したる問題で、殆んど決定に近づいたものと信じてよいと思ふ。
第七章に於ては、この『早期の狀態を再現せむとする傾向』が快不快原則を超えたものであることに就いて述べてゐる。而して本能的反復作用と快不快原則の支配內に於ける關係との問題は、いまだ完全に解決されたものでないとしてゐる。卽ち快不快原則の支配を認めないとは斷言出來ないと云つてゐる。猶その說明を精しくせむが爲めに、快不快原則は生物が無生物に還元せむとする傾向、卽ち

死の本能に對して、或る援助を與へむが爲めの傾向であると云つた。卽ち精神作用の張度を增加させようとしてゐる内外の刺戟に對して、或る監視の役割を果し、精神作用をして快感に據らしめむとしてゐるのであると解いた。そして快不快原則と本能的反復作用の關係を明かにしたのである。

强迫神經症の一例

一九〇九年精神分析學及精神病理學研究年報第一卷所載

次項には二種の問題を述べたいと思ふ。第一に、余は强迫症の一例から得た斷片的の話を述べよう。此の例は分析期間と影響とが多大であつたことや患者自身の印象などから見て、可なり重症のものだつたと見做してよからう。治療は約一ケ年續き、患者は人格を完全に恢復され、彼の禁制も取除かれたのであつた。第二には、この例から出發して、余が以前に分析した多數の患者を參照して得た强迫症の原因や、又それの心理的機制を、金言じみた説明を加へながら叙述して、一八九六年に公表した此問題に對する余の最初の觀察を此處で展開して行かうと思ふのである(一)。

【註一】(一)『擁護性神經症に就いての再度の研究』(强迫症の質と機制)(一八九六)參照。

この種類の叙述には序言が必要なのだ。なぜならば序言がないと、これは完全に正確なもので、他人が見習ふほどの價値があると思つて發表したのだらうと考へる人があるかも知れぬからだ。實際余はこの研究に當つて、この問題に當然加へられるだらうと考へた妨害を内外から受けてゐる。それだから余は出來るならば更にこれ以上の材料を喜んで提供したいと思つてゐるのだが、この患者を取扱

つた事について綿密な狀態を申述べることは出來ない。何故かといへば、それは患者の生活狀態の微細な處まで立入らなくてはならない。都會人は余の醫學上の活動に特別の注意を集中して、うるさいほどの興味を向けてくるものだから、此の病例を忠實に叙述するなどといふことは、やつて行くわけには行かない。然し乍らかういふ場合によくやる取捨變更などは全然無要なことで、又面白くないことだと考へてゐる。然し取捨變更が少な過ぎると多衆の不謹愼な好奇心から患者を迷惑させる。また取捨變更が餘り多過ぎると明瞭な材料を目茶苦茶にする虞れがあるから、さうならぬやうにと餘計な犧牲を拂はなければならない。材料といふものは實際生活の細目な部分であつてこそ、初めて正確なものが得られるのである。それだから、患者の深い秘密をあばく事は、患者の最もつまらない精細な事を曝露させるよりも容易だといふ矛盾が出來てくる。何故かといへば秘密をあばいてもその患者の誰人なるかは一寸分らないが、精細なことを材料に取入れるとその患者の誰かといふことは容易に知られるからだ。

これはこの病例やその取扱ひ方の叙述を余が徹底的に消略したに就いての言譯であるが、猶余は强迫症の精神分析的研究に當つて、叙述の仕方が秩序のないものとなつたのはこれ以上の理由があるのだ。それはこの强迫症患者の重い症狀の構成されるに就いて、その複雜した部分までは徹底して檢べ

る事が出來なかつたといふ事を告白しなければならないのだ。又同時にたとへ余がそれをこゝに分析して明快にすることが出來ても、分析の助けによつてその構成を認めたり又確かにそれであるといふ事の解釋が出來たとしても、之れを明瞭にしてみせることは不可能だ。この複雑な構成は治療を重ねてゐる間に初めて追々と明瞭になつてくるものなのである。これを爲すに當つて非常な困難を感ずるのは患者の抵抗といふことで、またその抵抗がどんな格高で出てくるかである。そればかりでなく、これの外にも更に强迫症そのものを了解することでさへ、決して容易でないことも公表して置かなければならないのだ。强迫症はヒステリーよりは容易である。だが人々は實際にはさうだとは思はなかつたであらう。强迫症患者のいふ言葉は、即ち言葉そのものが症狀の秘密な考へを表現する手段であるが、それはヒステリー患者がいふ言葉の訛(なまり)と同じなのだ。然し兩方を比較すると强迫症の言葉の方が辿り易い道筋をもつてゐることが解る。なぜならば强迫症の言葉は、我々普通の人が意識して話してゐる喋り方とさう違つてはゐないからだ。兩方の著明な差異としては、精神的の過程が一躍して肉體的の症狀となるといふヒステリー的の轉換が强迫症には缺けてゐることだ。この轉換といふ事はまだ十分には了解できてゐない。强迫症の研究の困難なのは、恐らくは我々が實際に證據立て得る程多數の强迫症と親しんでゐないからだらう。重症の强迫症に惱んでゐるものは、ヒステリー患者に比較

して治療を受けるものは僅少である。そして猶日常生活にあつてもその症狀を隱蔽してゐる。そして出來るだけ我慢して、やり切れなくなつた時に漸く治療を受けにくる。恰度彼等が肺結核患者であつたとしたら、養生院から入院を拒まれる位に惡くなつてから初めて來るのだ。余がこんな比較をする譯は、いま述べた慢性傳染病のやうに、强迫症の場合でもその初期のうちに手をつけたなら、その病氣の重症輕症に拘はりなく非常に巧妙なる效果が納められるからである。

斯ういふ狀態なので、この例も御承知の通り公表するに適當な範圍內だけの報告にとゞめて置いたのであるから、その不完全であることは止むを得ない。次項に揭げた一束の報告は可なり手を盡して集めたものだが、それでも滿足なものではない。だが、かういふ研究者の仕事に對して、その研究の出發點としては役に立つだらうと思ふし、又協力するといふ事から個人の努力では恐らくは得られないやうな成功を齎すことが出來ようかとも思ふ。

一、臨床記錄の抽出

余は大學教育を受けた一青年から訪問を受けた。その青年は子供時代から强迫症に惱んでゐるもので、この四年間は殊にそれが亢じて來たといふのである。その者の主な症狀としては、彼の非常に好んでゐる二人の人に、何事か事變が振りかゝつて來はせぬだらうかといふ心配であつた。この二人といふのは彼の父親(A)と崇拜してゐる婦人(B)とであつた。この症狀の外に、强迫的の衝動を自覺し出した。例へば剃刀を持出して自分の喉頭を切らうとするやうな衝動とか、又は些々たる事件に對して、時々『物忌み』などを感じて來た。この青年のいふ處によると、こんな强迫觀念と戰ふ爲めに自分は數年を弄費し、その結果彼の生活狀態は失敗に終つたといふ。それで種々な處置をやつてみたが何等の效果もなかつたが、某處の近くの治療所で受けた水置療法は稍微効を奏したといふ。この微効を奏したといふのは、彼の考へによると其處では正規的に性の滿足が出來たからだといつてゐるが、然し今はその機會を失つて性の滿足は得られず、得られても不規則的だといふ。彼は娼婦に對しては嫌惡を持つてゐて、自分の性的生活は阻止されてゐるといつた。自慰はあまりやらなかつたが、十六七歳の時に覺えて、爾來性的能力は尋常で、二十六歳の時に初めて性行爲を爲したといつてゐる。

この青年は余に頭腦明晰らしい印象を與へた。余はこの青年に性生活を話す時になぜそんなに力說したのかと聞いた。それは余の精神分析學の理論を研究したからだと答へた。然るに彼は余の著書を實際には一冊も讀んでゐない事が分つた。唯最近彼は余の著書の或る頁を見た時に、言葉の連想といふことで不思議な說明に出逢つたのだ(一)。この連想は彼が余に相談しようと思つてゐた觀念に關係したことで、自分の『考への努力』の或物を追憶させたのであつた。

【註】(一) 日常生活の病理心理(一九〇四年)參照。
(A) 彼の父は實は數年前に既に死亡したもので、それに對して患者は杞憂を有してゐるのである。(譯者)
(B) これは患者の戀人である。本文中に「彼の婦人」「彼の愛人」と記載されてゐるは皆この人のことである。(同)

(a) 治療の開始

翌日余は彼に向つて、治療に當つてはその唯一の條件に服從せねばならぬことを誓はせた。これは

何かといふと、彼の頭腦に浮んだものは何でも、たとひそれが不快な事でも些々たる事でも、又は辻褄の合はぬ無意味なことでも、總てを告白せねばならぬといふ事を告げた。而して余は彼の喋舌り出すことには何んな話題であらうとも、話を開始してゆくやうに進めて行つた(A)。彼は次のやうな話を試みた(一)。

【註】(一) 次に書いたことは治療を開始した晩に患者から書取つた備忘錄によつたもので、余が追憶できる限り患者の言葉をそのまゝ採錄した。治療中に患者のいふ言葉を書取るといふことは警戒しなくてはならないのだ。患者の言葉を一々筆記することは、病歴は正確には取れるが、一方患者の言葉に對する醫者の注意が減ぜられるといふ結果を生じて、償はれない程度の害となる。

彼の語る處によると、彼は非常に崇拜せる友人があつて、犯罪的の衝動に苦しめられる時には常にその友人を訪ねてゐた。彼は或日その友人に自分が犯人だつたら(B)侮蔑するや否やと訊ねた。友人は彼を絶對に善人であると保證して、そんな考へを起すのは恐らく青年時代から、自分の生活の暗黒面ばかり見る習癖を持つてゐたからだらうといつて慰めた。患者の話では、彼にはもう一人の友人があつて、前の友人と同じく彼に對して感化力をもつてゐた。この友人は十九歳の學生であつた(當時患者は十四五歳だつた)。この學生はこの患者を非常に好いてゐて、その自重心を甚だしく賞讃した。だか

らこの友人には彼は恰度天才のやうに見えてゐた。この友人は其後になつてこの患者の教師となつた。それから突然に患者に對する態度が變つて、彼をまるで低能者のやうに取扱ひ出した。遂にこの友人は患者の姉妹の一人に目を付けるやうになつた。そこで彼が教師になつた理由は、その家庭に出入りする自由を得ようとしてやつた事だと分つた。この事件が彼の過去の生活に於ける一大打擊であつた。患者は更に休まずに次の話をつゞけた。

（註）（A）これは精神分析法の一つの技巧で「自由連想法」と稱するものである。（譯者）
（B）こゝにこの患者は犯罪感を有してゐることを第一に注意すべきである。最後まで重要な役割として見做される。（同）

（b）小兒の性感

『私の性生活は早い方でして、私が四五歲の時に經驗した一つの場面を覺えてゐます（私は六歲以後のことは何でも記憶してゐます）。この時の場面は數年後になつてから非常に明瞭に浮んで來ました。それはピーター孃といふ非常に美しい若い家庭教師を雇つてゐたのでした(C)。

【註】（一）嘗て精神分析者であつたアドラー氏 Dr. Alfred Adler は、患者によつて最初に告白されたものには特殊の重要さがあるといふことを述べたが（論文中にて）、それに注意を惹かれた。この患者の最初に云ふ言葉では、彼に感化力をもつてゐた友人（男子）といふことを強調してゐた。それは何かといふと同性愛的の選び方であつて、この友人を生活中の特に重大な役割を持たせて話してゐる。然るに間もなく患者の言葉は第二の動機に移つて來た。それは後になつて非常な重要なものとなつたもので、所謂男女間の衝突と男女間の對峙とてある。患者は美しい家庭教師を呼ぶのに親しい名で呼んだといふ事には深い意味がある。といふのは此の婦人の名前は男のクリスト教名であつた。(A)ヴィーンの中產階級では、家庭教師をクリスト教名で呼ぶことが流行してゐるので、普通に記憶されてゐるのは矢張りクリスト教名てある。

『或る夕方、彼女は薄着で長椅子に横になつて讀書してゐました。私はその傍に寢てゐて、裾の方にくゞらせて吳れと云つたのです。彼女は誰にも云はないやうにといつて承知したので、私は脚の方へもぐつたのです。その時私は非常に奇異に感じたのでした。それからといふものは私は婦人のからだを見たいといふ烈しい好奇心に襲はれて苦しみました。私はこの家庭教師が入浴しにくるのを湯殿で待ち兼ねてゐて、强い興奮を感じたことを記憶してゐます（當時私は家庭教師や姉妹などと一緒に入浴することを許されてゐました）。六歲頃からは色々な事を覺えてゐます。その頃私の家では又一人の

家庭敎師がゐて、これも若くて美しい人でした。この人は臀部に腫物が出來てゐて、夜になるとその腫物を出して見せる癖があつたのです。私はそれを好奇心で待つてゐました。入浴する時も以前の家庭敎師と同じやうでした。ですがリナ孃（後の家庭敎師）は前の家庭敎師よりも內氣でした（余が此の時發した質問に答へて）平常私は彼女の室では寢ません で、大抵は兩親の室で寢ました。私が七歲の時に起つた出來事を記憶してゐます（この出來事は實はその一年後に起つた事を、後になつて患者は了解した）。私達卽ち家庭敎師と女中と又一人の女中と私と、それから私より一年半下の弟などが一緖に或る晚一室で坐つてゐました。若い婦人たちは喋舌つてゐましたが、突然リナ孃が『小さい子供なら夫れは出來るけれどポール（私の名です）は無器用だからきつと駄目です』と云つたのに私は氣が付きました。何の意味だか私には分らなかつたが、併し私が侮辱されたやうな氣がしたので泣き出したのです。するとリナ孃は私を慰めて吳れて、一人の娘の話をして吳れました。その娘は、自分が監督してゐた小さい子供と何かしてゐた爲めに、數ヶ月間牢屋に入つたといふ事でした。私はリナ孃が實際自分で惡いことをしたと信じなかつたのです。むしろ私の方から進んで彼女に色々な事を仕懸けたのでした。その室に入つたりからだに觸れたりしたが拒絕されなかつたのです。彼女は非常に怜悧で明かに性的願望を持つてゐました。二十三歲で旣に子供が出來て、其後間もなく其の子供の父と

婚姻してホーフラート夫人となつてゐます（墺太利のホーフラートとは著名な醫師、法律家、大學教授、官吏等に授けらるゝ肩書である）。現に私は街を歩いてゐて時々彼女に逢ふことがあります。』

『私は六歳の時にもう Elektion を感じたのです。が、一度も自分の母に知らせなかつたのです。その頃私は斯ういふ時に或る疑惑を解かうとしたのでした。といふのはこの問題と私の考へや好奇心との間に何か關係があるらしく感じたからです。猶この頃私の兩親は私の考へてゐる事を分つてゐるのだといふ一種の病的觀念を私は持つたのです。私はこの事を兩親に大きな聲で知らしたのですが、私には自分のその聲が少しも聞えずに仕舞つたといふ空想でこれを説明しました。これは病氣の初めだらうと思ふのです。當時私は婦人といふものゝ魅力に打たれて、この人達の裸體を見たいといふ強い願望を持つてゐました。然しそんな願望などを持つてゐると、何か氣味悪い出來事でも起りはしないかといふ氣がしてゐました。ですから私はそんな考へが起らぬやうに極力防がうと思つたのです。』

余はこゝで一問を出したら、彼は恐怖の例を擧げて答へた。『例へば私の父親が死ぬのではないかといふやうな氣味悪さです。父親が死ぬのではないかといふ考へは、非常に前から永い間私の心にいつぱいになつてゐるのです。これには一番苦しめられてゐます。』

この話の處に來て、余はこの患者の強迫恐怖の的になつたといふ父親は既に數年前に死亡したもの

だと聞いて驚いたのである。

この患者の六七歳時代に起つた出來事、即ち患者が治療の初めに於て叙述したことは、彼が信じてゐる通りその病氣の初めではなくて、現に病氣そのものだつた。この病狀は立派な强迫神經症であつた。神經症として缺けた點は少しもなくて、今後の症狀の種子であり原型であつた。この原型によつて其後の複雜してきた構成が明瞭になつたのだ。この幼年時代の症狀は、前述の如く性的本能の部分要素即ち愉視症(B)(愉視本能)に支配されて、それが爲めに自分の好きな女性に對して熱烈な愉視的な願望が間斷なく起つたのである。この影響はその後に起つた强迫觀念に相當してゐるもので、それまでは强迫性は帶びてなかつた。何故ならば其頃の自我は愉視することに對して干渉もせず反對もせず、何等關係のないものと見做してゐたからだ。然しこの願望に對して反對の態度は、何處かの叢淵から活動しかけてゐて、それが起る時には何時でも煩悶してゐた(二)。即ちこの幼年色魔の心中には爭闘のあることが明かに示されてゐたのだ。つまり强迫願望と一緒に、强迫恐怖が密接に結合してゐた。といふのは彼が斯樣な願望を起す度每に、何か氣味惡き事件が起りはせぬかといふ恐怖が附き纒つてゐたのだ。この恐るべきものといふのは、疾うから彼の優柔不斷の性格で蔽はれてゐたのだ。この性格は後になつて一般神經症の必然的な症狀として示されるものなのである。併しながら子供の斯ういふ優柔不

斷の性質の裏面に、何が隱されてあるかといふ事を觀破するのは困難なことではない。患者（强迫神經症）に對して、漠然とした抽象的な考へでなくて、具體的な例を擧げさせて云はせるなら、それは本源的で且つ實際的の出來事だといふ事が確言し得る。この本源的の出來事は常に抽象的な考への裏面に隱れようとしてゐるのだ。だから我々のこの患者の强迫恐怖は、それを本源的の意味に註釋すると次のやうな意味になるのだ。『私が一婦人の裸體になる處を見ようと願望するならば、私の父は死なねばならぬ。』この苦悶は氣味惡さと迷信的の色彩とが加味されてゐて、脅威されてゐる惡事を防がむとする衝動の先驅なのであつた。この衝動は後に至つて患者が取り入れた防禦手段になつたのである。

【註】（一）然し煩悶といふ事を考慮せずして强迫症を說明せむとした企てもあつた。

斯くて我々は次のことを發見した。それは卽ち性慾、それに對する嫌惡、未だ强迫性を帶びるに至らざる願望、それに對する爭鬪、その結果として生じた强迫性を帶びた恐怖、苦悶及び防禦行動を遂行すべく餘儀なくされる事等である。强迫神經症の目錄はこれで完全になつた譯だが、猶これ以外に認められるものに妄想構成或は譫妄 Delirium などがある。この譫妄といふのは『自身が高聲で呼んだのだから、兩親は自分の考へてゐる事を承知はしてゐる筈だ。然し自分には自分の叫んだ聲が聞え

なかつた』といふ奇妙な內容を持つたものである。子供がこんな不思議なる精神作用に類似したものを持つてゐるといふ事は、前述のことに當嵌めてみればよく分るのだ。このやうな精神作用は無意識の作用だとして述べてゐるが、こんな漠然たる問題に科學的の解釋が附けられるのだから省くことは出來ない。『私は自分の考へを高聲で述べるのだが私には聞えない』といふ事は、この患者は自分の考慮を全然知らないで、その考慮を働かせたといふ我々の所謂外界投出 Projektion のやうに思はれる。それは抑壓されてゐたものを精神の中で知覺したのであらう。

何故かといへば、この子供の初期の神經症は、成熟者の複雜した神經症と同じく一見荒唐無稽なものであることは分る。子供が斯樣な淫猥な願望を持つ時は、その父親は死なねばならないといふ子供の觀念は何ういふ意味であらうか。單に莫迦々々しい事だといつて看過すべきであるか。又はこの言葉を解釋して、それは早期時代に經驗した出來事又は前提の必然的の結果だと見做せる手段があるだらうか。

他の方面で爲された研究の智識をこの子供の神經症に適用してみると、他の場合と同じやうに、この子供は六歲にならないうちから既に心中に葛藤が起つて、抑壓作用を作つたのだらうといふ疑問を持たざるを得ない。この葛藤と抑壓とは、其の後健忘にかゝつて仕舞つて、その結果殘渣としてこの

强迫恐怖といふ特殊な内容を殘すやうになつたのである。後章に於て、余はこの忘却された經驗を患者に追憶させて、何の程度まで再現させる事が出來るかを述べて見よう。こゝには患者の嬰兒時代の健忘が恰度六歲の時まで續いたといふ事に注意をしなければならぬ。これは恐らく偶然のことではないだらう。

斯くの如く子供時代に發する慢性强迫神經症が、氣味惡さの豫感と又それを防禦しようとする行動とで現はれたといふのは、余に取つて珍らしい事ではなかつた。まだ他に澤山の例があるが、この例は極めて典型的であつた。然しこの症狀が唯一の型だといふのではない。第二回の分析中に起つた出來事をいふ前に、余は患者の早期の性的經驗の問題に就て二三の語を加へようと思ふ。この經驗は經驗そのものが重大であるばかりでなく、其後に及ぼした結果も亦重大であつたのである。然し余が或る機會に於て分析した强迫神經症の例も、この點については略類似してゐたことを云つて置きたい。又强迫症狀はヒステリー症狀とは違つて、常に性的活動が早熟だといふ特質を持つてゐる。そしてヒステリーに比べると、症狀を構成してゐる要素が患者の幼稚時代の性的生活に存在してゐて、現在の性的生活の中には存在してゐない事が明白になつてゐる。猶ほ强迫症患者の現在の生活狀態は、一見しては普通の健康人とは全然異つてゐないやうに見えるのが多い。そしてこゝに出した例よりも、病

的要素や異狀さが極めて僅少なものと見えるのが普通である。

（註）（A）　呼んだキリスト名が男名だつたことは即ち同性愛の傾向を持つてゐた所以だとの意。（譯者）

（B）　愉視症 Scoptophilia は俗にいふ覗き症でそれによつて一部の性的願望を充すのである。（同）

（c）大強迫恐怖

（患者の言葉）『私が今日あなたの處に治療を受けに來ようと決心したに就いては、直接の原因があるのです。私は以前には色々な種類の强迫觀念で惱まされ苦しまされてゐたのですが、これが大演習に行つてゐるうちに全くカラリと直つたのです。私は將校達に自分のやうな人間は色んな事を學び得るばかりでなく、色んな事に持耐力を持つてゐることを見せてやりました。或日私達が其處から短距離の行軍をやつた時、休憩中に私は鼻眼鏡を紛失しました。探せば分るとは知つてゐたのですが、出發に遲れるのを氣遣つて探さずに行つたのです。先方に到着してからヴィーン市のかゝりつけの眼科醫に電報を出して、次便で代りの眼鏡を送つて呉れるやうに賴みました。眼鏡を紛失した時、私は二

人の將校の間に坐つてゐました。その中の一人はチェック・スロバキア人の名前の大尉で、私にとつては重要な關係者となつてゐます。私にはこの大尉が何となく恐ろしかつたのです。といふわけは、大尉は殘忍なことが好きだつたからです。私は彼を惡人だとは思ひませんでしたが、將校食堂で食事中に彼は體刑の採用の必要を繰返して主張したので、私はそれに對してひどい激論をしたことがあります。それで、その休憩中に話し合つた時も、大尉は體刑の書物の話を私にしてくれました。それは東部の某地でやつてゐるといふ特に殘忍な體刑の話でした。』

こゝまで語つて患者は椅子から立上り、この精しい話を喋らせて吳れろと懇願した。そこで余は、自分は殘忍な事は好まないと云ひ、彼を强ひて苦しめようとは思はないが、自分の力に及ばないものは與へることが出來ないと告げてやつた。余の力の及ばぬ事を行ふは、月を採つて與へるやうなものである。然し精神分析の治療の規則として、抵抗に打勝つには或る問題に就ての考慮を省くわけには行かぬ（余は治療の開始に當つて彼に抵抗の意味を說明してやつた。すると患者は自分の裡にも抵抗があるかも知れないと答へた。そこで若し彼が自身のこの經驗を精細に物語るなら、その抵抗を打破ることが出來るのだと說明してやつた）。然し余は彼から與へられた暗示の意味を察知せむが爲めには、あらゆる努力を惜しまないことをいつてやつた。恐らく彼は杙刺し（くひざし）の刑（肛門より棒を入れて突

き刺す刑）のことを考へてゐたのではないかと余は思つた。『いゝえ、處刑者は縛られたのです』かう云つた最後の言葉は、如何やうに縛られたか分らぬ曖昧な言葉だつた。彼の臀部に鍋が被ぶさつて其の中に鼠が這入り込んだ。それから……患者は此處で言葉を切つて、非常な恐ろしさを感じたらしい表情を示し、一方には又抵抗の様子を示した。そこで余は『鼠が肛門に這入つたのだらう』と云つてやつた。

患者はこの話の間、重要な話題になる度毎に非常に奇妙な複雑な表情をした。余はこの表情は、彼がまだ自覺してゐない自身の快感に對して抱いた一つの恐怖のためだ、と註釋することが出來た。彼は物を云ふに極めて困難な様子で更に語を續けた。『その時私は、この出來事は自分に非常に親しい人に起つてゐる事だなといふ觀念が私の心に浮んだのです（一）。』そこで余は單刀直入に質問を發した。それに對して彼は、この處刑を執行した人は彼自身ではなかつた事、そして全然彼には無關心のやうに決行されたことを答へた。色々に患者を勵ましてから漸く彼の云つた『觀念』といふ語に關係のある人物が、彼の愛してゐる婦人であつたことを知り得たのだ。

【註】（一）彼が『觀念』といつた事は、この語より更に強く且つ意味の多い願望（むしろ恐怖）が明かに檢閱の下に處せられた事を顯はしてゐる。余は彼が奇妙な優柔不斷さて語つた總ての言葉を不幸にも書き現

はせない。

彼はこゝで物語を止めて、こんな考へは彼には全然無關係なもので、嫌惡を催す如きものだと云つた。そしてこんな考への連鎖が連續して出て來るのは、非常な速力で彼の心中に閃いて來るのだと云つた。こんな觀念が心中に起る時には、一種の呪文のやうな『潔め』といふ氣持が一緒に起つて來て、彼の瞑想が充たされさうになると、それを防がうとする防禦行動となつて現はれるのであつた。彼は更に語を次いで、大尉からこの恐るべき處刑の物語を聞いて、これらの觀念が腦裏に浮んだ時、彼はいつもの呪文を使つてこの二つの觀念を拂去ることが出來たといつた。(この呪文といふのは否定の身振りを加味した『併し』といふ意味と『お前は何んな事を考へてゐるのか』といふ意味とであつた。)余は患者がこゝで云つた『二つの觀念』と云ふ事に就いて合點が出來なかつた。恐らく讀者にもこの譯は分らなかつたであらう。患者が觀念といつたのは唯一度だけで、鼠の處刑を受けた婦人の話のところで云つたのみだつた。だから余はこの觀念と同時に起つた第二の觀念を餘儀なく認容しなければならなくなつた。考へてみるとそれは處刑の觀念が又彼の父にも當嵌められることだつた。さうすると彼の父は數年前に死去してゐるので、この方の强迫恐怖は第一の觀念よりも更に莫迦らしさが多いわけだつた。だから彼はそれを告白しまいとして暫時あせつたのであつた。

彼は更に語を次いで、その晩大尉から彼は小包郵便を渡されて『(一)A中尉がこの代價(二)を拂つたのだ。君はその代價を返濟しなければならないぞ』と云はれた。その小包は患者が電報で註文した鼻眼鏡であつた。處がこの瞬間に彼の心中では或る御裁可が出てゐた。何かと云へば、彼はこの返濟をしてはならない。若しそれをすると何か不吉なことが起るぞ（即ち鼠の瞑想が彼の父や彼の崇敬した婦人に對して實現される）といふ氣持ちだつた。處が間もなく慣用手段が初まつて、この御裁可を打消さうとする命令が誓ひといふ形式で現はれて來た。(A)その命令とは『汝はA中尉に 3.80 クラウンを返濟せねばならぬぞ』といふのだ。彼はこの言葉を口のなかで獨語したのだ。

【註】(一) 名前は此處では關係のないことゆゑA中尉とした。

(二) この代價は新しい眼鏡の引換郵便物の代金である。

演習終了後二日間を彼はA中尉に立換金を返濟せんが爲めに消費したが、色々な外部かららしい事情の爲めに、次ぎ次ぎに障害が起つて妨げられた。それは第一に、彼は郵便局に用足しに行く將校に賴んで返濟して貰はうとしたが、この將校はA中尉に逢はなかつたと云つて金を戾して呉れた。それで彼は安堵した。なぜ安堵したかと云へば、彼がこの誓ひを果さうとする行爲は、返濟してはならぬといふ御裁可に悖るからだ。第二に彼は探してゐたA中尉に逢つたが、A中尉は拂つた覺えがないと

稱して金を受取らなかつた。この中尉は郵便に就いては何事も知らない、それはB中尉がやつた事だと云つた。この話には患者も殆んど當惑してしまつた。誓ひを果すことが出來なくなつて仕舞つたからだ。が、これで見るとこの誓ひは全く間違つた根柢から立てられたものだつた。患者は當惑したあげくに奇妙な手段を考へ出した。それは何だと云ふと、AB兩中尉と一緒に郵便局に行つて、A中尉は其處にゐる若い婦人に3.80クラウンを與へ、この若い婦人はその金を更にB中尉に與へる。つまりこれで患者は3.80クラウンをA中尉とB中尉とに支拂ふことになる。かうすれば誓ひの言葉に合致させることが出來るといふ事だつた。

この點に就いて、讀者は最早こんな順序をこれ以上聞かうとしないだらうとは勿論余も承知してる。何といつてもこの精細な物語りやそれに對する患者のやり方は矛盾だらけで、全く閉口する事だからだ。彼は繰返してこの話をしてゐたが、四回目に至つて余は初めてこの茫漠たる物語の意味を認めて、その中から彼の記憶の錯誤や轉位作用などを發く事が出來たのだつた。余は今此處にこれらの精細なることを叙述する手數を避けたい。いづれこの本質は後になつて明瞭になることだ。余は唯ここで患者が二回目の分析の終りに、まるで心が極度に錯亂して迷つたやうな振舞ひをしたといふ事を申して置きたい。彼は何遍も繰返していいいいいいいいいい余のことを大尉と呼んだ。思ふに、これは分析の最初に余はM

大尉の如き殘忍な事は好まないと云ひ、且つ余は無益に彼を苦しめるといふ意向は持たないと云つた爲であらう。

第三回目の分析中に彼から得た唯一の情報は、彼の愛人に何事かの災難が惹起されむといふ恐れを、每回の分析中に持つてゐたといふことであつた。これは最初から現在までの分析中にいつも起つてゐた事だつた。彼は罪に對する膺懲は現世のみならず未來永劫までも續くのではないかといふ考へを起してゐた。彼は十四五歲の頃までは熱心なる宗教信者であつたが、其後漸次無宗教者となつて現在に至つた。彼は自分の信仰と强迫觀念との矛盾を考へて、それを妥協させる爲めに次のやうな質問を自身に起した。『お前は來世に就いて何んな事が分つてゐるのだ。何も分つてゐないではないか。だから何をしたつて恐るゝことはないぞ。大いにやるべしだ。』こんな論法は、强迫症を除いては明晰な頭腦の持主なる彼に取つて、何等の障害にはならなかつたらう。こんな譯で、彼は宗教的態度から利益を得るやうな問題に直面した時でも、自分自身を無理に押しつけて、何等利益の理由もない問題だといつて放棄したのであつた。

第三回目の分析中、患者は自分の强迫症的の誓ひを果さうとして、彼獨特の努力をした物語を話し終へた。演習の終る前夜、將校の最後の會食が催された時、患者は食事中に答辭を述べねばならなか

つた。それは『豫備軍隊の諸君』に對してのべられた健康の祝辭に答へるものだつた。答辭はうまく出來た。彼は恰も夢心地であつたが、その心の裏面には絕えず例の誓ひで苦しめられてゐた。其の夜は煩悶で送つた。腦裏に一つの議論が出ると又それに反對論が出て始終往來してゐた。この論點の主となつたものは、勿論彼が例の誓の基礎として採つた前提が即ちA中尉が彼の爲めに代金を拂つたといふ事が間違ひだつたといふ事であつた。處がまだ彼は、A中尉が翌朝彼と共にP市の鐵道驛に乘馬で行く事になつてゐるから、事件は終つたのではないといふ考へを起して煩悶を慰めてゐた。そこで彼はこの機會を利用して例の誓ひを果さうとしてゐた。然るに其の機會が來たにも拘らずそれを果さうとはせずに、A中尉に先に行つて貰ひ、自分はその後から從卒を使ひに出して、午後A中尉を訪問するからと云つてやつたのである。彼は午前九時に驛に行き、驛に荷物をあづけ、そこの小さな町で種々の用事を足し、午後になつてA中尉を訪問しようと計畫を立てた。當時A中尉はP市から約一時間位かゝる一村に居た。問題の郵便局の所在地までは汽車で猶三時間かゝるのだ。それ故彼はこの複雜した旅程の案を遂行するとすると、P市からヴィーンまで夜行列車に乘られると思つてゐた。彼の心中に爭鬪を起してゐた觀念は、自分は卑怯であり、又この代金をAに受取らせるやうにAを强要する不快さ及びAから自分のこんな態度を笑はれるだらうと思ふ不快さから逃れようとすることであつ

た事は明かだつた。そしてこの考へは、何故に彼が誓ひを無視せむとしたかの理由であつた。同時に又一方は彼が此の誓ひを果すといふことも卑怯なことだと考へた。それは彼が强迫症狀のために擾亂された平和を、再び得ようと欲してゐることだと解釋したからだ。患者は更に附け加へて云つた。彼は考へが何れとも決定しない場合には、たま〳〵出逢つた事柄を恰も神の手によつて定められた出來事として、それによつて彼の行動を決定するといふ習癖を持つてゐた。だから停車場で赤帽から『十時の列車で行きますか』と訊かれた時に彼は『然り』と答へた。そしてその言葉通り十時の汽車で出發したのだ。こんな風に彼は運命に基く事なら心を安んずる事が出來た。彼は食堂車の晝食の座席を申込まうと考へてゐた。次の驛で列車は停車した。處が彼は突然こんな考へを起した。此處で下車して次の下り列車に乘込めばP市に戻るにはたつぷり時間がある。P市にはA中尉が居るし、其處から汽車で三時間すれば例の郵便局へ行けると考へた。處が又折角のこの考案の邪魔をしたものがあつた。それは晝食の座席を申込んで置いた食堂車の給仕に對して取消をいふ遠慮であつた。だが彼はその考案はまだ放棄したのではなく、次の驛に再び停車するまで延ばしたのであつた。こんな調子で彼は次驛より次驛へと行く間に心を惱まし、遂に下車することが出來ない驛に來て仕舞つた。下車できないといふ理由は彼の親戚が其處に住んでゐたからだつた。たうとう彼はその儘直行してヴィーンに

行き、其處で友人に逢つてこの問題の處決を依賴して解決をつけて貰つてから、夜行でP市に赴かうと決心したのである。余はこの點に對して果して出來ることかと疑つた。これに對して彼は自分の汽車が到着して今度他の列車が出るまでは半時間の餘裕があると答へた。併し乍ら彼がヴィーンに到着して、友人と面會せむとして飲食店に行つた時に友人は居なかつた。それで十一時過ぎに漸く友人の家に着いたのだつた。彼は其夜友人に逢つて今迄の一部始終を話したのである。友人は彼の樣子を見て何うも强迫症になつてゐはせぬかと疑はざるを得ないので、驚き乍ら手を擧げたのであつた。だがその夜彼は慰められて熟睡する事が出來た。翌朝患者はこの友人に伴はれて 3.80 クラウンを某郵便局に送金せんが爲めに出掛けたのだつた。某郵便局とは眼鏡の小包が着いた局である。

この最後の敍述の中から、余は患者の物語中に示された種々な歪んだ行爲を整理する端緒を發見することが出來た。患者はこの友人から慰められて常識が恢復して來た後、例の少額の金子をA中尉やB中尉に送らずに直接郵便局に送つたのである。これで彼は小包の代金は誰に借りたものではなく郵便局の事務員に借りただけだといふことを悟つたのである。併しこの事は彼は汽車旅行に出發する前に知つてゐた筈である。實際は大尉がAに支拂へと云つたり又彼が自分で例の誓をした以前に知つてゐた事は分つてゐたのである。何故なら彼はあの殘忍な大尉に逢ふ二三時間前に、もう一人の大尉に

自分を紹介した。その時その大尉からこの事柄の眞相を聞いたのである。この大尉は患者の名を聞いた時に、郵便局の話を思ひ出したので、彼に聞かせた。少し前に郵便局に行つたら其處に若い婦人がゐて彼にH中尉(患者の名)を知つてゐるかと訊ねた。H中尉に小包が屆いてゐるから配達した時に代金を拂ふやうにと云はれたが、この大尉はそんな人は知らぬと返答した。併しこの若い婦人はこの未知の中尉を信用して立換へて置かうと云つたのだ。患者の手に眼鏡の小包が入るやうになつたのは斯樣な行きさつがあつたからであつた。殘忍な大尉が患者にこの小包を渡した時に、間違つてA中尉に3.80クラウンを支拂へといつたのだ。その時患者はそれは間違ひだとは知つた筈である。それにも拘らず彼はこの間違ひに基いた誓を立て、そして自ら苦しむ事になつたのである。この誓ひを立てるに就いては、彼は或物を禁壓したのだ。それは恰度余に對して患者がこれを物語るのを禁壓した如くに、他の大尉と自分を信用して呉れた郵便局の若い婦人とを抑壓したのである。この連鎖が整へられた時に、彼の態度は以前よりも更に無意味に混亂して來た。

彼はその友人の許から歸宅した時には、疑惑の心は更に昂まつて來た。友人から說得された事は、自身の考へてゐた事と毫も異なつてはゐない事を知つた。友人から得た一時的の慰安は、友人の人格から影響されたものだといふ事を確信した。彼が醫師の診斷を受けようと決心したのは、次の如き巧

妙なる方法で彼の妄覺の中に織込まれてゐた。彼は自分の健康を恢復せむが爲めに、A中尉に對して考へたやうな行動をなす事は必要であるといふ證明書を醫師から貰はうと思つた。さうすれば、A中尉は患者から3.80 クラウンを受取ることを承諾しない譯には行くまいと考へたのである。余の著書の一册が彼の手に入つて、而して余の診察を受けむと決心したのは此の時であつた。余から證明書を得むとすることは問題ではない。要するに余に要求する總てのことは、彼の强迫症狀より逃れさせて貰ふことであつたらう。數ヶ月の後に、彼の抵抗が極めて高くあらはれた時、彼は再び兎も角もP市に旅立ちしてA中尉を探し、彼に金を返濟する場面を演じようとする强迫を感じて止まなかつたのである。

(註)(A)「御裁可」といひ「誓ひ」といふは、何れも彼の心中に强迫的に湧き上つてくる觀念で、それに使驅されずには居られないものである。兩者は互ひに相反する働きを示してゐる。(譯者)

(d) 治療に誘導すること

讀者はこれより直ちに余が鼠に關する患者の奇なる、且つ無意味なる强迫症狀を明かにするだらう

と期待してはいけない。精神分析の眞の技巧は、分析者は先づ好奇心を禁壓せねばならぬことである。それ故四回目の分析の時に余は次の如き言葉で患者を迎へた。『今日は何んな事から始めようか』患者は答へて『私は今日は最も重要と思ふもので、初めから自分を苦しめたものをお話します。』そして彼は九年前に死んだ父の最後の病症に就いて永々と物語つた。或る夕、病症が危篤に近づいたと思つた時に、彼は危險は超えただらうかと醫師に訊ねた。醫師は『明後日の晩』と答へた。然し彼の腦裏には明後日より生きないなどとは思はれなかつた。彼は其の夜十一時半に一時間程眠りに就いた。午前一時に目を醒ました時、友人なる醫師から父の死んだことが報ぜられた。彼は父の臨終に居なかつた事について自ら呵責の念に堪へられなかつた。重態になつた時に病父が彼の名を呼んだと看護婦から聞いた時、彼は益々この呵責を強く感じた。看護婦の話では、看護婦が病床に近寄つて行つた時に、病人は『そこに來たのはボールか』といつたといふ。患者は自分が自己呵責に苦しめられるやうに、彼の母や姉妹等も亦同じく自己呵責に苦しんでゐるやうに見えた。然し彼はこれについて何事も云はなかつた。初めのうちは呵責の念は餘計ではなかつた。暫くの間は父が死んだとは思へなかつた。何か面白い戲談を聞いた時には、父に話してやらなければいけないと思つた。彼の空想は父に關係ある事ばかりで

あつて、例へば戸をノックする者があると、や、父が來たなと思つたり、或は室に入らうとする時は父が居はせぬかといふ氣持ちがあつた。父の死んだ事は決して忘れてはゐないのだが、こんな幻影を見るのだと思つてゐた。が、毫も恐怖は感ぜず、寧ろ幻影を見たいといふ慾望が強かつた。彼が臨終に逢はなかつた怠慢を思ひ當つたのは父の死後十八ヶ月後であつた。この怠慢感は繰返し起つて非常に彼を苦しめ、遂に自身を罪人扱ひにするやうになつた。これが起つたのは結婚した叔母が死んだので、彼がその家を弔問した時であつた。爾來彼の強迫觀念の構成分子として死後の世界が含まれるやうになつた。斯樣な強迫症狀の展開してゆく直接の結果、彼は甚だしく仕事の能力が削減された(一)。

【註】(一) 患者が其後告げたこの出來事の精細によつて、余は彼の受けた印象を理解することが出來た。彼の叔父は妻の死を悲しんで、次のやうに叫んだ。『ほかの男たちはあらゆる遊蕩をしたんだが、自分は唯この女の爲めにのみ生きてゐたんだつた。』この叔父の言葉を彼は自分の父の事を云つたものだと解して、父の夫婦關係が誠實であつたかを疑ひ出した。そこで叔父は、自分の言葉は決してそんな意味を含んでゐない事を極力説明したのであつたが、彼は自分の受けたこの影響を打消すことが出來なかつた。

此時この患者の自暴自棄にならむとするのを防いだ唯一のものは、友人から與へられた慰めであつた。この友人は患者の自己呵責心が實際よりも非常に誇張されたものだと說いて、その呵責心を掛除

けようとしたのだつた。此處に於て余は彼に精神分析の治療の原則をかいつまんで說いてやつた。そして說得してやつた。感情とその感情の內容である觀念とが連合してゐる時（この場合では自己呵責とその自己呵責を起した出來事）素人はこの出來事に對して感情が大き過ぎる、卽ち誇張されてゐると稱し、その結果として自己呵責を齎すといふ推論は（卽ち患者は罪人であるといふ推論は）誤つてゐると思ふであらう。が、これに對して分析者はかう云ふ。『いや、さうではない。感情は正しいものだ。罪惡感そのものは排除すべきではない。それは他の內容に屬するものであつて、自覺することの出來ない無意識のものであるから、これは探し出さなければならぬものだ。既に知られた、自覺できる內容の觀念は、間違つた連合をなして、本當の場所に侵入して來たゞけである。我々は內容の觀念なしには大なる感情を有する筈はない。それ故もし內容の觀念が缺けてゐる時には、この場所に適した他の內容觀念をその代りに取入れるのである。これは恰も警官が眞の犯人を捕へられなかつた時には、その代りに誤つて無垢の人を捕縛するのと同じである。斯樣に間違つた連合が存在してゐるといふ事實によつて、我々は苦痛の觀念を除去するに當り、理窟の力では全然駄目だといふことを初めて諒解できる。余はこの問題に關して、この新しい見地を容認するならば、直ちに難解なる問題に逢着するだらうと患者に云つた。何故ならば患者は實際に父に對して罪惡を犯してゐないといふことを知

つてゐるにも拘はらず、父に對する犯罪行爲の自己呵責を感じるのは、如何にして容認されるであらうか。

次回に於て患者は、余の先に述べた事に非常な興味を感じたが、二三の疑問が生じたと言つた。それは、自己呵責の念卽ち自分が罪人であるといふ觀念は正しいものであるといふ事を教へられたが、それで治療的效果があるといふのは何うといふ理由かといふ事だつた。それに對して余は、治療的效果があるといふのは、その觀念を知らせる事ではなくて、自己呵責の觀念が實際に結び付いてゐる所の無意識の內容を發見する事だと說明した。患者は自らの質問は恰度この點に向けられてゐたのだと言つた。

余はそれから無意識と意識との心理的差異に就て二三の短い說明をあたへ、又意識してゐる物は何でも時を經るに從つて磨滅するものであるが、無意識のものは比較的に不變であるといふ事實を話した。そして余の室內にある古器物を例に上げて說明して次のやうに言つた。『此等の古器物は實際に或る墓の中から、そればかり殘つて居たのを、發見したものである。埋沒せられて、保存せられてゐたのである。ボンペイの滅亡は發掘されなかつたらその儘であつたらうが、發掘されてから漸く始まつたのである』と。次に患者は、發見されたものに對して人はどんな態度を持つか、その證據としては

何があるかと訊いた。或者は確かに自己呵責の念に打ち克つだけの態度を持つだらうし、又或者はさうでは無からうと患者は思つて居たのだ。余は否と答へて言つた。その事情の性質の如何なる場合であつても、分析の進行中には、感情の大部分は操縦を受けてゐるものである。(八)ポンペイを保存する爲めにあらゆる努力は拂はれた。併し人々は其の一方に於て此の患者の有してゐると同樣の呵責の念から逃れようとあせつて居たのであると。患者は、自己呵責の念といふものは、人自身の心の中の道德的主義法則に違背した事に依てのみ發生するもので、決して外側の原因から生ずるものでないと考へてゐたと言つた。余も亦それには同感の意を表示し、更に人は單に外的の法則を破つた時には、動もすれば自からを英雄と見なす事があるものだと話した。患者は、斯かる事はすでに人格分裂が行はれてゐる時に於てのみ有り得る事だと言つた。そして斯くの如き人は、人格の復歸を成就する事が出來るであらうか、出來るとすれば、その人は人生に成功を齎す事が出來るだらうし、否、恐らくは大概の人々よりも更に大なる成功を成し遂げる事が出來るであらうと言つた。余は患者の此の人格分裂の考へには全く同感である事を答へた。患者はこの新しい對比、即ち道德的自己と、惡自己との對比を余が既に擧げたる意識と無意識との對比に一致せしめさへすればよいのである。道德的自己は意識的であり、惡自己は無意識的である(二)。患者の言ふ所によると、患者は自己を道德的人間だと考へてゐる

たのであるが、子供の時には道德的自己でない。もう一方の自己から出た行爲を爲した事があつた事を、可成り確かに記憶して居た。余は患者に言つた。患者は此の時恰度、無意識の主なる特性の一つ卽ち無意識と子供との關係に偶然にも言及して來たのである、と。そして更に次の如く說明をした。無意識は子供であつた。それは自己の一部であり、幼年時代に於て自己から分離し、其の後の自己發展の段階には與らず、その結果として抑制されて居たものである。此の患者の病症構成を作つた無意識的の考への責任を負ふべきものは、此の抑制された無意識に由來してゐるものなのである。余は更に語をついで、今度は無意識の特性をもう一つ發見する事が出來るだらう。これは自分一人で發見出來たら、大變結構なのだがと言つた。患者はこれに對して直接關聯した事ではもう何も話す事は無いが、その代りこんなに長い間持續して來た變調を改める事が出來るかどうか疑問だと言つた。殊に、來世に就いて自分が考へて居る觀念は、論理を以て反駁する事は不可能であるから、如何にして消滅させる事が出來ようかと言つた。余は彼に話して、自分は今、彼の病症の重態な事や彼の病症の構成の意味などについて論じてゐるのではない。併し彼の年の若い事や、人物の率直なる事が、彼には非常に好都合であると云つてやり、猶これに就いて自分は彼に對して好意を持つてゐる事を話した所、彼は大いに喜んだ樣子であつた。

【註】（一）これはすべて極めて大ざつぱに考へて眞實な事である。併し此の事が此の問題の第一門なのである。

次回に彼が余の許に來た時、この患者は先づ、少年時代に起つた或る事を語り始めた。彼は前にも話した通り、七歳の頃から、彼の兩親が彼の思つてゐる事を推量して知つてゐはしまいかといふ心配を持つて居た。そして實際に此の恐怖は彼の生涯中に執着く附きまとつて居たのだつた。十二歳の時彼は友人の妹である一少女を戀するやうになつた。（彼は余の質問に答へて、彼の戀は性的のものではなかつた。彼はその少女の裸體を見たいといふ欲望などは持たなかつた。何故ならその少女は餘り小さかつたからであつたと云つた。）併しこの少女は彼が望んで居た程に彼に對して愛情を示して吳れなかつた。それで彼は、若しも自分の身に何事か不幸が起つたなら、さうしたら彼女は自分に優しくしてくれるだらうと考へ出した。その不幸といふのは、例へば彼の父が死んだならなどといふ考へが彼の心中に迫つてきた。彼は直ちにその考へを非常な努力を以て追ひ拂つた。こんな譯で今でさへも彼は心の中に起つた考へを慾望だなどと見做す事は出來ないのであつた。それは慾望ではなくて、明らかに思考の一聯絡に過ぎないものだと言つてゐた（二）余は之に反對して、彼に斯う訊ねた。それが慾望でないなら何故彼はそれを否認し拒絕したのかと。患者はそれは單にその觀念の內容、即ち父が死ぬかも知れないといふ考への爲めであると答へた。彼はこの言葉を恰も不敬罪に問はれる場合のや

うに考へた。不敬罪の場合といふのは、例へば『天皇は阿呆である』と自分が直接云ふ場合でも、或はこの言葉を曲げて、『若し誰かゞ天皇は阿呆であるといふものがあるなら』と他人が云つた言葉のやうにしていふ場合でも、その言葉に對して責任を持たなければならない。こんな間接な言葉を用ひても同樣に不敬罪に處せられねばならないだらうと私は言つて說明した。余は又斯う言ひ足した。彼が斯くも熱心に排斥してゐる觀念を、余は斯かる排斥が不可能である所の文に書きはめる事が出來る。例へば『若しも私の父が死んだなら、私は父の墓前に自殺するであらう』といふやうにと云つた。すると彼は非常に混惑したが、併し余が反對するのを決して止めようとはしなかつた。余は此の『父が死ぬ』といふ觀念は今始まつたものでは無く、もつとずつと以前に其の緒を發したものだから、またいつかその由來を辿つて見ようではないかと言つて、此の議論を打ち切る事にした。彼は次いで、此れと恰度同じ考へが再び浮んだ事があると話し出した。それは恰度彼の父の死の六ヶ月前であつた。この時には彼は旣に戀人を有して居たが、財政上の障碍があつて、結婚が出來ないでゐたのであつた(三)。其の時、彼の心に起つた考へは、若しも父が死んだなら自分らは彼女と結婚する事が出來る位の財産を得るだらうと言ふ事だつた。この考へを拂ひ退ける爲めに、彼は父が何も遺さないでくれゝばよいがと望むほどになつた。さうすれば彼の受ける重大な損失に對して、何の報償も得ないでよい

のであるからと考へた。更にまたこれと同じ考へが三度目に、それはもつとずつと穩やかな形を取つて、恰度父の死ぬ日に彼に浮んで來た。其の時彼は『自分は今一番愛してゐるものを失ふのだ』と思つた。するとその直ぐ次ぎに、今度は斯ういふ矛盾した考へが起つた。『否、然うではない。お前にはもつともつと失つては辛い人があるのだ(三)』と。こんな考へが起つたので彼は非常に驚いた。何故なら、父の死は、彼の願望の目的では決してあり得よう筈はなく、たゞ彼は父の死を怖れてゐたものであると自分みづから信じてゐたからだ。彼がこれ等を熱心に述べた後で、余は彼に新しい一つの學說を示したらよからうと思つた。精神分析の學說に從つて、余は彼に話した。總べて恐怖は現在抑壓されてゐる願望に相當してゐるものだ(B)。それ故吾々は彼が主張した事は、その正反對なのだとして信じなければならない。この事はまたもう一つの學說的要件、即ち無意識は意識の正反對でなければならぬといふ事に當て嵌るものであると敎へた。これを聞いて彼は非常に心をさわがして信じようとしなかつた。彼は自分の父を世界中の何物よりも愛して居たのに、何うしてそんな願望など持てるものか。若し、自分の幸福となるべき物を全部すてゝ仕舞つても、父の生命を救ふ事が出來るといふのなら、必ず然うするのだがと大變不思議に思つてゐた。余は彼に答へて、彼が持つてゐるその樣な强い愛こそ、確かに抑制されてゐる憎惡の條件だと言つた。彼が、好きでも嫌ひでもない無頓着で居る人々に

對した場合には、彼は適度な好感と、同樣に適度な憎惡との傾向を、平行して保つ事が決して困難ではないのである。例へば彼が役人であつたとしたら、自分の上役に對して、長上としては優れた人であるが、同時に法律家としては詭辯家であり、裁判官としては不人情であると考へる事が出來るであらう。シエークスピアはシーザーに就いて、ブルータスをして恰度これと同じ樣な事を言はせてゐる。『シーザーは吾を愛した。故に吾はシーザーの爲めに泣いたのである。シーザーは幸運であつた。故に吾はそれを喜んだのである。シーザーは勇壯であつた。故に吾は彼を尊敬する。彼は併し野心を有してゐた。故に吾は彼を弑したのである』と。併し此の言葉は既に吾々に奇妙な感じを與へてゐる。吾々はシーザーに對するブルータスの感情は、もつと深いものであつたらうと想像して居たからだ。これが若し彼にとつて更に親しい間柄の人の場合だとすると、例へば彼の妻に對する如き場合だつたなら、彼は自分の感情が、何物をも混じられない純なものである事を望んだであらう。從つて彼は、人間として彼女の缺點を見逃すだらう。その缺點は、彼女に對する愛を損ずるかも知れないゆゑ、彼はその缺點に對しては盲目であるかの如く無視するだらう。故に彼の抱いてゐた憎惡が（こんな名稱を用ふるのは此の感情を漫畫扱ひにする嫌ひがあるが）意識される事を妨げてゐるものは、彼の愛情の熱烈さである。きつと此の憎惡には、何等かの根源がなければならぬ。だから其の根源を發

見する事が確かに一問題である。此の患者の述べた所によると、彼の兩親が彼の考へを察知してゐるだらうといふ恐れを彼が抱いて居た時を指してゐる。又一面に於て、余は此の患者に斯う問ふ事が出來る。それは、恰度二つの相反してゐる衝動が存在する時には、何れか一つが勝つものだが、彼の此の熱愛は、何故憎惡を撲滅させることが出來ないのであらうかといふ事だ。憎惡は何かその源泉から流れ出るものであり、そして憎惡を不滅ならしめてゐる或る特殊の原因に結ばれて居るものである。といふ事は吾々が單にそれを假定する事が出來る。斯く考へ來ると、一方に於て、此種の或る聯結が彼の生きてゐる父に對する憎惡を持續せしむると同時に、他方では、患者の强い愛がその憎惡の意識面に表はれて來る事を妨害して居るのである。それ故に此の憎惡感は、單に無意識に存在するのみであつて、時々、ほんの瞬時の間、意識に閃めきかける事が出來るのみである。

【註】（一）强迫症患者は此の種の婉曲辭法に滿足する者のみてはない。
（二）それは恰度十年前であつた。
（三）此處に於て彼の愛の二對象物、即ち父とその婦人との兩者の對立が明らかに示されてゐる。

患者は此の說は可なり肯定できるものだと認めた。併し少しも信じはしなかつたのである。勿論信じないのは當然である（二）、患者は又尋ねた。此の種の考へはどうして時々起つたり薄らいだりするの

であらうか。十二歳の時初めて起り、二十歳の時に再び現はれ、又その後二年經つて後、今度は今に到るまで其の考へが有るのは何うしてであらうかといつた。患者は彼の敵意が或る間隔を置いて消滅するといふ事が信じられなかつた。その期間に於て彼には自責の念が少しも兆さなかつたのである。余はそれに答へて、彼は人から質問を受けるとすぐに答へられる。それゆゑ彼は自分の談話をもつと永く續ける爲めには、人から仕向けられさへすれば宜しいのだと言つた。これには患者は稍合點の行かない樣子であつたが、再び話を始めた。彼は父に取つて最もよき友であつたし、父はまた彼にとつて最もよき友であつた。唯二三の點に就て、此の父と子とは常に相互ひに離反してゐた。(此れは何ういふ意味であらうか？)けれども此の父子の間には、彼と最も親しい友人との親密さよりも、より以上に深い親密さがあつた。彼が先きに話した自分の觀念の話の中に出て來た婦人、即ちその婦人を愛したが爲めに父を輕んじた。その婦人に就いていへば、その婦人を愛してゐたのは實際なのである。要するといつても彼は少年時代に絕えず持つてゐた性的愛を眞實に感じてゐたのではなかつた。要するに彼は青年期よりも少年期に於て、はるかに強い性的衝動を持つてゐたのだつた。此處に於て余は今此の患者は、吾々の期待してゐた答へを出し、且つ同時に無意識の第三特性をも發見したと思ふ旨を告げた。これによつて此の患者のもつた父に對する敵意が、其の不滅性を發した源泉としては、性的

慾望の性質を帶びた何ものかである事は明らかになり、此の點に於て、患者はその父を幾分か妨害物のやうに感じてゐたことが分るのであつた。余は語を繼いで、性慾と小兒的愛との間の爭鬪のうち、此の種のものは代表的なものである。彼が先きに話した、彼の憎惡感が時々薄らぐ事があるといふのは、彼の性慾の早熟な激發が、激發した直後には減少する爲めである。彼の敵意が、古の狀態の復活によつて再び顯はるゝのは、彼が更に又激しい性慾におそはれた時に起るのであると言つた。余は此處に於て、余自身がこの患者を少年時代や性の問題などに導いたのではない、患者自身が、自由意志に依つて此の兩問題に觸れて來たのだといふ事を患者に承認させた。彼は更にたづねて、彼がこの婦人を愛してゐた時に、父の妨害によつて一瞬の間も父に對する愛が壓迫され苦しめられるなどといふ事も、又そんな考へすらも無かつたのは何故だつたかと云つた。余は答へた。不在の人を破壞する事は殆んど出來得ざる事である。斯やうな考へは、彼が否定してゐた慾望(敵意感)が其の時初めて顯はれたものならば、可能であつたかも知れないが、併しその慾望は實際は長い間から抑制されてゐる慾望であつて、その慾望に對しては、彼は以前に爲してゐたと同樣の態度を取るより外は出來なく、從つてその慾望を破壞する事は出來ないのである。此の慾望(卽ち彼の父を妨害物として取り除き度いといふ)はその緖を今よりも事情の大いに異つてゐた時代に發してゐる。卽ち、恐らくは彼が父より

も性的に欲してゐた人を愛してた時代、或は彼がまだ明確な決斷力を持たなかつた時代に發したものであらう。故にそれは彼の極めて幼少の時、即十六歲にも達しなかつた時で、彼の記憶が漸く連續するやうになりかけた時だつたに違ひない。そして其の時以來、同じ樣な狀態が續いて來たに相違ないのだ。斯く余は一片の推定を爲して、これを以て吾々は談話を暫らく中止したのである。

【註】(一) 斯かる議論の目的は確信を作る事では無く、抑壓せられてゐたコンプレクス(結情)を意識にもたらす爲め、またその爭鬪を意識的精神活動の世界に誘導するため、また無意識から新しい精神形式を出す事を容易ならしむる爲めである。確信の感は、患者自からが再現した材料を硏究した後、初めて得らるゝものであつて、患者が全き確信を得ない間はその材料は限りなく有るものと考へられる。

次にこの患者が余の許に來た時、それは恰度七回目に當つてゐたが、彼は再び同じ問題を提出した。そして彼はどうしても、父に對してあんな慾望を抱いたとは信じられないといつた。彼はサドマンの物語りを記憶してゐた。その物語りは彼に非常に深い印象をあたへたのである。それは斯うである。或る婦人が自分の妹の病床に附添うてゐたが、『此の妹が死んで吳れゝばよい。さうしたら妹の夫と自分は結婚出來るのだが』といふ願望を起した。それで此の婦人は、此のやうな卑しい考へをおこした罪によつて生きてゐる事は出來ないと考へて、自殺をはかつたのである。患者は此の話はよく理

解出來ると言つた。もし彼の考へた死に相當するものとしても、それは正しい事だと言つた。何故なら彼は死を受くるに最も相當してゐるからだ(一)。余は、病人といふものは自分の病症について或る滿足を感じてゐるものであるから、實際に於て患者は或る程度まで病氣の恢復に對して抵抗するものだと言つた。吾々のやつてゐるこの治療には、常にこの患者がたえず抵抗を示してゐるのだといふ事實を、忘れてはならないのである。故に余は、繰り返し〳〵彼に此の事實を思ひ出さしめねばならなかつた。

【註】(一)　患者がこれを罪の感と認めたのは、彼の父に對して斯かる惡い慾望を決して持つてゐなかつたといふことと、非常な矛盾を示してゐる。これは抑制せられてゐた材料が意識に出てきた反動としてよくある例である。初めに事實を否認して『否』といつた言葉に次いて、直ちにその事實の確證が來るのである。尤もそれは、先づ初めには單に間接的なものに過ぎないものである。

彼は語を續けて云つた。それは此處に一つの罪惡行爲があつて、自分ではそれを自分が爲した事を明瞭に思ひ出す事は出來るのだが、自分がその行爲を爲したと認める事は出來なかつた、といふ話である。彼はニーチェ Nietzsche(一)の言葉『自分の記憶は「自分がこれを爲した」と言ふ。併し自分の誇は「自分はこんな事をした筈はない」と言ふので、その言葉を固持してゐるが、併し遂には記憶の方

が讓歩して仕舞つた』といふのを引用した。けれど彼は自分の記憶はこの點に於ては決して讓歩しないと言つた。余は答へて、その譯は彼が自分を罰するために、自己を責める事に快感を覺ゆる故だと言つた。患者は言葉をついで『私に一人の弟があります。その弟を本當は私は大好きなのです。しかしこの弟は、今私を大變に困らせてゐます。といふのは、弟は實に途方もない結婚をしたがつてゐるのです。それで私は、初めは彼の結婚を妨げるために弟を殺してやらうかとさへ思ひました。その弟と私とは、子供の時から隨分喧嘩をしたものです。併し一方ではお互ひに愛し合つてゐて、離れる事が出來なかつたのです。併し弟は私よりもずつと强くて、容子もよかつた爲めに、皆から好かれてゐましたから、私は明らかに嫉妬をおこしてゐたのです。』『さうです。君はこの前リナ孃に就いても嫉妬の話をした事があつた。』『それゆゑ、そんな時には（それは私がまだ學校に上らない頃で、學校は八歳からですから、まだ八歳にならぬ頃だつたのです。）私は斯うしてやつたのです。私達は並製の玩具の銃を二人とも持つてゐました。私は自分の銃の中に込矢を塡めて、弟に「銃身を見上げると何か見えるぞ」と言つたのです。そして彼が銃身を覗いてゐるときに、私はその引金を引いたのです。弟は額を彈たれましたが傷は出來ませんでした。しかし本當は私は弟を傷つけようといふ計畫だつたのです。後になつて私は殆ど氣も狂はんばかりになつて、地面に身を投げ出し、何故こんな事をしたの

だらうかと、我と我身に訊ねたのです。併しやつぱり私は自分でそれを行つたのでした。』余は、自分の問題を此の際に進めて行つた。余はこんなに彼が恐怖した行爲を記憶してゐたのなら、彼と父との間には、もつともつと以前に起つた事で、今は最早忘れ去つてしまつてゐるこれと同樣な事件があつたかも知れない。それを否認することは出來ないだらうと彼に言つた。患者は余に、自分が非常に崇拜してゐた婦人に對して、復讐してやらうといふ衝動のあつた事に氣が附いたといつた。實際その婦人は他人を愛することなどは容易に出來なかつた。併し自分が將來屬すべき一人の人のためには、全自身を保護して守つてゐたのであつた。その婦人は彼を愛してはゐなかつた。彼がその事を確かに知つた時、自分が將來に於て非常に富裕になつて、他の婦人と結婚し、その婦人と手を携へて、先きの女の許を訪ねて行つて感情を害してやらうか、と意識的に空想した事があつた。併し其所でその空想は破られた。何故かといへば、もう一人の婦人卽ち彼の妻は、全く彼には無關心であつたことを彼は認めねばならなかつた故である。斯くて彼の心は混亂してきて、たうとう彼の心の中には、此の婦人は死ぬべき筈であつた（復讐によつて）といふ事が明らかに分つてきたのである。此の空想が、自分の弟に對して企てた行爲の時と同樣に、自分にとつて特に怖ろしく思はれる卑怯の性質だといふことを認めた(三)。更に會話を進めて行く中に、余は患者が彼の性質の斯樣な特異性について、何れの場合

でも決して責任を負ふべき者ではない事を、論理的に考へねばならぬと教へた。何故なら、これらの許すべからざる衝動は、彼の幼年時代に始まつたもので、彼の無意識の中に殘つてゐる所の彼の幼年期の性質から出て來たものに過ぎない。それ故道德的責任は、子供には適用出來ぬといふ事を知らねばならないのである。余はまた、人間が道德的責任をもつて彼の幼年期の素質の全部より外れて育つてゆくのは、單に發展の一過程に過ぎないのであると言ひ足した(三)。併し彼は、彼の惡衝動の總てがこの原因から發生してゐるといふ事に就いては疑問を持つてゐると言つた。故に余は此の治療を進めてゆく中に、それを彼に證明しようと約束をした。

【註】（一） Jenseits von Gut und Böse, IV. 68. 參照。

（二） 彼の此の性質に就いては、後章に於て說明する。

（三） 余は此の論を玆に提出したのは、斯かる論の無效なることを余自身に示す爲めてある。余は、他の精神療法者が、斯かる武器を用ひて神經症と戰つて成功したと主張するを了解する事が出來ない。

彼は話を續けて、彼の父の死後、彼の症狀は非常に强くなつてきた事を告げた。余は彼が父の死を悲しんだことが、病氣を强くさせた原因だとした點に於ては、彼の意見と同意であると答へた。彼の悲しみは、いはゞ彼の病氣の中に悲しみの病的表現をなしたものである。普通の悲歎は一年か二年續

けば癒えるものだが、彼の如き病的の悲歎は際限なく續くだらうと話してやつた。
以上が、余として詳細に且つ又繼續的に報告する事の出來る治療記錄である。治療法の解釋的部分に、大體に於て適合するものである。此の治療は全部で十一ヶ月以上も續いた。

【註】（A）分析を受けてゐる間は、患者は分析者から感情を操縱されてゐるものである。（譯者）
（B）即ち「父の死」といふ願望が抑壓されて無意識に存する場合には、その願望は意識面に於ては「父の死」といふ恐怖となつて現はれるものである。（同）

（e）强迫觀念とその說明

强迫觀念といふものは、知られて居る通り、恰も夢の如く、動機もなければ意味もないやうに見えるものである。第一の問題は、此の觀念を理解され易く、又明らかにさせるために、これに對してその意味と人間の精神生活中の位置とを如何にして與へようかといふ事である。此の觀念を轉譯しようとする問題は解決し難いのである。併し吾々は其の迷想に迷はされてはならぬ。最も强烈なる、又最も變態なる强迫的觀念でも、これを十分深く調査研究する時は拂ひ除け得るものである。此の解決と

しては、その强迫觀念を患者の經驗の時間的關係内に導く事、即ちいつ或る一つの强迫觀念が最初に表はれたか、又如何なる外的事情の場合にそれが再發するかを質問して、それによつて成し遂げられるのである。屢々ある事であるが、强迫觀念が永久的に確立する事の出來ない時には、その觀念を除去する事もそれに準じて簡單に出來るのである。一旦强迫觀念と患者の經驗との關係が發見されるならば、吾々の取扱つてゐる病理組織中の不可解のもの、又は知る價値のある何物にでも容易に接觸する事が出來るといふことを、容易に信じ得るのである。即ちこの觀念の意味、原因及び患者の精神の重き動機力から出顯するもの等に、容易に接する事ができるのである。

特に明瞭な一例として、余の患者に非常に屢々現はれた自殺衝動の一つから始めよう。此の例は、話してゆく中に自然に殆んど分析されてゆくのである。此の患者は余に話した。彼は婦人が留守であつたゝめに、幾週間か勉强の出來なかつた事があつた。その婦人は祖母が重病なので看護に行つたのであつた。恰度彼が難しい勉强の最中に、ふと斯ういふ考へが彼に起つた。『自分が此學期の試驗を、出來るだけ早く受けられる時に受けろと命ぜられたなら、自分はどうにかしてそれに從ふ事が出來るだらうけれども、若し剃刀で自分の咽喉を切れといふ命令が出たなら、どうしよう？』と。彼はすぐにその時もうその命令が下されてゐたやうな氣がした。そして大急ぎで戸棚に行つて剃刀を出さうと

した。が、その時ふと又考へた。『否、こんな簡單な事ではなかつた。自分は行つてあの老婆を殺さなくてはいけないのだ(二)』かう思つた時、彼は恐怖の爲めに氣が變になつて、地面に倒れてしまつた。

【註】(一)こゝの意味では、『まづ最初に』といふ字が挿入されるべきである。

此の例に於ては、强迫觀念と患者の生活との聯絡は、患者の物語りの最初に含まれてゐる。彼は、その婦人と結婚が出來るやうにと、一生懸命に試驗勉强をしてゐた時、その婦人は留守になつたのであつた。彼は勉强しながら、その居ない婦人に對する戀しさに堪へられなくなつた。そして彼女の留守の原因に思ひ到つたのである。それで今や彼の念頭には或る感じが擡ち上つたのである。彼が正常な健全な人であつたなら、彼女の祖母に對して、迷惑か何かを感じたゞけであらう。即ち自分がこんなに彼女を戀しく思つてゐる時に、お祖母さんは何故に病氣などになつたのか、と感じたであらう。これと似てゐるが、併しこれよりか遙かに强い何物かゞ此の患者の心に浮んだのだと我々は考へねばならぬ。即ちそれは彼女を慕ふ心持ちと結びつく事の出來る無意識の憤怒である。その感情は現はれて次の如き叫びとなるのである。『おゝ自分は行つて、自分の戀人をぬすんだ老婆を殺してやり度い。』それから次いで次の如き命令が下される。『こんな亂暴な殺人的な怒りを起した懲罰として、そんな自

分を殺して了へ』と。斯くして此の全過程は、强迫症患者の意識の中に、最も烈しい感情と、そして反對の順序に、即ち先きに懲罰命令、後に罪的勃發の陳述とを伴つて這入つて行くのである。(A)余の此の説明は、無理であると考へたり、假説的要素を多分に含んで居ると思つてはならぬ。

尙一つの衝動で、間接的な自殺衝動と見做されるもので、もつと長時間續くものがあるが、その説明はさう容易ではない。なぜならば、その衝動と患者の經驗との關係は、吾々の意識に非常にかけ離れてゐる所の、純粹なる外的關係の陰に巧妙に隱蔽されてゐるからである。或る日患者が夏休みに家を離れてゐた時、自分はあんまり肥滿(dick)しすぎてゐるから、瘦せなくてはいけないといふ考へが起つて來た。それで彼はプディングがまだ運ばれない中に食卓から立上り、八月の太陽が赫々として照つてゐる中を、帽子も冠らず表通りに飛び出したのである。そして駈足で山に躍り上り、たうとう終には汗びつしよりになつて、仕方なくて止めたのである。或る時には彼の自殺意思が、此のやせ度いといふ熱望の後(うしろ)から、何の變裝もなしに出現した。といふのは彼が險しい絕壁の端に立つて居た時、突然に跳び込まうとする命令を受けたのであつた。跳んだなら確かに死んでしまつたに違ひない。患者は此の無意味な强迫行爲を何とも説明する事が出來ないでゐたが、突然心に思ひ付いた事は恰度その時に患者の戀人も亦その同じ場所に來てゐた事だつた。然かも彼女は英國人の從兄と一緒で

あつて、その從兄は彼女に對して非常に慇懃であつた。患者は此の人に對して嫉妬を感じてゐたのであつた。此の從兄の名はリチャード Richard と言つたが、英國でよく行はれてゐる習慣に依つてディックDick といふ名で知られてゐた。であるから此の患者は、此のディックを殺し度いと思つたのであつた。患者はディックが、どうにも堪まらない位ねたましく、ディックに對して憤怒を感じて居た。斯うい ふ理由で患者は罰としての肥滿制減法（肥滿＝ディック）を自分に行つたのである。此の强迫衝動は、先きに述べた直接自殺命令とは大變に異なつたものに見えるであらう。併しそれにも拘らず此の兩者は、共通な一つの重大な特性を有してゐるのである。何故なら、此の兩者は共に患者の意識にまで達し得なかつた激しい憤怒の情の反動として起つたもので、その憤怒とは患者の戀愛の妨害者として出現した人に對して向けられたものである(一)。

【註】(一)　名前及び言語が無意識思想と（衝動であつても又は空想であつても）その徵候との聯絡をとるために使はれるのは、强迫症に於けるよりも、ヒステリー症に於ける方がより屢々であり、またより勝手である。併し余は今更に一つの例を思ひ出した。恰度これと同じリチャードといふ名が、余がかつてずつと以前に分析した患者に依つて同じ樣に用ひられてゐたのである。其の患者は自分の兄と喧嘩した後、自分の財產を捨てゝしまふに一番よい方法を一心に考へた。そして最早金錢等とは緣を切つてしまひ度いものだと公言した。その患者の兄の名はリチャード(Richard)であり、佛語で Richard は金

持といふ意味なのである。

併し此の患者は、この强迫症とは別箇の强迫症を持つてゐる。（それも亦根原は戀人たる婦人であるが）それは此れと違つた機構を示して異なる本能より出發してゐる。此の患者は彼の戀人が彼のゐる避暑地に滯在してゐる期間中、彼の肥滿制減の熱望の外に、色々な他の强迫症狀をことごく現はしたのである。そして、此等の强迫症は、少なくとも幾分かは戀人に直接關係を有してゐたのである。

或る日、彼は彼女とボートに乘つて出かけてゐた。その日は强い風が吹いてゐた。彼は彼女に帽子を冠せてやらなければならなかつた。何故なら彼の心中には、彼女に對して何事もないやうにせよとの命令が形成されたからだ(二)。これは一種の擁護强迫症であつて、これは此の外にもつと他の結果を起した。又或る時彼等は雷雨の際に一緒に坐つてゐたが、その時彼は非常に恐怖を起して、何故だか彼にも分らなかつたが、焰光と續いて起る雷鳴との間に四十か五十位まで數へねばならぬやうな氣になつて苦しんだ。彼女が出立する日には、彼は道端にあつた石に足をたゝきつけたが、それを道の隅に片づけねば居られなかつた。何故なら彼女の馬車が二三時間の中にはこの道を通つて行くだらうし、この石にぶつかつては困る事になるだらうと考へついたからだ。併し、二三分間も經つた時には、彼は此んな事を馬鹿らしい事だと思つて、再びその道に戻つて、石を道の眞中のもとの場所に置き戻さ

ずにはゐられなかつたのである。彼女の出立後、彼は飽くまで物を識らむと欲する強迫願望におそはれて、彼の友達仲間の嫌はれ者となつた。彼は自分に話しかけられたどんな言葉でも、その一句切り一句切りの正確な意味を了解しようと努めた。さうでもせねば無上に貴い寶でも取り逃すかのやうだつた。それゆゑ彼は絶えず『今仰言つたのは何でしたか』と訊いてゐた。そして二度目に繰り返して聞いた事が、最初に聞いたのとは異つてゐる様に思はれて、いつでも彼は不滿でならなかつた。

【註】（一）　此の場合、『自分が批難されるやうな事が起らぬ樣に』と附け加へれば意味が完全にならぬ。

彼の病氣から起つた此等の症狀は、その時彼と彼女との二人の關係を支配して居た事柄から起つてゐたのであつた。夏休み前に彼はヴィーンに於て彼女に暇乞ひをした時、彼女から言はれた言葉を誤解したのである。卽ち彼女が同伴者の前で彼を拒みたかつたのだと解釋した。それが爲めに彼は非常に不愉快になつてゐた。彼女が夏休みの避暑地に來た時、此の問題を論ずる機會があつたので、彼女は、彼が誤解したあの言葉は反つて彼が笑罵されない様にと思つて言つたのだと證明してやる事が出來た。これで彼は再び愉快になつたのであつた。此の事件の最も明瞭なる諷刺は、物を識らむと欲する強迫願望に含まれてゐる。『かういふ經驗をした後は、若し不必要な苦しみを嘗めたくないと思ふなら、決して二度と誰をも誤解してはならぬ』と彼は恰も獨言をしてゐるかの様な工合であつた。斯う

決心したのは、單なる一例から全般化されたといふ譯ではなかつたのである。が、多分この婦人の留守のためであらう。一個の非常に價値ある例から、すべての他のより低く弱い場合に移されたものである。此の强迫症は、單に彼女から與へられた說明によつて、滿足した事からだけで起つたものとは言へない。これは未だ何か他の事を表現してゐたにちがひないのだ。何故なら、それには彼が聞いた事が、正確にくり返されたかどうかとの疑問が殘つてゐる。

このほか先きに述べた色々な强迫的命令に基いて、吾々は更に猶一つの要素を研究してみようと思ふ。彼の擁護强迫は、後悔の表現として、その反對の衝動卽ち彼が戀人の釋明を聞かぬ前に、彼女に對して抱いた敵意ある衝動の、その反動だけで生じたものである。彼が雷雨の時に感じた勘定强迫症狀は、彼が提出したある材料の助けによつて、何者かゞ死の危險にあるといふ恐怖に對する防禦法だと解釋する事が出來る。吾々が最初に研究した强迫症の分析では、吾々の患者の憎惡衝動を、特に激烈なるものとして、又意味なき憤怒として認める樣にと、旣に奢めて置いた。それゆゑ今吾々は彼等（患者と婦人）の和解の後でさへも、此の婦人に對する患者の憤怒は殘つてゐて、强迫症の形成にあづかつたのであると考へる。彼が聞いた事が正確であるか否かといふ强い疑問は、彼が今度はこの戀人の言つた事を本當に理解したかどうか、又彼女の言葉を自分に對する愛情の證據として考へてよい

かどうかといふ、まだ心にかくれてゐる疑惑が表現されたものである。彼の飽くまで物を識らむとする強迫願望の中に含まれてゐる疑ひは、彼女の愛に對する疑問である。愛と憎惡との戰が、胸の中に怒り荒れてゐて、此の兩感情の對象は一人の同じ人なのである。此の爭鬪は、彼が彼女の馬車の通るべき道から石を取り除き、後に又その石を元の場所に置き戻して、馬車がそれに躓き、彼女が怪我をするやうに企てた事によつて、その愛の行爲を棄てた强迫的象徵的の行爲といふ整然たる形で表はされてゐる。此の强迫行爲の第二の部分卽ち石を舊位置に戻すことを、單にその額面にあらはれてゐる通りの病的行爲に對する非難的の拋棄であると解釋したなら、吾々はそれに就て正確なる判斷を下すことは出來ないであらう。その行爲が强迫の觀念に伴はれたといふ事實は、それがそれ自身病的行爲の一部分だといふ事を表はしてゐる。(β) 假令その行爲は最初の行爲をさせた動機とは反對の動機によつて決心されたものであつたとは云へ、矢張り病的行爲である。

二つの相續いた事實が起つて、その第二のものが第一のものを打消すやうな、此の例の樣な强迫的行爲は、强迫神經症としては代表的の事柄である。患者の意識ではそれらの行爲を誤解するのが當然であつて、その行爲を說明するために、つまり合理的にするために第二次的動機を持ち出して來るのである(二) 併し此等の行爲の本當の意味は、大體に於て相等しい二箇の相反してゐる衝動の爭鬪なの

である。これまでのことで余は相變らず此の相反對してゐることとの起る事は、愛と憎惡との關係から出てゐるものであるといふことを認めてゐるのだ。此の種の强迫行爲は、理論上からは特に興味深いものである。何故なら、それらの行爲は徵候形成の新しい型を示してゐるからだ。ヒステリーに於てきまつて起る事は、相反抗してゐる兩傾向を同時に發現させ得る妥協が成立つといふことである。云ひ換へれば一つの石で二羽の雀を殺すのである(二)。處が此處では相反せる二つの傾向が滿足を別々にする。卽ち一方が先きに一方が後にするのである。とは言ふものゝ、この相反せる兩者の間には或る種の論理的聯絡(すべての論理を無視せるもの)をなさんとする事があるものである(三)。

【註】(一)『日常生活の理窟附け』一九〇八年(アーネスト・ジョーンズ)參照。

(二)『ヒステリー性空想及その兩性愛の關係』(一九〇八年文集二卷)參照。

(三)もう一人の强迫症患者が次の話しを余になした。彼は或る日シエーンブルンの公園を步いてゐた。その時地面に横たはつてゐた枝で足を打ち附けた。彼はその枝を拾ひ上げて小逕の傍の籬の中に投げ込んだ。處が家へ歸る途中で、その投げ込んだ枝が若しや籬から幾分か突出てゐて、自分の後から來る人に怪我をさせはしまいかといふ不安が突發した。彼はどうしても電車から飛び下りて、その公園に急ぎ戾られば我慢が出來なかつた。そして先刻の場所の處に行つて、その枝を又以前の場所に戾さないでは居られなかつた。その枝は、患者が入れた籬の中よりも、以前の道路にあつた方がどの位危險

か知れないといふ事は、誰だつて分ることである。この二度目の憎惡的な行爲即ち彼が强迫を感じて爲した行爲は、彼の意識的の考から見る時は、最初の博愛的な行爲に實際に附屬してゐた動機を衣として裝うてゐたのであつた。

愛と憎惡との爭鬪が、此の患者に於ては他の徵候から見ても同樣にあらはれてゐる。彼は信仰が復活する時には、いつでも自分で祈りを上げるのであつたが、その祈りは段々長い時間がかゝつて、遂には一時間半も續くやうになつた。此の理由は、逆結果といふやうになつて、何かゞいつも自分の信仰深い祈りの言葉の中に這入つてきて、その祈りが反對にひつくり返されてしまふ樣に感じられたからである。例へば彼が『神よ我を守り給へ』と祈るときには、惡魔が急いでそこに『勿れ』といふ言葉を挿し挾むやうな氣がされた。さうすると彼の心中では祈つてゐるのではなくて、呪つてゐるのではないかといふ考へがふと起つた。なぜかと云へば、その時には祈りとは反對の言葉が必ず這入つて來るだらうと思つたからだ。彼の祈りによつて抑制されてゐた最初の原の意思が、彼の此の最後の觀念を通つて首を出してきたのである。彼はたうとう祈りを止めて、色々の祈禱の頭文字や音綴等から工合よく作られた短い祈禱文を唱へて、此の困惑からやつと逃れることが出來た。彼はその祈禱文を何も餘處から這入り込む隙のない樣に早口で唱へたのだつた。

患者は曾つて或る夢を余に話した。その夢は、患者が分析者に對する轉嫁作用に關して、これと同じ爭鬪を表はしてゐた。その夢は斯うであつた。余の母が死んだので彼は悔みを述べ度いと思つてゐたが、余が以前さういふ樣な場合によく無作法にも笑ひ出した事が度々あつたので、今度も笑はれやしまいかと心配した。そして彼は p. c. とかいたカードを余の許に置いて行つた方がよからうと考へた。處が彼がそれを書いてゐる中に、その字は p. f. と代つてしまつたと言ふのである。この患者が戀人に對する色々の感情の對抗してゐるといふ事は、餘りに著しい爲めに、それを意識的認知から全然逃れ去る事は出來ないでゐるのだ。此感情相互の對抗が示されてゐる强迫觀念を考究してみると、患者は自分の逆衝動を十分正當に理解してゐないといふことが解る。彼はその婦人から十年前に最初の結婚を拒絕されたのであつた。それ以後、彼は自分の知る所では、彼女を强烈に愛してゐると思ふ時と、又彼女に無頓着だと思ふ時との、この兩時代を代る代るに過ぎて來ねばならなかつた。斯うしてゐる中に、彼は求婚が成功しかけた時に採るべき或る方法を採らうとする際になると、いつでも反抗の心が先づ初まつて來る。自分は彼女の事など介つては居られないのだといふ確信をもつた態度で始まつて來る。だが實際はこんな確信は何時でも直ぐに崩れてしまふのであつた。或る時彼女が重い病氣で床に就いてゐたので、彼はそれを非常に深く心配をしてゐた時、彼女の寢顏を打守りなが

ら、彼女が永久に斯うして寢てゐて呉れゝばよいがといふ願望がふと起つた。彼は此の觀念を巧妙にも一片の詭辯を以て說明してゐる。即ち彼は、彼女が幾度も幾度も重ねて病氣になりはしないかといふ堪へられない恐怖心から襲はれる爲めに、その恐怖から解放されむとして、彼女が永久に病氣であれと願つたのみであつたと言つてゐる〔一〕。時々彼は空想に耽つた。それは彼が自身で復讐の空想だと考へて、愧づかしく思つてゐた。例へば此の婦人が求婚者の社會的地位を非常に重んじてゐるといふ事を信じてゐたので、彼はこの婦人が何か官廳に勤めてゐる樣な人と結婚したといふ空想を自分で作り上げた。そして、彼自身もその人の勤めてゐる同じ役所に勤めてゐて、彼女の夫よりも早く昇進して、その夫を彼の部下にしてしまつた。空想は更に進んで行つた。或る時此の男が何か不正な行爲をした。此の時この婦人は彼の足下にひれ伏して、どうか夫を助けてくれと嘆願した。彼は、その願を受け入れてやつた。そしてこの時彼女に言つた。自分は彼女を愛してゐたが故にこの役所にはいつたのだ。なぜなら斯ういふ事があるだらうと前から豫知してゐたのだ。そして、もう彼女の夫が助けられた今となつては、自分の使命は果されたのであるから、自分はこの役所を退くと。

【註】（一）　此の强迫觀念を助成するに至つたもう一つの動機は、彼女が彼の目論みには無力であるといふことを知り度いといふ慾望であつたといふことは、疑ひを挿むことの出來ない事である。

彼は猶更に一つの空想を話した。それは、その空想中で彼は彼女のために大いに盡したけれども、彼女にはそれを自分が爲したといふことを知らせなかつたといふのである。この空想では、彼は單に彼の愛情を認めたゞけで、デュマの『モンテクリスト伯』にならつて、彼の復讐慾を抑制せんと計畫した寛容の原因及目的を十分に了解する事が出來なかつたのである。その上彼は時々彼の崇敬する婦人に對して、何か惡い事をしたいといふ可成り明らかな衝動に驅られる事があるのを自分でも認めると言つた。此の衝動は、この婦人がそこに居る時には槪して起らないでゐるが、その婦人の留守の時ばかりに顯はれるのであつた。

（註）（A）この强迫思考の發現の順序が何故に前後せるかに就いては二二八頁を參照すべし。（譯者）

（B）第一の行爲（石を片附けること）も亦第二の行爲（石を舊位に戻すこと）も共に相反する强迫行爲であるとの意。（同）

（f）　强迫神經症の起因

或る日、患者がある事件について余に語つた。偶然にもその事件が彼の病氣の刺戟的原因であつ

て、又少なくとも彼の六年前に發生して現今まで固着してゐる病症の直接起因として余は認めたのであつた。患者自身は自分が重大なる何物かを提供したなどとは氣付かなかつた。彼は此の事件を今まで重要だと考へたやうなことは更になかつたといふ。併しそれを彼は忘れはしなかつたのである。彼の此の態度は、理論上考究する價値があるのだ。

ヒステリーの場合では、病症の刺戟的原因は幼年期の經驗と同樣に、健忘に依るものだといふ規則がある。幼年期の經驗の助けによつて、病症の刺戟的原因はその感情を肉體的徵候に變ずる事が出來るのである。(A) 健忘は完全でない時でも、最近にうけた外傷的の刺戟的原因を紛亂させて、少くともその中の最も重要な分子を忘れさせて仕舞ふのである。この健忘といふことによつて、吾々はそれまでに起つた抑壓の證據を見ることが出來るのである。强迫神經症の場合はこれと異つてゐる。神經症は幼年期の素因が健忘である場合もあらう。だが、それは時々は不完全な健忘なのである。併し此の病氣の直接の起因は、それではなくて記憶の中に存してゐるのである。抑制する場合にはもつと異つた機構であつて、そして實際はもつと簡單な機構を使ふものだ。外傷は忘れられてしまはずに、その感情纒綿から抽出されるものである。それ故に意識に殘つてゐるものは全く無色のもので、重大視されてゐない觀念內容である。ヒステリーの場合に起るものと、强迫神經症の場合に起るものとの差異

は、吾々が現象の背後に再現することの出來る心理的過程中に存するのである。その結果は殆んどいつも同じである。何故ならば、その無味無色な記憶の內容は殆んど再生されぬものであり、患者の精神活動には與からぬものであるからである。抑壓の此の二つの種類の間に差別をつける爲めには、吾人は表面上には何の賴る物もないのである。が、たゞ患者が或る場合にはいつも物を知つてゐる樣な感じがあり、又或る場合にはそれをずつと前に忘れてしまつた樣な感じがあるといふ事を、確言する事があるばかりである(一)。

【註】(一) 强迫神經症患者には二通りの自覺がある。患者が彼の外傷を知つてゐるといふことは、それを知らないと言ふことと同樣に理窟に叶つてゐる。患者はそれを忘れてゐないといふ事に於てそれを知つてゐるので、患者はその意味を氣附かぬてゐるといふ事に於て知らないのである。日常生活にも斯る事はよくある。ショーペンハウエルがいつも行く料理店で、彼にいつも給仕をする給仕人は、或る意味で彼を知つてゐるといへる。しかしこれ以外の時では、フランクフォルトにあつても、それ以外の處にあつても知られてゐないのである。しかしその給仕人等は、今日吾々が、ショウペンハウエルを知つてゐると言つてた意味では、知つてゐないのである。

此の理由で、自己呵責の念に苦しめられてゐ乍ら、彼等の感情を間違つた原因に結びつけてゐる强迫症患者が、それが自分の自己呵責の原因になつてゐるとは知らずに、その本當の原因となつてゐる

話を醫師に話す事は決して珍しい事ではない。その事柄を話し乍ら、患者等は時々驚きを加へ、又時には誇らしい樣子をさへする。そして『併し私はそんな事は何とも思はなかつた』といふのである。恰度かういふ事が余の所に來た最初の强迫神經症患者にあつた。そして多年前に余に此の病氣の性質を洞察させた患者であつた。この患者は官吏で、種々良心の咎めに苦しめられてゐた。シエーンブルンの公園の枝の話しで、余が先きに例を上げたのは此の男の事である。余は彼が診察料として拂つたフロリンの紙幣が實に淸潔で滑らかであつた事におどろいた。(これはオーストリアで、銀貨の出來る前であつた。)余は嘗て彼に、官吏は國庫から引出してくる手の切れさうな新しいフロリン紙幣で分ると云つた。その時彼はそのフロリンはちつとも新しいものではない。自宅で火のしをかけて來たからだと言つた。彼はその理由を說明して、人に汚れたフロリン紙幣を渡すといふことは彼の良心の許さぬ處だ。何故ならその紙幣にはあらゆる黴菌が附着してゐて、受取つた人に害を及ぼすかも知れないからだと云つた。この時余は神經症と性的生活との關係について、漠然たる疑惑をすでに抱いてゐたので、彼に他の場合には斯ういふ問題については如何であるかと訊ねた。彼は稍得意らしく答へた。『それはよろしいです。その點では決して工合の惡い事はありません。私は尊敬すべき家族の中で親愛なる伯父さんの役をしてゐます。時々、その地位を利用して、或る若い少女を一人誘つて一日田舍に

遠足などにゆきます。その時都合をつけて汽車におくれる樣にして、ひと晩郊外ですごさねばならぬ樣にさせます。私はいつも二部屋借ります。私は物事を大變上手にします。しかしその少女が床に入りますと私も彼女の所に入つて、指で彼女に觸ります。』『でも汚ない手で觸つたりして、その少女を害しはしないかと思はないのですか？』余から斯う問はれて彼は非常に怒つた。『害ですつて？ 何の害をするでせう。どんな少女にだつて、一人にだつて害などしませんよ。彼等はみんな喜んでゐました。その少女達で今はもう結婚したものもありますが、何の害などありはしなかつたのです。』彼は余の抗議を惡く取つて、最早その後は訪ねて來なかつた。併し余は、紙幣に對する彼の潔癖と、少女に對する彼の無分別とを對照してみて、少女に對する自責の感情が、紙幣に對する潔癖となつて置換されたものと考へて解釋した。何故に轉換されたかといふのは明瞭に分る。若しも此の患者の自己呵責が、少女に對する行爲からだとして其處に止まつてゐたなら、彼は多分幼年期の有力なる決定（自己呵責）に強ひられて、それが爲めに性的滿足の形を破棄したであらう。故にこの轉換は、彼の病氣から、非常な利益を彼が引出した事を證明するのである。（パラノイア症狀より得らるゝ利益）(B)

併し余は、余の患者の病氣の刺戟的原因のもつと詳細なる試驗に戻らう。患者の母は、遠緣に當る金持の家族に育てられた。この家族は大きな工業商會を經營してゐた。彼の父は結婚した時には實業

にたづさはつてゐたので、彼の結婚は彼を非常に安樂な地位においた。患者は、彼の兩親の間に交された輕い對話から、（この兩親の結婚は非常に幸福であつた。）彼の父親が彼の母親と知己にならぬ前に、身分の低い貧しい、けれど美しい少女に求婚した事を知つた。これまでが此の話の序言である。父の死後此の患者の母はある日彼にかう話した。母は金持ちの親戚と相談して來たといつて、彼女の從兄が、彼（患者）が學校を卒業したら從兄の娘と結婚させると宣言したといふこと、それから從兄の商會の實業關係から、彼には大變よい職業の口が得らるゝといつたことを話した。この家族の計畫は患者の心の中に、自分が彼女の貧しさにも係らず愛してきた少女に忠實であるべきか、又父の跡をふんで、自分に當てがはれた美しい富める親戚の立派な少女を取るべきかといふ爭鬪が起つた。彼は此の爭鬪、實をいへば彼の愛と、父の願望の强い影響との間の爭鬪を解決せんとして、終に病氣になつたのである。否もつと正確にいへば、實際の生活に於てその問題の解決といふ仕事を、病氣になつて避けたのだといへる（一）。

【註】（一）彼が病氣に逃げ込んだといふことは、彼が自分と父とを同一視してゐたことに依つて出來るものだといふことは、立派に主張されて差支へない。此の同一視は、彼の感情を少年時代の殘物に退行せしめ得たのである。

此の考察が正確である證據として、彼の病氣の主なる結果は頑固にもいつまで經つても働けないことであつた。その爲めに彼は何年も彼の教育を延ばすことが出來た。併し此の樣な病氣の結果は、少しも意圖的ではなかつた。病氣の結果と思はれたことは、實際は病氣にかゝる原因であり、動機であつた。

豫期してゐた如く、此患者は先づ余のその問題の解釋を受け入れなかつた。彼は結婚の計畫が、こんな結果を起す筈がないと言つた。當時その問題は彼にはほんの僅かの印象もあたへなかつたと言つた。併し更に進んでゆく内に、彼は餘儀なく余の疑の眞實さを信ずる樣に、而も非常に强く信ずる樣になつた。轉嫁瞑想の力を借りて、彼は自分の忘れてゐた過去の一小話を、恰も新しい現在の出來事の樣に經驗したのである。此の患者の治療中に、或る不明瞭な困難な期間があつた。それは終には斯ういふ事だと解つた。彼が余の家の階段で一少女に出合つたことがあつた。それを彼は余の娘だと直ぐに思つたのだつた。その少女を大變氣に入つた。余が彼に對して親切で信じ難き程忍耐强いのは、自分を娘の婿に欲しい爲めなのだらうといふ想像を彼は描いてゐた。同時に彼は余の財産や地位を彼の心中に置いてゐた模型と一致するやうな標準に高めたのであつた。併し彼の自ら愛する婦人に對する消えざる愛は、この誘惑と戰つたのだ。彼がなした非常なる抵抗と、激しい罵詈とを通り越してか

ら後、彼はもはや轉嫁瞑想と過去の實際の事情との間が完全に類似してゐるといふ、驚くべき力に對して盲目でなくなる事が出來た。此の時期に於て彼が見た夢の一つを繰り返して、彼がこの問題を何う取扱つてゐるかの例としよう。彼は夢で、余の娘が二つの眼の代りに二かたまりの糞をつけて、彼の前に立つてゐるのを見た。夢の語を理解出來る人は、此の意味を容易に解釋するであらう。此の意味は、彼は彼女の美しい瞳（美貌の意）のために結婚するのではなく、彼女の持參金を目當にしてゐるのであるといふ意味である。

（註）（A）例へばヒステリー球、運動癱瘓等の如き症狀はそれであつて、神經症と區別される點である。即ち、神經症は肉體症狀を起さないのである。（譯者）

（B）少女に對する行爲の自責感が轉換されずに其處に殘つてゐたならば、それが爲めに性的障碍の症狀を發したのだつたらうが、紙幣の方に轉換されたので、本人としては非常な利益を得たのであるとの意。（同）

（G）父性コンプレクス及び鼠の觀念の解除

この患者が大人になつてから罹つたこの病氣には、起因として一條の絲がこの患者の幼年期までつながつてゐる。彼は自分で知つてゐた否疑つてゐた父の狀態と、同じやうな狀態に自分が置かれてゐる

るのだと悟つた。その爲めに自分を父と『同一視』する事が出來たのである。併し死んだ父親は、これとは異つた他の形式で彼の病症の中に包含されてゐるのだ。彼の病氣の根本に存在してゐる爭鬪の本體は、父の慾望の强い影響と彼自身の偏つた戀愛との爭鬪であつた。此の患者が最初の治療の時に報告した事を考へてみるならば、この爭鬪は非常に古くから存在してゐて、彼の幼年時代に既に發生してゐたのではないかといふ疑問を禁じ得ない。

話によれば彼の父は非常に優れた人であつた。結婚前に既に下士官であつて、此時代の彼の生活の遺物として率直な軍人的態度を有してをり、眞正直な言葉を用ふる癖を持つてゐた。何れの墓石にも故人の德が色々と刻まれるものだが、そんな德の外に猶また愉快なユーモアを持つて居り、又友人に對する親切さなどで知られてゐた。短氣で亂暴であつた事は、確に他の性質とは矛盾してゐるが、それはむしろ父の性質を完全に補つてゐるものとして必要なものだつた。父は此性質で子供らがまだ小さくて惡戲盛りであつた時に隨分と折檻したのである。併し子供らが成長すると、餘處の父親とは違つて、自分を侵すべからざる權威者のやうに振舞ふなどといふ樣な事はなく、善良な率直さを以て、自分の生涯の小失敗や不幸などを話して聞かせたりした。息子と一緒になつて最も親しい友達のやうな生活をしてゐた。(但し或る一點については然うではなかつた。)といつても決して誇張ではない。患

者は幼ない少年だつた時、この父の死といふ事に就ての考へが、彼の心を常にない過分の强さで占領した事や、また彼の少年期の强迫觀念の記述中にこれ等の考へ（父の死に就て）が表はれてゐる事などは、確かにこの或る一點に關聯してゐた。また彼が或る少女の同情を望んで、もつと親切にして貰ひ度いために、父の死を願望したといふのは、たゞこれと同じ關聯に依るのみである。

この父と子供との間に、性感に關することで何か原因があつたこと、又子供の早熟な戀愛生活に對して父が何か妨害物になつたといふ事には、最早疑問の餘地はないのだ。父の死後數年を經て彼が最初の性交を經驗した時、一つの觀念が浮んだ。『これは素晴らしい事だ。この爲めには誰でも父を殺すことがあるかも知れない』と。これは同じく彼の少年期の强迫觀念の反響であり說明であつた。猶又彼の父は死ぬ僅か前に、この患者に對して强い感情を作らせるやうな妨害をしたのだ。父は、患者がいつも婦人と一緒にゐるのを氣がついて、不謹愼だと云つたり、それだから自分で莫迦な耻づかしい思ひをするのだと云つたりして、その婦人から離れるやうに戒めたのだつた。

次にこの患者の性的活動力たる自慰的（オナニッシ）の方面の歷史を調べてみると、この申し分のない證據の上に更に新材料を加へることが出來る。今日迄正當に了解されてゐなかつたこの問題について、醫者の意見と患者の意見との間に相容れない部分があるのだ。患者は誰でも皆自分達の病氣の根本であり起因

であるのは自慰 Onanie であると決めてゐる。彼等は自慰を思春期の自瀆 Masturbation だと解してゐる。醫者は大概のところ何ういふ解釋法をとつてよいか決定し難い。然し神經症患者のみならず健康な人でも、思春期には自慰の期間を通過するものだといふ知識から考へて、醫者の大部分は患者のいふ事を誇張だと見做して受け容れないのだ。余の考へでは、醫者よりも患者の方が正しい見解をもつてゐると思ふのだ。なぜなら醫者は主要な點を見逃すやうな場合があるが、患者の陳述には眞理の微かな閃めきを持つてゐるものだ。患者が陳述する問題は、患者自身が解釋してゐる意味から云へば、確かに實際と一致しないものだらう。例へば思春期の自慰（これは此の時期の代表的事件として特筆され得るもの）が總ての精神障碍を起させる責任を持つてゐると考へてゐるやうに。だから彼等の問題は解釋してやる必要があるのだ。思春期の自慰は事實上幼年期の自慰の復活に過ぎないものだ。この問題は今日迄おろそかにされて來た。幼年期の自慰は普通三歳から四五歳までの間に頂點となる。それは幼兒の性的素質の表示であつて、後から起る神經症の病原論はその中から探し出すことが出來る。こんな變裝された方法で、患者は自分の病氣を幼年期の性感のせゐにしてゐるのだ。だがそれは確かにその通りで正しいのである。これに反して吾々が自慰の問題を治療上（クリニツシ）のものとして取扱はうとしたり、又はこの問題が多種多様な性的分子、或はその分子から發生するどんな種類の空想の解放を

も表示し得るといふ事を忘れたならば、この問題は解決が不可能となる。自慰が有害だといふ事は、極く小程度まで自治的である。といふ譯は、自身の性質で何うでもなるのである。そのうち實際の有害として認められる部分は、性生活の病原を起させる意義のうちの一部にしか當らないものだ。多くの人々が自慰を行つて無害(或る程度の)だつたといふ事實は、その人が敎養的に許される範圍內で性的素質と性的生活の發展過程上、自慰を許してゐるのだといふ事を單に示してゐるに過ぎないのである(二)。處が或る種の人々は、性的素質がもつと都合惡く、又は性的生活の發展が障碍されて來た爲めに、性感に惱んで病氣になる。卽ち彼等は自身の性的分子の必要なる抑制又は亢進を、禁制するか又は代償構成を爲すかにあらざれば遂げられないのである。

【註】(一)『性說に關する三論文』(フロイド)參照。

余の許に現在來てゐる此の患者には非常に著しい自慰の行動があつた。彼は思春期に於ては特に記述する程にはこれに耽らなかつた。それ故考へ方に依つては神經症に罹らずに濟んだかも知れなかつた。併し彼は父の死後間もなく、恰度二十一歲の時に自慰の衝動が起つて來た。彼はそれの滿足にふけることを、その度每に恥ぢて、すぐにその習慣を止めたが、その後ずつと、それは極めて稀な珍しい時にだけに起つて來た。それは彼が特に愉快な時を過した時とか、特に氣持のよい讀書をした時

とかに起つたと言つた。例へば、ある氣持よい夏の午後、ヴィーンの街の中央で、騎手が非常に上手に角笛を吹いてゐたのを聞いてゐた時のことだつた。街の中で角笛を吹くのは許されないので、巡査が來てそれを止めたが、それまで彼はそれを聞いてゐて、そしてその衝動を起した。又ある時は、彼がゲーテの『詩と眞理』をよんだ時であつた。この物語りで、嫉妬深い主婦が自分の次にゲーテに接吻した或る女を嫉妬し、その女にあたへた呪ひの中から如何にしてゲーテは逃れ出たか、そしてゲーテはその呪ひに暫らくは抑へられてゐたが、遂には喜びに充ちて愛する人に幾度も〳〵接吻をあたへたといふことを讀んだ時であつた。

此の患者には、此等のやうに美しい向上的の場面に當つて、恰度自分が自瀆してゐるやうな衝動を受けるのは少しも不思議ではないと思はれた。併し余は、此等の二つの場合の中には共通した何物かが、卽ち禁止と命令に對する反抗とが含まれてゐるといふ事を指示せずには居られなかつた。

吾々は又同じ問題に關聯して、患者が試驗勉强をしてゐたら、父がまだ生きてゐて、いつでも再び現はれるかもしれないといふ彼の好きな空想を走らせてゐた時の、奇妙な行動を考へねばならぬ。彼は自分の勉强はいつも出來るだけ夜遲くにしてゐた。夜の十二時から一時の間に、彼は勉强を中止して、恰も父が外に立つてでもゐるかの樣に、玄關の扉をあけた。それから戻つてきて廣間に這入り、

自身の Penis を出して鏡で眺めるのであつた。此の狂人的行動は、彼が幽靈も墓を出るといふ時間に父の訪問を豫期してゐるかの樣な行爲だとして考へて見るなら、それは明瞭に分る事である。彼は概して父の生存中は勉强を怠けてゐた。これを時々父は困つたものとしてゐた。今は、父が幽靈になつて歸つてくれば、父は子の一心に勉强してゐるのをみて喜ぶだらう。併し彼のもう一方の行動を見れば、喜ぶ譯には行かないのである。故に此の點に於て父に反抗してゐる筈である。斯く彼は一つの不可解なる强迫行動に於て、彼が父に對する關係の二方面を表はしてゐる。それは恰度これに次いで石に對する强迫行動を彼の戀人に對して爲したと同じことである。

此等の徵證や同種類の材料から出發して、余は一つの解釋を提供したのである。それは、此の患者が六歲未滿の時、自慰に關係した或る性的不行狀をなして、父から非常に折檻されたといふ事である。余の推定によれば、この罰はたしかに彼の自慰を止めさせたのだ。併し裏面に於て彼は父に對する根深い不滿を殘し、父が患者の性的快樂の妨害者だといふ感を常に持たせる事となつたのだ。余の非常に驚いた事には、患者は余に斯ういふ事を話した。それは、彼は極めて幼少の時にそんな事があつたといふ事を母から幾度も聞いたといふ事である。母はその著しい結果のためにそれを忘れなかつたが、彼自身はそんな記憶は何もないといふ。その話といふのは、彼が幼少の時で、その時日は恰度

彼の死んだ姉の病氣の時と同時であつたので明らかに分つてゐた。彼は何か惡戯をしたので父からひどく打たれた。この子供は大變怒つて打たれ乍らも父に對して惡口をついた。しかし何も惡い言葉を知らなかつたので、考へついた物の名を何でも言つて叫んだ。『羊！』『タオル！』『皿！』とかいふ樣に。彼の父は子供が本氣になつて怒つたのに驚いて、打つのを止めて叫んだ。『この子はずつと立派な人になるか又はずつと惡人になるぞ〔二〕』と。患者は其時の光景は彼の父にも彼にも同樣に永久の印象をあたへたらうと信じてゐた。患者は彼の父はその後決して彼を打たなかつたと言つてゐる。彼の性質が幾分か變つて來たのもこの經驗の故であると言つた。それ以後彼は自分の怒りの亂暴さを恐れた爲めか大變臆病になつた。その上、彼は一生涯打たれる事を恐れ、彼の兄弟の一人が打たれてゐる時などには、恐れと憤りに充たされて逃げ隠れるのが常であつた。

【註】〔二〕此の善惡の岐路はその可能性を洩らしはしなかつた。彼の父は此の樣な早熟な感情から齎らされる共通な結果たる神經症の事を見逃してゐたのであつた。

其後患者は母に再び訊ねてみたら、その話は確かだと云はれ、更に當時三歳と四歳の間であつた事が分り、彼は誰かを嚙んだために罰せられたのだといふ事も分つた。母はそれ以上の詳細な事は覺えてゐないが、彼が傷つけた相手は多分乳母だつたらうと微かに記憶してゐると云はれた。母の話には

彼の不行儀が性的性質のものであつたといふ暗示はなかつた（二）。

【註】（一）精神分析に於て、此種の事には度々出會ふ。即ち患者の幼年期の性的活動力が、その頂點に達して何か不幸や罰などを受ける時は、その結果屢々禍を來すといふ極めて初期の幼年期に見られる事件である。これらの事柄は夢の中に朧げに起り易い。併し、時にはその事柄が非常に明瞭になり、分析者はそれを確かに把握したやうに考へるのだが、それだけでは決して最後の解釋を得る事は出來ないのである。分析者は非常な熟練と愼重さを以てせねば、問題の光景が實際に起つたものか否かを決定させずに終つてしまふ。吾々が此の光景の幾つかの倒錯が、（それは屢々相互ひに相違してゐるものであるが）患者の無意識的空想中に探し當てられるといふ事を認めたなら、吾々は正しい解釋の道筋に置かれたとしてよいのである。若しも吾々が此等の事の歴史的眞實を判斷するに迷ひ度くないならば、人人の幼年期の記憶は、後年（概して思春期）になつて固められるといふ事、及びその記憶は國々がその初期の歴史に就て傳説を作つてゐる過程と同じやうに、總ての點に於てそれと類似した模造の複雑な過程を意味してゐるといふことを理解して居なければならぬ。こゝに於て人々は成長するにつれて自分の幼年期についての空想中に自發的性的活動力の思ひ出を打消さうと努めること、及びそれは恰も眞の歴史家が過去を現在の見地から眺めるのと同じく、彼等は自己の記憶の跡を、對象愛にまで引上げてなすといふことが明瞭となるのである。この事は、なぜこれらの空想が誘惑と攻撃とに充たされてゐるか、又その空想中に於てこの事實が自發的の性的活動力、及びそれを刺戟するところの愛撫や罰に限られてゐるかといふ事の說明となつてゐる。更に個人は自身の幼年時代に就ての空想を構成

する時には、自身の記憶を性化するものだといふ事が明瞭に分る。即ち彼は平凡な經驗を自身の性的活動に關係させ、彼の性的興味をその經驗にまで擴げて來るのである。併しさうする時に、彼は實際に存在してゐる所の關係の跡を恐らくは辿つてゐるのである。余の『五歳の男子に於ける恐怖症の分析』を記憶してゐる人には、余が幼年期の性感を思春期の性的興味に過ぎないものとして退化せしめてしまふのは、余が幼年期性感の重要さを輕視してゐる理由であるといふ事を說明しないでも分るだらう。余は單に、幼年期の性的活動力の描寫を曲解するやうな一聯の空想を晴らすために、或る專門的忠告をなし度かつたのみである。

今の例に於けるが如く、個人の有記憶前の過去の話が基礎となつてゐる事實を、大人になつた人の確固たる證明に依つて、成立させる事の出來るやうな幸な位置に置かれる場合は殆んど無いのである。若しあつたにしても、この患者の母の述べた言葉は、種々の可能への道を開いてくれてゐる。母がその子供のその爲めに罰せられた事柄の性的性質を宣告しなかつたのは、母自身が監督者たる地位にあつたといふ理由からであらう。何故なら、すべての兩親にとつて、子供の監督者たる以上最も熱心に消滅を望んでゐることは、子供の過去の性的要素である。併し子供が性的性質を帶びない普通の惡戯をした爲めに、その乳母や母自身から叱られるといふ事もあり得るし、また子供の反動が非常に激しいので、父親から折檻されるといふ事も有り得るものである。此の場合の空想では、乳母や召使とかは、それよりも一段と高い地位の母に置き換へられるのが普通である。此の種の話に就て患者の夢をより深く解釋すると、患者の精神中に實に叙事詩的想像によつて產み出されたやうなものが存在

してゐることが認められる。彼の母及び姉妹又は姉妹の早死等に對する性的願望は、此の若い勇士が父から受ける折檻と關聯してゐる。然し此の空想といふ織物の絲を手操つて、それを解くことは不可能である。此の療治の成功には確かにこれが妨げとなつてゐるものである。患者が恢復し、彼の正常なる生活がその主張を通さんとして來ると、彼の前には長い間顧みられなかつた、また治療の繼續とは兩立しない所の多くの仕事が出て來る。といつてそれを分析の間隙が出來たとして、余に批難をあたへる事は出來ぬ。精神分析の科學的結果は、現在では治療的目的の副産物にすぎない。故にかゝる治療が失敗する場合に、最も多くの發見が爲される事が度々ある。

幼年期の性的生活の內容は、それが優勢な性的分子であれば、自發的性的活動の中に存在し、又は對象愛の痕跡中に存在し、又は强迫症のコンプレクスの核心だと呼ばるゝやうなコムプレクスの中に存在してゐる。そのコンプレクスは好奇心發生以後の小兒の最も初期の衝動、即ち兩親や兄弟姉妹に對する愛情も敵意も同時に含んでゐるコンプレクスである。子供の性的生活の內容が均等であるといふ事は、後年に到つて帶びてくる所の變化的傾向の不變的性質と共に、眞の經驗が如何に大に、又如何に少く空想構成にあづからうとも拘らず、幼年期頃に構成されたる空想を一般に特性づける所の絕えざる同一性とをそれによつて容易に說明できようと思ふ。子供の父が性的反對者の役割を當てられる事や、又自發的性的活動力の妨害者の役をなす事は、全く幼年期のコンプレクスの核心となるものの特性のためである。そして實際の事件が、通常非常に大なる程度まで、この事を惹起させる責任があるものである。

此の幼年期の光景に就ての議論は註の中に見出されたであらう。今余の言ひ度い事は、此の光景の現出が初めて此の患者を感動させて、彼は自分の有記憶前に非常に愛してゐた父に對して非常な怒りに襲そはれた（この怒りは後に潜伏してしまつたが）といふ事を信ずる事が出來なかつたといふ事である。余はこの事が實は、もつと大きな効果をあたへるかと思つてゐた。何故なら、これは患者に數度話され、然かも父親自身からも話されてゐた事であつて、この事の實在的事實には何等疑惑のあり得る筈はなかつたからだ。併し乍ら彼は、强迫神經症者の如き非常に怜悧な人々をいつも混惑させる所の『不合理である』といふ事の理由で、その物語りの證據的價値に反對して、彼自身その光景を記憶しないといふ事實を云ひ張つた。彼が、父との鬪係は本當は此の無意識の補足の請求を餘儀なくせねばならなかつたのだといふ確信に達するには、たゞ轉嫁といふ苦しい路を通つて行くより外に方法がなかつた。間もなく物事はさういふ一點に達したのである。それは何ういふことかといふと、彼の夢で、又は目ざめた時の空想で、又は彼の聯想で、彼は余と余の家族に對して最も亂暴な汚ない惡口をあびせ初めたのであつた。併し彼が愼重に行動してゐる時には、彼は余に對しては非常な尊敬を拂つてゐた。彼が余に對して、此等の侮辱をくり返してゐた時の行動は、殆んど自暴自棄に陥つた人の態度であつた。彼は常に斯うたづねた。『どうしてあなたの樣な立派な紳士が、私の樣な卑しい役にも

立たぬ奴に侮辱されてゐるのですか。私を追出して下さい。それが私には相當してゐるのです。』彼はこんな事を言ひ乍ら長椅子から立上つて室内を歩きまはるのであつた。最初彼はこの習慣を自身の感情が細かいためであると說明してゐた。彼は自分がそこに安樂に横はつてゐる間は、こんな怖ろしい言葉を言ふ氣には決してなれないと云つた。併し間もなく彼はもつと有力な說明を發見した。それは彼は余から打たれる事を怖れて、余の接近するのを避けるためだと云つた。若し彼が長椅子に臥てゐるやうな時には、限りもない大きな折檻から逃れようとして、非常な恐怖を抱いてゐる者のやうな恰好をして、手で頭をおほひ、腕の中に顏を埋めて、急に飛上り、顏は苦痛でゆがめ、走つて大急ぎで逃げ去つたであらう。彼は、父が非常に激情家であつて怒り出したら止め樣もなかつたのを思ひ出した。斯くしてこんな苦痛の學修を經てゐるうちに、患者は少しづつ自分で持つことが出來なかつた確信の感を持てるやうになつて來た。それは無關心の人々にとつては、眞理は殆んど自明の理であるのだけれど、患者には容易に確信を持てなかつたのだ。而して今や、彼のねずみの觀念の解決に到る道は明らかになつた。治療はその轉換點に達して來た。そして今まで差控へられてゐた色々の材料は悉く有用になつてきた。そして色々の事件の全聯鎖が可能になつてきた。

すでに述べた通り、こゝの記述は最も簡單に大略な事柄を述べて滿足する事としよう。明らかに最

初に解決さるべき問題は、チェックの大尉が物語つた二つの話が、即ちかの鼠の話とA中尉に金を返せと云つた事とが、何故にこの患者にあのやうな激動的影響をあたへたか。そして何故にこの様な激烈な病的反動を起したかといふ事である。この推定はかうである。それはそのコンプレクスに關聯した感情の問題である。その話は患者の無意識の內の或る神經過敏の部分にぶつかつたのである。さう證明されるのである。この患者は軍事上の事に關しては何時もさうであるが、彼は、長年の兵役生活をして軍人時代の話をいつも聞かせて異れた父と、無意識に同一視したのである。そこへ偶然にも斯ういふ事が起つた。(偶然といふものは、恰度言葉づかひが冗談を言ふのに役立つやうに、徵候形成に役立つものである。)それは彼の父の小さな冒險が、此の大尉の要求と共通した重要要素をもつてゐたといふ事である。といふのは彼の父は、下士官といふ資格で少額の金の管理をしてゐた事があつた。その金を或る時カルタ遊びで費つてしまつた。(斯く、彼は Spielratte (一)であつた。)友達の一人がその金を立替へてくれなかつたなら、父は隨分と容易ならぬ立場に陷らねばならなかつたのである。父は軍隊を去つてから裕福になつた時、彼の友に金を返さうとして、その友が困つてゐはしまいかと探しまはつたが、その友の行方は知れなかつた。此の患者は父がその金を返せたかどうかに就いては、はつきり覺えてゐない。彼は父の若い時の此の罪惡を思ひ起すのが苦痛だつた。何故なら、表面的には兎

も角として無意識の中には父の性質に對する憎惡非難が充ちてゐたからだ。大尉が『3.80クラウンをA中尉に返濟せよ』といつた言葉は、彼の耳には此の父の返濟してゐない借金の事を言つたかと思はれる樣にひゞいたのである。

【註】（一）文字上から云へば、『遊ぶ・鼠』であるが、獨逸語では『賭事をする者』といふ意味の慣用語。

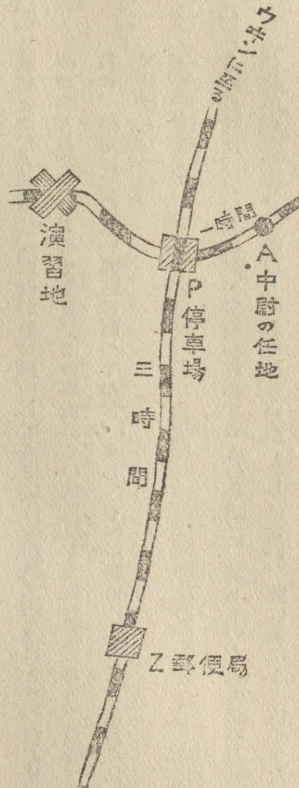
併し、Ｚの郵便局で若い婦人が自ら彼に就て稱讃的の言語を云つて（二）、その小包の料金を立換へて吳れたといふ報知を受けた時、彼は又全く別の方面で彼の父の事を倚更強く『同一視』したのであつた。分析の途中で彼は或る新しい報告をもたらした。それは、その郵便局のある小さい町の宿屋に、美しい娘がゐたことである。この娘は此の若い士官にとつて確かに勵ましであつたにちがひない。だから彼は演習が終つたら又この町に歸つて來て、仕合せにも彼女に會へればいゝなと思つてゐた。併し、郵便局にも若い婦人の競爭者がゐるのだ。父の結婚當時の話しの通りに、彼も自分の軍隊生活が終つたらこの二人の內どちらを選ばうかと躊躇した。吾々は彼がヴィーンに行かうか、又は郵便局のある所に歸らうかと考へた不思議な不決心や、及び彼が現に旅行をしてゐながらも歸らうかといふ誘惑が絕えずあつた事（九十三頁參照）等が、吾々が最初に考へたやうに無意味なものでない事が、是に於て直ちに解るのである。彼の意識的精神には、郵便局の所在地Ｚから引張られてゐる引力は、Ａ

中尉に會つて彼をうながしてゐる誓を果す必要からだといふ事で說明する事が出來る。併し本當は、彼を引付けたものは郵便局の若い婦人であつて、中尉はその同じ所に住んで軍事郵便の職に務めてゐた故、單に彼女の代用物の役をなしてゐたのである。そして後に患者が、郵便局に勤務してゐるのはA中尉ではなくてB中尉だといふ事を聞いた時、患者はB中尉までも同じ樣にその結合にまき入れてしまつた。彼はその時無我夢中(二)になつて、二人の士官に連續して、非常に親切な二人の娘の間に感じてゐた躊躇の感を再生する事が出來た(三)。

【註】(一) 忘れてはならぬ事は、大尉が思ひ違ひしてA中尉に金を拂ふやうにと言つたより以前に、彼は此の事を知つてゐたといふ事である。この事情がこの話の最も大事な點である。患者はこれを隱蔽してゐたため、非常に望のない混亂に陷つてゐた。そしてそれが爲めに暫らくは余がそれ全體の意味を考へ出す妨げとなつた。

(二) 一九九頁參照。

(三) この患者は、彼の鼻眼鏡の料金を再拂するこの小話に、最上をつくして彼の混亂狀態を披瀝した。それ故に多分余自身の說明も明瞭ではないかもしれない。故に余はこゝに小さな地圖を描いて、ストラッへイ夫婦が演習後の位置を明らかにした圖面を示さう。余の通譯者がかういふ事を言つたが、それは正當な事だらう。それは、A中尉は郵便局の所在地Zに以前住んでゐてその軍事郵便局を管理してゐた。併し最後の二三日間はその職をB中尉にゆづつて、他の村に轉ぜられたといふ事である。こ

れが明瞭に分つてゐないと、此の患者の態度は依然として不明になつてしまふ。この殘酷な大尉はこの轉任を知らなかつた。それで料金はA中尉に拂はればならぬと云つた理由が分るのである。

大尉の鼠の物語りによつて生じたる結果を說明するに當り、吾々は分析の過程をもつと委しく辿らねばならぬ。患者は先づ初めに非常に澤山な聯結的材料を提供した。併しそれは、彼の强迫症の機構の說明には何の助けにもならなかつた。鼠に依つて作られた刑罰の觀念は、患者の多くの本能を刺戟したのである。そして患者の追憶の全部を呼び起したのであつた。それ故大尉が鼠の話しをした時から、金を拂ふやうに賴んだ時までの短い期間中に、鼠は一聯の表徵的の意味となつた。そしてその次

の期間中には新しい意味が絕えずそれに加へられて行つた。余は此の事全部に就ては大變不完全な說明しか出來ないと白狀せねばならぬ。鼠の刑罰が他の何物にも增して攪亂したものは、患者の肛門性感であつた。これは患者の幼年時代に於て非常に重要なる役割を演じたもので、蟲といふものから絕えず刺戟をうけて多年肛門性感の活動性を保持してゐたのであつた。さうしてゐる間に鼠といふことは『金(かね)』といふ意味を持つやうになつた(一)。患者は、raten(月賦拂)といふ聯想を有する Ratten(鼠)といふ字を再び考へて、これに關する症狀を示した。

患者は彼の强迫的譫妄狀態に於いて、自身で一定のねずみの通貨を作つたのだ。例へば余が或る質問に答へて、彼に一時間の診察費を告げた時に彼は獨言を言つた。(それはその後六ヶ月經てから余は知つた。)『そんなに澤山のフロリン、そんなに澤山の鼠』と。彼は父の遺產のまはりに段々少しづつ集つて來た金の興味の全コムプレクスを此の言葉に譯したのだ。そのわけは、その問題に聯結してゐた彼の總ての觀念は、Raten から Ratten といふ言葉の橋によつて彼の强迫生活に持ち運ばれ、彼の無意識に征服されたのである。更に大尉が彼に小包料金の支拂を賴んだ事は、彼の父が賭事をして借りた負債につゞいてゐる所の Spielratten といふ語呂的の橋によつて、鼠の金(かね)といふ意を强めたのである。

【註】（一）『性格と肛門性感』フロイド文集（一九〇八年）參照。

併し患者は鼠が危險な傳染病の運搬者だといふ事は知り拔いてゐた。それゆゑ彼は鼠を彼の黴毒傳染に對する恐怖の表徵とした。（軍隊に於ては尤もな事である。）此の恐怖は、患者が父の軍隊生活中に送つた生活様式について抱いた總べての疑を隱してしまつた。又他の意味では Penis それ自身が黴毒傳染病の運搬者である。それで彼は鼠を男の性器と考へる事が出來た。斯く認めるのに、まだもう一つの理由がある。それは、Penis（特に小兒の）は容易に蟲に擬せられ得る。大尉の話は、恰度彼が子供の時に彼の肛門の中に大きな丸い蟲がゐたやうに、誰人かの肛門内に鼠がもぐり込むといふ話であつた。かく二度迄も鼠が Penis の意味となつてゐる譯は、肛門性感があつたからである。又さう考へないでも、鼠は不潔な動物で、排泄物を食べたり、下水の中に住んだりしてゐる（二）。此の新しい意味によつて鼠譫妄狀態の範圍が如何に大きく開展し得るかといふ事は、もはや說明する必要はないだらう。何故なら、『あんなに澤山の鼠、あんなに澤山のフロリン』といつた言葉は、彼が特に嫌つてゐた婦人職業の優れた特性描寫である。又他方に於て、大尉の話中の鼠に代ふるに Penis を持ち出した事は、患者が父と自分の愛人とを關聯して考へるに到つた時、彼に取つて特に嫌惡感を起さしめずには置かなかつたところの肛門性交の狀態から生じた事であるといふ事は、決して關係のない事ではな

い。大尉が彼に返金を頼んだ後で、患者の精神中に形成された强迫感の中に、これと同じ狀態が再現したといふことを考へる時、吾々は南方スラーヴに於て使用されてゐる『或る呪ひ』を、餘儀なく思ひ起すであらう(二)。此の全材料と、更により多くの材料とは、隱蔽された記憶『結婚』といふもの背後にある鼠論の織物の中に織込まれてゐるのである。

【註】(一) 若しも讀者が神經症者の精神中には、斯る想像の躍動がありうるといふ事に反對し度いと思ふなら、余は讀者に藝術家も亦屢々これと同樣な氣まぐれな空想に更けるものだといふ事を思ひ起させる事が出來よう。例へば、Le Poitevin の Diableries érotiques の如き。

(二) 此等の呪ひの正確な言葉はクラウス F. S. Krauss の編輯による定期刊行物 Anthropophyteia に掲載されてゐる。

此の話をした患者自身の話し方により、またその話を余に聞かせた時の顏の表情によつて現はされた通りに、此の鼠刑罰の話は彼の早期に抑制されたる利己的及び性的殘酷の衝動を猛然として燃え上らせたのである。併しこれまでの豐富な材料も强迫觀念の意味を說明する迄には至らなかつた。併し或る日イブセンの『小アイヨルフ』Little Eyolf の鼠婆さんが分析に上り、次の如き推定をされるに至つた。即ち彼の强迫的譫妄狀態によつて採られた多くの形のうちで、鼠は猶もう一つの意味を有してゐる。即ち『子供』といふ意味を有してゐるといふ事である(一)。この新意味の源を考究して、余は直

ちに最初の、又最も重大な根原の或物に思ひ到つた。嘗つて患者が父の墓參に行つた時、一つの大きな動物が（それを彼は鼠と思つた）父の墓の上を馳けて通つたのを見た(二)。彼はその動物が實際に父の墓の中から出て來て、恰もその時まで父の死骸をむさぼつてゐた所だつたと思つた。鼠といふ觀念は、それが鋭い齒を有してゐてその齒で嚙つたり咬んだりするといふ事實と離すべからざる關係がある(三)。併し鼠は鋭い齒を有し、慾張りで、汚なくて、それで罰せられないでゐるのではない。必ず罰を受けてゐる。人から殘酷にいぢめられ、無慈悲にも殺されてゐる。患者は度々それを見て怖しく思つた事がある。患者は度々哀れな物に對して憐憫の情をもつた。併し患者は自分自身がその樣な見苦しい汚ない小さなもので、怒つた時には人に嚙みつくので、その爲めに隨分とひどく罰せられた事もあつた。（一七七頁參照）彼は本當に鼠に生寫しであると言へる。大尉が彼に話しをしてきかせたのは、運命が彼を聯想的試煉に會はせたやうなものである。運命はコンプレクスを刺戟する言葉を呼び出し、彼はそれに强迫觀念を以て反動したのである。

【註】（一）イプセンの鼠婆さんは、鼠を最初に水の中におびき入れ、二度目には同じ樣にして町の子供を決して家へかへらせぬ樣に誘ひ出したかのパイド、パイパーの傳說から、たしかに引出されたものである。『小アイヨルフ』も亦この樣にして、鼠婆さんの魔力のために水の中に身を投げたのである。傳說に

は、鼠は概して嫌惡すべき動物として表はれるよりも、むしろ何だか薄氣味わるい動物として現れてゐる。即ち『地下の動物』とも言ひ得べきものとして表はれるものである。そして、死人の靈を表はすのが常であつた。

（二）これは確かに鼬であつた。ヴヰーンの主なる墓地（中央墓地）には隨分鼬が居る。

（三）メフイストフエレスが魔力あるペンタグラム（☆）で守られてゐる扉を通り度いと思つた時に言つた言葉を對照せよ。

『此の閾の魔力を破つて通るには、鼠の齒が必要だ。
（彼はそこでねずみを呪ひ呼び出す。）
もう一咬み。それでよい。』

（ゲーテのフアウスト、第一部）

（四）『脹れたねずみに、
彼は自分の生うつしの姿を見る。』

（ゲーテのフアウスト、第一部）
Auerbach の Cellar の場面。

彼の最初の最も重要な經驗に依れば、鼠は子供らである。恰度此の時に彼は一片の報告をもつて來た。彼は非常に長い間その報告の文脈とは遠ざかつてゐたが、今になつてその報告は彼が子供に感ぜ

ずにはゐられない興味を十分に說明してゐる。彼が長年間崇敬してゐた婦人で、まだ結婚しようといふ決心はつかないでゐたその人は、婦人科的手術で兩卵巢を除去され、それで子供は出來ないと宣告されてゐたのである。彼は子供が大變好きなので、この理由で、實際躊躇してゐたのであつた。

是に於て、初めて彼の强迫觀念が形成された過程の解釋し難い部分を了解する事が出來るやうになつたのである。幼兒の性についての學說と表象主義の助けとを借りて（夢の解釋から學ぶ事が出來る如き）全事實は釋明され、意味をつけられるのである。午後の休憩中に（この時彼は鼻眼鏡を亡くした）大尉が患者に鼠刑罰の事を話した時、患者は最初にこの話の殘酷で淫蕩的なのにびつくりした。併し直ぐ後で、彼が誰かを嚙んだといふ、彼の幼年時代の光景にそれが關聯されて思ひ浮んで來た。此の樣な刑罰を防ぐ事の出來た大尉を、彼は自分の父を以て置き換へた。斯くして、彼は元の場合に殘酷なる父に對して爆發した激怒を、再び爆發させて大尉自身の上に注いだのである。彼の意識の中にほんの一瞬間表はれた觀念、即ち彼の愛する誰人かの身にこれと同じ樣な事が起るかも知れぬといふ考へは、恐らくはその物語りの語り手に向けられたる、併しこの場合では語り手と置換られた彼の父に向けられたる『汝も同樣の事を受けねばならぬ』といふ願望と解釋されるであらう。一日半經つて後（二、大尉が小包を彼に渡し、A中尉に 3.80 クラウンを拂ふやうに賴んだ時、患者はすでに彼の殘

酷な目上の者が間違ひをしてゐるのであつて、負債を負うてゐる人は、郵便局の若い婦人のみだと氣附いてゐたのである。故に、その時、彼の心には、容易く何か嘲弄的の答へが浮んだかも知れなかつた。例へば『へえ、さうですかな』とか、『君のお祖母さんに拂ひなさい』とか、『はい必ずお拂ひ致します』とか、何の强迫力にも從はないやうな答へをするかもしれなかつた。併し左樣ではなくて、彼の父性コムプレクスと及び彼の幼年時代のその光景の記憶とから、次のやうな答へが彼の心の中には作られたのである。『はい私の父か、又はあの婦人かに子供が出來たならA中尉にお拂ひします』とか『私の父やあの婦人に子供が出來る事と同じ確かさで、私はA中尉にお拂ひしませう』等といふ答である。簡單に言へば、嘲笑的誓言が、決して果されない所の馬鹿げた條件と並べられたのである(二)。

【註】(一) 彼は最初に、鼻眼鏡が着いたのはその夕方ではなかつたといつた。彼が註文した鼻眼鏡が同じ日に着くなどといふことは有り得ない。患者は此の期間を回顧して、短縮したのであつた。なぜなら、その期間は彼の決定的精神聯絡が開始された時で、抑壓されてゐたあの挿話、即ち士官から郵便局の若い婦人の親しみ易い態度を聞いたその挿話が生じた時なのであつた。

(二) 此の荒唐無稽なことは、恰も夢に於けるが如く强迫的思考が嘲弄的の言葉となつたのである。フロイドの Die Traumdeutung (1900) 七章二九五頁參照。

併しながら是に於て、今や犯罪がなされたのである。即ち彼は最も愛すべき二人の人、彼の父と彼

の婦人とを辱しめたのである。この行爲には罰が要求された。その刑罰は、彼が果す事の出來ない或る誓ひで、又彼の目上の人の惡氣から出た要求に對する文字通りの服從をなすといふ、或る誓ひに彼自身を縛らねばならぬ事なのであつた。その誓ひは次の如くである『今度は汝は本當にその金をＡ中尉に拂はねばならぬ』この强迫的服從によつて、彼は大尉の願ひ（Ａ中尉に支拂へといふ）は誤まれる前提に基づいてゐるといふ良き理解を抑へつけてしまつた。『さうだ、汝は汝の父の代理者が要求した通りに、その金をＡに返濟しなければならぬ』と。このやうに王樣も亦誤られてはいけない。若し王樣が彼の臣下の一人を間違つた稱號で呼んだなら、その臣はその後ずつとその間違つた稱號をつけてゐるものである。

之等の事柄をほんの朧げながらも理解することが患者の意識には出來かけて來た。併し大尉の命令に對する反抗やその反抗が反對なものに突然變つた事などは、兩方とも彼の意識內に表はれてゐた。最初には彼はその金を拂ふまい。若し拂へばあれが（とは鼠刑罰の事）起るぞといふ考へが起つた。それから次には彼の反抗の罰として、此の考へがその反對の誓ひに變更されてきたのであつた。

更に進んで、吾々は此の患者の大强迫觀念の形式が起るに就いての一般的條件を描いてみよう。彼のリビドーは、長期の節制や又若い士官が婦人の仲間に入るといつも受ける親しい歡迎などによつて

餘程增加されてゐた。そのうへ彼が演習に出發した時には、彼と彼の婦人との間に或る冷やかさがあつた。彼のリビドの强烈になつた事は、從つて父の權威に對して行つた往時の爭鬪を、今又新たに爲さむとする傾向を彼に與へたのである。それがため彼は他の婦人たちと性行爲をなさむといふ考へを敢へて持つやうになつて來た。父に對する記憶は不忠實にも段々弱くなり、かの婦人に對する價値は段々疑はれて來た。その樣な氣分になつて彼はこの二人をはづかしめるやうになつたのである。そしてその爲めに自分を罰したのである。この時に彼は昔の模範（モデル）に從つたのだ。演習が終つて彼がヴィーンに旅行しようか、それとも止つてゐて彼の誓ひを果さうかと迷つてゐた時、彼は極く初まりから心を亂されてゐた二つの爭鬪を、一つの繪で表現したのである。二つの爭鬪とは、彼が父に從順であらうかどうしようか、又彼の愛する婦人に對して忠實であらうかどうしようかといふ事である(二)

【註】（一） 嘗て彼の父に對して服從することが、婦人を棄てる事と一致した事があつた。それをこゝで注目する事は興味無い事ではなからう。もしも彼が止まつてAに金を返したとしたら、彼は父に償ひをなしたてあらう。併し同時に、もつと美しい他の婦人の方を好んで、彼は婦人を棄てたてあつたらう。此の爭鬪に於て彼の婦人は、たしかに患者の正常な良き思慮の助けによつて、勝利を得たのである。

余は刑罰の註釋について一言加へたい。その註釋とは、『他の方面より考へれば鼠刑罰は彼等の兩方

共に行はれるであらう』といふ意味である。それは余が他處で論じた二つの小兒の性論の影響に根ざしてゐる。この論の内の一つは、赤坊は肛門より出て來るといふ説と、もう一つのは第一の論から論理的に續いてくるもので、男も女と同樣に子供を生む事が出來るといふのである。夢の註釋に用ひる專門的規則に從へば、直腸から出て來るといふ考へは、その反對の直腸に這ひ込む（恰度鼠刑罰に於けるが如く）といふ考へに相當し、又反對に、直腸に這ひ込むといふのは直腸から出てくるといふのと一致するのである。

【註】（一）『小兒の性說に就いて』（一九〇八年）文集二卷參照。

吾々は此の場合に示された斯かる烈しい强迫觀念が、もつと簡單な方法で、又何か他の方法で取り去られるだらうと考へるのは正當ではない。吾々が以上述べた解決に到達した時、患者の鼠譫妄狀態は消失したのである。

II　理論

(a)　强迫形成の或る一般的特性(一)

一八九六年に於て、余は强迫觀念を、抑制の下より變形して再發したる叱責、卽ち小兒期に於て快感を以て行はれた性的行爲に必ず伴つて來たその叱責であると定義を下した(二)。此の定義は、その構成的要素には異議なきものであるが、形式的基礎に於ては批判される餘地があるかと考へられる。此の定義は、餘りにも統一といふことを目標としすぎた。そしてその標本として、强迫神經症患者自身の常習言行を取つたのだ。その時この强迫神經症患者は無際限を好む特性によつて强迫觀念の名の下に非常に多種多樣の心理形成を持つてゐたのである(三)。それは實際『强迫的考へ』と言つた方がもつと正確だらう。强迫構成物は明瞭にしてみれば精神の働きの何れの種類のものにも相當すると云へるのだ。それは判然と慾望、誘惑、衝動、回想、疑惑、命令、禁止などに種類別する事が出來る。患者は誰でも此等の區別を分らせまいやうにと努め、これらの精神の働きから感情的指標を取り去つて、その殘りを單に强迫觀念として見なさうとしてゐる。余が今取扱つて居る患者は、此の型の行爲を示

してゐる。それは彼が初めの頃に、彼の一慾望を單なる『一聯の思想』の標準に引下げようとした時である。（一〇四頁參照）

【註】（一）此の章及次の章に取扱はれてゐる問題中の或る點は、强迫神經症の文集の中で既に述べた。レーウェンフェルド Löwenfeld の究め盡せる研究 Die psychischen Zwangserscheinungen 1904. からも拔萃する事が出來る。

（二）『擁護神經精神症の再度の研究』（一八九六）文集一卷一六二頁參照。

（三）余の定義に於ける此の缺陷は、本書中に於ても幾分か訂正されてゐる。即ち次の文句が揭げられてゐる。『復活された記憶と、その上に建てられた自責とは、不變のまゝで意識に表はれる事は決して無い。意識に表はれ、意識生活に於て病原的記憶に代はるところの强迫觀念と强迫感情とは、抑壓された觀念と抑壓する觀念との間の互讓的（和解的）形成物である。』即ち定義に於ては『變形して』といふことに特に力を置かればならないのである。

更に斷つて置かねばならぬ事は、强迫的考への現象學でさへも、今までは未だ十分な注意を拂はれて居なかつた事である。患者が彼の心中に無理に進入してきた强迫觀念に反抗して爲し續けた第二次的爭鬪中に於て、心理的構成物は特にある名を附せらるゝに相應した表現をなしたのである。（患者が演習の歸りに心を占領してゐた連續的思想は其の一例である。）これらの思想は、强迫的考へに反抗し

て起る所の、純粋に合理的な思慮ではないのであつて、實際二種の考への間種(混成物)である。これらの思想は、爭つてゐる所の强迫の前提の確かなものを受け入れ、斯くして理性といふ武器を使ひ乍ら、病理的思想の臺の上に建てられてゆくのである。斯かる構成物は譫妄狀態といふ名を與へられるに相應してゐると思ふ。この區別を明瞭にする爲め、余は一例を擧げよう。この例は、患者の症狀記錄中の適當な文中に入れて差支へないものである。余は既に患者が試驗勉强をしてゐた時、彼が爲した狂氣じみた行爲、即ち夜更けまで勉强を爲した後、彼がいつも玄關の扉を開けて、父の幽靈を迎へようとし、それから彼の性器を鏡に映して眺めたといふことを記述した。(一七五頁)彼は『若しも父がまだ生きてゐたとしたら、この事全部を見て何と言ふであらうか』と自分に問うて、自分を正氣に歸らしめようと努めた。併し此の論は、此の合理的な形に促進せられた以上は何の效果もなかつた。『若しも彼がまたこんな無意味な事をする樣になつたなら、次の世に於て彼の父に何か禍が起るだらう』といふ譫妄的脅威に、彼が幽靈の觀念を變へるまでは幽靈は除かれないものである。

第一と第二の防禦的爭鬪の區別は確かに確固たる基礎を有してゐる。併し患者自身が自分自身の强迫觀念の用語を知らないといふ事を吾々が發見する時、吾々はその區別の價値が、思ひがけなくも減少せる事を發見するのである。これは不合理の樣に思はるゝかも知れぬが、しかし、完全な常識であ

る。精神分析の經過中に勇氣を得るのは、患者のみではなくて病氣そのものも同樣に然うである。病症は大膽になつて行つて、以前よりももつと明瞭に物を言ふやうになる。比喩をもつて言へば、患者は今まで自分自身の病的產物には恐れて眼をそらして居たのであつたが、今度はそれに注意を向けるやうになり、それに對してもつと明瞭なもつと細密な觀察をなすやうになるのである(二)。

【註】(一)　多くの患者は强迫觀念の內容を云ひ表す事が全然出來ない位に注意を轉向させる。また幾度もくゝ繰返して爲してゐ乍ら、その强迫的行動を言ひ逃べる事が出來ない位に、彼等の注意を轉向するものである。

この他、强迫神經症形成に對するもつと明確なる知識を得るには二つの特別なる方法がある。第一は、經驗に依つて分る。卽ち强迫命令(又は何にても)は、覺醒中はたゞ恰も切斷された電文の如くに切り取られたり歪められたりした形でのみ知られてゐるが、その實際の原文は夢の中で明らかに表はれるといふ事である。斯やうな原文は夢の中では談話の形で表はれる。それ故夢の中の談話は覺醒中に於ける談話から來たものだといふ規則に一つの例外を作るのである(二)。第二には、病歷例の分析試驗を進めて行く中には、數多の强迫が相續いて起つても、それは屢々(その强迫の表現は同一ではなくても)究極は同じ一つのものであるといふ確信を得る事が出來る樣になるのである。强迫は最初

に表はれた場合には振ひ落す事も出來ようが、それが二度目には歪んだ形になつて戻つて來るので氣が附かなくなる。そして多分その防禦的爭鬪に於ては以前よりも遙かに有力に强迫そのものを保持する事が出來るやうにならう。それは確かにその强迫が變形して表はれたといふ理由に依る。併し最初に表はれた形は正しい形であつて、屢々その意味をかなり明らかに表はすものである。吾々が非常な苦心のもとに意味の察知し得ざる强迫觀念を明瞭に解釋した時、患者は余等の構成した考へ、慾望、又は誘惑と恰度同じやうなものが、自分の强迫觀念の起るより以前に實際に起つて、併しそれは存續しなかつたといふ事を余等に語る事が屢々あつたのである。吾々が、現在の患者の病歴から此の例を擧げるとすれば、非常に長時間に亙つて枝葉の問題に立ち入ることになるのである。

【註】（一）Freud, Die Traumdeutung(1900) 七版二八三頁を參照。

それ故に公然と强迫觀念として述べられてゐる所のものは、その最初の强迫言行の歪みに於て、最初の防禦的爭鬪の跡が表現されてゐるものだ。强迫の歪みは强迫を長續きさせる。何故なら意識的考へがその歪みのためにその强迫を正解しないからである。恰度それは夢と同じである。何故なら、夢も亦、互讓と歪みとの產物であり、眼醒めた時の考へに依つて誤解されるからである。

此の意識の誤解は、强迫觀念その物に關して働くのみならず、第二次的防禦的爭鬪、例へば防禦的

定則の如きものに關しても亦働いてゐるものである。此の適例を二つばかり示さう。吾々の患者は、いつも防禦的定則として、aber（けれども）といふ言葉を極めて早口で發音し、それと同時に否認の手振りを示してゐた。或る時此の患者は余に話した。此の定則は近頃變つて、もう äber とは發音しないで abér といふのだといつた。此の新方法の理由をたづねた所、彼は斯う宣言した。第二音綴の無音の e は、彼に取つては非常に恐ろしい外來の及び反對要素の侵入して來る感があつて、何か不安の感をあたへられる。故に彼は、e にアクセントをつける樣にしたのだと云つた。併しこの説明は强迫神經症型の優秀な見本ではあるが、實際は單に理窟附けに過ぎないものである。本當は abér といふのは、同じ發音の Abwéhr（防禦）といふ語に接近してゐるのである。Abwéhr といふ語は、患者が吾々の精神分析の理論的議論中で學んだ言葉である。又ある時は患者は余に如何なる惡魔に對しても有效な省略語である所の主な魔法語について話をした。彼は祈禱する時の最も有力な慈悲ある言葉の頭文字を寄せ集めて、その語を作つたのであつた。そしてその終りにアーメン amen と附け足したのであつた。余は、その言葉そのものをこゝに出す事は出來ない。その理由は、後で直ぐに明瞭に解るであらう。何故なら患者がそれを余に話した時に、余はその語が彼の婦人の名前のアナグラムであるといふ事を感知せずには居られなかつた。即ち彼女の名前にはSといふ字が入つてゐた。それでその

Sの字を一番後に、即ちアーメンamenの前につけた。さうすると彼は自分のSamen（精液）を愛してゐる婦人につけたのである。即ち想像でもつて彼は婦人を相手に自瀆したのである。併し彼自身はこの非常に明瞭な關聯を少しも氣付かなかつた。彼の防禦力は、抑壓されてゐた力に欺かれたのである。この事も亦、防避されようとしてゐる事は、結局はそれを防避するために使ふ方法そのものゝ中に、常に表示されるものだといふ好き一例である。

强迫思考は歪みを受けたものであつて、それは恰度夢の思考が夢の顯著な內容となる前に蒙るのと同樣の歪みであるといふ事は、旣に述べた通りである。それ故に此の歪みの技巧は吾々に取つて興味深いものであらう。吾々が解釋し明瞭にした幾連續かの强迫によつて、强迫の色々の樣式を發表しようとも、妨害する物は何物もないのである。併し此の例を公表する事については、或る條件に支配されてゐる爲め、今は極く僅かの標本をしか載せる事が出來ない。この患者の强迫の中で、鼠の大觀念の如く構成の複雜な、又解釋に困難なものはない。その他の强迫に於ては非常に簡單な技巧が使はれてゐる。即ち省略又は略辭に依つた歪みであつて、此の技巧は特に冗談の場合に適用され得るものだ。併し余の現在の患者に於ては、此の技巧は事柄が理解されるのを防ぐ爲めに使用されて、それに大變に役に立つた働きをなした。

例へば、患者の最も古くて最も得意な强迫は（その强迫は諫言又は警戒に關したもの）次の樣であつた。『もしも、自分が此の婦人と結婚したならば自分の父に何か不幸が起るだらう（次の世に於て。）』といふ强迫である。この言葉の中に、吾々は今までは飛び拔かしてゐたが、分析に依つて吾々には知られてゐた中間の文句を挿入したなら、次の如き一聯の思考を得るだらう。『若し父が生きてゐたなら、私のこの婦人と結婚しようといふ意圖に對して、恰度私の幼年時代にあつた一光景の時の如く、父は非常に怒る事だらう。さうすれば私も亦再び父に對して憤り、出來得る限りの禍ひを父の上に望むだらう。有り難い事には、私の慾望の全能に依つて、その禍ひは確かに父の上に來るだらう』と。

こゝに又一例がある。その解決は省略語を充塡して出來たのである。これも警戒又は禁制的の性質のものであつた。患者には愛らしい一人の姪があつて、患者はその子が大好きであつた。或日こんな考へが彼に起つた。『若しも汝が性交にふけるなら、エルラの身に何事か起るだらう。』それは卽ちエルラ（姪の名）は死ぬだらうといふ事だつた。この省略語を補つたなら次の事になるであらう。『汝は假令知らぬ人とでも性交をするならば、汝は汝の結婚生活に於てはいつでも子供を得る事は出來ない（彼の婦人が不姙だから）といふ事を思ひ出さずにはゐられないだらう。これは汝を非常に悲しませる。そのために、汝は小さいエルラを見るたびに汝の姉を嫉妬するやうになる。そして汝は、エルラを姉

に與へるのを嫌ふ。この嫉妬的衝動は必ずこの子供の死を來すことになるであらう(一)。

【註】(一) 余の著書『機智』Der witz(1905)(四版六三頁)の中の一例は、此の省略技巧が冗談をいふ時に使はれてゐる。その方法を讀者は思ひ起すだらう。『ヴヰーンに機智のうまい喧嘩好きの新聞記者が居つた。非常に辛辣な罵詈をするので、その爲めに彼の攻擊を受けた人々から、度々酷い目に逢はされた事があつた。或る時、彼のいつもの反對者の一人が何か新たに惡行をなして議論されて居た時、誰かゞ斯う云つた。『もしXが之をきいたら、彼はまたきつと耳を撲たれるだらう』と。一寸聞くと馬鹿げたこの語も、若し吾々がこの二句の間に斯ういふ言葉を入れたら變ではなくなる。卽ち『聞いたら』の後に『彼は必ずその人の事について酷評を下すだらう。だから』といふ文句を入れるのである。此の省略的の冗談は、形の上から見ても又その內容の上から見ても、同じく本文に引用した最初の例と同樣であると氣付くであらう。

略辭に依る歪みの技巧は、强迫神經症の代表的なものであるらしい。余は他の患者の强迫思考の中でも、同樣にこれに出會つた。その一例は極めて明らかな例であるが、構成上に於ては鼠觀念と同じであるために非常に興味があつた。これは疑惑の例であつて、主として强迫行爲に苦しんでゐた婦人である。この婦人はニューレンベルグで夫と共に散步に出掛け、ある店に入つて子供の物を色々と買物した。その買物中に櫛が一つあつた。夫は餘り買物が長くかゝるので、途中の骨董屋に或る貨幣が

あつたのに氣がついてゐたので、それを買ひに行つてゐるからと妻君に告げた。そして買物をすませたら、此處へ來るからと附足した。併しその婦人には、彼が隨分長い時間買物に行つて居た樣に思はれた。それで彼が歸つて來た時、婦人は何處に行つて居たのかと聞いた。彼は『なに、先刻話した骨董屋に行つて居たのだ』と答へた。これと同時に、婦人は自分が今子供の爲めに買つた椅を、實際いつも持つてゐたのだか何うだつたかといふ苦しい疑惑に襲はれた。彼女には勿論こんな疑問に對して簡單な精神的の連鎖などを發見する事は出來なかつた。たゞ此の疑ひは何かと置換へられて感じたものだらうと見做して、無意識の思考を完全な連鎖とするには、次の如くに再構成するより他はないのであつた。卽ち『若し貴男がその骨董屋に居たゞけなら、そして私がそれを本當に信じようとするなら、私はたつた先刻買つたばかりのこの椅が、今まで何年も私の持ち物であつたといふ事も、同樣に信じてもよいのだ』と。こゝでもつて此の婦人は、嘲弄的な皮肉な對比物を持ち出したのである。それは恰度余の患者が『これらの二人（父と婦人）が子供をもつ事が確かなら、それと同じ位確かに自分はAに金を返さう』と考へたのと同樣である。此の婦人の場合に於ては、その疑は彼女の無意識的嫉妬に因つてゐる。彼女は自分の夫が骨董屋に行つたといふ期間を、戀愛的な訪問に過したものと考へるやうになつたのである。

余は此の紙上で、强迫思考の心理的意義を論じようとはしないが、斯かる論はその結果に於て非常に價値のあるものである。そして猶ヒステリーや催眠狀態の現象の研究よりも以上に、意識及無意識の性質について吾々の觀念を明かに爲すものである。哲學者や心理學者は、無意識に就ての立派なる理論的見解を、又聞き知識を基礎とし又は彼等自身の在來の定義から考へて發展させてゆくのであるが、彼等が先づ强迫思考の現象の第一步の硏究に依て得らるゝ如き確かな印象に從つて行くならば、それは最も望ましい事なのである。若しさうする事が、彼等の從來の仕事の方法よりも、左程骨の折れるものでないならば、吾々は彼等にそれを願ひ度いとまで思つてゐる。余はこゝでは附け加へて置くのは、たゞ强迫神經症に於ては、無意識的精神過程は、屢々純粹の歪められない形のまゝで意識内に侵入する事があるといふ事と、又その侵入は、思考の無意識的過程の如何なる段階に於ても起り得るもので、且つその侵入の際には、强迫觀念は大部分は非常に長い間に形成されたものと認められるといふ事である。分析者が患者の助けを借りて、强迫觀念が最初に起つた時日を發見しようとする時に、患者は分析の進行につれて益々遠い過去にその時日を置かねばならなくなり、絕えず强迫觀念が起つた最初の時日を、新しく〳〵見出すといふ驚くべき事情は、これによつて說明されるのである。

(b) 强迫神經症の或る心理的特性

現實、迷信、及び死に對する彼等の態度

此章に於て、余は强迫神經症の二三の精神的特性を扱ふ積りである。その特性は、それ自身は何等重要でないものゝ様に見えるが、それは更に重要なる理解に達する途上にあるのである。この特性は余の現在の患者に著しく表はれてゐる。併し余は、その特性が彼自身の個人的特性に歸す事の出來ないものではあるが、彼の無秩序には關係あるものである事を知つてゐる。そしてその特性は、他の强迫症患者に於ては、可成り代表的に出會へるものである事を知つてゐる。

余の患者は非常に迷信家であつた。しかし彼は高等の敎育を受けて知識のある聰明な人であつたから、こんなつまらぬ事は何も信じないといふ事を、時々余に證明する事が出來たのであつた。斯く彼は迷信家であつたと同時に、又迷信家でない處もあつた。彼の態度は、無敎育者の如き自分等の信仰と自分等とを同一物に感じてゐる迷信に比較してみると、明らかに差別があつた。彼は時々全く迷信に陥る事はあるけれど、彼の迷信は强迫的思考から起るものである事を理解してゐた様であつた。此の矛盾した、然かも動搖した態度の意味は、余が今から述べようとする假說の見解から考へたならば

最も容易く了解する事が出來る。患者が此の問題に就て虚心坦懷な態度を持つてゐたといふ事は實は本當の事ではなくて、患者はそれについて二つの別々な矛盾した確信をもつてゐるのが、實際なのだといふ事を假定するに余は躊躇しない。之等の二つの見解の間に於ける患者の動搖は、かなり明瞭に心中の擾亂に對する瞬時の態度から起るものであつた。之等の强迫の一つを打ち負かすと、直ぐ彼は優越感を以て彼の輕信を笑ふのであつた。そして彼の此の確固さを動かす如き事は何事も起らなかつた。併し彼がまだ明瞭にされてない他の一つの强迫、又はこれと同じものである所のもの、即ち抵抗に出逢つた時には、彼の此の輕信的信仰を支持するために不思議な合致が起るのであつた。

併し彼の迷信は敎育ある人の迷信であつた。金曜日を忌んだり、十三の數を恐れたりする様なくだらぬ迷信は持たなかつた。たゞ彼は、豫告や豫言的の夢を信じた。彼は何故か解らぬけれど、恰度その時考へて居た人に出會ふ事が絶えずあつたし、長年忘れてゐて突然思ひ出した人から、恰度手紙をもらつたりする事があつた。これと同時に、彼は正直にも(否むしろ彼の公然たる信仰に忠實であつたのだ)不思議な豫告が、何の結果も齎らさなかつた例も忘れなかつた。例へば或る時、夏休みに他處に出掛けた時、彼はヴィーンに再び生きて歸る事はないだらうと、實際確かに感じたのであつた。彼はまた豫告の大多數は、特に個人的重要さをもつてゐない事を認めた。又彼が長い間思ひ出さなく

て、ほんの二三分前に思ひ出した知人に出逢つた時にも、彼自身とこの奇蹟的な出現者の間にはこれ以上何事も起らなかつた事を認めた。彼は生涯の重大なる事々は、すべて彼に何の豫告もなしに起つた事、及び例へば父の死なども不意に起つて全く彼を驚かした事等も、當然否認する事は出來なかつた。併しこの様な論議も、彼の確信に於ける齟齬には何等の效力もなかつた。これらの論は單に彼の迷信の强迫性を證するに役立つのみで、その事は既に彼の迷信が、彼の抵抗の增減に從つて生じたり又は消えたりする方法から推理されてゐた事である。

勿論余は彼のもつと遠い過去のすべての奇蹟的物語りの理論的說明をしようといふのではない。併し彼の治療期間に於て起つた同じやうな事に就て、余は彼自身が確かに此等の奇蹟の製造に與つてゐるといふ事を彼に證明してやる事が出來た。そして彼が使つた方法をも指示してやる事が出來た。終りになつて、此等の不思議な事をした小奇術的なわざを發見するために、患者は余に助力をしてくれた。豫告や豫感が眞實になつて現はれるといふ信仰を此の患者が持つに至つたに就ては、興味ある幼時の根原を余は發見したのである。それは彼の思ひ出によつて明らかに曝露された。幼少の折、何事か爲す豫定の場合、その時日が定まると度々患者の母は、『その日では私は出來ない。その日では私は臥床に寢なければならないだらう』といふのが常であつた。そして、實際其の日が來ると彼女は確か

に臥床に就いたのであつた。

患者は、彼の迷信の支柱となつてゐる此の種の經驗を見出す『必要』があつたといふ事は誰かである。且つ彼はさういふ理由で、吾々もよく出合つてゐるが日常生活に於ける『偶然の一致事』に沒頭し、その一致事の不足を彼の無意識の力で補つてゐたのである。余は多くの他の强迫症患者に於ても之と同樣の必要に出會つた事があつた。そして、それ以外のもつと多くの患者にもこの必要の存在がありはしないかと思つた。余は强迫神經症の心理的特性の見地から、これは容易く說明が出來ると思ふ。此の病氣に於ては既に說明した如く(一六四頁參照)、抑制は健忘に依つて行はれるのではなく、感情の撤退に依つてもたらさるゝもので、原因的の連接が分離する事で爲されるのである。これらの抑制されたる連結は、或る朧げなる形になつて存續する樣に見える。(余はこの形を他の處で眼內知覺に喩へた(一)。)そしてその連結は投出作用 Projektion の過程を取つて外部の世界に移される。そしてその外部世界に現はれる事によつて、意識から消されたといふ證據となるのである。

【註】(一) 日常生活の精神病理(一九〇五年)十版、二八七頁參照。

矢張り强迫神經症患者の有するもう一つの精神的必要で、ある點に於ては今擧げた患者に關係してゐるものは、彼等の生活の『不確實性の必要』卽ち疑ひの必要である。此の特性を考究することは深

く本能の調査にまで達せねばならぬ。不確實といふものゝ創造は、神經症がその患者を現實から追ひ出し、世の中から離れさせようとして用ひる方法の一つであつて、總ての精神神經症的障碍の對象物の中の一つである。患者自身が確實さを避けて疑惑の中に居る樣にする爲めに、患者はどの樣な努力をなすかは明瞭過ぎる事である。或る患者は此の傾向を柱時計や懷中時計に對する嫌惡といふ事で明らかに示した。それは時計は少くとも一日の時間を確實に示すからだ。且つ又患者がこの樣な疑惑を拂ふやうな道具（例へば時計の如き）を無效にするために、無意識的策略を用ふるといふ傾向を示した。余の現在の患者は、彼の爭鬪を決定するのに役立つやうな事實の知識は、如何なるものでも回避するといふ事に非常な才能を發揮してゐる。だからこの患者は彼の結婚問題に最も關係の深い彼の婦人に就ての事柄には無智であつた。彼は表向きは誰が彼女に手術を行つたか、その手術は片方であつたか兩方であつたかといふ事は知らなかつた。彼は忘れた物を思ひ出し、見逃した事を見出すやうに强ひられねばならなかつた。

强迫神經症者が感ずる『不確實』と『疑惑』とに對する偏愛は、すべての人類が不確實な意見をもつてゐる問題や、及び吾々の知識も判斷も必然的に疑ひに向けられるやうな問題の方へとわざ〳〵選擇して彼等の考へを導いて行くのである。此の種類の問題の主なるものは、父たる事、壽命の長さ、

死後の生及び記憶である。記憶に就いては、吾々は記憶の確實さに對する何等の證明なしにでも、それを信ずる習慣をもつてゐる(一)。

【註】(一) リヒテンベルグ Lichtenberg 曰く。『天文學者が月に住む者の有るか無いかを知つてゐるその確實さは、自分の父が誰であるかを知つてゐるのと同じ程度の確實さであつて、彼の母は誰であるかを知つてゐる程の正確さではない』と。文明は非常に進歩し、人々は彼等の推理を彼等の判斷の證明と同じ標準に置き、婦人家長制度より一歩ふみ出して男子家長制度に到る事に決したのであつた。大きな人の上に小さな人の乘つてゐる有史以前の象は父系の表示である。アテーナは母はなかつたが、ツォイスの頭から飛び出したのである。法廷で證する人、即ち證人 witness は、獨逸語では、Zenge (文字通りの意味では begetter 父) といふが、その役目は生殖の行爲に於て男子によつて爲される故である。象形文字に於ても witness といふ字は男性器で繪の如く表はされてゐる。

强迫神經症に於ては、記憶の不確實は、徴候の形成の一助として出來るだけ廣い範圍に用ひられてゐる。吾々は壽命や死後の生命の問題が、患者の思想の實際の内容内に於て演じてゐる役割を直ぐに知ることが出來る。併し余は今、一つの適當なる轉換として、余の患者に於ける特別の迷信的特性の一ツを先づ考へて見よう。その特性については既に述べた事もあるし、そのために讀者を一人ならず困らした事もある。(二〇四頁エルラの項參照)

余は患者が、善きにも惡しきにも係らず自分の思想、感覺、慾望等に歸した所の『全能』(A)を引照しよう。此の全能の觀念は妄想であり、强迫神經症の範圍を越えてゐるといふ事は確かに宣言し度い事であると余は思ふ。併し余はもう一人の患者に、之と同じ確信をもつた者に出會つた事がある。この人は旣に以前に健康に復して正常な生活を送つて居る。實にすべての强迫神經症者は、此の確信をもつてゐるかの如く振舞ふのである。此等の患者が自分の力を買ひ被りすぎてゐる事について、何等かの說明をなさねばならぬのが吾々の任務である。此の信仰は、幼年時代の誇大妄想狂の遺物を率直に承認したものであるといふ事を、吾々は有無をいはさずに想定して、患者に彼の確信の根柢を求めようとするのである。それに答へて患者は二つの經驗を擧げた。患者は自分の病氣が初めて水治療院で快くなり、又快くなつたのはそこにきた時だけであつたのだが、その水療院に二度目に行つた時、彼はもと自分のゐた部屋に置いて貰ふ樣に賴んだ。何故なら、その部屋の位置は看護婦の一人との關係に好都合だつたからである。所がその部屋は生憎塞がつて居て、老敎授が入つてゐるといふ事だつた。これを聞いて彼は自分の治療の成功の見込みが非常に減らされたと思つた。その反動として老敎授に對して意地惡い考へを起して『彼は中氣の發作か何かで急に死んでしまへばよいに』と思つた。二週間後に彼は、死骸の觀念に亂されて眠から覺めた。朝になるとその敎授は本當に中氣の發作を起

して死んで、自分の部屋に運ばれたといふ事を彼は聞いた。その運ばれた時間が恰度彼が眼をさました時間だつたといふ。第二の經驗は、年は若くはないが、愛されたいと望んでゐる一人の未婚婦人に關した事だつた。その婦人は彼に非常に注意を注ぎ、ある時彼に對して明らさまに愛して貰へるだらうかどうかと聞いた。彼ははつきりせぬ遁辭の挨拶をした。二三日經つてから彼女が窓から身を投げたといふ事を彼は聞いた。彼はそれから自責の念に驅られた。そして若し彼女を愛してやつたなら、自分の力で彼女の生命を救へたらうにと思つた。この樣にして彼は自分の愛と憎惡との『全能』を信ずる樣になつたのであつた。吾々は愛の全能を否定せずに、これらの例は兩方とも死に關してゐるといふ事を指示する事が出來る。且つ又次の如き明瞭な說明を與へる事が出來る。卽ち他の强迫神經症患者と同樣に、此の患者も外界に對する彼の憎惡感情の効力を大きく見すぎる事を强ひられてゐる。何故なら、彼の憎惡感情の內的の精神的効力の大部分は、彼の意識的知識から逃げ出てしまつたからだといふ說明である。彼の愛は――否むしろ彼の憎惡は――實際に壓倒的である。彼がその根原を理解する事が出來なくて、又それに對して空しく防禦を努めてゐる所の、その强迫思想を創造したものは、確かにこの愛と憎惡とである(二)。

【註】(一) 思想の、否もつと正確に言へば慾望の全能は、原始時代の人々の精神生活に於ける本質的要素として

今まで認められて來た。(『トーテムとタブー』參照)

此の患者は、死といふ問題に對して非常に奇妙な態度をもつてゐた。誰でも死ぬと彼はいつでも大に同情した。そして葬式には信心深く參列した。それ故彼は兄弟姉妹たちから『死屍の鳥』といふ異名をつけられてゐた(B)。彼は想像中で絕えず人々を亡い者にしてゐた。それでその遺族に心からなる同情を示さうとしてゞある。彼が三歲から四歲の間に起つた一人の姉の死は、彼の空想の大部分を占めてゐた。それは其の期間內の彼の子供つぽい不行狀と密接な關係を持つ樣になつた。その上、彼の心は如何に小さい時から父の死に就ての考へで占有されてゐたかも吾々は知つてゐる。そして又彼の病氣そのものが、その事件(父の死)に對する反動だと考へる事も出來る。その事件に對して彼はその五ヶ年も前から强迫的慾望をもつてゐたのだ。彼の强迫恐怖が不思議な擴張をして、次の世界にまで達したといふ事は、彼が父に對して持つた死の願望に對する報償に外ならないのだ。それは父の死後十八ヶ月經つて、父の死に對する彼の悲しみが復活した時に起つたのだ。そしてそれは現實に反抗し、近頃になつて總ての空想中に表はれてきた慾望を尊敬して——彼の父の死といふ事實を否定するために工夫されたものである。卽ち數箇所(一九九頁及び二〇四頁)に於ける、『次の世界に於て』といふ語は、『若しも父がまだ生きてゐたとしたなら』といふ語に飜譯されてゐるのである。

他の强迫神經症者の行爲を見ても、假令余の今の患者のやうに幼時に死といふ現象に直面こそしなかつたけれど、余の今の患者と大した差異はないのである。彼等の思想は他の人達の壽命とか死の可能性などによつて、絕えず占領されてゐるのである。先づ初めに彼等の迷信的傾向はこれ以外の內容は持たず、これ以外の根源は何もないだらうと思ふのだ。併し此等の神經症患者は、主として彼等が未解決で殘しておいた爭鬪を解決してくれるものとして、死の可能性といふ助力を必要としてゐるのだ。彼等の主なる特性は、決斷をする事が出來ない事である。特に愛の問題に於てはさうである。彼等は如何なる決斷でも出來るだけは延引させようとする。何れの人に決めようか、又ある人に對して如何なる方法を取らうかといふ事が定まらない時は、彼等はどうしても昔の獨逸の法廷を模範にして選ばねばならないのである。獨逸の法廷に於てはその論爭に判決が下らない前に、訴訟は訴訟當事者の死によつて終らせられるのである。斯くの如く彼等の生活に入り來るすべての爭鬪に於て、彼等は自身にとりて重要なる人々又は大概は愛してゐる人々の死が、惹起されはしないかと用心してゐる。彼等の兩親の內の一人とか、競爭者だとか、何れに定めようかと迷つてゐる二人の愛人の中の一人とか、といふ人の死である。併し恰度此の點に於て、强迫神經症に於ける死のコンプレクス論は强迫神經症の本能的生活の問題に接觸して來た。それで吾々は今度はその問題に向はう。

（註）（A）全能の觀念は發達の過程に經て來る全能念慮であつて、發達と共に放棄されてしまふものであるが、それが殘留してゐるのである。（譯者）

（B）不吉の鳥といふ意味ならむ。（同）

（C）强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑惑との根原

心理的力の相互作用のもとに强迫神經症は成立したものであるが、その心理作用の了解を得たいならば、患者が大人になつた時も又子供の時も同樣に、病氣を起したその刺戟的原因となつた問題について、患者から聞いた所の事に戻らねばならぬ。彼は二十代の時、愛人ではない他の婦人に對して結婚しようといふ誘惑に出會つて病氣になつた。そして彼は結婚に必要なすべての準備を延期させて、此の爭鬪の決定を避けた。この延期させる法は、彼の神經症から與へられたのである。彼の愛人と他の少女との選定に當つての躊躇は、父の感化と、愛人に對する愛との爭鬪に縮めることが出來る。言葉を換へて云へば、彼の父と彼の性的對象物との間の爭鬪的選擇、即ち患者の追憶や强迫觀念から判

斷して彼の遠い少年時代にすでに存在してゐたところの爭鬪的選擇に縮められ得る。彼は一生涯、愛人と父とに關しては、間違ひもなく愛と憎みとの爭鬪を經續せねばならなかつたのである。彼の復讐の空想や物を識りたい强迫及び路傍の石を除く事等の强迫的現象は、彼の感情が調子外れだといふ事の證據となつてゐる。これらの現象は或る程度までは理解し得べきものであり又正常なものである。彼の婦人は、最初には拒絕し後には冷淡であつたので、彼が彼女に敵意をおこしたのは幾分か許さるべきことである。然し彼と父との關係は、吾々が彼の强迫思考の飜譯から了解した通り、やはり感情の不調によつて支配されてゐた。彼の父にも亦吾々が確かに證明し得る如く、彼の子供時代にもつた敵意に、ある言ひ譯をあたへたにちがひない。彼の婦人に對する態度は、愛情と敵意との混合物であつて、彼の意識的認知範圍内に於て非常に發展した。甚だしい時には彼は自身の否定的感情の程度と力とに就いて自身を欺いたりした。併し之に反して、彼が自分の父に對して抱いた敵意は、一度は强く意識した事はあつたけれど、彼の認知範圍から既に以前に消失してゐた。その敵意が再び彼の意識に戻つてくるのは、最も激しい抵抗に反抗してゐる時のみである。彼が幼時父に對して持つた憎惡を抑壓したといふ事は、彼の其後の生涯を神經症の支配下に置いた原因として、認める事が出來るだらう。

此處で箇々に擧げた患者の感情の爭鬪は、互ひに獨立せるものではなく、一對になつて一緒に相結ばれてゐるものである。彼の婦人に對する憎惡は父に對する愛着と一對になり、彼の父に對する憎惡は婦人への愛着と一對になつてゐるのである。併し此の單純化から起つた二つの感情の爭鬪、即ち彼の父に對する關係と、婦人に對する關係との反對性、及び此等の二つの關係の範圍內に於ける愛と憎惡との間の矛盾は、その內容に於ても根源に於ても相互に何等の關聯はないのである。此等の二爭鬪のうち、第一のものは總ての人の愛の對象の選擇の際に常に起る所のもので、男性女性何れかの選擇に對して起る正常なる動搖に相當するものである。これは古くからよく云はれてゐる『お父さんとお母さんとどつちが好き？』といふ質問によつて、子供の心に最初に氣付かせられる事である。これは兩性に對する彼の感情の比較的の强さが何うであらうとも、又彼が終には決定すべき性的目標が何であらうとも、彼の一生に附き纒つてゆくものである。併し普通は此の反對性は間もなくその嚴しい矛盾性を消失する。頑固な『此れか彼れか』といふ特性を消失する。正常な人に於ても、一方の性をより一層尊敬することは、片方の評價を下げる事によつていつも目立たせることが出來るのであるが、其處には『兩者の不同』といふ要求を滿足させる餘地が見出されるのである。

愛憎間のもう一つの爭鬪は、吾々に更に不思議な感を起させるものがある。愛の始まりは屢々憎惡

と認められる事があり、又愛はその滿足を拒まれたなら、容易く幾分は憎惡に變へられる事を知つてゐる。もつと激しい段階に於ける愛に於ては、二つの相反した感情は、恰も互ひに競爭してゐるが如く、暫らくの間は相竝んで存在し得ると詩人は言つてゐる。併し愛と憎惡とは長年の間共存して、兩者とも同一人に向けられ、然も兩者とも最强の程度のものであることは、驚かざるを得ないことである。實は吾々はこの强烈な愛は、旣に以前に憎惡を征服してしまつたか、或は憎惡に征服されてしまつたらうと豫測してゐたのであつた。處がこの二つの反對物が存續してゐるといふ事は、極めて特殊の心理的狀態の下に、無意識內に於る狀態の共力に依てのみ出來得るのである。卽ち愛は憎惡を征服する事には成功しなかつたが、憎惡を無意識內に追ひ下げる事は出來たのである。そして憎惡は、無意識內に在つて意識の働きによつて破壞される危險から遁れて存續する事が出來、又成長する事さへ出來たのである。斯樣な狀態になると、意識的の愛は、槪して反動として特に非常な强大なものとなる。そして憎惡を永久的に壓倒して行けるだけの强さを常に持つことが出來るやうにして置くのである。戀愛生活に於ける斯かる不思議な狀態の出現に就いて必要なる條件となつてゐるものは、極めて初期卽ち幼年時代の有記憶以前の或る時期に、この二つの相反する愛憎が分離し、その一つが――多くの場合は憎惡が――抑壓されてゐる事から起るのである(二)。

【註】（一）初めの診療期に於ける此點に就ての論と比較せよ（一〇四頁參照）。ブロイレルはその後この感情群を記述するに當つて、雙存性 Ambivalent といふ適當なる語を紹介した。余の『强迫神經症の素質』文集（一九一三年）を參照せよ。

吾々が强迫神經症患者の多數を研究してみるならば、余が今此の患者に於て發見した如き愛と憎惡との關係は、强迫神經症の特性中で最も屢々起るものであり、最も顯著で從つて最も重要な特性であるといふ印象を感じないわけには行くまいと思ふ。併し神經症の選擇の問題を、本能生活との關係に容れようとする誘惑が如何にあらうとも、斯かる過程を避くる理由は十分にある。何故なら吾々は如何なる神經症に於ても、症狀の背後には同じ抑制された本能を見出すといふ事を忘れてはならぬ。結局無意識に於て愛により抑制されてゐる憎惡は、ヒステリー及びパラノイアの發病にあづかる所が非常に多大である。此處に於て、一定の結論を作らうとするには、愛の性質をあまり知らな過ぎるのである。そして特に愛に於ける『陰性』の要素（こと、リビドーの加虐的成分との關係は、全く不分明になつてゐる。それ故これより得るものは、一時的の假りの說明にすぎないものと考へねばならぬ。故に吾々は次の如く考へる事が出來る。卽ち余等の今述べてゐるこの無意識的憎惡の場合には、愛の加虐的成分はその構成的原因によつて特に强く發展し、從つて早期の而かも完全な抑制を受けたものと

考へ得るのである。そして吾々の觀察した神經症的現象は、一方に於てはその反動として誇大された愛情の意識的感覺から生じ、又他方に於ては、憎惡の形となつて無意識の中に存してゐる加虐性から生ずるといふ事を、吾々は考へ得るのである。

【註】（一）『ジンポヂウム』Symposium の中で、アルチビアデスがソクラテスに就て言つてゐる『何度となく余は彼が死ねばよいがと思つた。けれど、それでゐながら余は、若しも彼が死なねばならなくなつたら嬉しいどころか、どんなに悲しむかは解つてゐる。だから余は全く途方にくれてゐるのである』と。（Jowett の譯）

愛と憎惡との此の顯著なる關係は、如何なる方法で說明されようとも、その關係の存在は、吾々の此の患者の例によつてしたる觀察によつて疑ひもなく確立されるのである。吾々が强迫神經症の不可解な過程を追求してゆく場合に、その過程を此の今述べた如き、一つの要素に關聯せしめて行くならば、容易に追求できるものだといふ事を發見したのは喜ばしい事である。若し强い愛が、それと殆んど同程度に强い憎惡によつて反抗され、同時にその憎惡と離れ得ざる樣に結びつけられてゐたならばその直後に來る結果としては、意志の部分的の脫力と、また愛の動機力によつて起される所の行爲の決斷力の喪失とが起るのである。併し此の決斷力の喪失は長い間單一の行爲の集合だけに限られてゐる

るものではない。なぜならば、第一に愛人の行爲で一つの主要なる動機に關係してゐないものがあらうとは思はれないからである。第二には性的事柄に於いて、人々は標準としての力を有してゐるもので、他の反射行爲のすべてが皆それを標準としてゐるのである。第三には、『轉位』の裝置を十分に使ふのは强迫神經症患者の心理的固有の特性である。それ故に決斷力の喪力は、患者の行爲の全範圍に亙つて開展してゐるのである。

是に於て吾々は强迫神經症患者の精神生活の中に出會ふが如き、强迫と疑惑とに就いて說明ができよう。疑惑は患者自身の不決斷の內的知覺に一致したものである。彼の不決斷は、憎惡が愛を抑制する結果であつて、如何に意圖された行爲であつても、それを占有してその決行を妨げるのである。疑といふのは、本當は彼自身の精神內にて最も確實であるべき筈の『愛に對しての疑』である。そして疑は、他の總べての物の上に散り擴がり、特に最も無意味な最もつまらぬものに置換へられ易いものである(二)。自己の愛に對して疑をもつ人は、それよりも更に小さい物に對して疑を持つだらう。否むしろ疑はねばならぬのである(三)。

【註】（一）冗談をいふ時の技巧としての『瑣事に依れる代理』の使用を參照。(Freud, Der Witz(1905) 四版六五頁。

（二）ハムレットがオフィリヤに向つて歌つた戀歌の中にも斯ういふのがある。

『星が火である事を疑ひ、
太陽が動くのを疑ひ、
眞理がいつはりであると疑つても、
吾が愛は決して疑ふな。』

患者自身に、自分の保護的方法が不確實だと感じさせ、その不確實さを追拂ふために、その保護的方法を絕えず繰返させるものは此の疑惑なのである。彼の愛に就いては、彼の初めから抑止された決斷の實行不能と同じ様に、彼の保護的行爲そのものをも結局は實行不能に終らせてしまふのは、矢張り此の疑惑である。研究の初めに於て、余は强迫神經症患者及び殆んど正常と思はれる人の不確實さについては、猶ほ一つの更に一般的の根原を假定するに到つた。例へば、もし余が手紙を書いてゐる時、他人より質問を受けて妨げられたとすれば、後刻その妨げのために書き落しはなかつたかといふ全く當然な不確實さを感じて、再び讀み返さねばならぬのである。これと同じく强迫神經症患者が、例へば祈禱の時に感ずる不確實さは、絕えず祈禱中に混入して妨害してゐる無意識的空想に依るものと考へられる。此の假說は正しい。しかし、吾々がもつと初めに述べた事と容易く一致する。彼の保

護的方法を持續したかどうかといふ患者の不確實さは、無意識的空想が妨害する影響だといふ事は眞實である。併しこれらの空想の內容は、明らかにこれと反對の衝動であつて、それを避けるのが祈禱の目的であつたのである。或る時――それは、余の今の患者に非常に明らかであつた。何故なら、邪魔をする要素は決して無意識の儘では居らず明らさまに表はれて來るからである。祈禱で患者が使ひたかつた言葉は『神よ彼女を守り給へ』といふのであつた。併し反對の『勿れ』といふ語が突然に無意識の中から出てきて祈禱の文句の中に入つた。彼はこれは呪ひの仕事であると解した。（一六〇頁參照）若しその『勿れ』が云ひ出されずにあつたなら、患者は自分が不確實の狀態にあるのだと氣が付き、祈禱を限りなく延ばしたであらう。併しその『勿れ』は明瞭になつてきたので、彼は祈禱を止めたのである。併し止める前に、彼は他の强迫症患者の如く、その反對の感じの入込むのを防がうとしてあらゆる手段を試みた。例へば祈禱を短くしたり、早口に云つたりした。これと同樣に、他の患者もこれらの保護的行爲を他の物から離さうと努めるのである。併し長い間には此等の技巧的手段も何等の役には立たなくなる。若し愛の衝動が或る瑣々たる行爲に置換へて成功したとしても、すぐに敵意の衝動が起つて愛の新しい地位にとつて代り、愛が爲した所の事をすべて取り除いてしまふのである。

强迫症患者が、精神生活の安全中に弱點を指摘する事が出來たなら、といふのは、記憶といふ事の信用できぬ事を明らかに知つたなら、此の發見によつて患者は自分の疑ひをあらゆるものに擴げるやうになる。卽ち旣に爲してしまつた行爲の上にも、或は今迄には愛と憎惡のコムプレクスに關係のなかつた行爲の上にも、又は全過去の上にまでも疑ひをかける事が出來る樣になるのである。余は、かの婦人の例をこゝで思ひ出せる。彼女は或る店で櫛を買つたが、夫に疑ひを持つ樣になつてから、彼女はその櫛を今まで長い間持つてゐたのではないかと、實際に疑ひ出したのであつた。此の婦人は、明らさまに次のやうに語つてゐたのではないだらうか。『若し私があなたの愛を疑ふ事が出來るなら、（これは夫に對する彼女の愛の疑の出現に他ならぬ。）私はこれも疑ふ事が出來る。そして何でも彼でも疑ふ事が出來る。』と。そしてこの言葉は、吾々に神經症的疑惑の隱れた意味をあらはしてゐるではあるまいか。

强迫は他方に於ては、疑の報償として、及び疑を證明する所の禁止の、ゆるし難き條件の緩和としての試みである。若し患者が『轉位』の助けによつて遂に禁止せられた目的の一つを決斷する事に成功したならば、その目的はどうしても爲し遂げられねばならぬのである。此の目的は彼の本源的のものではない事は事實であるが、その目的の中に堰き止められたる力は、その目的が代用さるべき行爲

となつて解放されるための出口を見出す機會を見逃す事は出來ない。斯くして此の力は、愛情衝動或は敵意衝動が、その解放の道の支配を奪ふ事に從つて、ある時は命令として、或る時は禁制として感じられるのである。若し偶々、强迫的命令が從はれないやうな場合には、緊張は耐へ難いものとなり、非常な不安の形となつて患者に認められる。併し代用さるべき行爲に至る道は、たとへ轉位が極めて些小なものに行はれるのであつても、非常に競爭されてゐるので、斯かる行爲は、概して避けようとされてゐる所の衝動に近い聯絡を探つてゐる所の保護方法の形をとつてのみ成しとげられるのである。

更に一種の『退行』Regression によつて、最後の決定と準備的行爲とが置き代り、卽ち思考は行爲に置換へられ、代理的行爲の代りにその行爲に先立つた或る思想が、强迫の全力を以て自己存在を主張するのである。此の行爲から思考へ逆行するこの『退行』は、多少著しいものである。それ故に强迫神經症の一例は、强迫思考（卽ち强迫觀念）や强迫行爲の特性を、この言葉（卽ち强迫觀念とか强迫行爲とかいふ言葉）のもつと狹い意味に於て表はすのである。併し斯かる强迫行爲は、二つの反對衝動間に於ける互讓形成の形で一種の和解を構成する故にのみ可能であるのである。何故なら强迫行爲は、（病氣が長引けば長引くほど明瞭である。）段々と幼時の性的行爲である自慰的性質に接近してゆく

傾向があるからである。斯樣にして、神經症の形を採つて愛の行爲があらゆるものに成し遂げられてゆく。併しそれは『退行』の新しい種類の助力を借りてのみ成しとげられてゆくのである。なぜならこの樣な行爲は、もう一人の人卽ち愛と憎惡との對象物には最早や關係はないので、幼時に起るが如き自己愛的行爲であるからである。

行爲から思考へ戾る最初の『退行』は、神經症の發生に關係ある他の一つの要件に依て容易くさせられてゐる。强迫症患者の病歷は偸視症的及び好奇心的本能 scoptophilische und epistemophilische Instinkt の早期發達及び早期抑制を殆んど明らかに表はしてゐる。そして吾々も知れる通り、此の患者の幼年期の性的活動力の一部は、その本能によつて支配されてゐたのである(二)。

【註】(一) 强迫症患者に於ける知的能力の平均が非常に高いといふ事は、此の事實に關係してゐる。

强迫神經症の發生に於て、加虐的な本能的成分のあづかる所が多大だつたといふ事は吾々は旣に述べた。好奇心本能が、强迫神經症患者の性質中に非常に優勢に含まれてゐる時には、不滿といふ事が主要な徵候となる。そして思想の過程そのものが性化される。思想の內容に正常に附隨してゐる所の性的快感が、思考そのものゝ行爲と置換へられるのである。そして一聯の思想が決斷に達した時の滿足は、性的滿足として經驗されるのである。好奇心本能が關係してゐる種々の形の强迫神經症に於て

は、好奇心本能の思考過程に對する關係は、その本能が行爲に出ようとして無益に努力してゐる力を引寄せ、それを他の種の愉快なる滿足を得る可能性のある思想の範圍に轉入させるのに非常に都合よくさせるのである。斯様に好奇心本能の助けに依つて代理になるやうな行爲は、今度はそれ自身が思考の豫備的行爲に置換へられることになる。その結果として全過程はその特性もろともに新たなる世界に轉移される。それは恰もアメリカに於て、時々全家屋が一ケ所から他所へ移される事があるのと同様である。

さて、これから余は上記の論を基礎として、强迫神經症の容態に强迫的性質を與へる所の、今まで長年研究されてきた心理的特性を決定しようと思ふ。思考過程が强迫的であるといふのは、精神系統の運動神經末端に於て、或る禁止（相反する衝動の爭闘による）の結果として思考過程が、質についても量についても、行爲のためにのみで常に置換へられてあつた所の精力を消費して行はれる時である。卽ち換言すれば、强迫的思考とは或る行爲を逆に表す作用をなす所の思考であると云へる。思考の過程といふものは、感情を解放したり、又外部の世界を改變したりするための行爲ではなくて、恐らくは、より高い標準にて、精力のより小さい轉位を以て（經濟的根本をもつて）導かれるものであるといふ余の考へには、誰も疑問を抱かぬであらうと思ふ。

斯かる大なる烈しさを以て、意識の内に進入してきた强迫思考は、次にはそれを解放せんとせる意識的思考の努力に對して、防備堅固にされねばならぬ。吾々も旣に知つてゐる如く、强迫思考が意識的にならぬ前に受けた『歪みの作用』に依て、此の防備はなされるのである。併しこれのみが唯一の方法ではない。加ふるに箇々別々の强迫觀念は、歪められたのみならず、最もたやすく理解される最初の位置から他の位置に殆んど移されてゐる。此の結果を考究してみると、まづ第一に、病氣の狀態とそれから生ずる强迫との間に、ある一間隔の時間が嵌め込まれて、その原因關係の意識的研究を迯はせようとしてゐるのである。第二には、强迫の內容が一般化される事によつて、それ自身の一定位置から取り出されるのである。余の患者の『識りたい强迫』はこのよい例である。(一五六頁參照)併しもう一人の患者の例はもつと適當な例であらう。これは一人の婦人が自分の身につける飾物は、もう決して附けてはならぬと自分で禁じてゐた。併し此の嚴しい禁止の原因は、唯ある特別の一つの寶石に關してゐたゞけだつた。彼女は自分の母がその寶石を所有してゐるのを羨ましがつた。そして、いつかはそれが自分に讓られる事を望んでゐたのである。終りに、若し吾々が內容の『歪み』と、言葉の『歪み』との區別を知りたいなら、意識がそれを解かんとする試みに對して、それを强迫が防ぎ守らむとする方法がもう一つあることを知らねばならぬ。それは、不定の卽ち曖昧の言葉使ひの選擇

である。誤解された後は、その言葉使ひは患者の譫妄狀態の中に進んで行き、患者の强迫がそれ以上の如何なる發展或は代理の經過を取つたにしても、それは誤解の上に基礎をおくものであるから、原語の正當の意味を基礎としてゐないのである。併しよく觀察してみれば、譫妄狀態といふものは現在意識內にない所の强迫的事柄や言葉に、絕えず新しい關係を作りやすい傾向を有するものである。

余は再び、强迫神經症者の本能的生活に戾つて、それについて再び附言し度いと思ふ。余の患者は彼の他のすべての特性以外に、嗅覺過敏 renifleur (osphresiolagniac) であつた。彼の話によれば、子供の時に恰度犬のやうに人を誰でも嗅ぎ分けたものであつた。大人になつてからでさへも。彼は他の多くの人々よりも、嗅覺は銳かつた(一)。余は、ヒステリーの患者と矢張り强迫神經症患者で、これと同じ特性を持つたものに出會つた事があつた。そして余は、子供時代以來消滅した嗅覺過敏の傾向は神經症の發生に與る所があることを認める樣になつた(二)。是に於て余は嗅覺の萎縮(これは人が直立の姿勢を取るやうになつて明らかに生じた結果である。)と、その結果としての彼の嗅覺過敏の器官的抑壓とが、彼の神經症の感受性の發源に大いに關係があつたか否かといふ一般的の質問を起し度く思ふ。これは文明の進步と共に抑壓の犧牲となるものは、何故に確かに性的生活であるのかといふ事の說明を幾分かあたへるであらう。何故なら吾々は、下等動物に於ては性的不能と嗅覺の作用との間に

親密なる關係の存することを昔から熟知してゐるからである。

【註】(一) 彼は子供の時に、非常に強い弄糞症的傾向を有してゐたことを附記する事が出來る。この點について彼の肛門性感のあつたことはすでに認められる。(一八六頁參照)

(二) 例へば崇物症 Fetishism の形に就いて等。

余は此の論を終るに際して希望を述べ度い。余の本論は何れの點に於ても不完全ではあるが、少なくとも他の研究者が、此の問題の更に深い研究に依つて强迫神經症の上に更に明解を加ふる刺戟とならむ事を望むのである。この神經症の特性は何であるか、ヒステリーとの差は何であるかといふことは、余の考へでは本能的生活の中に於て見出されるのではなく、心理的關係に在るのであると思ふ。余は余の患者と別るゝに際して、彼について余が感じた所を紙にかき殘した。それは、彼が恰も三重人格に分裂されてゐたかの樣である。卽ち一つの無意識的人格と、彼の意識が兩者の間を往來し得た所の、二つの前意識的人格とに分裂してゐた樣である。彼の無意識は、初期に於て抑制せられ、惡衝動として述べられた激情の衝動を含んでゐた。正常な狀態の時は彼は親切で快活で物解りがよかつた。卽ち聰明なる優秀なる人物であつた。併し彼の第三精神組織に於ては迷信と禁慾主義とに伏してゐた。斯くの如く彼は二つの信條と、二つの異つた人生觀とを有する事が出來た。此の第二の前意識

的人格は、主として彼の抑制されたる慾望に對する反應構成を含んでゐる。そしてこの第二の人格は若し病氣がもつと長引いた時には、正常の人格を呑みつくしてしまふかも知れぬといふ事が容易く豫測される。余は今、强迫行爲に非常に惱んでゐる婦人を研究する機會を有してゐる。彼女も同樣に樂天的な活氣ある人格と、非常に陰鬱な禁慾的な人格とに分裂されてゐた。彼女はその第一の人格を彼女の表向きの自我として表はした。併し實際は彼女は第二の人格に支配されてゐたのであつた。これらの心理的組織は、兩方とも彼女の意識に接近してゐた。併し彼女の禁慾的人格の裏には『彼女の存在』の無意識部分が認められ得る。即ちそれは彼女にとつては、知られてゐないもので、且つ昔からの長い間抑制せられた『或目的に對して進む衝動』から成り立つてゐる『彼女の存在』の無意識部分である(二)。

【註】(一)　患者の精神的健康は、余が此處に報告したる所の分析によつて恢復した。彼は多くの他の立派な有望な青年等と共に、世界大戰に於て戰死したのである。

何故の戰爭か？

,,Warum Krieg?——Ein Briefwechsel zwischen A. Einstein und S. Freud,‘‘ (1933).

アインシタインとフロイドとの間に交されたる戰爭に關する覺書

一

親愛なるフロイド！

國際聯盟竝びにその在巴里國際精神文化共同研究所の薦めに依り、私は自分の勝手の人物を擇び、勝手の問題に就いて意見を交換することゝなり、此處に現在の狀勢から文明に取つて最も重大であると思はれる問題に就いて貴方と論じ合ふ、又となき機會を得た事を、甚だ幸福に思ふものであります。即ちその問題とは、如何なる方法に依て、人類を不幸な戰爭から解放し得るか、と云ふ問題である。技術の進步と共に、此の問題が文明人に取つては、生存上の問題と化したと云ふ事は、概ね人々の認める所でありながら、其の解決のために致した熱心な努力も、是迄は無殘にも蹂躙されて來た。

此の問題を實際的にも、職業的にも扱つてゐる人々の間に、自力に對して全く絕望的な氣持から、絕えざる科學的研究に依て人生の凡ゆる問題に著しい貢獻を爲した人々に向つて、一つ此の問題についての意見を徵して見やうとの希望が、生れて來たのだと私は信ずる。私として見ると、平生私の研究してゐる方面では、人間の意慾と感情の深みに徹するわけには行かないから、私に出來る事と云へ

ば、まづ問題を設定して、多少外面的な解決策は私の方で豫め片付けておいて、貴方には、人類の本能生活に關する御蘊蓄を傾けて、問題を解明して戴くやうに仕向ける事だけである。私としては、貴方が教育の方法を指示して下さるのを期待してゐるのであるが、其の方法とは、或る程度まで政治的ならぬ道に於いて、心理的な障害——心理學の素養の淺い人々は充分に感じては居ながら、其れはどう云ふ關係から來てゐるか、どうしたら變化させられるか等に就いては、殆ど見當のつかない如き、さう云ふ障害——を克服し得る如き方法である。

私自身は、國家的色彩を帶びた感情には緣のない人間であるから、問題の外部的な、或は組織者側の面は極めて單純に考へられる。——國々は、相互の間に持ち上がる凡ゆる紛爭の解決の爲に、一つの立法し、司法する機關を設置する。國々は立法機關に依て制定された法規に服し、一切の紛爭に裁判を起し、其の判決に無條件に服從し、又裁判が其の判決の執行に必要と認めた處置を貫徹せしむべき義務を有つ。然るに早くも此處で、私は最初の困難に逢着する。——裁判が人間に依て構成される機關である以上は、裁判が其の判決を徹底せしむべき實力が弱ければ、それだけ非合法的な影響を受け易い事になるであらう。我々が當然、念頭に置くべき事柄は、權利（レヒト）（正義）と權力（マハト）とが離るべからざる關係にあると云ふことであり、また其の名と其の利害に於て正義の云々せられるその團體が、そ

の理想とする正義の尊重を強ふることが出來るだけの權力を具へてゐればゐるほど、司法機關の判決は當該團體の正義理想に愈々近付いて行くのだと云ふことである。所が現在では、裁判に動す可からざる權威を與へ、其の判決の執行に絕對服從を强要し得る體の、超國家的機關を所有する事は吾々には到底出來ない。其處で、私はまづかう云ふ命題を與へねばならない。——國際的な安全保障への道は、國々が行動の自由又は尊嚴を或る部分無條件的に放棄することを要す、さうして其の他の道に依つては此の安全保障には到達し得ないと云ふ事は、疑ひの餘地が無い、……と。

最近十年に亙る明かに眞劍な努力を以てしても、此の目的を達し得なかつたのに徵しても、何か強大な心理的な力が働いて、此の努力を痲痺せしめてゐるのを、何人も明白に感じ得るであらう。これ等の力の二三のものは、露はに見えてゐる。或る國家の內にあつて、其の時々に支配する階級は權力を必要とするから、從つて其の國の君主權は制限せられない。此の「政治上必要なる權力」は屢々、他の階級の物質的經濟的の努力に依て培はれる。私が此處で特に考へてゐるのは、彼の凡ゆる民族の內に居る、極く少數であるが、中々敏活な、社會的反省や禁制を度外視してゐる一群の人々のことである。

所で、右の簡單な命題は、事物の關係の認識に、僅かに一步を進めたものに過ぎない。次いで問題

になる事は、私が今名付けて少數者と呼んだ人々が、戰爭の爲には、唯×××、×××××、大衆を如何にして、彼等の×××に供する爲に動かし得るかと云ふ事である。（私が大衆の事を云ふ場合には、兵士として、自らは其の民族の至高の善の防禦の爲に奉仕すると信じ、或は多くの場合、正當なる防衞であると確信してをり、戰爭を全く職業としてゐる人々をも含めてゐるのである。）此れに對する答はかうであらう。――彼等當代の支配者たちは、先づ何を措いても、學校、新聞、そして又多くの場合、宗教組織をも掌中に收めてゐる。

併し、此れだけの答ではまだ這般の事情の全般を云ひ盡しては居ない。それは、此の手段を以て、大衆×××××××××と云ふ事が、如何にして可能であるか、と云ふ問題が生じて來るからである。これに對する答としてはたゞ、人類の內には、憎惡し、破壞する衝動が祕むでゐると云ひ得るだけである。平生は、此の傾向は潛在してゐて、唯變質者にあつてのみ顯現する。併しながら、これは比較的容易に覺醒させられ、群衆的な狂燥へと昂進させられる。此處に、凡ての宿命的な、錯綜した人間の力に關する深刻な問題が祕むでゐるやうに思はれる。此の一點を明かにするためには、人類の本能に就いての偉大な識者を俟たねばならない。

かくて今や最後の問題へと進む。――人類の心理發達の道程に於て、彼等に憎惡、破壞の狂氣に抗

し得るやうに、導くことが出來るであらうか？……と。此の場合、私は決して、所謂無敎養者の事を云つてゐるのではない。私が半生の經驗に依つて知つた限りでは、それは寧ろ全く、「知識人（インテリゲンツ）」と稱する人々であつて、彼等は事物を直接、經驗から汲まず、印刷物を通じて最も安易に、又そつくりその儘、總てを受入れるのを恒とする爲に、××××××見ても最も容易に看過することが出來るのである。

最後に、もう一つ付加へておく。――私は是迄、唯國家間の戰爭、竝びに所謂國際間の紛爭のみに言及して來た。私とても、人間の攻擊性は、又別の形式や條件（例へば、昔の宗敎戰爭や今日の社會的原因に基く市民戰爭、或は國內少數者の迫害など）の下に作用するのを知つてはゐる。が、私が、人間社會の下にあつて最も代表的な、又無統制なるが故に最も有害である形の紛爭を故意に取り上げたのは、恐らく、これこそ戰爭を如何にして避け得るかを、最も直截に示し得ると思つたからである。貴方が是迄多くの論文の中に、吾々に興味ある、又焦眉の問題と關聯して凡ゆる問題に對し、或は直接に、或は間接に、回答を與へられたのを、私は承知してゐるのである。併しながら、特に世界平和の問題を、貴下の新たな認識の光の下に照し出して戴けるなら、それは甚だ有難い事である。そのやうな御高說に依つて更に別の立派な努力が生れて來るに相違ないからである。

快不快原則を超えて

一九三二年七月三十日

ポツダム附近カプートより

A・アインシタイン拜

二

親愛なるアインシタイン！

貴方が興味を感じて居られ、同じく他の人々にも興味があるべきだと信じられる問題について、貴方が私と思想交換を望むでゐられること承りましたので、私は直ちに喜んで承諾致しました。貴方は、問題を今日の我々に知り得る範圍内から選ばれる事と、私は豫期して居た。知り得る範圍内から選ばれるならば、物理學者と心理學者とは、その知り得る事柄を、各々獨自の路から辿つて行つて、結局異る方向から同一地點に出會ふ事になるであらう。所が、貴方は意表外に出られて、人類を戰爭と云ふ事柄から防ぐには、如何なる方法をとればよいかと云ふ問題を提出せられた。私には、これが政治家等に課せられる實際問題であると思はれたので、私——と云ふより、寧ろ吾々——に取つては、何か甚だお門違ひの感じがしたのである。所がやがて私は、貴方が自然探求者、物理學者と

てゞはなく、宛かも極地探險者フリトヨフ・ナンゼン Fridtjof Nansen が、故郷を失ひ食を求める哀れな世界大戰の犧牲者等を救つたやうに、人類の友として、國際聯盟の薦めに應じられたものであると分つたのである。

私としては、實際的な提案はする氣にならないから、唯戰爭防止の問題を心理學的に見るとどうなるかを論じるだけにしよう。

併しながら、此の事についても貴方は、御自分で書かれたものゝ中に、概ねの事を云つてしまはれた。謂はゞ、貴方は私の御株を奪つたも同然であるが、私は尙貴方に追隨して行つて、貴方の論じられた總てを裏書し、又私の知る限り、或は假定の及ぶ限り、更に廣く再論するに止める。

貴方は、權利（正義）と權力との關係から出發してゐられるが、それは吾々の探求の出發點として、確に正鵠を得てゐる。「權力」《Macht》と云ふ語の代りに、これより一層烈しく生硬な「暴力」《Gewalt》と云ふ語を用ゐてもよいであらうか？　權利と權力は現在では正反對である。一が他のものから發展したと云ふ事は、容易く示し得るし、又原始に溯つて、それが初め如何に起つたものか、探求するならば、問題は直ちに解決する。所で、私は次に、概ね分りきつた事を、宛かも新しい事のやうに申上げなくてはならないのであるが、それは論の順序として必要な事であるから、御許しを願ひ度い。

人と人との間に於ける利害衝突は、原則としては暴力の使用を俟つて解決するのである。動物界に於ては、正にその通りであるが、人間とても必ずしも例外とは行かない。人類の場合には、更に是に意見の衝突と云ふのが加はるがこれは極端に抽象化してしまつて、これが解決には全く別の方法を必法とするかのやうに見えるのである。尤も、複雜化したのは、後の事であつて、原始的には人間の小さな集團にあつては、何人が所有すべきか、何人がその意志を貫くべきかは、腕力次第によつて決せられた。やがて、道具が使用されるやうになると共に、腕力は更に强められ且つ道具を以て腕力の代りにするやうになつた。より精巧な武器を有する者、或はより巧みに武器を操るものが勝者となつた。武器が用ゐられるやうになると共に、直ちに精神の優秀が暴力と交替し始めた。が、戰鬪の窮極の意圖は依然同樣であつて、一方に痛手を負はせ、戰鬪を不能ならしめ、餘儀なく要求を撤回させ、反抗を放棄せしめるにある。此の目的を完全に遂げるには、對手の力を永續的に取除くこと、つまり殺してしまふ事にある。對手を殺して了へば、再び敵對を企てる事が不可能になるし、又他の者としても自分もあんな目にあつてはたまらないと云ふ氣になるし、かう云ふ二重の利益がある。その他、敵を殺すことは本能的な傾向を滿足せしめる。が、是については、後に詳述するであらう。
敵を威嚇しながら生存せしめておけば、また必要に應じて利用することが出來ると云ふ考へがあつ

ても、殺さうと云ふ意圖の方ではそれに反對することがある。敵を殺さないで生かしておけば征服するだけの力で足りるのである。が、是れは敵に對する寛大の始まりで、その爲に征服者は、それ以後に被征服者側の臥薪嘗膽を念頭に置かなくてはならない爲に、自身の安全を一部犧牲としてゐるわけになる。

より强大な權力の支配してゐる本來の狀態は右のやうであつた。理智に支持されてゐる暴力、又は理智の支持してゐない自然的な暴力の支配してゐる狀態は右のやうであつたのだ。ところが我々の知る通り、この制度は發展の過程に於て漸次變化して來て、暴力から正義に變化して行つた。併し一體、暴力が權利(正義)となるには、如何なる道を經たものであらうか? それには唯一つの道があるばかりだと、私は考へる。弱者も大勢寄ればたゞ一人の强力に匹敵し得ると云ふ事實の中にこの道があるのである。「團結すれば强力となる」„L'union fait la force,“ である。暴力(專制力)は團結に依て打ち破られ、此れら團結者の權力が、とりもなほさず單獨者の專制力に對峙して、權利と云ふものになる。つまり、權利とは團結者の權力に外ならないのである。是もやはり專制力(暴力)たることに變りはなく、同じ手段に依て動き、同じ目的を追ふもので、それを妨げる如何なる一人者へも立向ふのだ。その相違は、實は唯、その暴力を振ふものが、一方は單獨者であり、他方は團體であると云ふ點に過

ぎない。併しながら暴力が權利(正義)へと、移り行くに當つて、當然滿さるべき心理的條件がある。多數者の團結は確固たる存續性を必要とする。若しも團體が一つの覇權に對して戰ふ爲にのみ構成され、之を克服すると同時に崩壞する體のものならば、それは何の役にも立たない。次に、自ら最强と信ずる者が覇を唱へて暴力を行使し、勝負は限りなく繰返されるであらう。團體はそれ自身を保持するために不斷に努め、組織を固め、反逆の危險を豫防すべき法規を設定し、違法を監視し、合法的に强制力を發動すべき機關を制定しなくてはならぬ。此のやうな利害關係を團體が認めると共に、團結者の各成員の間に感情的結合、共同感情が釀成される。此の感情の中にこそ團體の本來的の力が宿るのである。

以上で、旣に私は自分の云はむと欲することの本質的なものを總て云つてしまつたやうに思ふ。——より大きな統一體へ權力を移すことに依つて暴力(專制力)を克服する事。此の統一體は各成員間の感情の紐帶に依て、相互に結合される事。更にこれ以上の事は、凡て細說であり、反復であるに過ぎない。團體が、相互に同じ强さの多數個人から構成されてゐるならば、事情は極めて單純である。もしさうならば此の團體の法律は、各人の共同生活を可能ならしめるためには個人が其の力を强制力として發動せしめる事の自由を如何なる程度まで斷念すべきかを決定すればよいのである。併しなが

ら、そのやうな安定狀態は理論的にのみ考へ得るのであつて、實際は團體の包含する要素が、最初から互ひに不均等な力のものである所から、事態は一層複雜してゐる。卽ち、男性と女性、親と子などのやうな實力が違つたもの丶寄合であり、漸ては又戰爭や降伏のあるために征服者と被征服者とが出來、それが主人と奴隷との鬪係になつて來る。從て、團體の權利は團體內の不均等な權力鬪係を表現することになり、法規は全く××××××××、××××××××作られて、××××××××にも與らぬ事になる。此のために團體の內部には法規の不安定性と同時に、又その存續性と二樣の源泉が存する事になる。前者は、支配者仲間の個々人が、萬人に妥當すべき制限以上に出で、權利（正義）支配から强力（暴力）に逆轉せむとの試みであり、後者は、被抑壓者側の者が更に權利を擴張し、この擴張せられた權を法律化せんとし、つまり不均等な權利とは正反對に總ての人々に均等な權利を目指して突進する不斷の努力である。此の第二の潮流は、團體の內部に權力鬪係の變動が實際に起つた場合に、特に激成されることは、多くの歷史的契機に於いて見られる通りである。

其の場合に、權利は漸次に新たな權力鬪係に適合し始める。と云ふよりは、屢々實際の成行きが示してゐるところを云へば、支配階級は此の權利の變動を認めやうとせず、反亂や市民戰爭が起り、一時的に法律は停止し、更に別の暴力行使を經て、新たな正義の秩序につくのである。尙、正義變遷の

他の源泉は、平和的な形を取る。それは團體的(社會)各員の文化的變化であるが、此の間の事情については後に考察することにしてもよい。

このやうに、一つの團體(社會)内にあつても、利害衝突が暴力に依て解決せられるのを我々は見るのである。併しながら、同一地域上に共同生活を營む事の必要からも、共同勞働の爲から云つても、此のやうな爭鬪は速やかに終熄せしめるのが得策であるから、此のやうな條件の下に於いては平和的に解決せられる見込みが愈々增すのである。併しながら、人類の歷史を一瞥するに、團體と團體、或は一團體と數團體との間の戰鬪、大小の社會的統一體、都市の部分、地方、種族、國民、國家等の間に於ける絕え間のない爭鬪の連續は、恒に殆ど武力に依て解決された事を示してゐるのである。

此のやうな戰爭は略奪に終ることもあれば、或はまた安全な降伏、一部の侵略に終る事もある。侵略的な戰爭と云つても、一樣に判斷するわけには行かない。多くの侵略、例へばモンゴリア族、トルコ族の侵略の如きは、單に慘虐のみを事としたが、他のものは反對に、暴力から權利(正義)への轉換に資した。彼等はより大いなる統一を形成し此の内部に於ては、暴力の行使を不可能ならしめ、新たな正義的の秩序に依て葛藤を解決した。此のやうにして、ローマ人等の侵略は、地中海沿岸の諸國に、貴重な「羅馬的平和」《pax romana》を現出した。フランス國王等の領土擴張慾は、平和的な、華

華しいフランス國を生むだ。逆說的に聞えやうが、熱望の的である「永久平和」を生むのに、戰爭も其の手段として滿更不適當ではないと云ふ事を認めざるを得ない。それは戰爭が彼の大統一を成遂げると共に、其の內部の强力な中央權に依つて爾後の戰爭は不可能とされたからである。併しながら、征服の結果は槪して永續しないものである爲に、それは結局役に立たない。大槪は、强制的に合併された部分に結合力が足りない爲に、新たに成就された統一も再び瓦解してしまふのである。その他、侵略は甚だ廣範圍に亙つてゐても、是迄唯、部分的同化しか爲し得ない所から、其の同化されたる各部分の爭鬪には何より必らず武力的な解決を要したのである。で、凡て此れらの戰爭的な努力の結果としては唯、人類が極く稀れではあるが慘害の著るしい大戰爭の代りに、多くの、實に絕間なき小規模の戰爭を行つて來た……と云ふ事になつてゐるのである。

之を現代に適用して見ると、貴方がもつと手短かに到達されたのと全く同じ結論を示すのである。何より確實な戰爭防止は、人類が團結して、一切の利害の衝突に當つて、之が判定を委任し得るやうな中央權力を建設した時に、始めて可能となるのである。此處には明かに、此のやうな最高法院の設立と、必要な權力を是に委託すると云ふ、兩つの要求が一つになつてゐる。一方のみでは役には立たないのである。現在、聯盟が此のやうな法院として考へられてはゐるものゝ、今一方の條件が滿され

てゐない。聯盟はそれ自體の權力を所有してゐないのだから、これに加入してゐる個々の國々が是に力を讓渡しない限りは、是を持つわけがない。併し目下のところではなかく〳〵さう云ふことにはなりさうもないのである。國際聯盟なるものは、人類の歷史上、餘りに其の例を見ないと云ふより、寧ろ殆ど前例のない程度まで敢行せられた一の試みであると云ふことを承知してゐなければ、この制度を眞に理解するわけには行かないのである。この試みたるや、權威、卽ち强要の力（これは從來權力の有するところであつたが）を、一定の理想的な態度の上に委任する事である。吾々は旣に、二つのものが働いて團體を結合せしめることを、知つてゐる。卽ち、强制力の壓迫と、團體各員の感情的結合（術語で同一視と呼ぶ）とである。一方の契機が弱つて來ると、大抵は他の契機が働いて、團體を維持しようとするやうである。彼の理念（理想）なるものは、團體各員の重要な共同觀念を表白するものであつてこそ、其の時に始めて意味を有つ。それならば、其の理念なるものは、如何なる程度の强さを持つてゐるかゞ、問題になる。歷史は、事實、其れが相當の働きをした事を敎へてくれる。汎ギリシャ的理念、例へば周圍の未開族より何か自らが優れてゐるとの意識は、同盟、神話、祭式等の中に、强く表現されてゐるが、この意識は好戰的風習をギリシャ人の間に大いに和らげたほど强烈ではあつたが、勿論、ギリシャ民族の各部間に於ける戰亂を防止することは出來なかつた。一つの都市、又は

聯合都市が敵國ペルシャと結托して競争者に打撃を與へるのをさへ抑止出來なかつたのである。キリスト教の共同感情は非常に强大であつたが、これとても同樣、文藝復興期に於いて、大小のキリスト教國が互ひに戰ひ合ふた時、回教主の援軍を乞ふのを、防ぎ得ない有樣であつた。現代に於ても、此のやうな團結的な權威を期待し得るやうな理念は存在してゐない。今日、人々を支配してゐる國家的理想が恰かも正反對の働きを爲す事は、是又明かな事である。ボルシェヴィスト流の考へ方を一般に徹底させる事に依つて始めて戰争を終結させ得ると豫言する人々がゐるが、併し今日の吾々は、此のやうな目的からは甚だ緣遠いのであつて、恐らく是が達せられるのは、恐るべき市民戰争を經て後の事である。此處で、現實の權力を理念の權威と置換へる事は、今日では未だ駄目であると宣告される。權利は原始的には暴力（强制力）であつて、尙今日に於てすら、暴力（强制力）による支持を必要とすると云ふことを考慮に入れないならば、誤算を來すのである。

さて、私は今こそ、貴方の文章の他の命題について、註を施す事が出來る。貴方は、人間が實に容易く戰争に熱中出來るのを訝られ、人間の內には何かが作用して、此のやうな煽動に直ちに迎合する憎惡、破壞への本能を推定せられた。私は再び、貴方に全部的に賛成する事が出來る。吾々は此の種の本能の存在する事を信じて居つて、最近の何年かは、此の本能の現象を研究するに費したのである。

此れを機會に、吾々が精神分析學に於て、長年の暗中模索の結果遂に到達した本能説の一部を述べることを許して戴き度い。

吾々は人類の本能は、唯二種であると考へる。即ちその一は保存し、結合せんと希ふ本能で、吾々は之をプラトーンの「饗宴(シンポジオン)」のエロスと全く同意味に於いて色情的(エロテイシ)と呼び、或は情慾の一般的概念よりは更に擴張したものとして性慾的(セクシユエル)と呼ぶ。今一つの本能は、破壞し殺害しようとの本能で、吾々は是を攻擊本能、或は破壞本能として考へてゐる。御覽の通り、是は單に、誰でも知つてゐる愛と憎惡の相反を理論的に説明したに過ぎないのであつて、其の關係の根源と思はれるのは、貴方の畠に於いては重要な役割を演じてゐる引力と反撥力との極性に發してゐるやうである。併し、此處で餘りに早く、善惡の價値的見解を導入しないやうにしたい。一の本能は、他の本能同樣、已むを得ないものであつて、此の兩者の作用が協同し相反する所に人生の現象が生ずるのである。所で、一種類のみの本能が單獨に働く事は殆ど有り得ないのであつて、恒に必らず反對側の本能の或る量と結合——吾々は是を「合金」と稱してゐる——してゐるやうに見える。之の結合してゐる量のため本能の目的は修正されるか、或はその量が目的を達する事情の許す限りに於いて、始めて本能の目的は實現されるやうになる。例へば、自己保存本能は確かに色情的性質を帶びてゐるが、是が其の目的を實現する爲に

は、明かに攻撃本能に頼らなくてはならないのである。同様、對象に向けられた愛の本能も、其の對象を所有しようとする時には、やはりそこに支配衝動（本能）の附加を必要とする。此れ等二樣の本能は、その現象してゐるところに於いて兩者を辨別することが困難な爲に、隨分長いこと吾々は認識を妨げられて來たのである。

若し貴方が、今少し我慢して聽いて下さるやうならば、人類の行爲には更に異る種類の複雜さが認められると云ふ事を申し度い。人間の行爲が一種類の本能的感情に依つて動かされる事は甚だ稀れであつて、その行爲には既にそれ自身に於いてエロスと破壞本能とが關係してゐるにきまつてゐるのである。行爲を可能ならしめる爲には、同じ方途に向けられた多くの契機が必らず關係し合つてゐるのが常である。貴方の同學の一人であるところのリヒテンベルク教授 Prof. G. Ch. Lichtenberg は、既にそれを知つて居た。氏は、吾々古典學者の時代に、ゲッティンゲンで物理學を講じられた。併し、恐らく氏は物理學者としてよりも、寧ろ心理學者として更に重要であつたのであらう。氏は動機說（Motivenrose）について發見した所を、次のやうに述べて居る。「人間が行爲する根據となるべきものは、三十二の風向に定められ、其の名稱も同じやり方でかう云ふことが出來よう。例へば、食物（パン）――食物（パン）――名譽、或は、名譽――名譽――食物、と云つた具合である。」

所で人間が戰爭へと遣られる時には、彼等の內に、高尙なもの、卑しいもの、人々が聲高に語るもの、それについては口を塞いでゐるもの等、全く多くの契機が、そこに協同してゐるのである。それ等動機の總てをこゝに擧げることは出來ないが、確かにそれ等の中には、攻擊破壞慾も含まれてゐる。歷史や日常生活に現はれてゐる無數の慘虐は此の本能の存在と烈しさとを强調してゐる。此の破壞衝動は、他の色情的な、或は理想的な衝動と化合した場合に、當然、此等の滿足が容易く得られるやうになる。吾々が歷史上の慘虐を聽くには、大概の場合、理念上の動機は單に破壞慾の口實として用ひられたのであると云ふ印象を受ける。又他の場合、例へば異教徒糾問所の慘虐等では、信仰上の契機は意識的であるが、破壞的契機がそれを無意識的に强めてゐると考へられる。二つとも有り得る事である。

私は、貴方が折角戰爭防止に就いて取上げられた興味を、とんでもない吾々の理論へと引張り込んでしまつたやうな氣がする。が、私としては今少し破壞本能について、語り度いのである。破壞を好んで取上るからとて必ずしも破壞を重要視するわけではない。吾々は多少抽象的な思辨を試みた結果、凡ゆる生物の內部には此の本能が働いてゐて生物を滅ぼし、生命を無機物へ還元せしめやうと努めてゐると云ふ見解に到達したのである。凡ての重大點に於いて是は死の本能と呼ばるべきものであ

るが、他方、色情的本能は生命への努力を代表してゐる。死の本能が、特殊の器官の助けを借りて、外部へ、對象へと向けられた時には、破壞本能と成る。謂はゞ、生物は他者の生命を破壞する事に依て、自己の生命を維持するのである。併し、死の本能の一部は、依然として生物の內部に殘つて居つて、吾々は此の破壞本能の內化と云ふ事から、正常な現象や病的な現象の數々を演繹しようと試みた。これは科學としてはいさゝか邪道であつたかも知れないが、攻擊性が內部へ向ふ結果、良心が發生すると云ふ說明までしたのである。貴方もお考へであらうと思ふが、此の過程の度が過ぎると（これは全く考へられないことではない）、必らず不健康となるが、此の破壞本能が外界へ向けられる時にはその生物自身は身輕になり、好都合な結果を得るわけになるのである。之の事は、吾々が常々鬪つてゐる恐ろしい、危險な傾向に對する生物學的な是認として役立つ事になるのであらう。此れ等の傾向は此の傾向に對する吾々の抵抗よりは、自然に近いものである事は、認めざるを得ない。で、この抵抗について吾々は更に別の說明を見出さなくてはならない。恐らく貴方には、吾々の理論が神話に類するものであり、此の場合、決して歡迎すべき性質のものではないと云ふ感を受けられた事と思ふ。併しながら、一切の自然科學は此のやうな神話的なものゝ域を脫してゐないのでなからうか？　今日貴方の領域である物理學に於ては、多少とも之と事情を異にしてゐるであらうか？

以上説明した多くの事から、我々はその第一の目的として次の事だけは云はふと思ふ。卽ち、人間の攻撃本能を放棄させようと望む事は、到底期待出來ない、と。是は、人間が必要とする總てのものを自然から豐富に與へられるやうな地上の一角に住み、壓制や攻撃を他所にして、穩やかに生活する人人にこそ望めるのである。私には、そんなことは全く信じられない。若しそんな事があるものなら、此の幸福な人々について、更によく知り度いものである。又ボルシェヴィスト等は、物質的要求の滿足を保證し、社會の各員に平等を期する事に依て、人類の攻擊性を根絕し得るとの希望を持つてる。私にはそれが幻覺（イリュージョン）だとしか受け取れない。先づ彼等は細心の注意の下に武裝して見たが、彼等の追隨者達は彼等以外の凡ゆる人々に對する憎惡に依つて團結することは出來ない。それに貴方自身も御氣付のやうに、問題は人類の攻擊性を根絕せんとするにあるのではない。たゞ我々は此の攻擊性が戰爭となつて表れ出ないやうに、試みる事が出來るだけである。

吾々の神話的な本能說に依つて、吾々は戰爭防止への間接的方法のための一命題を、容易に發見する。若し、戰爭をしたがることが破壞的本能から來るものなら、是に對しては此の衝動の敵手役であるエロスを呼び起すのが手つ取り早い。人類の中に感情的結合を形造くるものは、凡て必らず戰爭に逆作用するのである。此の結合にも二種が有り得る。第一のものは、性的目的を伴はない戀愛對象へ

の關係に等しいものである。精神分析學は此處で愛を云々したとて、恥づるには及ばない。宗教とても同じ事を云つてゐる。「汝自身を愛する如くに、汝の隣人を愛せよ。」と。さて、是は云ふに易く、行ふに難い。感情結合の今一種のものは、同一化に依るものである。人類の中に著るしい共通性を作り出すものは、總て此の種の共通感情、同一化作用を呼び起すのである。人間社會の上部構造は大部分、是等のものに掛つてゐるのである。

貴方は權威の濫用と云ふ事を嘆ぜられたが、私はそれに依つて戰爭的傾向に對する間接的防止法の暗示を受けた。人間が指導者と服從者とに分れるのは生つきであつて、取除かうとすれば取除き得る不平等のためではない。此の後者に屬する大衆は、彼等の爲に裁決を與へる權威を必要としてゐて、彼等は此の裁決に對しては概ね無條件的に從ふ。之と聯關して、獨立性のない大衆の指導の任に當る、確固たる思想を持ち、眞理に向つて只管に邁進する人々を養成するために從來以上に骨を折らねばならない。國家權力や宗教思想がこれに味方をせず、これに干渉し禁止し來ることは、證明する迄もない事である。本能生活を理性に依つて統制し得る人々の社會が在れば、勿論是が理想的である。人間相互の間の結合感情が假りにないにしても、是以上に完全な、抵抗力ある、人間の團結を作り出す事は出來ないであらう。併しながら、是は殆どユトーピア的希望であるやうだ。戰爭防止の間接的方法

としては、もつと他に確かに前者より一層適用性のあるものがあるが、是は早急の間には合はない。殘念ながら、是は廻りのおそい水車に似てゐて、粉が挽き上がる迄には、人間の方が餓ゑてしまふのだ。

御覽の通り、世間にうとい理論家に向つて、切迫した實際問題の相談を持ち掛けて見た所で、大した事は期待出來ないのである。寧ろ、手許にある手段を以て、個々の危險に直面しようと努める方がましである。

所で、私は尙一つの問題を取扱ひ度いと思ふ。貴方の書面は、是について何も觸れてゐなかつたのであるが、私は是に特に興味を惹かれてゐるのである。貴方や私や他の多くの人々をも含めて、吾々は何故に戰爭に對して此の樣にむきになつて憤慨するのであらうか？　何故に吾々は是を、人生の他の多くの悲慘な災厄のやうに、看過しないのであるか？　これもやはり自然であり、生物學的に相當の根據を持ち、實際的には全く避け得ない事なのである。かう云ふ考へ方をしても何卒、呆れないやうにして戴き度い。吟味の目的として、恐らく人間は、實際には持合せることの出來もしない優越を豫想する必要があるのではあるまいか？　是に對する答としては、各人は自分の生命についての權利を有つが故に、戰爭は有望な人間生活を亡し、各人を恥づべき位置に落し、彼が望みもしない×××

×ひ、貴重な物質的の價値、人類の勞苦の結晶を毀損せしめるが故に……等々の事が擧げられる。又現代的な形式に依る戰爭は昔の英雄的な理想實現の機會を與へないし、又將來の戰爭は武器の完成の結果として、一方或は雙方の滅亡を意味すると云ふやうな事も擧げられる。是等の理由は總て、眞實であり、爭論の餘地のない事であつて、戰爭が人類一般の共力に依て未だ廢止されないのが不思議に思ふばかりである。此等の各點については、尙論ずる餘地がある。一體團體の方でもまた個人の生命に對して權利を有ち得ないものだらうか、それが問題である。凡ゆる種類の戰爭を一率的に排斥すると云ふわけには行かない。他國や他民族の滅亡を我武者羅に企てる國家や民族が存在する限りは、これ等の國や民は戰爭に對して備へる所がなくてはならない。併し、是は貴方が私に課せられた議論ではないのであるから、いつまでも是等の議論に拘泥してゐないことにする。私の目的とするところは、他にある。吾々が戰爭に向つていきり立つ最大の理由は、吾々がそれ以外に施す術のない事に因るのだと信ずる。吾々は平和主義者である。それは生理的に條件づけられてゐて、さうならざるを得ないからである。果して然らば、吾々は此の心的態度を論證に依つて是認することは易々たるものである。

尤もそれは說明無しには諒解し難い事であらう。私の考へは次のやうである。——何時とも知れぬ時代から、人類は文化發展 Kulturentwicklung の過程を辿つて來た。(之を寧ろ「文明」Civilisation

と呼ぶ方がよいと云ふ人もある事を、私は承知してゐる。）吾々が吾々自身に就いて完成し到達した最もよきもの、及び吾々を惱ますものゝ全部とは云はぬが大部分は、等しく文化發展の過程に負ふてゐるのである。此の過程の動機と起源とについては吾々は知る所なく、眞の成り行きについても判然としたことは分らないが、其の特質の二三は容易く看取し得るのである。恐らく、文化の辿りつく先は、人類の滅亡である。何故ならば、文化は種々なる方途に於いて性機能を障害し、又今日にあつては、未開の人種の方が人口增加し、文化に取殘された者の階級の方が、高度の文化人よりも强いのである。多分、此の過程は、或る種の野生動物が家畜となる過程に較べることが出來やう。この過程には疑ひもなく、肉體的變化が伴つてゐる。文化發展と云ふことは此のやうな有機的の過程であると云ふ考へは、未だ人々の信じ得ないところである。文化過程と共に入り込むだ心理的變化は、誠に驚くべきものがあり又判然たるものである。この變化とは本能の目的を不斷に轉住させることゝ、本能の亢奮を制限することに存するのである。吾々の先祖に快感を與へた刺戟も吾々に取つては興味がなく、或は堪へ難いものとさへなつた。吾々の倫理的、審美的の理想要求が變化したとすれば、それは有機的な根據に基いてゐるのだ。文化の心理的特質の中では、二つのものが最も重要であるやうに思はれる。即ち知性が强くなつて本能生活を支配し始めたことゝ、又、危險な凡ての結果を伴ふ攻擊傾向が內面

化して有利な結果や危險な結果が伴つて來たことゝである。吾々を文化に驅り立てた心に最も甚だしく矛盾するものは戰爭であるから、その故にこそ吾々は戰爭に對していきり立つのであつて、吾々はたゞ端的に戰爭は嫌ひである。それは單に知的な、又感情的な否定であるばかりでなく、我々平和主義者に取つては、生得の偏執にも等しい、蟲酸の走る事柄なのである。また戰爭は殘酷な事だからと云ふのもさる事ながら、審美的に見て高く評價出來ないことも、同樣に吾々の反抗を助長してゐるのである。

他の人々も又同樣に平和主義者となるには、一體吾々は何時まで待たねばならないのであらうか？それは何時とも云へないのではあるが、二つの契機――文化的心理態度と、將來の戰爭の效果に對する當然の不安と――からして何時かは戰爭の結末を告げる日の來るべきを信ずる事は、必ずしもユトーピア的希望ではあるまい。が、如何なる道如何なる迂路を辿つて來るかは、吾々の推知し得ない所である。然し吾々は次のやうに云ふ事が出來る。――凡て文化の發展を促すものは、また戰爭に對抗しても働いてゐると。

以上は誠に至らぬ答辯で、さぞ貴方を失望させたことゝ思ふが、あしからずお許しを願ひたい。心から御挨拶までに申添へます。

九月、ヰインにて　　S・フロイド

精神分析學の興味

『シェンチア』誌（一九一三年ボロニア發行）第七卷に始めて獨佛兩文（佛譯者は M. W. Horn, Nifflhein-Grossharthau）にて發表。原名は,, Das Interesse an der Psychoanalyse.'' 原書全集第四卷に收載。

第一部

心理學的興味

精神分析とは神經質 Nervosität（神經症）の諸形態を心理學的技術に依つて治療せんとする醫法である。一九一〇年に一小著中＊に於いて私は、精神分析がブロイヤーの洗流し法から發展したこと、シャルコー及びジャネーの學説に關係あることなどを述べておいた。

【註】＊ Über Psychoanalyse, 6. Aufl. 1922.（本全集第十巻『精神分析總論』の內『精神分析五講』のこと。）

精神分析的療法を適用し得る病症形態の實例として、ヒステリー性痙攣、禁制現象、竝びに强迫神經症の多種多樣な症候（强迫觀念、强迫行爲）を擧げることが出來る。これ等の病症形態は、時々は自然に癒ることもあるし、また醫師の個人的影響によつて氣まぐれに（その樣子はこれまでは何とも理解出來なかつた）左右せられる如き狀態である。眞正の精神障碍の重症形態の治療に就いては、精神分析は未だ何ら爲すところはないが、併し精神症や神經症に就いては精神分析は、醫學史上初めて、これ等諸病の由來及び機制を洞察することが出來るやうになつた。

併し精神分析にこのやうな醫術的意義があるからとて、諸科學の綜合に興味を持つてゐる學徒の仲

間にこれを吹聽しようとの企てが正當であると云ふことにはなるまい。蓋し、大部分の精神病醫や神經症學者たちがこの新療法に對して否定的態度をとり、その前提や結論に對して非難的態度をとつてゐる限り、この企ては尙早に思はれるからである。併しながら私がこの企てを正當なものとして考へる以上、精神病學者以外の他の人々の興味をも呼ぶものであると云ふことを主張する。何となれば、精神分析は他の幾多の知識領域と接觸し、且つそれ等の知識と精神生活の病理との間には思ひがけない密接な關係を生ずるからである。

私はこのやうにして今や精神分析に對する醫術的興味は別問題にしておいて、この若い科學に就いて私の主張して來たことを、諸々の實例に依つて說明して見ようと思ふ。

×　　×

正常者と病態者との區別を問はず、その身振表現や言語表現竝びに思考形態の内には、心理裝置の機能の有機的障碍又は變態的缺陷の結果とのみ見做されてゐて、今まで心理學の對象とならなかつたものが澤山にある。どんなのがあるかと云ふと、正常者の行損ひ（云ひ損ひ、書き損ひ、忘却など）、偶然行爲、正常者の夢、痙攣發作、譫妄狀態、幻覺、强迫觀念、竝びに神經症者の强迫行爲である。人々はこれ等の現象――行損ひは一般は氣付かれないで了ふものだが、もし氣付かれたにしても――

を病理學的に考へ、生理學的説明を下さうと試みたが、併し如何なる場合にも滿足を得なかつた。然るに精神分析學に於いては、總てこれ等の事柄が純粹に心理學的性質の假定に依つてのみ理解され得るものとなり、我々に分つてゐる心理的現象と關係させて考へられ得るものだと云ふことを首尾よく證明し得るやうになつた。このやうにして精神分析は一方に於いて生理學的な考へ方を局限すると共に、他方に於いては精神病の一大部分を心理學內に取込んだのである。こゝに於いて正常の諸現象はより强い證明力を得ることになつた。精神分析は病理的材料に就いて得た洞察を正常的材料に轉嫁するのだと云ふ批難は當らない。精神分析は其處此處で相互に獨立的な證明を下し、かくして正常的過程も病理的過程と同じ法則に從ふものであることを示してゐるのである。

こゝに問題となつてゐる正常的現象に就いて、即ち正常なる人間に就いて、觀察を下すために、私は二つの事柄――行り損ひと夢と――をやゝ詳しく取扱つて見よう。

行り損ひ、即ちよく覺えてゐる筈の言葉や名前や意圖を忘却すること、云ひ損ひ、讀み損ひ、書き損ひ、何としても搜し出せなくなるやうな置忘れ、紛失、十分な知識を有するに拘らず間違ひをすること、多くの習慣的な身振りや運動――これ等總ては健康者、正常人の行り損ひとして私の一括するところであるが――などの如きは心理學が概して殆ど問題にせざるところであり、疲勞、注意の轉換、

輕微な病的狀態の副作用から誘導せられた「放心」(Zerstreutheit) として分類せられて來た。併しながら精神分析の研究するところに依ると、「輕微な病的狀態の副作用」の如きは單に助勢的意義を持つに過ぎず、またこれ等がなくとも依然同じ現象は生じ得ると云ふことが明かになつた。行り損ひは完全に心理的現象であつて、そこには常に意味と傾向とがある。それ等はその時々の狀勢(立場)のためにさうより外に表現されようのないところの一定の意圖に役立つてゐるのである。これ等の狀勢は大抵は、或る心的葛藤の狀勢であつて、それ等の葛藤のために潜在の傾向が直接的表現を阻まれて間接的方途を辿るやうになつてゐるのである。行り損ひをした本人はこれを認めることもあり、見のがすこともある。またその下に抑壓され隱されてゐる傾向が分つてゐることもあるが、併し當該行り損ひがその傾向の所作であるとは、分析して見なければ分らないのが普通である。行り損ひの分析は屢屬極めて容易であり、且つ迅速に行はれる。分析解釋の間違ひに氣をつけてさへ居るならば、その行り損ひの直後に思ひつくことがそのまゝその說明になつてゐる。

行り損ひは分析的見解の正しさを確信したい人々にとつては、最も適當な材料である。私は一九〇四年に初めて公刊した小著の中で、かゝる實例の多數とその解釋とを述べたが、その集成はそれ以來他の觀察者たちの多數の寄與に依つて豐富なものとなつてゐる。*

【註】＊『日常生活の精神病理』（Zur Psychopathologie des Alltagslebens.）參照。（本譯文全集第二卷）

抑壓せられる結果、行り損ひとして表現せられることに滿足するの外なき意圖は如何なる動機によつて抑壓せられるか。それ等諸動機の內最も屢々なるは、不快の逃避である。で、人々は自分が不快に思つてゐる者の名前を頑固に忘れ、また根柢に於いて澁々ながら或る企てを遂行する（例へば、何かの習俗の必要に從つて）場合には、とかくその企ての遂行を忘れる。或る人と仲が惡くなつた場合には、その人を想起させるもの（例へばその人から贈られたもの）を紛失する。またその時の旅行が厭で、何處か他に滯在してゐたい場合には、列車に乘込むのを間違へる。不快逃避の動機が最も判然と見えるのは、印象及び經驗の忘却の場合であつて、これは旣に精神分析學以前に於いて多くの論者が認めてゐるところである。記憶は偏頗であり、苦痛感が附帶してゐるあらゆる印象を想起させまいとするが、併しこの傾向があらゆる場合に首尾よく實現せられるとは限らない。

別の場合には、行り損ひの分析は、我々が轉位（Verschiebung）と呼ぶ過程がそこに混入して來るためにやゝ複雜となり、それを觀破し解釋することが容易でなくなる。例へば、人々はまた別にこれと云ふ批難を覺えてゐない人の名前を忘れることもあるが、それはこれを分析して見ると、その人の名前がこれと同一又は類似音の名前を持つてゐる者で我々の嫌惡してゐる者の名を想起させるためだ

と云ふことが分つて來る。このやうな聯關あるために何の咎もない人の名前が忘却せられたので、忘却しようとの意圖が何らかの聯想の道に添うて轉位せられたのである。

また不快逃避の意圖は必ずしも單に行り損ひとしてのみ實現せられるとは限らない。また多くの場合に於いて、別の傾向が當面の立場に於いては抑壓せられてゐるが、云はゞ背後から障碍として顯現せられざるを得ないやうな場合もあると云ふことが、分析に依つて暴露せられてゐる。同樣にまた、相手に對して祕密にしておかなければならないやうな考へが、云ひ損ひによつて暴露せられることも屢々あるものだ。偉大な詩人たちはその意味に於ける云ひ損ひを理解し、その作品中にこれを利用してゐる。貴重な物品の紛失は屢々、期待せられたる不幸を避けるための犧牲行爲であり、他の多くの迷信も敎養ある人々の間では行り損ひの形で依然實行せられてゐる。品物の置忘れはその品物の放棄に外ならないのが普通である。品物の破損はもつとよい品物と取換へることを餘儀なくするための、一見その意圖なきかの如く見える企てゞある。

行り損ひはそれの現れが如何に微々たるものに見えようとも、それを精神分析的に闡明して行く內に常に世界觀に於いて二三の變革を徐々に伴ふやうになるものである。我々は正常人が、我々の期待し得る以上に屢々相反の傾向に依つて動かされるものであることを發見する。我々が「偶然的」と思

つて居たことの大部分が必ずしも偶然的でないことを知るやうになる。品物の紛失が大抵は生活の偶然性から切離され、所謂へマなことが實は我々の祕かなる意圖の實現に利用せられてゐることは、殆ど一つの慰めでさへある。併し更に重要なことは、我々が全く偶然のせいにしてゐる重大な災禍が、分析の結果、實は偶然ではなく、よしんば明かにそれと承認せられないにもせよ、とにかくその人自身の意志がそこに參與してゐたと知ることである。横死と自殺とを區別するのは實際のところ非常に困難であるが、この區別は分析的觀察によつて一層疑はしいものとなる。

行り損ひの説明がその理論的價値を解決の容易さと正常人に於けるかゝる過程の頻發の度合ひ如何とに負ふとしても、精神分析のかゝる成果は健康人の精神生活に起るもう一つの現象に比すれば、その意義に於いて遙かに劣つてゐる。その一つの現象と云ふのは夢の解釋のことであるが、これに依つて精神分析學は實に官學と對立すると云ふ運命を開始したのである。醫學的研究は夢を無意味無價値な、純粹に肉體的な現象だと説明し、睡眠狀態に沈下した精神器官が部分的覺醒を強ふる肉體的刺戟に依つて表現せられるのだと説明する。精神分析は、夢に意味と意圖とがあり、個人の精神生活に於いて一地位を占め、そして夢は奇怪であり、無聯絡であり、荒唐無稽ではあるが、それ等を超えてやはり心理的行爲としての高さあるものとした。肉體的刺戟は夢の形成に際して加工せられる材料とし

ての役割を演ずるに過ぎぬ。夢についてこれ等二つの考へ方の間には、何らの仲介がない。生理學的見解の誤謬なることはその無效なることに依つて證明せられてをるが、これに反して分析的見解は幾千の夢を意味あるものとして飜譯し、これを人間の深奥なる心理生活の認識に利用したと云つて當然である。

私は『夢の解釋』と云ふ重要なる題目を一九〇〇年公刊の拙著中に取扱ひ、その後精神分析の殆ど全ての協力者の寄與によつて該書中に述べられた學說が確證せられ促進せられたのを見て滿足を覺えた。* 夢の解釋は精神分析の基礎であつて、その成果は心理學に對する精神分析の最も重要な寄與を表はすものだとは、一般の贊同の下に主張し得るところである。

【註】 * „Die Traumdeutung (7. Aufl. 1922) „Über den Traum" (3. Aufl. 1921) 尙、ランク、ステーケル、ジョーンズ、ジルベラー、ブリル、メーデル、アブラハム、フエレンチー、その他の著書參照。

こゝで私は、夢の解釋の技法を示すことも出來ないし、夢を分析的に組立直して見たらどう云ふ結果になつたかを根本的に明かにすることも出來ない。たゞ二三の新概念を確立し、正常心理學に對してそれ等諸概念が如何に重要な結果を有し、またその重要さの强調せらるべきかを傳へるに止めておかねばならない。

精神分析學の敎ふるところに依ると、あらゆる夢は意味を持つてをり、その奇怪さはその意味の歪みから生じてをり、その荒唐無稽なるは意圖的であつて、侮蔑、嘲笑、矛盾を表現してをり、その終始一貫性を缺いてゐることはこれを解釋するには一向差支へないことである。我々が覺醒後に想起する夢は、夢の顯在內容とも呼ばるべきものである。これに解釋の仕事を施せば、顯在內容の背後に隱れ、これを通じて顯現する潛在的な夢の思想に到達することが出來る。この潛在的な夢の思想は、かくして解釋すれば、旣に奇怪でもなく、荒唐無稽でもなく、終始不一貫でもなく、我々の覺醒思想の十分に價値ある成分である。潛在的な夢の思想を顯在的な夢の內容に變化させるものは夢の仕事と稱せられてゐるが、この仕事は夢に歪みを生じさせ、その結果として夢の內容に於ける夢の思想はもはや人々には意識出來なくなる。

夢の仕事は心理的過程であつて、この過程に似たものはこれまで、心理學にとつて知られては居なかつた。それは二つの主要方向に於いて我々の興味を牽く。第一に、それは我々が覺醒思想中に殆ど發見しないところの、或は單に所謂思考缺陷の基礎としてのみ認めるところの、(觀念の)凝縮、又は(一觀念から他觀念への强調點の)轉位、移動の如き新しい過程を示してゐる點。第二に、夢の仕事に依つて我々は心理生活中に數々な力の葛藤があり、その葛藤の作用は我々の意識的知覺には隱されて

あること。我々の内には檢閲があつて、それは或る觀念が意識面に浮び出てもいゝか否かを裁斷し、不快を生み出したり再生させたりする傾向あるものは力の及ぶ限り容赦なく排除する。論じてこゝに至ると我々は、不快な記憶を避けようとするこの傾向に就いても、精神生活の諸傾向間の葛藤に就いても、既に行り損ひの分析に於いてこれに類することの暗示せられてあつたことを想起する。

夢の研究に依つて我々は自づから心理生活に就いて或る考へ方を持たざるを得なくなるが、この考へ方こそは心理學最大の難問を解決するものだと思はれる。夢の仕事は我々に、意識と結びついてゐるものよりも包括的で、且つより重要なる無意識心理活動を假定せしめる。(これに就いては精神分析學の哲學的興味を論ずる項に於いてなほ二三附言するところがあるであらう。) 夢の仕事は我々をして心理裝置を種々な個所や系統に區分することをなさしめる。さうして無意識精神活動中には意識中に知覺せられるものとは全然別種の過程の存することが明かになされる。

夢の仕事の機能は常にたゞ睡眠を繼續せしめるにある。「夢は睡眠の番人なり。」夢の思想それ自身は種々な心理的機能に役立つことがある。夢の仕事の役目は、夢の思想から出現した願望を錯覺的な形で充足せられたものとして表現することにある。

夢の精神分析的研究は、從前思ひもよらなかつた深部心理への洞觀を始めて打開いたと云ふことが

出來よう*。この新しき洞觀を考慮に入れるためには、正常心理學は根柢から改變せられねばならない。

【註】＊この心理學的題目を解剖學的に位置づけたり、組織學的に類別したりすることは、精神分析學が當時拒否したところであつた。

この一小論述の中に、夢の解釋の心理學的興味を說き盡くすことは全然不可能である。我々はたゞ夢に意味があり、心理學の對象たるものであることを强調せんと意圖するものであることを忘れないやうにしたい。さうして心理學のためのこの新しき獲得を、病理學的領域に押擴げて行くことにしたい。

夢及び行り損ひから結論せられた心理學上のこの新しき獲得は、やはり他の現象の說明にも適用せられねばなるまい。もし我々がそれ等新獲得の價値を、否その存在をさへも信ずべきであるならば……。さうして今や精神分析は實際に、無意識心理活動、檢閱、抑壓、歪み、代償形成（これ等は正常諸現象の分析に依つて得たところであるが）などの假定に依つて一連の病理的諸現象を始めて理解するを得しめたものであり、神經症心理のあらゆる謎への鍵を我等の手中に委ねたものであることを示してゐるのである。かくて夢はあらゆる精神病理的形成の正常的原型となつたのである。凡そ夢を理

解するものは、神經症及び精神症の心理的機制を洞察することが出來るのである。

精神分析學は、夢から出發したその研究に依つて、神經症心理を確立することが出來るやうになり、その心理學に對して不斷の勞作に依つて少しづつ何物かを附加しつゝある。併し我々が今や追求してゐるこの心理學的興味は、この偉大な關係の二つの成分をより詳しく取扱ふことより以上のことを我我に要求するものではない。即ち、人々が生理學的に說明しなければならないと信じてゐた多くの病理現象が心理的行爲であることの證據、及び、變態的結果を呈示する過程が心理的本能力に還元せられ得ることの證據、これ等二つの證據が要求せられてあるのみである。

私は第一の主張を二三の實例に依つて說明しようと思ふ。ヒステリー發作は昂進する情緖亢奮の徵象であると久しく認められ、本能感情の勃發と同視せられて來た。シャルコーはこれ等現象形態の多種多樣性を記述的公式に纒めようとし、ジャネーはこれ等發作の背後に働く無意識觀念を認識した。精神分析學では、これ等の發作は嘗て經驗せられ、凝縮せられた諸場面の身振的表現であり、それ等の場面に患者の空想は拘泥してゐるのであるが、而もそれを意識してはゐないのだと說かれてゐる。表現せられてゐる行動には凝縮や歪みのあるために、これ等の默劇は見物人には何のことやら分らないのである。併しながら同じ見地からして、他のあらゆる所謂（ヒステリー病の）持續的症候は見ら

れるのである。それは徹頭徹尾空想の身振的又は錯覺的表現であつて、これ等の空想が彼等の感情生活を無意識に支配し、その祕かなる被抑壓願望の充足を意味してゐるのである。これ等諸症候の苦痛的特性は內的葛藤から由來するのである。そのやうな諸々の無意識的願望亢奮の葛藤が必然的であるために、患者の心理生活はそれ等の症候となつて歪められて表れるのである。

他種の神經症たる强迫神經症に於いては、患者は一見無意味な儀式を小心翼々として固守してゐる。その儀式とは、例へば洗濯とか着衣とか云ふ大したことでもない行動を反復したり律動的にしたり、又は不合理な規則を遵守したり、謎のやうな禁令を嚴守したりすることである。すべてこれ等の强迫行動が、その中の最も目立たない微々たるものでさへも如何に有意味であるか、如何に生活の諸葛藤、誘惑と道德的禁制との間の鬪爭、妨害せられた願望そのもの、懲罰と悔恨とをそれに無關係な材料に反映させてゐるかを證明し得たのは、正に精神分析的操作の勝利であつた。同じ病の他の形態に於いては、患者は强迫觀念そのものの內容からは說明出來ないやうな種類や强度の感情を具へ、その內容が患者を命令的に强要する表象、卽ち强迫觀念に惱む。これを精神分析的に硏究して見ると、これ等の感情は心理的現實性を根柢に有してゐる非難に相當するものであるが故に正當なものであると云ふことが分る。併しこれ等の感情の伴うてゐる諸觀念は本來的な觀念ではなく、何らかの抑壓せ

られたもの丶轉位（代償、置換）に依つてこれに結びついて來たものである。これ等の轉位を解きほぐして（還元して）見ると、抑壓せられた觀念への認識の途が開かれ、感情と結合とが全然適當であることを思はせる。

他の神經症たる、本來不治なる早發性痴呆症（Paraphrenie, Schizophrenie）に於いては、その最惡の結果として患者は全然無感動、無關心となつてしまふやうに見えるのであるが、屢々唯一の行爲として常同症（Stereotypien）と呼ばれる或る單調な反復的運動、及び身振りだけの殘つてゐることが屢屢ある。そのやうな殘存物を（ユングが）分析的に研究して見ると、意味深き身振的動作の殘留であることが分つた。その動作の中には、嘗て本人が支配せられてゐた願望亢奮の表現せられてゐるのを見るのである。この患者の最も馬鹿げた話も、奇妙な姿勢や態度も、精神分析的前提を適用して以來、精神生活の關係に於ける領解と脈絡とを有するやうになつた。

譫妄狀態や錯覺や、樣々な精神病者の錯亂狀態に就いても同じことが云へる。今までは單に氣まぐれに支配せられてやつたことだと思はれてゐたことに就いても、これを分析して見ると、そこに法則、順序、關係の存することを指摘することが出來、分析操作のなほ不十分な場合にもそれ等の存在を察知することが出來た。併し種々樣々な心理的病氣形態は根柢に於いて同一であり、且つ心理學的概念

で把握し記述することの出來る諸過程からの歸結として認識せられる。既に夢の形成の場合に發見せられた心理的葛藤が、他の心理力のために無意識界に押し遣られた衝動亢奮の抑壓が、抑壓せられた力の反動形成が、抑壓せられてはゐるがまだそのエネルギーを完全に奪はれてはゐないところの本能の代償形成が、あまねくそこに働いてゐるのである。そこには至るところ、夢に就いて以來我々にお馴染の凝縮や轉位の過程がある。精神病學的臨床診察に於いて觀察せられる疾病形態の多樣性は二つの別の多樣性に依存する。卽ち、抑壓作用に服する心理機制の多樣性と、抑壓せられた亢奮をして代償形成として勃發せしめるところの進化史的素因の多樣性とである。

精神病學上の問題の大部分は、これを解決するために精神分析學に依つて心理學に委讓せられるが併し、精神分析學は精神障碍を純粹心理學的に把握せんと努め、またその把握の結果を表現するものだと考へようとするならば大變な誤りである。精神病學の仕事の他の一半に有機的要素（機制的、中毒的、感染的要素）の心理裝置に對する影響をその內容とするものであることを、分析學は見落してゐるわけではない。精神障碍の起源を調べるに際しては、精神障碍の最輕微のもの（神經症）に就いてさへも、分析學はそこに純粹に心理發生的起源をのみ主張したことはなく、後に述べる如く明かに有機的契機に依つて精神生活が影響せられてゐることにその原因を尋ねてゐるのである。

精神分析學の成果の細々したものゝ內で心理學一般に對して重要視せらるべきものはあまりに多くして、一々それを立證してゐることは出來ないほどであるが、たゞ私はこゝで二つの點に就いてだけ觸れておきたい。卽ち、精神分析が精神生活の最高位を本能感情過程におく態度の明瞭なること。知力が本能感情に依つて混亂と眩惑とに導かれることが正常人に於いても病人に於いても同樣であつて、それが案外に廣汎圍に亙つてゐること。

—完—

昭和 五 年三月十二日印　　刷
昭和 五 年三月十五日發　　行
昭和十五年二月廿五日改訂第三版

フロイド精神分析學全集

（快不快原則を超えて
何故の戰爭か）

定價金壹圓八拾錢

譯　者　大　槻　憲　二

發行者　和　田　利　彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　龜　谷　良　一
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷所　日東印刷株式會社
東京市本郷區眞砂町三十六番地

發　行　所
東京市日本橋區通三丁目八番地
株式會社　春陽堂書店
振替東京一六一七電話日本橋五一・一九四八番

フロイド精神分析學全集

（第四卷）快不快原則を超えて　大槻憲二譯

・定價　一圓八十錢・
・送料　十二錢・

一、**快不快原則を超えて**、第一章以下第七章まで

二、**强迫神經症の一例**　一、臨床記錄の抽出（a治療の開始、b小兒の性感、c大强迫恐怖、d治療に誘導すること、e强迫觀念とその說明、f强迫神經症の起因、g父性コムプレクス及び鼠の觀念の解除）二、理論（a强迫形成の或る一般的特性、b强迫神經症の或る心理的特性、c强迫神經症の本能的生活及び强迫と疑念との根源）

附錄　快不快原則に關する譯者の解說

（第五卷）性慾論・禁制論　矢部八重吉譯

・定價　一圓七十錢・
・送料　十二錢・

原著者肖像及び筆蹟

一、**性慾に關する三論文**　第一論文　性の錯誤（第一章性的對象に關する變態、同性愛、性的對象としての性的未熟者及び動物、第二章性目的に關する變態、解剖的違反、豫備的性目的の定着、第三章あらゆる變態に一般的なもの、第四章神經症患者の性本能、第五章部分本能と性的帶域、第六章神經症患者に於いて性的變態が外見的には目立つ所以の說明、第七章幼兒性感について）第二論文　幼兒の性感（幼兒時代の性的潛在期間とその中絕、幼兒性感の顯現、幼兒性感の性目的、性的顯現としての自慰、幼兒の性研究、性組織發達の諸段階、幼兒性感の源泉）第三論文　思春期に於ける性感の變化（性器帶域の變化と豫備快感、性的亢奮の問題、リビドー說、男女の別對象發見）論旨要約

二、**禁制と徵候と惃憂**　第一章以下第十一章まで

三、**附錄**　フロイド先生會見記（譯者）

フロイド精神分析學全集

快不快原則を超えて
何故の戰爭か？

大槻憲二譯
伊東豊夫譯

●

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド精神分析學

快不快原則を超えて
何故の戰爭か？

大槻憲二譯
伊東豊夫譯

フロイド
精神分析
学全集 L

快不快原則を超えて
何故の戰爭か?

T・I・P・A・

精神分析学研究所

フロイド
快不快原則を超えて
何故の戰爭か?
精神分析学研究所